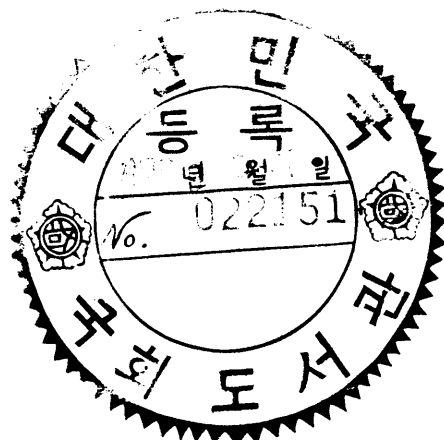


調査資料第二十四輯

朝鮮の災害

朝鮮總督府

3615051



序

本書は囑託善生永助をして、朝鮮に於ける各種の災害に就き、其の歴史、被害狀況、善後始末等に關する一切の資料を蒐集して編纂せしめたるものに係り、執務上の參考に資するを主眼としたる爲め、努めて説明を簡短ならしめ、記事に關係ある數種の地圖及び圖表をも添附してある。

昭和三年八月

朝鮮總督官房總務課長 中村寅之助

朝鮮の災害

目次

第一章	災害と氣象……………	一頁
-----	------------	----

地勢と氣象の關係……………	一
---------------	---

各地氣象表……………	八
------------	---

第二章	災害の記錄……………	一九
-----	------------	----

旱害及び饑飢……………	二一
-------------	----

洪水……………	三六
---------	----

暴風……………	五四
---------	----

地震……………	六三
---------	----

霜害……………	八二
---------	----

雹害……………	八七
---------	----

火災……………	八九
---------	----

目次

第三章 災害の程度……………一〇一

農作物被害……………一〇一

水害……………一一五

林野被害……………一二〇

船舶遭難……………一二一

旱害……………一三四

火災……………一三七

第四章 災害の影響……………一四七

荒地面積……………一四七

災害費、災害救済費……………一四九

地方土木費……………一五二

地方土木費國庫補助……………一五七

損害保険……………一六一

災害と貧困者……………一六四

第五章 災害の救濟

災害救濟制度	一八一
大正八年の旱害救濟	一九〇
大正十四年の水害救濟	二一五

地 圖

高度及溫度
山系及河系

圖 表

最近五箇年間農作物被害見積額比較
農作物被害見積額及被害種別（昭和元年）
最近十箇年間水害被害額種別及年次別比較
大正十四年水害被害額並に氾濫區域面積比較
昭和元年度種類別森林被害高
最近五箇年間森林被害比較
大正十三年旱害主要農作物被害面積

火災による損害見積額比較及び火災原因別

火災による損害見積額及び火災件數道別

月別火災件數損害見積額及び火災原因別

朝鮮總督府特別會計歲出災害費及び災害救濟費累年比較

道地方費歲出災害費及び災害救濟費二箇年比較

調査資料
第二十四輯

朝鮮の災害

朝鮮總督府囑託 善 生 永 助

は し が き

本書は題して「朝鮮の災害」と謂ふも、その記述の範圍は、主として氣象の異常に基きて起りたる自然災害、即ち地震、洪水、暴風、旱魃、降霜、降雹、蝗に因る被害、及び林野災害、並に火災に限り、工業上の災害たる鑛山、炭坑、工場、電氣、瓦斯事業、土木工事に基く災害、並に鐵道、索道、隧道、電車、自動車、船舶等に於ける交通事故、及び暴行または不注意に因る殺人、傷害、死亡、癱疾に關する人命上の災害に就いては一切觸れて居らぬことを斷つて置かねばならぬ。云ふ迄もなく、朝鮮に於ける災害の最も大なるものは、水害と旱害にして、これに亞ぐものは暴風被害であり、林野被害と火災に因る損害もまた相當に大なるものである。年々これ等の災害の爲めに受くる、財政經濟上の損失は實に莫大なるものであるが、殊に水害並に旱害は、近年の例に徴するも被害の範圍頗る廣大に亘り、罹災者の窮狀言語に絶するものがある。

以上の諸災害中には、地勢上及び氣象上必然免れ難きものもあるが、治山、治水、水利事業の完成を計るに於ては、旱害及び水害の如きは、或る程度迄はこれを防止し、若くはその被害を緩和し得べく、また民度の向上と消防設備の進歩に依りて、林野被害及び火災の減少を見ることも困難でない。然しながら既に災害の發生したる以上は、その防止、復舊、救済等に就いて臨機應變の對策を講せねばならぬ。而してこれ等の施設計畫を爲すに當りては、先づ過去に於ける災害の記録を參考とすることが必要であらう。本書は不完全ながらその要求に應せんが爲め、古今の資料を整理按排して編纂したものである。主として自然災害のみに重きを置き、他の工業上及び交通上の災害を取扱はざりしは、決してこれを閑却したるに非ずして、未だ朝鮮に於ては、工業の發達幼稚なると、交通機關の普及不十分なる結果、この種災害に關し特に記述する程の重要な事故の少い爲めである。本書の編纂に當りては各種の文獻及び資料を參考としたが、その重なるものを左に舉げて置く。

三國史記	高麗史	李朝實錄	東國通鑑	海東經史
東國紀年	東史年表	增補文獻備考	各地方邑誌	古代觀測記錄
昭和三年曆	日用便覽	近年に於ける朝鮮の風水害	朝鮮の洪水	大正八年旱害誌
大正十三年旱害調査書	大正十四年水害誌	農作物被害調査書	森林被害統計	朝鮮社會事業要覽
朝鮮總督府統計年報	朝鮮の契	火田の現状	朝鮮の物産	朝鮮の市場
朝鮮の人口現象	朝鮮の犯罪と環境			

第一章 災害と氣象

災害の消長は氣象と最も深い關係を有して居るから、以下少しく朝鮮の氣象に就いて説明するが、氣象を述べるに當りては先づ大體の地勢を見ねばならぬ。朝鮮は亞細亞大陸の東部に斗出せる一大半島にして、東經百二十四度十一分より百三十度五十六分二十三秒、北緯三十三度六分四十秒より四十三度三十六秒の間に位置し、その總面積は一萬四千三百三十二方里に及び、本州と略ぼ伯仲の間にある。東は日本海に面し、西は黃海に臨み、南は朝鮮海峽を隔て、九州及び中國と對し、北は鴨綠江及び豆滿江に依りて滿洲及び露領に界して居る。東部海岸は概して良港に乏しく、僅に元山、城津、清津、雄基等を數ふるに過ぎないが、南部及び西部海岸は大小の島嶼散在し、幾多の岬灣出入して良港を形成し、就中、釜山、木浦、群山、仁川、鎮南浦等は著名なるものである。朝鮮の地勢は、蜿蜒たる長白山脈が東北より西南に連りて北方の國境を擁し、その一脈は南に延び、平安南北道及び咸鏡南北道の境を劃して江原道に入り、東海岸線に沿ひて南に走り、以て半島の脊梁を成して居る。この脊梁山脈以東の地は斜面急峻にして、大川、平野は少いが、その以西は比較的傾斜緩慢で、處々に平野開け、鴨綠江、洛東江、大同江、漢江、錦江、蟾津江の六大江を始め大小の河川多く、舟楫の便と灌漑の利に富んで居る。造林、治水事業未だ完からざる爲め、屢々洪水旱魃の害を蒙ることあるも、地味概し

て肥沃なる爲め農業に適し、米、麥、豆類、雜穀、人蔘、棉花、煙草、繭、麻、蔬菜、果實等の農産物に富み、また牛、木材、礦物等をも産し、沿海は魚族その他の水産物が極めて豊富である。

朝鮮の地勢は右の如きを以て、或は大陸的氣象に左右せられ、或は海洋の影響を受け、氣象上自ら特異な現象を示して居る。試みに氣壓に就いて見るに、年平均氣壓の最も高いのは龍巖浦の七六二・八にして、漢口及び旅順の七六二・九と略ぼ等しく、高山の七六二・〇、吳、福岡の七六一・八より高く、その最も低い江陵の七六一・三は、長春の七六一・五より稍低く、敦賀、金澤、長野と相等しいのである。

朝鮮に於ける年平均氣溫は、南部海岸は攝氏十三度餘にして、北進するに従ひて次第に遞減し、中央部京仁地方は十度内外なるも、國境内陸に入れば四度乃至三度に降る。また東部沿岸地方は西部海岸地方に比すると氣候溫和にして、夏季を除けば約二度内外高溫なるを常として居るが、これは西部海岸は冬季北西の季節風多きも、東部海岸は脊梁山脈のために風勢微弱と爲り、且つ海水溫度が暖流の影響を受けて西部海岸に比し高溫なるに因るのである。

年平均氣溫の最高は釜山の二三・五で、福井と同溫度を示し、京都の二三・八に近く、濟南の一四・七よりは遙かに低く、最低は中江鎮の三・五で、長春の四・四、眞岡の三・八と大差ないのである。毎日最高氣溫の平均では年一八・一の大邱が第一位で、天津の一七・八より稍高く、彦根とは同溫度、銚子

飯田の各一八・〇に略ぼ等しい。毎日最低氣溫の最も低いのは雄基の年平均二・三で、滿洲に於ける營口の三・一、奉天の一・三、北海道に於ける羽幌の二・七、根室の二・〇の各中間に當つてゐる。一般に朝鮮の寒氣は南北に於て大差あるも、暑氣はその差が極めて少い。即ち酷寒期たる一月の日々の最低氣溫平均では、中江鎮の零下二八・九と、釜山の零下一・六とで、二七・三の大差あるに反し、酷暑期たる八月の日々最高氣溫平均は大邱の三一・一を最高とし、雄基の二二・八を最低とし、その間僅に八・三の差あるに過ぎない。一年を通じて最も暑い八月と、最も寒い一月の兩月中の最高最低溫度を取つて、これを支那及び内地と比較すると、八月中の最高溫度たる大邱の三六・一は濟南の三六・四、上海の三五・八の間にあり、内地で最も高い京都の三五・四、甲府、大阪の三五・三に比して稍高溫度たるに過ぎないが、一月中の最低溫度たる中江鎮の零下三七・六は、長春の零下三一・二、落合の零下三六・一、敷香の零下三三・四に對して著しく低いことを示して居る。

各地の濕度は大體に於て平均してゐるが、潮流の影響を受けることの大なる木浦の七六が稍高く、漢口、高知、津、長野、福島と相等しいが、これを内地に於て最も濕度の高い豊岡、及び樺太大泊の各八三と比較すると大差あるを窺ひ得る。濕度の低いのは雄基の六五で、大連の六六、奉天の六四と匹敵し、内地の最も濕度の低い神戸の七一、前橋、室戸の七二に對して遙かに低く、一般に朝鮮が空氣の乾燥して居り、濕度の低いことがわかる。

降水日數は中江鎮の二三・八・〇が最も多く、上海の一三三・八と略ぼ等しい。雨の少い滿洲では長春の一〇七・九を除いて年百日を越ゆる地方なきも、これに反して内地では概して降水日數多く、僅に甲府の一三一・八、大分の一三八・一、大阪の二三八・三の如きが、最も降水日數の少い地方で、名瀬の如きは年二三七・四に達してゐる。朝鮮を通じて降水日數の最も少いのは大邱の九八・二で、奉天の九一・一と稍近い、**降水總量**では釜山の一四三〇が最大で吳の一四六一、筑波の一四一六と近く、降水量の最も少い雄基の六八五は、滿洲で降水量の最も多い長春の六六六と、樺太で降水量の最も少い大泊の七四一の間にあたつてゐる。朝鮮に於ては雨の降る季節と雨の降らぬ季節即ち乾燥季節とは截然たる區別あり、降雨が一箇年中の或る季節に偏して居り、降雨季節は六、七、八の三箇月にして、その前後の五月及び九月も雨量の多い月であるが、この兩月の雨量は年により非常の變動あるを常とし、確實に降雨のあるのは六月以後である。また南部は四月から降雨の季節が始まり、全鮮を通じ降雨の最盛時期は南方は七月、北方は七、八月の間、東岸地方の北部は時として九月に涉ることがある。大體に於て一箇年の降雨量の七割位は降雨期に降り、他の三割位は、十月より翌年三、四月に至る乾燥期に降る割合になつて居る。斯くの如く降雨季節が一定して居る故に、一箇年の雨量に於ては内地の各地方に譲るも、降雨期の雨量を同じ期間の内地の雨量に比すると決して劣つて居ない。朝鮮の降雨期には豪雨珍しからず、従つて洪水の害を被ることも極めて多いのである。

快晴日數では龍巖浦の一〇四日が最も多く、内地で快晴日數の多い高知の五九日、東京の五六日に對して著しき差があるが、それでも天津の一三七日に對しては遙かに少く、長春の一〇八日と相接近してゐる。快晴日數の最も少いのは木浦の四九日で、大阪の四四日、名古屋の五五日、鹿兒島の五四日と略ぼ近い。朝鮮近海は到る處濃霧を發生し、殊に多島海附近より西部近海に多い。これ等地方の濃霧も沿岸に近づくに従つて減少し、内陸に入りては殆んど皆無となる。冬季には概して濃霧を見ないが初春より晩春初夏にかけて最も盛んである。一年間の霧日數の最も多いのは仁川の年平均四一日で、これに亞ぐは雄基の三九日であるが、内地には斯くの如き霧日數の多い地方はなく、この霧日數は大泊の三八日、青島の六一日の間にあり、江陵の六日は最も霧日數の少い方にして、奉天の六日、天津の七日、高知の六日、廣島、京都の各七日と相並ぶのである。

● **暴風日數**の最も多いのは雄基の二二九日にして、大連の二二二日より多く、これに亞ぐは木浦の一七八日で、長春の一六九日、長崎の一六〇日、及び青島の一九七日、大泊の一九二日の中間にある。而して全鮮中暴風日數の最も少い平壤、京城の各十八日は、下關の十七日、函館の十五日と相距るところが遠くない。由來朝鮮地方に襲來する低氣壓は、一は支那北部又は西伯利亞方面に發生するもの、他は支那中部楊子江流域地方に發生するもので、共に大體西方から東方に移動し、大陸の何處かに發生した低氣壓は朝鮮を過ぎて内地方面に向ふのである。而して第一種の北方に發生する低氣壓は主に

冬期に多く、次に楊子江沿岸に發生する低氣壓は春より夏に亘りて多く、その發生するや江岸に沿つて漸次東轉して上海附近に達し、それより黃海又は支那東海に出て、朝鮮中部以南より九州地方の間にまで襲來する。また別に亞細亞東部に於ける低氣壓にして著名なるものは、南洋方面の洋上に發生する所謂颱風で、これは八、九月の交に多く發生し、臺灣は年々その襲來を受けて災害を蒙り、内地に於ても二百十日前後の暴風雨はこれに依るもので、農家は厄日として怖れて居る。朝鮮は普通この颱風の經路外にありて直接その影響を受けることは少いが、往々その經路を外れて朝鮮に襲來することがある。然しながらその勢力は大に衰弱して、甚だしき暴威を振ふことは稀れである。

平均氣壓表

測候所	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
龍巖浦	七〇・〇	七六・六	七六・二	七六・二	七六・一	七五・〇	七五・〇	七五・七	七五・七	七四・八	七三・九	七三・五	七三・八
平壤	七六・六	七六・〇	七六・八	七六・〇	七六・二	七五・一	七五・三	七五・八	七五・五	七四・七	七三・三	七三・三	七三・六
木浦	七六・三	七六・九	七五・五	七五・〇	七五・六	七五・二	七五・三	七五・一	七五・五	七三・九	七三・九	七三・二	七三・一
仁川	七九・〇	七七・六	七五・九	七五・二	七五・六	七五・四	七五・五	七五・七	七五・〇・二	七四・五	七三・四	七三・八	七三・六
中江鎮	七二・三	七六・三	七四・九	七五・〇	七五・一	七五・二	七五・八	七四・七	七五・〇・二	七三・八	七三・一	七三・三	七三・九
京城	七九・二	七七・六	七五・七	七五・二	七五・七	七五・四	七五・八	七五・九	七五・三	七四・六	七三・二	七三・一	七三・七
全州	七九・〇	七七・四	七六・〇	七五・五	七五・三	七五・二	七五・三	七五・六	七五・八	七四・一	七三・四	七三・七	七三・四
元山	七七・四	七六・四	七四・八	七五・五	七五・〇	七五・三	七五・七	七五・三	七五・六	七四・一	七三・一	七三・九	七三・九

平均氣溫表

測候所	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
大邱	七六・三	七六・八	七五・二	七二・〇	七九・七	七五・五	七六・一	七五・九	七六・〇・一	七四・三	七六・七	七六・三	七五・三
江陵	七六・五	七六・四	七四・〇	七二・〇	七五・七	七四・九	七五・五	七五・九	七六・〇・〇	七三・六	七六・四	七六・〇	七二・三
釜山	七六・〇	七五・七	七四・七	七二・九	七五・七	七五・七	七五・一	七五・八	七五・九・七	七三・六	七六・〇	七六・七・〇	七二・八
城津	七六・七	七五・五	七三・七	七六・六	七五・七	七五・三	七五・七	七五・四	七六・〇・五	七六・六	七五・六	七五・六	七二・四
雄基	七六・〇	七五・九	七三・八	七六・七	七五・七	七五・三	七五・一	七六・四	七六・〇・五	七三・四	七五・四	七五・八	七二・五
龍巖浦	八八・八	八六・二	八〇・一	七八	八四・〇	一九二	二二・〇	二二・七	二八・〇	二二・五	一五・一	六・四	八・一
平壤	八二・一	八四・八	一二・三	九・三	一五・二	二〇・四	二二・九	二四・三	二八・六	二二・〇	二九・一	五・三	九・一
木浦	一・三	一・七	五・一	一一・二	一六・二	二〇・四	二四・四	二六・〇	二二・八	一六・二	九・四	三・四	一三・一
仁川	三・五	二・一	二・七	九・五	一四・六	一九・四	二二・二	二四・七	二〇・二	一四・三	五・八	一・三	一〇・六
中江鎮	三・一	一五・二	四・八	六・一	二・九	一八・七	二二・六	二二・七	二二・七	六・七	三・八	一五・二	三・五
京城	四・五	一九	三・一	一〇・六	一六・〇	二二・〇	二四・五	二五・五	二〇・〇	一三・二	四・九	二・三	一〇・八
全州	一・七	〇・二	四・五	二・三	一六・八	二二・四	二五・三	二六・二	二〇・七	一三・九	六・九	〇・七	二・一
元山	三・四	二・四	二・四	九・四	一四・七	一九・一	二二・六	二二・三	一八・八	一三・二	五・五	一・一	一〇・一
大邱	一・六	〇・五	五・二	三・二	一七・二	二二・九	二五・三	二六・〇	二〇・九	一四・四	七・〇	〇・四	二・四
江陵	一・一	〇・三	四・五	二・四	一五・九	二〇・四	二四・〇	二四・四	一九・七	一四・五	八・〇	一・七	二・〇
釜山	二・二	三・一	七・〇	二・三	一六・三	一九・八	二二・七	二五・五	二二・九	一六・四	一〇・〇	四・〇	一三・五
城津	六・〇	四・二	〇・六	六・七	一一・〇	一五・五	二〇・一	二二・〇	二七・七	二一・七	三・五	三・五	七・九

朝鮮の災害

10

雄基 (一) 九四 (一) 六四 (一) 一六 五三 九七 一四六 一九四 二四 一六五 一〇一 〇八 (一) 六三 六二

毎日最高氣溫の平均

測候所	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
龍巖浦	(一) 三七	(一) 一〇	四・七	一三・七	一八・八	二三・六	二六・七	二七・九	二五・三	一七・三	六・三 (一)	一・七	一三・九
平壤	(一) 二九	〇・四	六・三	一五・五	二二・四	二六・四	二六・六	二九・一	二四・三	一八・三	八・〇 (一)	〇・五	一四・六
木浦	五・五	六・〇	一〇・〇	一六・四	二二・〇	二四・八	二六・三	三〇・三	二六・五	二二・四	一四・一	七八	一七・六
仁川	〇・五	二・二	七・二	一四・四	一九・三	二三・九	二六・九	二八・六	二四・五	一九・〇	一〇・三	二・七	一五・〇
中江鎮	(一) 二三	(一) 六〇	二・一	一三・三	二〇・一	二六・〇	二九・〇	二八・五	二二・四	一五・三	二・二 (一)	八・三	一一・〇
京城	〇・二	三・一	八・四	一六・七	二二・一	二六・七	二八・八	三〇・二	二五・三	一九・五	一〇・四	二・五	一六・一
全州	二・八	四・六	一〇・四	一七・八	二三・〇	二七・四	二九・六	三一・一	二六・一	二〇・六	一二・四	五・二	一七・六
元山	一・三	二・四	七・三	一五・二	二〇・五	二四・〇	二六・六	二七・四	二三・六	一八・六	一〇・五	三・六	一五・一
大邱	三・八	六・〇	一一・一	一八・五	二三・五	二七・五	三〇・一	三一・一	二六・二	二二・一	一三・一	五・九	一八・一
江陵	三・七	四・九	九・四	一六・七	二二・一	二五・一	二八・一	二八・七	二四・四	二〇・〇	一二・三	六・五	一六・八
釜山	六・四	七・三	一二・二	一六・四	二〇・三	二三・三	二六・七	二九・〇	二五・六	二二・一	一四・六	八・三	一七・五
城津	(一) 〇・六	〇・八	五・〇	一二・〇	一六・〇	一九・七	二三・六	二五・六	二三・三	一六・九	八・六	一九	一二・七
雄基	(一) 五・四	(一) 二・一	二・六	一〇・〇	一四・三	一八・八	二三・八	二五・一	二〇・九	一四・八	五・一 (一)	二・三	一〇・四

毎日最低氣溫の平均

測候所	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
龍巖浦	(一) 二三	(一) 一〇・八	(一) 三・九	三・三	九・六	一五・五	二〇・一	二〇・二	一三・四	六・七 (一)	二・四 (一)	一〇・五	四・〇

氣溫の月中及び年中最高の平均

測候所	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
平壤	(一三・三)	九・八	三・五	三・六	九・六	一五・一	二〇・〇	二〇・三	一三・七	六・五	一・八	(一〇・一)	四・二
木浦	(一・八)	一・六	一・五	七・三	三・四	一七・三	二二・七	二五・〇	一八・五	一二・三	五・七	〇・一	九・七
仁川	(七・〇)	五・五	〇・八	五・七	二・一	一六・一	二〇・五	二二・六	一六・四	一〇・一	一・八	(四・九)	七・一
中江	(二・九)	二・四〇	(二・八)	〇・三	六・三	一二・四	一七・七	一六・七	八・一	〇・三	(八・九)	(二・七)	二・九
京城	(九・四)	六・七	二・〇	四・八	一〇・三	一六・〇	二〇・八	二二・五	一五・一	七・三	(〇・二)	七・〇	五・九
全州	(五・八)	四・四	〇・六	五・三	二・四	一六・三	二二・七	三三・一	一六・〇	八・一	二・二	(五・五)	七・四
元山	(七・七)	六・八	一・八	四・六	一〇・一	一五・二	一九・五	二〇・一	一四・七	八・四	一・〇	(五・三)	六・〇
大邱	(六・二)	四・三	〇・二	六・一	一一・二	一六・八	二三・三	二二・九	一六・四	八・六	(一・八)	(四・二)	七・四
江陵	(五・一)	三・九	〇・〇	六・一	一〇・八	一五・八	二〇・四	二〇・六	一五・六	九・八	三・四	(二・四)	七・六
釜山	(一・六)	〇・八	二・八	八・二	二二・三	一六・七	二二・一	三三・六	一八・六	一二・三	五・八	〇・〇	九・八
城津	(二・八)	九・一	三・六	二・五	七・三	二二・六	一七・五	一九・一	一二・四	六・八	(一・〇)	八・〇	三・九
雄基	(三・四)	(一〇・五)	五・六	一・二	五・九	一四	一六・八	一八・一	一二・一	五・二	(三・二)	(一〇・二)	二・三
龍巖浦	二・九	五・六	一一・一	一九・九	二四・七	二九・七	三三・一	三三・〇	二六・五	二四・一	一六・三	六・一	三・六
平壤	四・七	八・四	一五・〇	三三・四	二七・七	三二・七	三三・九	三三・六	二九・五	二四・七	一七・九	八・四	三・四・〇
木浦	一三・〇	一三・二	一七・七	三三・五	二六・四	二九・一	三三・六	三三・六	三三・一	二六・二	二二・五	一五・五	三・九
仁川	七・五	一〇・一	一五・二	三三・二	二六・二	二九・三	三三・四	三三・四	二九・三	二四・五	一八・七	一〇・六	三・九
中江	(二・〇)	三・一	三・六	三三・三	二八・〇	三三・三	三三・九	三三・二	二八・三	三三・二	一四・〇	三・〇	三・三
京城	七・三	二一・〇	二七・五	二四・一	二八・七	三三・四	三三・七	三三・八	三〇・三	二五・一	一八・九	一〇・七	三・一

朝鮮の災害

一一

氣溫の月中及び年中最低の平均

測候所	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
雄基	一・七	五・四	一〇・一	一八・一	二三・九	二八・四	三二・七	三〇・八	二六・二	二三・三	一三・二	七・三	三三・二
城津	五・二	六・七	一三・七	二・九	二五・八	二七・七	三〇・八	三〇・五	二六・八	三三・七	一七・二	九・〇	三三・二
釜山	二・二	一三・六	一七・三	二・四	二五・五	二七・五	三二・四	三二・四	二九・五	二四・九	二〇・九	一五・六	三三・七
江陵	二・一	七・二	一九・八	二六・六	三〇・六	三三・〇	三四・九	三四・七	三〇・八	二五・三	二二・五	一四・〇	三五・七
大邱	一〇・七	一三・九	一九・八	二六・三	三〇・五	三三・五	三六・七	三六・一	三二・六	二六・四	二〇・七	一三・七	三六・七
元山	八・三	一〇・三	一六・七	二五・九	三〇・八	三三・七	三六・九	三六・六	三〇・三	二四・八	一九・〇	一一・三	三五・七
全州	一〇・九	一三・七	一九・六	二五・〇	二九・二	三三・九	三六・五	三六・八	三二・三	二六・〇	二〇・三	一三・一	三五・一
江陵	二・一	七・二	一九・八	二六・六	三〇・六	三三・〇	三四・九	三四・七	三〇・八	二五・三	二二・五	一四・〇	三五・七
釜山	二・二	一三・六	一七・三	二・四	二五・五	二七・五	三二・四	三二・四	二九・五	二四・九	二〇・九	一五・六	三三・七
城津	五・二	六・七	一三・七	二・九	二五・八	二七・七	三〇・八	三〇・五	二六・八	三三・七	一七・二	九・〇	三三・二
雄基	一・七	五・四	一〇・一	一八・一	二三・九	二八・四	三二・七	三〇・八	二六・二	二三・三	一三・二	七・三	三三・二
龍巖浦	二・五	一九・二	二・九	二・四	四・三	一〇・九	一六・六	一五・四	六・六	一・五	二〇・八	一九・一	三三・二
平壤	三・二	一八・三	一〇・五	二・二	四・六	一〇・六	一五・九	一五・七	七・四	一・四	二〇・七	一八・五	三三・八
木浦	八・一	六・九	三・四	一九・一	八・二	二二・九	一八・一	二〇・〇	一三・五	六・七	一・〇	六・一	九・四
仁川	二・八	二・七	七・一	〇・四	七・三	二二・四	一六・六	一七・九	一一・三	三・二	六・四	一三・四	一六・一
中江鎮	二・六	二・〇	二・五	七・一	一・〇	六・〇	二二・七	二〇・四	〇・七	七・四	二・一	三・五	三八・三
京城	一・〇	一・四	八・七	一・四	五・三	一一・五	一六・五	一七・三	八・八	〇・四	八・一	一五・九	一九・〇
全州	二・五	二・七	六・三	一・五	六・三	一一・七	一七・七	一八・二	九・〇	〇・九	五・四	一一・二	一三・四
元山	一・五	一・四	八・七	一・四	四・〇	一〇・一	一四・八	一五・六	八・七	一・四	六・九	一三・七	一七・〇
大邱	三・九	二・二	六・二	〇・三	五・八	一一・二	一六・二	一七・八	一〇・二	一・六	五・〇	一〇・四	一三・八
江陵	三・七	二・〇	六・六	〇・五	四・六	九・九	一五・一	一六・三	一一・〇	三・六	四・五	一〇・四	一三・八
釜山	八・六	七・五	三・六	二・三	七・八	二二・九	一六・六	一九・一	一三・三	五・六	一・五	六・八	一〇・〇

城津	(一八九)(一七二)(二二三)(三二
雄基	(二〇〇)(一六三)(一三一)(四三
平均湿度表	
一月	二八
二月	八二
三月	二三・五
四月	一四・六
五月	八〇
六月	〇・一
七月	(一六六)(二〇・四
八月	(一八〇)(一九六)(二六・四)(二〇・四
九月	(一八・一)(二〇・一)(二六・一)(二〇・四
十月	(一八・一)(二〇・一)(二六・一)(二〇・四
十一月	(一八・一)(二〇・一)(二六・一)(二〇・四
十二月	(一八・一)(二〇・一)(二六・一)(二〇・四

測候所	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
龍巖浦	七	七	九	七	七	八	八	八	六	七	九	七	七
平壤	七	七	六	六	六	七	九	六	七	七	七	七	七
木浦	七	七	七	七	六	八	七	八	六	七	七	七	七
仁川	六	六	六	七	七	八	八	八	七	九	六	七	七
中江鎮	八	七	六	六	六	七	六	八	八	七	七	七	七
京城	六	六	六	六	六	七	八	六	七	七	七	七	七
全州	七	七	六	七	七	七	九	九	七	七	七	七	七
元山	六	七	六	六	六	六	八	八	六	六	六	六	六
大邱	六	六	六	六	六	六	七	七	七	六	六	六	六
江陵	五	六	六	六	六	七	八	八	六	六	六	六	六
釜山	五	五	五	六	六	七	八	九	七	七	六	五	六
城津	六	六	六	七	七	八	八	八	六	七	七	六	七
雄基	五	五	五	六	七	八	八	八	七	六	六	五	六

降水日數

測候所	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
龍巖浦	四・八	四・五	六・三	七・六	一〇・〇	一二・四	一五・六	二一・八	八・七	七・五	六・六	五・〇	九・七

朝鮮の災害

一四

降水量

測候所	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
平壤	六・三	四・四	六・六	七・二	八・六	九・八	一五・二	二・七	八・八	七・三	八・七	七・二	一〇二・八
木浦	一一・七	九・四	九・六	一〇・一	八・九	二・五	一四・二	一一・五	一〇・四	七・四	一一・三	三・六	二九・六
仁川	七・五	五・三	六・一	八・〇	八・九	九・七	一四・四	一一・五	八・九	六・九	八・七	八・四	一〇四・二
中江鎮	八・〇	六・八	九・四	一一・八	一五・八	一四・五	一七・一	一四・五	一二・〇	九・二	九・七	九・三	一八・〇
京城	七・六	六・三	七・六	八・三	九・七	一〇・七	一六・〇	一二・七	九・五	六・五	九・〇	八・四	一一・二
全州	九・四	九・三	八・三	九・七	一〇・一	一〇・六	一五・九	一二・九	九・〇	七・一	一一・一	一一・四	二五・九
元山	六・五	五・九	七・三	八・三	一〇・六	一二・六	一八・二	一六・三	一二・三	九・〇	七・六	四・一	二八・七
大邱	五・五	四・九	六・七	八・七	九・二	一一・五	一三・五	一一・八	九・七	五・四	六・六	四・七	九八・二
江陵	七・一	七・七	八・五	九・〇	一一・四	一二・二	一四・八	一四・六	一一・九	八・一	六・六	五・一	一一・〇
釜山	六・三	五・五	八・九	九・九	九・〇	一二・五	一四・二	一〇・九	一一・〇	七・四	六・四	五・〇	一〇七・〇
城津	九・一	六・四	六・五	六・二	一〇・〇	一一・七	一二・九	一一・〇	九・〇	六・〇	八・四	八・〇	一〇五・八
雄基	三・五	四・一	六・三	七・一	一四・七	一四・五	一六・一	一四・五	九・九	七・二	五・九	四・一	一〇七・七
龍巖浦	一・三	一・一	一・三	四・一	三・一	八・八	二・九	一九・〇	一・九	六・五	三・四	一・三	八九・七
平壤	一・五	一・四	一・七	四・五	三・三	七・五	二・五	一〇・〇	一・四	四・五	四・二	一・五	九一・七
木浦	四・〇	三・六	三・九	九・四	八・四	一四・七	二・五	一四・六	一〇・九	五・四	四・五	三・五	一〇四・一
仁川	九・一	一・九	二・九	五・五	八・〇	一〇・五	二五・一	三・八	一〇・九	三・九	四・二	二・一	一〇〇・〇
中江鎮	一・三	一・一	一・二	四・〇	六・六	一〇・七	一五・九	一六・六	九・二	三・九	二・八	一・四	七六・六

木浦	釜山	全州	大邱	仁川	京城	江陵	平壤	元山	龍巖	城津	中江	雄基	測候所	木浦	釜山	全州	大邱	朝鮮の災害
一	〇	〇	一	一	二	一	二	〇	一	一	〇	〇	一月	四	三	五	〇	霧日數
一	〇	一	一	一	一	〇	一	〇	一	〇	一	一	二月	三	九	六	八	
二	一	一	〇	三	一	〇	一	一	二	一	〇	二	三月	四	八	六	七	
二	一	一	一	五	一	〇	一	一	二	三	〇	五	四月	四	六	五	五	數
二	二	一	一	五	二	一	二	二	二	六	一	八	五月	五	六	三	四	
四	二	一	〇	八	一	二	二	二	三	七	一	〇	六月	二	二	三	二	
四	二	一	〇	一〇	一	一	二	二	四	七	〇	〇	七月	二	三	一	二	一六
一	〇	一	一	三	二	〇	四	一	二	二	一	二	八月	四	七	四	四	
一	〇	二	一	一	二	〇	二	〇	一	〇	〇	〇	九月	五	四	四	四	
〇	〇	一	二	一	二	〇	四	〇	一	〇	〇	一	十月	七	一〇	九	八	一六
〇	〇	一	二	一	一	一	二	〇	一	一	〇	一	十一月	六	二	五	一〇	
一	〇	一	一	一	二	一	二	〇	一	一	二	一	十二月	三	一四	四	二	
八	八	二	二	四	一七	六	二四	九	一九	二五	七	三九	年	四九	九三	五五	七七	

暴風日數 (大正十三年迄)
(舊法による)

測候所	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
雄基	三	三	三	三	三	三	三	九	五	三	三	三	三九
中江	一	一	三	七	五	三	一	一	〇	四	三	二	三三
城津	三	三	三	七	二	七	七	八	二	六	六	三	一五二
龍巖	九	八	三	一五	一五	一〇	八	五	七	九	二	九	二九
元山	三	七	八	八	八	三	二	三	四	七	一〇	二	三三
平壤	一	二	三	三	二	一	一	〇	一	〇	二	二	一八
江陵	一八	二	二	二	九	三	三	二	三	六	二	二	一〇五
京城	一	三	三	二	一	一	一	一	一	〇	二	二	一八
仁川	一六	一四	一八	一五	一四	九	一〇	九	一〇	一〇	一七	一七	一六〇
大邱	八	八	一〇	一〇	九	四	四	四	三	四	七	八	八〇
全州	三	三	四	四	一	一	一	一	一	〇	二	三	三三
釜山	一九	一五	一四	九	六	四	六	五	六	六	二	一七	二九
木浦	一九	一八	二〇	一七	三	九	三	一〇	二	二	一七	九	一七八

備考

一、以上氣候表は中央氣象臺並に各地測候所に於ける果年の觀測成績に據り、中央氣象臺に於て調製したものである。表中氣壓(海面及び重力を更正した)及び降水量は耗、氣温は攝氏の度、濕度は百分率を以て示す。

二、統計に用ひた年數は、各測候所創立以來大正十四年に至る年期である。其年數及び各測候所の高さ(晴雨計の高さは次表の通りである)。

朝鮮の災害

海面上の高さ

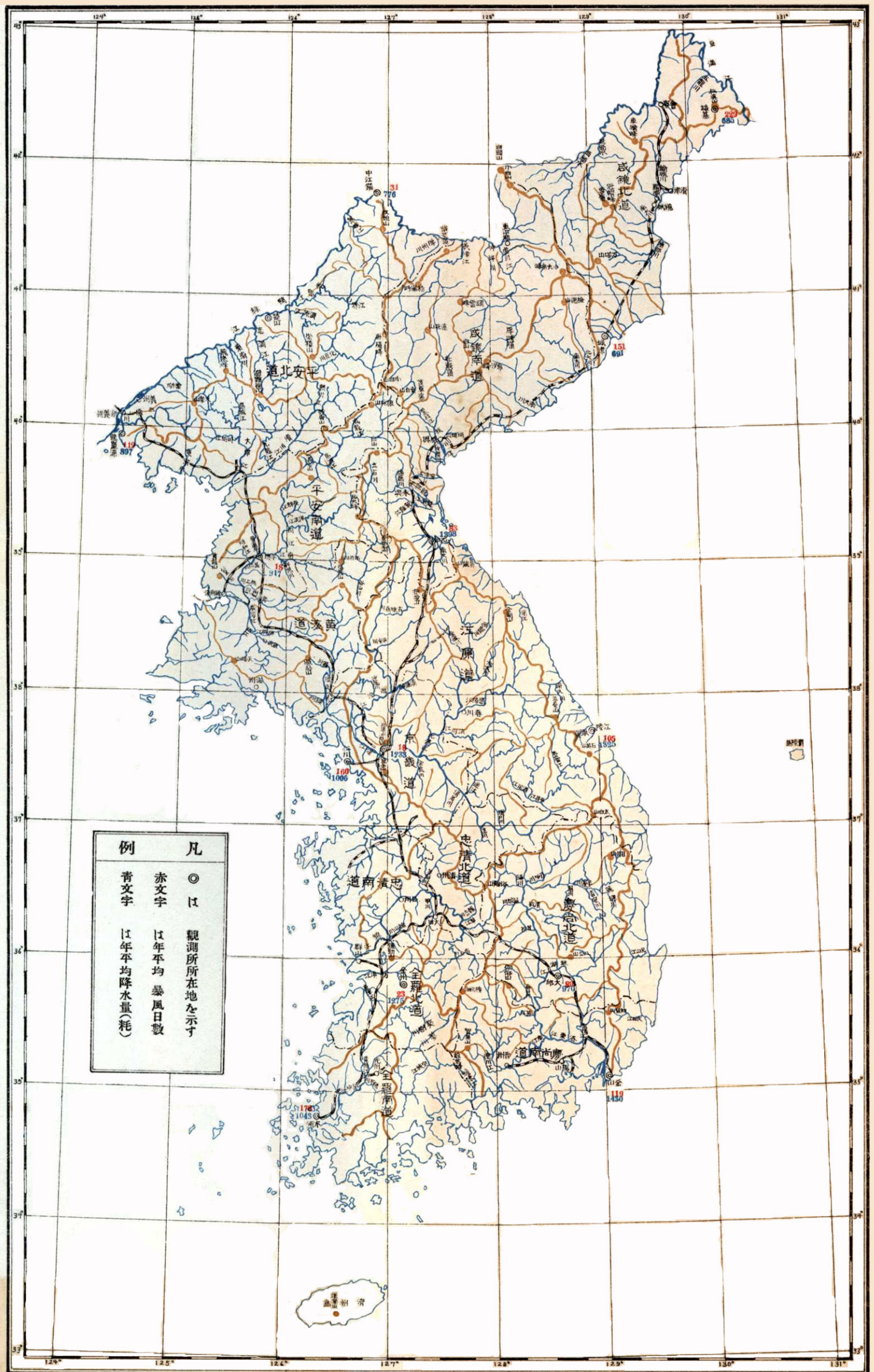
統計年数

一八

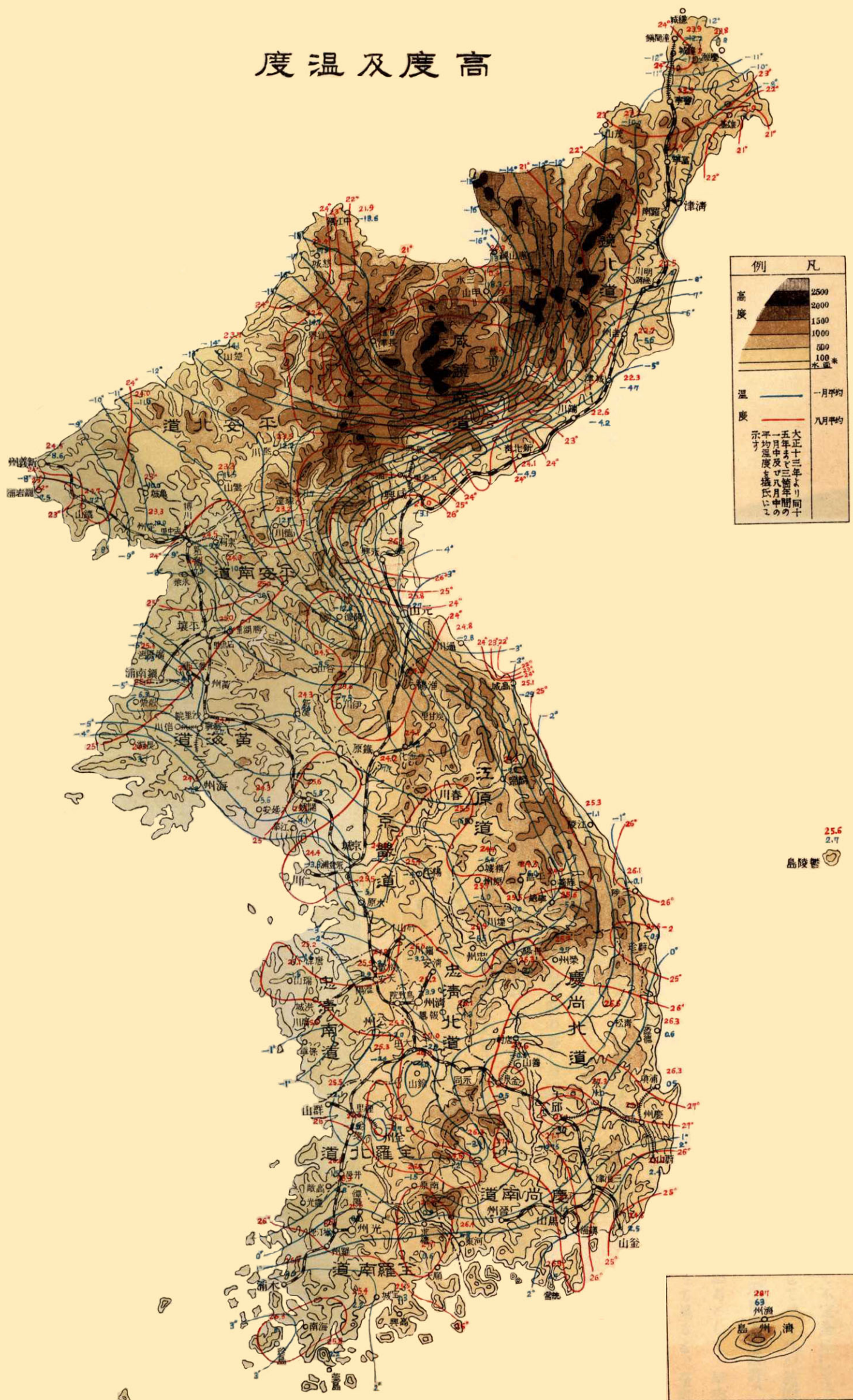
龍	平	木	仁	中	京	全	元	大	江	釜	城	雄
巖				江								
浦	壤	浦	川	鎮	城	州	山	邱	陵	山	津	基
六・四	四八・〇	二八・二	六七・六	三一四・〇	二九・五	五二・五	三六・五	五二・四	一一・三	一二・五	三一・九	六三・八
二一	一八	二一	二一	一一	一八	七	二一	一八	一四	二一	二〇	一一

朝鮮に於ける地勢及び氣象の大體は前述した通りであるが、更に別圖、山系及び水系、高度及び溫度と比較對照して慎重周到なる觀察を下すときは、自ら各種災害の發生し易き季節並に地域の如き、略ぼこれを明かにすることが出來やうと思ふ。

系河及系山



高度及温度



第二章 災害の記録

災害の現状を究め、更に將來の對策を講せんと思せば、遠き過去に遡りて、災害の記録を索ね、その程度、回数等を明かにして置かねばならぬ。朝鮮に於ける災害の記録は極めて不完全にして、李朝以前のは如きはこれを窺ふの資料に乏しく、李朝時代に至りてもその記述粗雑にして、これが範圍及び程度は到底捕捉し難き憾みがあるが、試みに、三國史記、高麗史、李朝實錄、增補文獻備考、東國通鑑、海東釋史、東國紀年、東史年表、各地方邑誌、古代觀測記錄等の文獻を參考として、旱害及び饑飢、洪水、暴風、火災、地震、霜害、雹害の記録を作製して見た。これに據りて見ると、全鮮的若くは地方的に最も被害の甚大なるものは旱害の影響であつたらしく、それが爲めに人民の饑餓に陥つた例も頗る多かつたことを示し、また旱害と蝗の害とは相伴つて襲來したことの尠くないのを認める。旱害に亞いで大なる被害を與へたものは洪水で、その暴威を逞うしたことは随分多かつたやうであるが、京城のみの出水表を見ても、その度数の多く、慘禍の著しきに驚かざるを得ないのである。朝鮮は地勢の關係よりして、氣象上内地に比して暴風の襲來を受けることは少いのであるが、それでも暴風に關する記録は相當に多くなつて居る。尤もその被害の程度は、單に大風とか、大風拔木、大風傷殺、太風飛沙、大風折木飛瓦といったやうな記載の爲め、これを明かにするを得ないのを遺憾とす

る。朝鮮に於ては普通に地震はないものゝ如く考へられて居るが、歴史を繙くに於ては頗る地震の記録に富んで居る。即ち新羅時代より高麗時代にかけてはその數甚だ多く、李朝時代に至つても強震の頻發したことを窺ふことが出来る。幸ひに近來殆んど地震らしき地震を感じざるも、これを以て直ちに朝鮮が地震上安全地帯であると速断してはならない。蝗害に亞いで霜害及び雹害の農作上に及ぼした被害も尠くなかつたらしいが、中にはその記録の多少誇大に載せられて居るのではないかと疑はるものもある。以上の自然災害に對して火災の被害も亦大なる地位を占め、大火の記録は極めて多いのであるが、史實に徴し概して冬期に火災の多いことは、過去に於てもその發火の原因が主として濫突の焚火に起因したことを想像するに難からず、また戰亂に基く兵火の洗禮を受けたことも一再ならざるを認むるのである。

これを要するに、有史以來、朝鮮に於ては各種の災害が頻發し、人命上、經濟上その慘害を齎らした例は頗る多いのであるが、過去に於ては治山、治水、水利、防火、觀測等の施設に殆んど見るべきものなく、人類家畜は勿論、土地、家屋、作物等が全く危險に對して暴露されて居た爲めに、自然災害をして暴威を逞にせしめたのである。韓國併合以來、これ等の災害防止に對する施設も漸次進歩しつつあり、罹災者救済に就いても、從來に比し面目を一新して居るけれども、今尙ほ旱害、水害、火災の如き、年々その被害の夥たゞしきものあり、これが爲めに受くる所の財政經濟上の創痍は決して

輕からざるものである。

旱害及び饑飢

朝鮮	年	代	日本	皇紀	西	曆	摘
百濟溫祚王	四	年	垂仁天皇	十五年	前	一五	春夏饑
同	三十三	年	同	四十四		一五	春夏大饑民相食
新羅南解王	五十五	年	同	四十七		一八	旱蝗饑
百濟溫祚王	三十七	年	同	四十八		一九	旱饑
新羅南解王	二十一	年	同	五十三		二四	蝗
百濟溫祚王	四十五	年	同	五十六		二七	春夏大旱草木焦枯
高句麗太祖王	三年	八月	同	八十四		五五	國南蝗害穀
同	十年	八月	同	九十三		六四	國南飛蝗害穀
百濟己婁王	十四	年	景行天皇	二十年		九〇	大旱無麥
同	三十二	年	同	三十八		一〇八	春夏旱饑民相食
高句麗太祖王	五十六	年	同	三十九		同	春夏大旱赤地饑
新羅婆娑王	三十	年	同	四十一		一〇九	蝗害穀
同	三十二	年	同	四十二		一一一	夏旱自五月至七月不雨
同	三十三	年	同	四十八		一二二	春夏大旱饑民相食
高麗太祖王	十六	年	同	五十二		一二二	蝗害穀
新羅祗摩王	十一	年	同			一二三	飛蝗害穀

朝鮮の災害

新羅逸聖王十七年	成務天皇二十年	一五〇	夏旱自四月六月不雨
同 阿達羅王八年七月	同 三十一年	一六一	蝗
同 二十一年	同 四十四年	一七四	春旱井泉皆竭
百濟肖古王二十二年五月	同 五十七年	一八七	王都旱井泉及漢水皆竭
同 四十二年	神功皇后攝政八年	二〇八	秋旱蝗
新羅奈解王十五年	同 十年	二一〇	春夏旱
百濟肖古王四十六年八月	同 十一年	二一一	國南蝗饑
新羅奈解王三十一年	同 二十六年	二二六	春夏大旱
百濟仇首王十四年	同 二十七年	二二七	夏大旱
新羅助賁王八年八月	同 三十七年	二三七	蝗
百濟古爾王六年	同 三十九年	二三九	春夏旱自正月至四月不雨
同 十三年	同 四十六年	二四六	大旱無麥
同 十五年	同 四十八年	二四八	春夏旱冬饑
新羅沾解王七年	同 五十三年	二五三	夏旱自五月至七月不雨
百濟古爾王二十四年正月	同 五十七年	二五七	大旱樹木皆枯
新羅沾解王十三年七月	同 五十九年	二五九	旱蝗
同 味鄒王七年	同 六十八年	二六八	春夏大旱
高句麗西川王三年六月	應神天皇三年	二七二	大旱
新羅儒禮王九年七月	同 二十三年	二九二	旱蝗
高句麗烽上王九年	同 三十一年	三〇〇	大旱饑自二月至七月不雨民相食

新羅基臨王五年	同	三十三年	三〇二	春夏旱
新羅訖解王四年七月	仁德天皇元	年	三一二	旱蝗
百濟比流王十八年七月	同	九年	三二一	國南蝗
同	同	十九年	三三一	春夏大旱草木枯江漢竭冬饑民相食
新羅奈勿王十七年	同	六十年	三七二	春夏大旱饑
高句麗小獸林王八年	同	六十六年	三七八	旱饑民相食
新羅奈勿王二十六年	同	六十九年	三八一	春夏旱
百濟近仇首王八年	同	七十年	三八二	春夏不雨饑民鬻子自活
高句麗故國壤王五年四月	同	七十六年	三八八	大旱
同	同	八	同	蝗
同	同	六年	三八九	春夏饑民相食
新羅奈勿王三十四年七月	同	七十七年	同	蝗饑
同	同	四十二年	三九七	北邊旱饑
同	同	四十四年七月	三九九	飛蝗蔽野
同	同	四十六年	四〇一	春夏旱
高句麗廣開土王十二年七月	同	三	四〇二	旱蝗
百濟阿莘王十一年	同	同	同	夏大旱禾苗焦枯
新羅實聖王五年七月	反正天皇元	年	四〇六	國西蝗害穀
高句麗廣開土王十五年	同	同	同	蝗
百濟腆支王十三年四月	允恭天皇六	年	四一七	旱饑

二四

新羅訥祇王四年	同	十六年	允恭天皇九年	四二〇	春夏大旱
百濟毗有王七年	同	二十一年	四三二	春饑穀貴人食松樹皮	
新羅訥祇王三十七年	同	二十二年	四三三	春夏旱	
百濟毗有王二十八年八月	同	三十六年	四四七	旱饑	
新羅訥祇王三十七年	同	四十二年	四五三	春夏旱	
百濟毗有王二十八年八月	同	安康天皇元年	四五四	蝗饑	
同三斤王三年	同	雄略天皇二十三年	四七九	春夏大旱	
新羅炤智王十四年	同	仁賢天皇五年	四九二	春夏大旱	
同十九年七月	同	十年	四九七	旱蝗	
百濟東城王二十一年	同	武烈天皇元年	四九九	夏大旱民相食	
同二十三年	同	三年	五〇一	旱自五月至七月不雨	
高句麗文咨王十一年八月	同	同	同	蝗	
百濟武寧王二年	同	四年	五〇二	春饑	
同六年	同	八年	五〇六	夏旱自三月至五月不雨川澤涸	
新羅智證王七年	同	同	同	春夏旱	
百濟武寧王二十一年八月	同	繼體天皇十五年	五二一	蝗饑	
高句麗安藏王五年	同	十七年	五二三	冬饑	
同安原王六年	同	宣化天皇二年	五三六	春夏大旱八月蝗	
同七年	同	三年	五三七	春饑	
同平原王五年	同	欽明天皇二十四年	五六三	夏大旱	

同	十三年八月	同	三十二年	五七一	早	蝗
新羅眞興王三十六年		敏達天皇四年	年	五七五	春	夏旱
高句麗平原王二十三年		同	十年	五八一	秋	饑
新羅眞平王十四年		崇峻天皇五年	年	五九二	夏	大旱
百濟武王七年四月		推古天皇十四年		六〇六	大旱	饑
新羅眞平王三十五年		同	二十一年	六一三	春	夏旱
同	五十年	同	三十六年	六二八	夏	大旱秋饑民賣子女自活
同	善德女王元年	舒明天皇四年	年	六三二	夏	旱
百濟義慈王十四年		孝德天皇五年	年	六五四	春	大旱饑
同	十七年	齊明天皇三年		六五七	大旱	赤地
新羅聖德王四年五月		文武天皇慶雲二年		七〇五	旱	國東饑
同	六年	同	四年	七〇七	饑	
同	十三年	元明天皇和銅七年		七一四	夏	旱
同	十四年六月	元正天皇寶龜元年		七一五	大	旱
同	十九年七月	同	養老四年	七二〇	蝗	害穀
景德王四年五月		聖武天皇天平十七年		七四五	早	
同	六年	同	十九年	七四七	秋	旱饑
同	十三年八月	孝謙天皇 天平勝寶	六年	七五四	早	蝗
恭惠王五年五月		稱德天皇 神護景雲	三年	七六九	早	蝗
元聖王二年		桓武天皇延暦五年		七八六	秋	早京都饑

朝鮮の災害

元聖王	三年七月	桓武天皇延暦六年	七八七	蝗害穀
同	四年	同	七八八	秋國西旱蝗
同	十一年自四月至五月	同	七九五	旱
同	十二年	同	七九六	京都饑
同	十三年九月	同	七九七	國東蝗害穀
哀莊王	十年七月	平城天皇大同四年	八〇九	大旱
憲德王	七年	嵯峨天皇弘仁六年	八一五	秋國西大饑
同	八年正月	同	八一六	年荒民抵浙東求食者百七十人
同	九年	同	八一七	夏秋大旱民多飢死者
同	十二年	同	八二〇	春夏旱大饑冬饑民賣子自活
同	十三年	同	八二一	春饑
興德王	二年八月	淳和天皇天長四年	八二七	京都大旱
同	七年	同	八三二	春夏大旱赤地
同	八年	同	八三三	大饑
文聖王	二年	仁明天皇承和七年	八四〇	夏大旱自四月至六月不雨冬饑
同	十年	同	八四八	夏旱
同	十五年八月	文德天皇仁壽三年	八五三	西南州郡蝗
憲安王	二年	同	八五八	夏大旱自五月至七月不雨
同	三年	清和天皇貞觀元年	八五九	春饑
景文王	七年	同	八六七	冬饑

同	十二年八月	同	十二年	八七〇	蝗	饑
同	十三年	同	十五年	八七三	春	饑
眞聖女王二年五月	至四月	宇多天皇仁和四年	八八八	旱		
孝恭王十年	至五月	醍醐天皇延喜六年	九〇六	不雨		
景明王五年八月		同	二十一年	九二一	旱	蝗
高麗太祖十七年		朱雀天皇承平四年	九三四	西京旱	蝗	
成宗七年		一條天皇永延二年	九八八	夏旱	蝗	
同	十二年六月	同	正曆四年	九九三	東北界蝗	
穆宗	十二年六月	同	寬弘六年	一、〇〇九	東北界蝗	
顯宗七年七月		三條天皇長和五年	一、〇一六	蝗秋江南饑		
同	八年六月	後一條天皇寛仁元年	一、〇一七	螟		
同	九月	同	同	同	蝗	
同	九年五月	同	二年	一、〇一八	西北界蝗	
同	十一年六月	同	四年	一、〇二〇	西北界蝗	
同	十五年五月	同	萬壽元年	一、〇二四	旱	
同	十九年八月	同	長元元年	一、〇二八	西北界蝗	
靖宗二年五月		同	九年	一、〇三六	旱	
文宗三年		後冷泉天皇永承四年	一、〇四九	關内饑四月西北界饑六月關西安北饑		
同	十八年四月	同	康平七年	一、〇六四	旱	饑
同	二十一年	同	治曆三年	一、〇六七	京北饑	

朝鮮の災害

二八

宣宗三年	白河天皇應德三年	一、〇八六	夏大旱自四月至六月不雨
同九年	堀河天皇寛治六年	一、〇九二	東路饑
同十年	同七年	一、〇九三	東路又饑
肅宗三年 自三月至四月	同 承德二年	一、〇九八	旱
睿宗十五年	鳥羽天皇保安元年	一、一二〇	秋大旱自夏至八月不雨五穀不登疾癘大興
同十六年	同二年	一、一二一	大旱
仁宗五年七月	崇德天皇大治二年	一、一二七	西北界蝗
同十年七月	同 長承元年	一、一三二	京都饑穀貴物賤銀瓶一斤直米五斗小馬一匹直一石特牛二頭直四斗布一匹直六升街巷饑殍相望
同十一年五月	同二年	一、一三三	旱蝗食京畿松葉殆盡
同二十三年七月	近衛天皇久安元年	一、一四五	西北界昌朔等七州及西海道蝗
毅宗元年七月	同三年	一、一四七	海州蝗
同三年六月	同五年	一、一四九	蝗
同六年六月	同 仁平二年	一、一五二	旱
同十六年四月五月	二條天皇應保二年	一、一六二	大旱
同十八年五月	同 長寛二年	一、一六四	大旱草木萎焦
同二十三年	高倉天皇嘉應元年	一、一六九	春夏大旱自正月至四月不雨
明宗三年	同 承安三年	一、一七三	春夏大旱自正月至五月不雨川井皆涸禾麥枯槁火災多作疾疫並喫人多饑死至有市人肉者
同十一年八月	安德天皇建久元年	一、一八一	春夏大旱自正月至四月不雨
同二十一年八月	鳥羽天皇建久二年	一、一九一	西海道蝗
同二十四年六月	同五年	一、一九四	旱

神宗二年七月	土御門天皇正治元年	一、一九九	蝗
高宗十四年	後堀河天皇安貞元年	一、二二七	全羅道饑
同十五年五月	同二年	一、二二八	北界蝗
同十七年正月	同寬喜二年	一、二三〇	大饑道殍相望
同四十二年	後深草天皇建長七年	一、二五五	春大饑夏秋大旱清州以南自三月至七月不雨江陽郡蝗食桑葉成繭
同四十三年	同康元元年	一、二五六	秋大饑銀一斤直二石
同四十四年閏四月	同正嘉元元年	一、二五七	京都大饑
同四十六年正月	同正元元年	一、二五九	京都大饑民相食官吏與民就食於南州者絡繹於道重房御史臺禁官吏出闕多饑死者
元宗元年	龜山天皇文應元年	一、二六〇	夏大旱京畿蝗
忠烈王三年三月	後字多天皇建武三年	一、二七七	耽羅大饑民有闔戶死者
同六年三月	同弘安三年	一、二八〇	蝗全羅道饑
同八年四、五月	同五年	一、二八二	大旱
同十一年四月	同八年	一、二八五	大旱
同十三年三月	同十年	一、二八七	全羅道饑民或有食丐子者
同四月	同	同	大旱
同十七年五月	伏見天皇正應四年	一、二九一	蝗
同二十七年	後伏見天皇正安三年	一、三〇一	大旱東界自正月至九月不雨
同二十九年八月	後三條天皇嘉元元年	一、三〇三	肅州原津自饑
忠宣王三年	花園天皇應長元年	一、三一一	大旱自四月至八月不雨
忠肅王後四年	後醍醐天皇建武二年	一、三三五	大旱自三月至五月不雨

朝鮮の災害

三〇

忠惠王	後四年	後村上天皇興國四年	一、三四三	春旱八月東界山谷蝗
同	五年四月	同	一、三四四	大旱自前年五月至今年四月不雨
忠穆王	三年四月五月	同	一、三四七	大旱
同	四年四月	同	一、三四八	京都大饑
恭愍王	三年	同	一、三五四	夏旱秋饑布一匹直米一斗三升九月蟲食松岳幾盡
同	六年九月	同	一、三五七	西北面大饑
同	七年	同	一、三五八	春夏大旱東北面及交州江陵道饑
同	八年六月	同	一、三五九	楊廣全羅慶尙道大旱冬大饑
同	九年四月	同	一、三六〇	大旱冬大饑全羅道最甚餓死者過半棄兒道路者不可勝計京都布一匹直米五升
同	十年三月	同	一、三六一	龍州饑民相食夏西北面大饑盜賊蜂起
同	十四年五月	同	一、三六五	京畿蝗
同	十六年五月	同	一、三六七	南方大旱行旅不得水熊津渡纔濡馬足
同	二十一年	後龜山天皇文中元年	一、三七二	冬饑布一匹直米一斗五升
同	二十二年四月	同	一、三七三	全羅慶尙道饑
辛禰	二年六月	同	一、三七六	大旱
同	九月	同	同	西北面蝗
同	四年五月	同	一、三七八	早冬京都饑布一匹直米一斗三四升
同	五年五月	同	一、三七九	旱
同	六年六月	同	一、三八〇	京都饑布一匹直米五升
同	七年五月	同	一、三八一	旱大饑布一匹直米一斗慶尙道高靈郡尤饑死者多棄兒滿路

同	八	年	同	二年	一、三八二	春旱無麥苗七月京都大饑布一匹直米三四升
恭讓王	二年	五月	同	元中七年	一、三九〇	蝗江陵交州道蝗食苗
同	四年	六月	同	九年	一、三九二	蝗食太廟松盡
朝鮮定宗	元年		後小松天皇應永	六年	一、三九九	忠清道饑
太宗	十一年		同	十八年	一、四一一	西北蔚海等道大旱
同	十五年		稱光天皇同	二十二年	一、四一五	大旱
同	十六年		同	二十三年	一、四一六	京畿饑
世宗	十八年		後花園天皇永享	八年	一、四三六	饑
同	二十七年		同	文安二年	一、四四五	京畿江原道大饑
文宗	庚午		同	寶德二年	一、四五〇	自四月至六月不雨
端宗	壬申	七月	同	享德元年	一、四五二	平安道大旱秋饑
同	二年		同	三年	一、四五四	京畿關東三南大饑
世祖	三年		同	長祿二年	一、四五八	下三道饑
睿宗	元年	六月	後土御門天皇文明	元年	一、四六九	關西沿江饑
成宗	元年		同	二年	一、四七〇	秋兩南饑
同	八年		同	八年	一、四七七	蝗
同	十二年	六月	同	十三年	一、四八一	大旱
同	十六年	六月	同	十七年	一、四八五	大旱
同	十七年		同	十八年	一、四八六	春大旱秋三南大饑
同	二十三年		同	明應元年	一、四九二	大旱饑

朝鮮の災害

三二

中	宗	六	年	後柏原天皇永正八年	一、五一	北界大旱
同	二	十	年	同 大永五年	一、五二五	京都饑
同	三	十	五年	後奈良天皇天文九年	一、五四〇	大旱
明	宗	乙	己	同 十四年	一、五四五	秋京外大饑餓葦戰路
同	二	年	年	同 十六年	一、五四七	饑
同	三	年	年	同 十七年	一、五四八	京都饑
宣祖三年	自五月至七月			正親町天皇元龜元年	一、五七〇	不雨嶺南大饑
同	五	年	五月	同 三年	一、五七二	有虫食禾苗
同	十	二	年六月	同 天正七年	一、五七九	咸饑大旱禾苗盡枯
同	十	三	年	同 八年	一、五八〇	秋饑京畿江原兩西尤甚
同	十	七	年	同 十二年	一、五八四	冬海州饑民掘食白土
同	二	十	六年	後陽成天皇文祿二年	一、五九三	水大饑木綿一匹直米二升一馬價米三四斗
同	二	十	七年	同 三年	一、五九四	饑
光	海	君	戊申	同 慶長十三年	一、六〇八	大旱饑
同	四	年	年	後水尾天皇同十七年	一、六一二	咸饑道大饑死亡無數
同	七	年	五月	同 元和元年	一、六一五	大旱草木盡枯井泉皆涸冬大饑
同	十	一	年	同 五年	一、六一九	秋連月大旱禾稼盡枯大饑
仁	祖	四	年	同 寬永三年	一、六二六	秋大饑餓葦相望三南尤甚
同	五	年	年	同 四年	一、六二七	兩西大饑
同	六	年	七月	同 五年	一、六二八	大旱

三四

顯宗	十一年		靈元天皇寬文九年	一、六六九	京都及湖南饑
同	十二年		十年	一、六七〇	夏大旱秋大水大饑
肅宗	甲寅年		延寶二年	一、六七四	大饑 秋關西饑
同	元年五月		三年	一、六七五	富平地有虫名蜃蛭穴地中而畜生蠶食穀苗
同	三		五年	一、六七七	夏大旱冬京都嶺南湖西饑
同	五		七年	一、六七九	饑
同	六年		八年	一、六八〇	北道饑
同	八年		天和二年	一、六八二	濟州及兩西饑
同	十		貞享元年	一、六八四	早
同	十一		二年	一、六八五	旱饑
同	十二		三年	一、六八六	湖南饑
同	十六		東山天皇元祿三年	一、六九〇	夏早
同	十七		四年	一、六九一	京都饑
同	二十一		八年	一、六九五	大饑
同	二十二		九年	一、六九六	同
同	二十四		十一年	一、六九八	饑
同	二十九		十六年	一、七〇三	饑
同	三十		寶永元年	一、七〇四	夏早
同	三十八		中御門天皇正德二年	一、七一二	京都饑

朝鮮の災害

三六

英祖	四十一年	後櫻町天皇明和元年	一、七六四	大旱自四月至七月不雨
同	四十四年	同	一、七六八	濟州饑
同	四十六年	同	一、七七〇	饑
正祖	七年	光格天皇天明三年	一、七八三	饑
純祖	三十二年	仁孝天皇天保三年	一、八三二	太饑
李太王	十三年	明治天皇明治九年	一、八七六	夏旱八月十一日霜殺穀八路大饑
同	二十五年	同	一、八八八	夏旱

洪水

朝鮮年代	日本皇紀	西曆	摘要
高句麗閔中王二年五月	垂仁天皇七十四年	四五	國東大水
同 墓本王元年八月	同 七十七年	四八	大水山崩二十餘所
百濟己婁王四十年六月	景行天皇四十六年	一一六	大雨漢江水漲漂流人家
新羅祗摩王二十年五月	成務天皇元年	一三一	大雨漂民戶
同 阿達羅王七年四月	同 三十年	一六〇	暴雨關川水溢漂流人家
同 伐休王九年五月	仲哀天皇元年	一九二	大水山崩十餘所
同 奈解王十七年五月	神功皇后攝政十二年	二二二	大水漂毀民屋
百濟仇首王八年五月	同 二十一年	二二一	國東大水山崩四十餘所
同 九年六月	同 二十二年	二二二	京都雨魚
新羅沾解王十四年夏	同 六十年	二六〇	大水山崩四十餘所

同	儒禮王七年五月	應仁天皇二十一年	二九〇	大水月城額
同	乾解王四十四年四月	仁德天皇三十八年	三五〇	大雨淡旬平地水三四尺漂沒官私屋舍
同	奈勿王十一年四月	同	三六六	大水山崩十四餘所
同	十八年五月	同	三七三	京城雨魚
同	慈悲王八年四月	雄略天皇九	四六五	大水山崩十七所
百濟東城王十三年六月	仁賢天皇四	年	四九一	京都大水熊川水漲漂沒二百餘家
新羅炤智王十八年五月	同	九	四九六	大雨關川水漲漂沒二百餘家
百濟東城王十九年六月	同	十	四九七	大雨漂沒民屋
高句麗安原王五年五月	安閑天皇二	年	五三五	國南大水漂死者二百餘人
新羅眞平王十一年七月	崇峻天皇二	年	五八九	國西大水漂沒民戶三萬三百六十戶死者二百餘人
百濟武王十三年五月	推古天皇二十	年	六一二	大水漂沒民屋
新羅善德女皇七年九月	舒明天皇十	年	六三八	雨黃花
高麗寶藏王十五年五月	齊明天皇二	年	六五六	王都雨鐵
新羅文武王四年七月	天智天皇三	年	六六四	一善郡大水溺死三百餘人
同	聖德王十九年四月	淳仁天皇天平寶字四年	七六〇	大水山崩十三所
同	惠恭王十六年二月	光仁天皇寶龜十一年	七八〇	雨土
同	元聖王十三年九月	桓武天皇延暦十六年	七九七	大水山崩
同	憲德王六年五月	嵯峨天皇弘仁五年	八一四	國西大水
同	十五年正月	同	八二三	雨蟲于西原
高麗太祖七年秋	醍醐天皇延長二年		九二四	京都大水漂沒民屋水溢街衢漂沒人家水變爲赤也

朝鮮の災害

三八

顯宗十七年七月	同	後一條天皇萬壽三年	一、〇二六	京都大雨四日漂毀民屋
同 九月	同	同	同	西京大水漂沒民家八十餘戶
靖宗五年六月	同	後朱雀天皇長曆三年	一、〇三九	大雨鴨綠江水漲漂失兵船七十餘艘
同 六年五月壬戌	同	長久元年	一、〇四〇	大雨彌月
同 七年二月癸未	同	二年	一、〇四一	雨黃土
文宗二十一年十一月	同	後冷泉天皇治曆三年	一、〇六七	南至日大雷雨
宣宗五年五月	同	堀河天皇寬治二年	一、〇八八	暴雨海溢漂沒人家覆沒舟楫
肅宗四年六月	同	堀河天皇康和元年	一、〇九九	大雨九龍山頽
同 九年七月戊戌	同	長治元年	一、一〇四	雨穀千通海縣
睿宗八年七月	同	鳥羽天皇永久元年	一、一一三	大雨平地水深尺餘
仁宗二年七月	同	崇德天皇天治元年	一、一二四	大雨雨(是日册李資謙爲朝鮮國公百官庭賀未畢大雷雨水深一丈)
同 九年十月乙丑	同	天承元年	一、一三一	大雨四日
同 十二月壬辰	同	同	同	大雨溝渠凍如三月
同 十年八月	同	長承元年	一、一三二	大雨漂沒水家無數又水湧奉恩寺後山奔流入國學漂沒經史百家語
同 十二年五月	同	三年	一、一三四	雨血于廣州
同 二十三年六月	同	近衛天皇久安元年	一、一四五	大水東界文湧二州山崩水湧漂沒城門
毅宗十九年三月	同	二條天皇永萬元	一、一六五	天寒雨甚衝卒凍死
同 六月	同	同	同	大雨漂沒民家六十餘戶
明宗六年正月癸酉	同	高倉天皇安元二年	一、一七六	雨黃土
同 九年六月	同	治承三年	一、一七九	大雨市邊橋樓漂流

同	十年六月	同	四年	一、一八〇	大雨西京苻仁寺漂流八十餘間
同	十六年閏七月	後鳥羽天皇文治二年	一、一八六	安邊府大水漂水千餘人	
同	十八年七月	同	四年	一、一八八	定長宜預高和六州大雨漂盡民屋
同	戊申	同	同	同	鎮溪界黃蟲黃鼠隨雨而下損傷禾稼
同	八月	同	同	同	登文宜鎮溪龍津寧仁等諸城大水漂蕩城郭死者甚衆
高宗	八年三月	仲恭天皇承久三年	一、二二一	雨青色蚯蚓	
同	十二年五月	後堀河天皇喜祿元年	一、二二五	大雨二日平地水深七八尺許	
同	三十三年五月	後嵯峨天皇寬元四年	一、二四六	雨毒蟲	
同	四十一年七月乙巳	後深草天皇建長六年	一、二五四	大雨傷稼多漂民戶	
同	四十三年二月	同	一、二五六	雨水銀	
同	七月	同	同	京都大水	
同	四十五年六、七月	同	一、二五八	恒雨	
元宗	十四年閏六月庚申	龜山天皇永文十年	一、二七三	大雨傷稼	
忠烈王	十五年八月	伏見天皇正應二年	一、二八九	大雨十日雨漁	
同	閏十月庚辰	同	同	大雷雨雨如墨水	
同	二十七年戊申	後伏見天皇正安三年	一、三〇一	大雨傷稼	
忠宣王	二年七月	花園天皇延慶三年	一、三一〇	大雨松岳南崖崩墜壑	
忠穆王	四年四月	後村上天皇正平三年	一、三四八	大雨松岳崩	
忠定王	二年八月	同	一、三五〇	淮陽大水漂沒官廨民戶及金剛山諸寺	
恭愍王	五年七月壬辰	同	一、三五六	大雨漂沒人家	

朝鮮の災害

恭愍王七年五月	後村上天皇正平十三年	一、三五八	慶尚道大水禾穀皆漂沒
同 十一年十一月乙巳	同 十七年	一、三六二	大雨震雷
同 十六年五月	同 二十二年	一、三六七	雨血于泥靚
同 二十二年四月丁丑	後龜山天皇文中二年	一、三七三	〔夜雨白毛、戊寅、己卯、壬午、癸未、丁亥、丙申亦如之長二寸或三四寸細如馬鬣〕
同 五月丙寅	同	同	雨水于平州大如升
辛禰元年六月丙午	天授元年	一、三七五	漢陽府大雨三角山國望峯崩
同 七年七月癸亥	同 弘和元年	一、三八一	大雨漂溺人畜
同 八年二月癸亥	同 二年	一、三八二	雨穀有似黑黍小豆蕎麥者
恭讓王元年四月	同 元中六年	一、三八九	恒雨山崩水湧
同 二年五月	同 七年	一、三九〇	大雨雨〔時清州、獄起評理尹虎等方鞠囚忽雷雨大〕
同 九月丙午	同	同	〔作前川暴漲毀城南門直衝北門城中水深丈〕
朝鮮太宗元年	後小松天皇應永八年	一、四〇一	端川雨炭
世宗三年	稱光天皇同二十八年	一、四二一	大雨仁政殿驚頭皆頽
成宗四年夏	後土御門天皇文明五年	一、四七三	大水
同 九年四月	同 十年	一、四七八	雨 土
中宗五年七月	後柏原天皇永正七年	一、五一〇	京師大水平地水深數尺漂沒民戶
同 十五年二月	同 十七年	一、五二〇	大水三江漲溢
明宗二年七月	後奈良天皇天文十六年	一、五四七	〔八道大水人畜田舍漂溺無數平壤城中依山倉亦至沈沒〕
同 六年三月己丑	同 二十年	一、五五一	〔漂沒家舍七百二十餘戶淹死人二百餘名牛馬三百餘匹〕
宣祖六年二月	正親町天皇天正元年	一、五七三	雨 土

同	十年十月	同	五年	一、五七七	京畿大水漂没人屋
同	十一年六月	同	六年	一、五七八	下三道大水壞山襄陵
同	十二年六月	同	七年	一、五七九	下三道大雨
同	十三年春	同	八年	一、五八〇	大水人多溺死
同	六月	同		同	大雨陵谷變遷
同	二十三年十一月甲辰	後陽成天皇同十八年		一、五九〇	京都大雨江水漲溢
同	三十八年七月辛卯	同 慶長十年		一、六〇五	〔畿南關東東京畿忠清道大水公私家舍漂没人畜溺死不記其數安邊府境內始盡浮没牛馬雞犬山禽野獸堆死如山通或疑非天降雨海翻爲災云〕
光海君戊申夏		同 十三年		一、六〇八	雨 草 實
仁祖元年七月		後水尾天皇元和九年		一、六二三	大 霖 雨
同 三年二月		同 寬永二年		一、六二五	大雨連月
同 四月		同		同	順天府大雨山崩漂没人家五百餘戶
同 五年二月		同 四年		一、六二七	雨血草葉皆赤
同 四月甲子		同		同	同
同 十五年六月		明正天皇同十四年		一、六三七	大雨連月
同 二十五年七月		後光明天皇正保四年		一、六四七	京畿江原道大水
顯宗五年閏六月辛巳		靈元天皇寬文四年		一、六六四	湖南大水漂没男女五十餘人
肅宗八年七月戊午		同 天和二年		一、六八二	咸鏡道大水漂没九百餘戶人畜壓溺死者數百餘
同 三十三年夏		東山天皇寶永四年		一、七〇七	大水
同 三十七年八月		中御門天皇正德元年		一、七一一	嶺東大水

朝鮮の災害

四二

英祖	五年八月	中御門天皇享保十四年	一、七二九
同	七年八月	同 十六年	一、七三一
同	十五年六月	櫻町天皇天文四年	一、七三九
同	八月	同	同
同	十七年	同 寛保元年	一、七四一
同	十八年九月	同 二年	一、七四二
同	二十六年九月	桃園天皇寛延三年	一、七五〇
同	二十八年六月	同 寶曆二年	一、七五二
同	三十九年	同 三年	一、七五三
正祖	元年八月丁巳	後桃園天皇安永六年	一、七七七
同	五年六月	光格天皇天明元年	一、七八一
同	八月	同	同
同	十三年六月	同 寛政元年	一、七八九
同	二十年八月	同 八年	一、七九六
同	二十一年	同 九年	一、七九七
純祖	十年七月	同 文化七年	一、八一〇
同	八月	同	同
同	十五年八月	同 十二年	一、八二五
同	十六年閏六月	同 十三年	一、八一六
同	十七年六月	仁孝天皇同十四年	一、八一七

關北大水漂没近千人	
全羅道大水壞八塚墓漂棺榔	
黃海道大水一坪九百餘戶盡淹死	
北道大水漂没近千人	
關東大水漂没千餘戶	
嶺南大水淹死者甚衆	
湖南同福等縣大水漂没一百三十戶	
畿甸大水漂没數百戶壓死者三十餘人	
關東大水	
起大雨山崩漂戸不記其數金剛山萬瀑洞填塞	
平安道大水漂没三百餘戶	
慶尙道大水淹沒四百十餘戶	
平壤大水漂没五百餘戶	
義州大水漂没一千餘戶淹死者二百餘人	
黃海道大水漂没三百餘戶淹死者數十人	
義州大水漂没一千七百餘戶淹死者一百七十餘人	
咸鏡道大水漂没七百餘戶淹死者四十餘人	
慶尙道大水漂没一千八百餘戶淹死者五百七十餘人	
黃海道大水漂没五百餘戶	
全羅道大水漂没二千三百餘戶	淹死者八十餘人
慶尙道同	一千餘戶
忠清道同	六百餘戶
	同 二十餘人

四四

哲宗	五年七月	安政	元年	一、八五四	忠清道大水漂額一千餘戶	倭死者四十人
同	八月	同		同	全羅道同	同
同	七年八月	同	三年	一、八五六	忠清道同	二百三十餘人
同	八年八月	同	四年	一、八五七	慶尙道同	六十餘人
同	十一年八月	萬延	元年	一、八六〇	慶尙道同	三十餘人
同	十三年七月	文久	二年	一、八六二	慶尙道同	五十餘人
同	十四年六月	同	三年	一、八六三	全羅道同	二百餘人
同	八月	同		同	咸鏡道同	三十餘人
李太王	元年夏	元治	元年	一、八六四	全羅道同	五十餘人
同	二年七月	慶應	元年	一、八六五	廣州同	三十餘人
同	八月	同		同	慶尙道同	五人
同	三年七月	同	二年	一、八六六	慶尙道同	二百五十餘人
同	五年七月	明治天皇明治元	年	一、八六八	全羅道同	一百五十餘人
同	八年七月	同	四年	一、八七一	江原道同	三十餘人
同	十一年七月	同	七年	一、八七四	平安道同	三十餘人
同	十八年閏七月	同	十四年	一、八八一	慶尙道同	六十餘人
同	十月	同		同	慶尙道同	二十餘人
同	二十二年八月	同	十八年	一、八八五	慶尙道同	九十餘人
同	二十五年七月	同	二十一年	一、八八八	全羅道同	二十餘人
同		同		同	平安道同	三百餘人

同	二十八	十二月	同	二十四	一、八九一	慶尚道同	五千餘戶	同	一百七十餘人
同	二十九	年十月	同	二十五	一、八九二	江原道同	二千七百餘戶	同	六十餘人
						平安道同	六百餘戶	同	六十餘人

京城出水表 (古代觀測記錄に據る)

朝鮮 王名	千支	月	日	日本 年號	西曆	月	日	概況
太宗	丁亥	五月	庚辰	應永一四	一四〇七	七月	十一日	大雨京城川梁皆溢
同	己丑	五月	己卯	同	一四〇九	六月	二十九日	大雨水漲橋梁盡毀城內溺死者二人昭格殿西洞山崩
同	庚寅	五月	己丑	同	一四一〇	七月	四日	大雨水漲漂沒橋梁
同	同	七月	壬午	同	同	八月	二十六日	大雨前月久旱及是月陰雨連日至是日大甚都城水溢自鐘樓以東至興仁門人不能通
同	同	八月	壬寅	同	同	九月	十五日	大雨水溢
同	癸巳	五月	辛丑	同	一四一三	六月	二十八日	大雨城內川邊民舍即令漢城府察之母致漂沒留後司街中水漂四尺
同	丁酉	八月	庚子	同	一四一七	十月	六日	都觀察使李伯持報自本月初五日至八日大雨且風陸地水溢三十里
同	戊戌	五月	壬申	同	一四一八	七月	五日	大雨京都開川水漲橋梁漂沒
同	同	同	乙亥	同	同	同	八日	川邊家漂流者數十皆失家產又靜時後山顛壓僧徒死者五名
同	同	同	丙子	同	同	同	九日	大雨水溢大市爲川人不能行傳子承政院曰予終夜不寐此水於甲申年何如李明德等啓曰此水不及甲申況甲申之年當七月穀成之時此水當至苗其害又不甚也
同	同	同	甲申	同	同	九月	十五日	大雨水邊郊野牧馬溺死禾稼大傷
世宗	庚子	八月	乙卯	同	一四二〇	八月	三十日	大雨水溢入窟次上猶不移
同	辛丑	七月	戊戌	同	一四二一	七月	十五日	大雨如注平地數尺
同	同	六月	癸卯	同	同	同	十五日	大雨京橋川梁沉低下流淤塞溺殺人家七五哭聲相聞或有登家攀樹以免者溺死者頗多

第二章 災害の記録

朝鮮の災害

四六

世宗	壬寅	四月	丙午	應永二九	一四二二	五月	十九日	大雨豐壤離宮水間類初太上王於離宮之西引水爲池壘石爲畔而構亭於其中
同	丙午	六月	丙寅	同三三	一四二六	七月	十七日	大雨京中十九戶漂流
同	庚申	六月	甲戌	永亨一二	一四四〇	七月	十一日	大雨城中川梁漲溢水邊人家多漂沒
同	辛酉	七月	甲辰	嘉吉元	一四四一	八月	五日	大雨城中大水
同	同	八月	壬申	同	同	九月	二日	大雨夜城中大水漂沒人家平地水三尺許
同	癸亥	八月	辛丑	同三	一四四三	九月	二十一日	漢江水溢沒人家
文宗	辛未	七月	丁未	寶德二	一四五一	八月	十六日	大雨街衢漲溢水深數尺川邊人家有或沒者
世祖	己卯	六月	戊辰	長祿三	一四五九	七月	二十六日	大雨城中水漲平地水深四五尺江水亦漲人多漂沒
同	壬午	六月	甲申	寬正三	一四六二	七月	二十六日	大雨水邊家漂沒
同	戊子	六月	庚寅	應仁二	一四六八	六月	三十日	大雨市街水深三四尺人多漂沒
成宗	壬辰	五月	癸丑	文明四	一四七二	七月	二日	大雨水邊居民漂流多
中宗	辛未	七月	丙申	永正八	一五一一	八月	三日	大水平地水深數尺漂沒民戶
同	庚辰	七月	同	同	一五二〇	八月	十五日	大雨沿江居民多被漂沒家舍頽壓山岸沙汰人畜死者甚多京中及廣州尤甚
明宗	甲寅	六月	乙亥	天文二三	一五五四	七月	十五日	大水漢江水標二十一尺二寸
宣祖	丙子	十月	天正四	一五七六	一五七九	七月	十五日	京城大水漂沒人家
同	己卯	十月	同	同	一五七九	七月	十五日	春大水人多溺死
同	己丑	十一月	甲辰	同	一五八九	十二月	七日	大雨江水漲溢
同	戊戌	十二月	壬申	慶長四	一五九九	一月	十六日	大雨自昏至曉川溢
仁祖	丁卯	六月	丙辰	寬永四	一六二七	七月	三日	大風雨如注江上以常流水處基址尺量則以布帛尺二尺五寸加漲溢
同	己巳	七月	辛未	同六	一六二九	八月	六日	禮曹啓曰立秋後霖雨累日不斂損傷甲戌漢江水溢漲溢江邊居民有十餘家

同	癸酉	七月	己酉	同	九	一六三三	八月	二十一日	中部水標自本月十八日至十九日平明下雨 水漂良中七尺五寸漲溢達夜下雨如注
同	丙子	五月	甲子	寬永一三	一六三六	六月	二十三日	漢江水如漲四尺五寸許戊辰今日下雨九尺五 寸加流	
同	同	六月	己卯	同	同	七月	八日	常流水基四尺五寸加漲溢漢江常流水二十 八尺二寸加流中部水標常流良中五尺加流	
同	同	七月	己巳	同	同	八月	二十八日	夜下雨四尺五寸加流	
同	辛巳	六月	乙巳	同	一六四一	七月	八日	中部水標四尺流下	
同	壬午	六月	丁卯	同	一六四二	七月	二十五日	南部水標三尺五寸漲溢	
同	癸未	四月	壬子	同	一六四三	六月	三日	雨下漢江水基一尺五寸加漲溢十九日漢江 常流水基加三尺五寸漲溢流下	
同	同	五月	癸卯	同	同	同	二十六日	漢江常流塞以布帛尺十餘尺漲溢	
同	同	六月	丙子	同	同	七月	二十九日	水標直手本內看審則五尺流下事	
同	丙戌	六月	丙子	正保三	一六四六	七月	十三日	南部水標未時下雨水標四尺流下	
同	同	十二月	壬辰	同	一六四七	一月	二十五日	大雨三日漢江水漲	
同	丁亥	七月	同	同	同	同	同	京畿大水	
孝宗	庚寅	八月	己亥	慶安三	一六五〇	九月	十三日	京畿大雨民多溺死者	
同	甲午	六月	丙寅	承應三	一六五四	七月	二十一日	大雨關內水溢人有殞死者三角山小峰崩丁 卯漢城府啓曰昨日暴雨川梁漲溢橋梁崩頽	
同	丁酉	六月	己卯	明曆三	一六五七	七月	十八日	家舍漂流人民有殞死者	
同	戊戌	六月	甲申	萬治元	一六五八	七月	十八日	南部水標去夜下雨三尺二寸流下	
同	壬寅	六月	丙寅	寬文二	一六六二	八月	八日	京城大水	
顯宗	丙午	六月	庚午	同	一六六六	七月	二十二日	大雨不止城中屋壞壓死亦多丁卯畿內大水 水邊人家漂沒甚多禾穀沈水傷損不可勝計	
同	戊申	六月	乙亥	同	一六六八	七月	十六日	漢江水漲溢江邊人家五戶沈沒	
同	辛亥	七月	甲子	同	一六七一	八月	十九日	自三日連晝夜大雨漢江水漲高至三十尺故 說祭祈晴	
第二章	災害の記錄							自曉大雨暴注崇朝向止城中大小溝渠無不潑 溢橋梁圯毀衢街成川人多殞死仁慶宮前橋圯 猝死者至十四人城中水災之慘近古所未有	
四七									

[illegible]

朝鮮の災害

五〇

肅宗	丙子	五月	癸亥	元祿九	一六九六	六月	七日	中部五尺漢江五尺三寸
同	同	六月	丁亥	同	同	七月	一日	漢江七尺五寸庚寅中部七尺五寸壬寅中部七尺八寸
同	丙丑	三月	丙子	同	一六九七	五月	十六日	漢江五尺五寸
同	同	五月	庚子	同	同	七月	九日	漢江以布帛尺六尺加漲溢
同	同	六月	戊午	同	同	同	二十七日	中部五尺五寸漢江七尺六寸加漲溢癸亥中部六尺五寸丙寅中部六尺七寸
同	戊寅	五月	丁丑	同	一六九八	六月	十一日	中部八尺漢江十二尺五寸加漲溢壬寅中部七尺
同	同	六月	甲寅	同	同	七月	十八日	中部水標七尺江水漲溢江邊人家沈水不得尺量丁巳中部五尺丙寅中部七尺
同	同	七月	庚寅	同	同	八月	二十三日	中部十尺漢江十四尺五寸
同	己卯	六月	辛亥	同	一六九九	七月	十日	中部五尺漢江七尺五寸
同	同	七月	丁亥	同	同	八月	十九日	京畿川梁漲溢
同	庚辰	二月	辛巳	同	一七〇〇	四月	五日	漢江下雨後十二尺七寸加漲溢
同	同	五月	乙巳	同	同	六月	二十九日	中部六尺五寸丙午中部七尺五寸戊申漢江十尺七寸
同	同	七月	癸卯	同	同	八月	二十六日	中部六尺五寸
同	辛巳	五月	甲寅	同	一七〇一	七月	三日	漢江七尺
同	同	六月	己未	同	同	同	八日	中部六尺庚申中部十尺五寸漢江十尺癸亥中部十尺乙丑中部六尺丁卯中部十尺辛巳中部十尺五寸甲申十尺五寸
同	同	七月	戊申	同	同	八月	二十六日	中部七尺
同	同	八月	丁巳	同	同	九月	四日	中部六尺五寸庚申中部六尺
同	壬午	六月	辛未	同	一七〇二	七月	四日	中部八尺丁丑中部八尺五寸漢江人家沈溺不得尺量
同	同	閏六月	甲申	同	同	七月	二十八日	中部九尺甲午中部十尺丙午九尺五寸
同	同	七月	甲寅	同	同	八月	二十七日	中部十尺漢江漲溢水邊家舍沈溺不得尺量

同	癸未	六月	乙亥	同	一六	一七〇三	七月	十四日	中部九尺五寸 中部九尺濠水漲江津頭居家門進水沈以布帛尺十二寸乙酉漢江十三尺許癸巳中部七尺五寸
同	甲申	六月	辛巳	寶永元	同	一七〇四	七月	十五日	中部七尺漢江五尺五寸癸未漢江十七尺
同	乙酉	七月	戊申	同	同	同	八月	十日	中部六尺漢江九尺八寸
同	同	五月	甲子	同	二	一七〇五	六月	二十二日	中部六尺五寸
同	同	六月	丁酉	同	同	同	七月	二十五日	中部七尺漢江六尺四寸
同	同	七月	丙寅	同	同	同	八月	二十三日	中部五尺漢江七尺三寸
同	丙戌	五月	壬午	同	三	一七〇六	七月	五日	中部六尺五寸漢江十二尺五寸
同	丁亥	六月	甲申	同	四	一七〇七	七月	二日	漢江五尺二寸丁亥中部五尺乙丑中部六尺濠水大漲水邊人家皆沈以布帛尺二十六尺二寸丙申江水大漲水邊民家漂沈二十八尺加漲溢夏大水
同	己丑	五月	丁酉	同	六	一七〇九	七月	四日	中部五尺五寸江水大漲七尺八寸
同	同	六月	乙卯	同	同	同	同	二十二日	京畿連日三日晝夜暴注人家漂流十八戶中部水標十尺
同	同	七月	戊子	同	同	同	八月	二十五日	中部六尺
同	同	八月	丁未	同	同	同	九月	十二日	濠水漲七尺八寸
同	庚寅	五月	壬辰	元祿七	一七一〇	六月	二十四日	濠水漲六尺五寸	
同	同	閏七月	甲辰	同	同	同	九月	四日	漢江十三尺六寸丁未中部六尺
同	辛卯	五月	乙亥	正德元	一七一	六月	二十六日	中部五尺五寸丙戌漢江五尺六寸	
同	同	七月	庚戌	同	同	同	九月	五日	漢江水漲十六尺五寸
同	壬辰	六月	辛酉	同	二	一七一二	七月	十二日	漢江十五尺己巳中部七尺漢江十四尺五寸
同	同	八月	甲寅	同	同	同	九月	三日	中部六尺

第二章 災害の記錄

五一

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
癸未	壬午	庚辰	戊寅	壬申	丙寅	辛丑	己亥	同	戊戌	同	同	同	同	同	同	同	同	同	癸巳
六月	六月	六月	八月	六月	五月	六月	五月	七月	六月	六月	五月	五月	六月	五月	七月	六月	六月	六月	閏五月
丙申	乙卯	戊戌	甲子	辛亥	己酉	戊午	壬申	乙亥	癸未	戊子	辛巳	丙子	癸酉	己未	丁酉	己亥	甲戌	正德三	甲戌
同一三	同一二	同一〇	同八	寶曆二	延享三	同六	同四	同	同三	同	同二	享保元	同五	同	同	同四	同	一七二三	一七二三
一七六三	一七六二	一七六〇	一七五八	一七五二	一七四六	一七一	一七一九	同	一七一八	同	一七一七	一七一六	一七一五	一七一五	同	一七二四	同	一七二三	一七二三
七月二十日	八月十二日	八月六日	九月十二日	八月一日	八月二十三日	七月二十二日	六月二十日	八月十五日	七月三日	七月十三日	七月六日	七月六日	七月九日	六月二十五日	九月六日	八月九日	七月二十日	七月二十日	七月二十日
水標七尺三寸漢江以布帛尺二十尺加漲	漢江以布帛尺九尺加漲溢	漢江以布帛尺十二尺加漲辛丑水標五尺五寸	漢江以布帛尺十九尺加漲	二百十餘戶 京畿大水人物壓死者三十三人人家漂沒者二百十餘戶	大霖雨連日平地水深丈餘道路不通廬舍漂流城中人畜亦多溺死者	漢江水漲溢五尺五寸	中部六尺漢江五尺五寸	漢江漲溢五尺二寸庚子中部十二尺幾越霖雨水大漲七尺五寸癸酉霖雨暴注江水漂流三十五尺流下	中部五尺五寸	中部水標上過流甲申中部五尺丙戌漢江十尺五寸	漢水漲二十五尺八寸	漢水漲十一尺一寸	中部七尺庚辰中部七尺潦水漲七尺癸未潦水大漲以布帛尺二十五尺八寸	同十六尺五寸	同十三尺二寸	同九尺七寸	同九尺七寸	同九尺七寸	漢水漲十一尺三寸

同	甲申	六月	辛卯	明和元	一七六四	七月	九日	水標五尺二寸
同	乙酉	五月	壬辰	同二	一七六五	七月	五日	水標五尺三寸
同	丁亥	六月	丙午	同四	一七六七	七月	九日	水標十尺之上過流
同	戊子	四月	辛丑	同五	一七六八	五月	二十三日	水標五尺五寸
同	己丑	六月	丁卯	同六	一七六九	七月	十九日	漢江水漲溢以布帛尺五尺
同	同	七月	丙戌	同	同	八月	七日	漢江以布帛尺七尺添流乙未水標十尺之上過流丙午水標五尺二寸
同	庚寅	七月	壬寅	同七	一七七〇	八月	十八日	漢江以布帛尺五尺添流
同	壬辰	六月	戊戌	安永元	一七七二	七月	四日	漢江以布帛尺五尺許添流水標三尺九寸流下
同	癸巳	七月	辛巳	同二	一七七三	九月	十日	漢江水標四尺今番雨後以布帛尺四尺加漲矣常流水基良中合八尺添流
同	甲午	六月	壬寅	同三	一七七四	七月	二十八日	漢江以布帛尺十三尺添流
正祖	丁酉	六月	庚戌	同六	一七七七	七月	二十日	漢江七尺添流
同	同	七月	甲戌	同	同	八月	十三日	漢江十尺添流
同	同	八月	己亥	同	同	九月	七日	漢江五尺添流癸卯漢江五尺添流
同	戊戌	六月	丁巳	同七	一七七八	七月	二十二日	漢江十尺添流
同	丁未	七月	己巳	天明七	一七八七	八月	十六日	時久縣江漲
純祖	甲子	七月	己亥	文化二	一八〇四	八月	十九日	江華留守吳載紹以本月十二日雨水深一尺六寸二分西南雨水門及南三水門辦爲須圮民家漂額百戶人物殞死七名啓
同	丁丑	七月	壬戌	同十四	一八一七	九月	一日	時霖雨屢都下五郡民家漂額七百七十八戶
同	辛巳	八月	己丑	文政四	一八二一	九月	七日	自六月初霖雨連綿多或盈尺前後合都內民家漂額一千七百九十九戶北漢人物壓死十六名其各八道漂額四十二十六戶壓死者百六十五名

第二章 災害の記録

朝鮮の災害

純祖	壬辰	六月	癸未	天保三	一八三二	七月	五日
憲宗	丙午	九月	辛卯	弘化三	一八四六	十一月	九日
哲宗	丁巳	四月	甲午	安政四	一八五七	五月	六日
同	己未	六月	丙寅	同	一八五九	七月	二十七日

暴風

朝鮮	日本	西曆	記
高麗恭本玉二年三月	垂仁天皇七十八年	四九	暴風拔樹
新羅儲理王三十三年五月	垂仁天皇八十五年	五六	大風拔木
同 脫解王二十四年四月	景行天皇十一年	八〇	京都大風
百濟己婁王十四年六月	同	九〇	大風拔木
新羅婆娑王十七年七月	同	九六	暴風自南拔金城南大樹
同 祗摩王十一年四月	同	一二二	大風東來折木飛瓦
百濟肖古王四十四年十月	神功(攝政)九年	二〇九	大風拔木
新羅奈解王十九年三月	同	二一四	大風折木

五四

據我使柳相亮以今月二十二日夜暴雨本城行宮後麓及山谷處沙汰行宮公廨僧寺樓觀類漂之外民家漂流四十五戶人物死三十名路是歲自六月望後至七月初平無日不雨水深或過一尺前後五部民家漂流三千一百六十六戶人物死二十四名其他八道漂類七千六百七十一戶歷死二百九十三名是歲夏秋京外大水五部類民家凡三千九百餘戶各道漂類民家凡二千四百七十餘戶人命殞死且多

教曰霖雨支離近於災異豫心恐懼大對千熙政堂上曰連日之雨便成長霖極其乖宜豫心恐懼矣

雨數曰此雨已澆旬有餘矣田疇之潰缺千穀之沈熱即是必然之勢焉心懷々々內枕靡安於民家漂類壓死亦難保其必無發遣宣傳官與五部官員這々摘奸

事

同 助賁王四年四月	同 三十三年	二二三	大風飛瓦
同 味鄒王十七年四月	應仁天皇九年	二七八	暴風拔木
高麗美川王元年十二月	同 三十一年	三〇〇	風從西北來飛瓦走石六日
新羅訖解王三十五年四月	仁德天皇三十二年	三四四	暴風拔宮南大樹
百濟昆有王三年十一月	允恭天皇十八年	四二九	大風飛瓦
新羅訖祗王十九年正月	同 二十四年	四三五	大風拔木
同 二十二年四月	同 二十七年	四三八	京都大風
同 四十一年二月	同 四十一年	四五二	大風拔木
同 炤知王四年二月	清寧天皇三年	四八二	大風拔木
同 十二年四月	仁賢天皇三年	四九〇	暴風拔木
百濟東城王十四年四月	同 五年	四九二	大風拔木
高麗文咨王二十七年三月	繼體天皇十一年	五一七	大風拔木毀宮南門
高麗安原王十二年三月	欽明天皇三年	五四二	大風飛瓦拔木
新羅眞平王四十九年三月	推古天皇三十五年	六二七	大風土雨五日
同 文武王十四年七月	天武天皇二年	六七四	大風毀皇龍寺佛殿
同 孝昭王七年二月	文武天皇二年	六九八	大風折木
同 聖德王十五年三月	元正天皇靈龜二年	七一六	大風拔木飛瓦毀崇禮殿
同 景德王八年三月	孝謙天皇、天平、天平感寶、天平勝寶	七四九	暴風拔木
同 二十二年七月	淳仁天皇天平寶字七年	七六三	京都大風飛瓦拔木
同 元聖王九年八月	桓武天皇延暦十二年	七九三	大風折木偃禾

朝鮮の災害

五六

新羅昭聖王二年四月	桓武天皇延暦十九年	八〇〇	暴風發臨海仁化二門瑞蘭殿簾飛不知去處
同 文聖王十二年	仁孝天皇嘉祥三年	八五〇	京都大風拔木
同 景明王五年四月	醍醐天皇延喜二十一年	九二一	京都大風拔木
高麗太祖十五年五月	朱雀天皇承平二年	九三二	西京大風官舍類毀屋瓦皆飛
光宗元年正月	村上天皇天曆四年	九五〇	大風拔木
同 十二年四月	同 應和元年	九六一	大風雨拔木
穆宗十二年正月	一條天皇寛弘六年	一、〇〇九	幸崇教寺暴風折傘蓋柄
顯宗二年六月	同 八年	一、〇一一	暴風飛瓦拔木
同 四年四月	三條天皇長和二年	一、〇一三	大風三日
同 六年四月	同 四年	一、〇一五	大風折木
同 十一年十一月	後一條天皇寛仁四年	一、〇二〇	大風 風
同 十三年十月	同 治安二年	一、〇二二	暴風拔木
靖宗六年七月	後朱雀天皇長久元年	一、〇四〇	暴雨埃風路人有殞死者廣化門鴟吻類
文宗四年二月	後冷泉天皇永承五年	一、〇五〇	暴風折木拔屋三日
同 六年七月	同 七年	一、〇五二	大風毀屋折木
同 三十六年九月	白河天皇永保二年	一、〇八二	大風折木
宣宗四年三月	堀河天皇寛治元年	一、〇八七	大風拔木
同 六年四月	同 三年	一、〇八九	寒風大起
睿宗二年八月	鳥羽天皇嘉承二年	一、一〇七	納李資謙第三女大風飛瓦拔木
同 三年正月	同 天仁元年	一、一〇八	大風

朝鮮の災害

仁宗	九年十一月	崇德天皇承元年	一、一三一	大風雨
同	十一年十二月	同 長承二年	一、一三三	大風拔木
同	十二年八月	同 三年	一、一三四	同
同	十三年五月	同 保延元年	一、一三五	大風拔木
同	十六年八月	同 四年	一、一三八	同
同	十八年六月	同 六年	一、一四〇	有良風凡五日百穀草木枯死過半蚯蚓出死道傍可掬
同	二十年正月乙未	近衛天皇康治元年	一、一四二	大風終日飛沙走石
同	丁巳	同	同	大風飛沙
毅宗	元年正月	同 久安三年	一、一四七	大風折木拔屋
同	十一年正月	後白河天皇保元二年	一、一五七	風從轉來
同	十二年八月	同 三年	一、一五八	子尙書刑部奏決重刑大風雨拔木飛瓦
同	十月	同	同	大風拔木
同	十五年七月	二條天皇應保元年	一、一六一	大風傷穀
同	十八年五月	同 長寛二年	一、一六四	大風旱草木萎黃
明宗	四年九月	高倉天皇承安四年	一、一七四	大風飛沙走石二日
同	七年五月	同 治承元年	一、一七七	暴風拔木
同	八年三月	同 二年	一、一七八	大風揚沙石
同	四月	同	同	亦如之
同	九月	同	同	大風昇平門右扇鳴尾頰
同	九年七月	同 三年	一、一七九	大風傷穀

同	九	同	同	大風雨泰定門右鴟尾類
同	十	同	同	大風拔木
同	十一年	同	同	同
同	十七年	同	同	同
同	七月	同	同	同
同	十八年	同	同	大風
同	十月	同	同	大風拔木
同	二十三年	同	同	大風雨三日
同	二十七年	同	同	大風雨
同	九月	同	同	大風雨
同	七月	同	同	大風拔木
同	四月	同	同	大風拔木
同	八月	同	同	大風拔木
同	四年	同	同	大風雨
同	十五年	同	同	大風拔木
同	二月	同	同	恒風
同	九月	同	同	暴風飛瓦
同	七月	同	同	大風振屋
同	正月	同	同	大風飛瓦
同	三月	同	同	亦如之
同	閏六月	同	同	大風拔木

第二章 災害の記録

朝鮮の災害

高宗	四十四年三月	後深草天皇正嘉元年	一、二五七	恒風
同	九月	同	同	大風飛瓦
同	四十六年六月	同 正元元年	一、二五九	大風雨
元宗	十年六月	龜山天皇文永六年	一、二六九	暴風雨拔木飛瓦
忠烈王	六年八月	後宇多天皇弘安三年	一、二八〇	全羅道大風七日川溢損禾
同	九年四月	同 六年	一、二八三	夜暴風大起
同	十一年七月	同 八年	一、二八五	大風拔木飛瓦
同	十四年八月	伏見天皇正應元年	一、二八八	大風傷禾
同	十九年四月	同 永仁元年	一、二九三	暴風傷禾麻
同	二十一年七月	同 三年	一、二九五	大風拔木
同	二十四年二月	同 六年	一、二九八	大風雨
同	二十七年五月	後伏見天皇正安三年	一、三〇一	慶尚道安東府退串部曲大風拔一大樹置二里許枝幹不折斃
忠宣王	三年二月	花園天皇應長元年	一、三一一	大風屋瓦皆飛
忠肅王	五年二月	同 正和二年	一、三二三	夜大風雨越庭東西廊頽
同	五月	同	同	大風行路不行
同	六月	同	同	大風雨
同	八月	同	同	大風雨禾偃木拔凡二日
同	六年六月	後醍醐天皇元應元年	一、三一九	大風雨
同	七月	同	同	同
同	八月	同	同	夜大風

同	十五年十一月	同	嘉曆三年	一、三二八	大風
同	(讓位)六年十月	同	延元二年	一、三三七	北風大作揚沙石人馬不能前
同	七年七月	同	三年	一、三三八	大風雨拔屋樑禾
惠應王(復位)二年十二月		後村上天皇興國二年		一、三四一	大風拔松樹數千章
惠穆王元年七月		六年		一、三四五	大風雨拔松岳樹
同	三年五月	同	正平二年	一、三四七	大風飛瓦
忠定王元年閏七月		同	四年	一、三四九	大風雨城中屋瓦皆飛儀鳳樓類松岳龍首兩山松盡拔
同	十月	同		同	大風看樂樓類
同	二年六月	同	五年	一、三五〇	暴風雨拔木損禾
同	三年正月	同	六年	一、三五一	颶風暴作翌日乃至
同	十二月	同		同	颶風大作
恭愍王二年正月		同	八年	一、三五三	大風
同	十一月	同		同	同
同	三年正月	同	九年	一、三五四	同
同	五年正月	同	十一年	一、三五六	同
同	六年九月	同	十二年	一、三五七	大風拔木飛瓦二日
同	七年二月	同	十三年	一、三五八	大風晝晦
同	八年正月	同	十四年	一、三五九	大風拔木
同	七月	同		同	大風雨
同	十二年閏三月申午	同	十八年	一、三六三	旋風忽起吹亂市廛諸物高舉空中落巡軍庭人爭拾取
同	十四年正月	同	二十年	一、三六五	大風雨

同	宣祖十二年六月	後土御門天皇明應七年	一、四九八	大風雨拔木飛瓦城中民庶顛仆肢慄
同	二十四年七月	正親町天皇天正七年	一、五七九	平安道大風拔木
同	三十六年六月	後陽成天皇天正十九年	一、五九一	大風折木拔屋殺伐之聲震動
仁祖四年	慶長八年	同	一、六〇三	〔大風雨揚沙拔木屋瓦皆飛沿海船隻損破無餘人畜漂溺無數西南尤甚〕
同	五年二月己酉	後水尾天皇寬永三年	一、六二六	義州狂風三晝夜大作盡拔九龍山松木
同	七月丁丑	同	一、六二七	大風雨船隻破碎人多溺死
同	六年十二月丙辰	同	一、六二八	大風雨禾穀若經霜雪
同	七年七月丙戌	同	一、六二九	晦闕西大風揚沙走石連二日不止
同	十三年三月甲子	明正天皇同十二年	一、六三五	大風雨揚沙拔木
同	七月辛酉	同	同	夜大風雨
孝宗七年八月	後西院天皇明曆二年	同	一、六五六	大風折拔太廟內巨木七十餘株
同	靈元天皇天和二年	同	一、六八二	大風
同	東山天皇元祿二年	同	一、六八九	威鏡道大風
同	二十二年八月辛亥	同	一、六九六	大風拔木振闕
同	三十九年八月	中御門天皇正德三年	一、七二三	狂風大作起自西北終夕不止折木拔屋
同	七年六月	同	一、七三一	濟州大風雨室屋頽圯死傷人物公私牛馬多致顛斃
同	十五年六月	櫻町天皇天文四年	一、七三九	大風雨拔木諸道封山松木大半折拔
				大風從南來折木飛瓦起自忠清道至西邊尤甚

朝鮮の災害

朝鮮年代	日本皇紀	西曆	摘
高麗琉璃王二十一年八月	垂仁天皇三十一年	二	地震
百濟溫祚王三十一年五月	同 四十二年	一三	同
同 六月	同	同	同
高麗大武神王二年正月	同 四十八年	一九	同
○百濟溫祚王四十五年十月	同 五十六年	二七	地震屋舍皆倒
○新羅儒理王十一年二月	同 六十二年	三四	京都地震泉湧
百濟多婁王十年十一月	同 六十六年	三七	地震聲如雷
新羅脫解王八年十二月	同 九十二年	六四	地震
百濟己婁王十三年六月	景行天皇十九年	八九	地震裂陷民屋多有死者
同 十月	同	同	地震
新羅婆娑王十四年十月	同 二十三年	九三	京都地震
同 二十一年十月	同 三十年	一〇〇	京都地震屋倒民有死者
○百濟己婁王三十五年三月	同 四十一年	一一一	地震
高句麗太祖王六十六年二月	同 四十八年	一一八	同
新羅祗摩王十二年五月	同 五十二年	一二三	金城民爲陷爲池美渠生
高句麗太祖王七十二年十一月	同 五十四年	一二四	京都地震
新羅祗摩王十七年十月	同 五十八年	一二八	國東地震
高句麗太祖王九十年	成務天皇十二年	一四二	九都地震
同 次大王二年十一月	同 十七年	一四七	地震

同	八年十二月	同	二十三年	一五三	同
新羅阿達羅王十七年七月		同	四十年	一七〇	京都地震
百濟肖古王三十四年七月		仲哀天皇八年	年	一九九	地震
高麗山上王二十一年十月		神功皇后(攝政)十七年		二一八	同
新羅奈解王三十四年九月		同	二十九年	二二九	同
同 助賁王十七年十一月		同	四十六年	二四六	京都地震
高句麗中川王七年七月		同	五十四年	二五四	地震
同 十五年十一月		同	六十二年	二六二	同
同 西川王二年十二月		應神天皇二年		二七一	同
同 十九年九月		同	十九年	二八八	同
同 烽上王元年九月		同	二十三年	二九二	同
同 八年十二月		同	三十年	二九九	同
同 九年正月		同	三十一年	三〇〇	同
○新羅基臨王七年八月		同	三十五年	三〇四	地震泉湧
○同 九月		同			京都又震壞室屋民有死者
百濟近肖古王二十七年七月		仁德天皇六十年		三七二	地震
同 近仇首王六年五月		同	六十八年	三八〇	地裂深五尺橫廣三丈三日而合
高句麗故國壤王二年十二月		同	七十二年	三八五	地震
新羅奈勿王三十三年四月		同	七十六年	三八八	京都地震
同 六月		同			同

朝鮮の災害

新羅實聖王五年十月	反正天皇元年	四〇六	京都地震
百濟毗有王三年十一月	允恭天皇十八年	四二九	地震
○新羅訥祇王四十二年二月	雄略天皇二年	四五八	地震金城南門毀
同 慈悲王十四年三月	同 十五年	四七一	京都地震廣表二十丈濁水湧出
同 二十一年十月	同 二十二年	四七八	京都地震
高句麗文咨王二年十月	仁賢天皇五年	四九二	地震
○同 十二年十月	武烈天皇四年	五〇二	地震民屋倒墮有壓死者
○新羅智證王十一年五月	繼體天皇四年	五一〇	地震壞民屋有壓死者
百濟武寧王二十二年十月	同 十六年	五二二	地震
高句麗安原王五年十月	安閑天皇四年	五三五	同
新羅眞興王元年十月	欽明天皇元年	五四〇	同
百濟威德王二十六年十月	敏達天皇八年	五七九	同
新羅眞平王三十七年十月	推古天皇二十三年	六一五	同
百濟武王十七年十一月	同 二十四年	六一六	京都地震
新羅眞平王五十二年	舒明天皇二年	六三〇	宮庭地震
同 善德女王二年二月	同 五年	六三三	京都地震
百濟武王三十八年二月	同 九年	六三七	同
同 三月	同	同	同
新羅文武王四年三月	天智天皇三年	六六四	地震
○同 八月	同	同	地震壞民屋南方尤甚

同	六年二月	同	五年	六六六	京都地震
同	十年十二月	同	九年	六七〇	同
同	十三年正月	天武天皇元	年	六七三	地震
同	二十一年五月	同	九年	六八一	同
同	孝昭王四年	持統天皇九	年	六九五	京都地震
同	同七年二月	文武天皇二	年	六九八	京都地動
同	聖德王七年二月	元明天皇和銅元年		七〇八	地震
同	九年	同	四年	七一〇	同
同	十六年四月	元正天皇養老元年		七一七	同
同	十七年三月	同	二年	七一八	同
同	十九年正月	同	四年	七二〇	同
同	二十年二月	同	五年	七二一	京都地震
同	二十二年四月	同	七年	七二三	地震
同	二十四年十月	聖武天皇神龜二年		七二五	地震
同	孝成王元年二月	同	天平九年	七三七	地震
同	六年二月	同	十四年	七四二	地震聲如雷
同	景德王二年八月	同	十五年	七四三	地震
同	二十四年四月	稱德天皇天平神護元年		七六五	同
同	惠恭王二年二月	同	二年	七六六	〔康州地陷成池縱橫五十餘尺水色青黑勿有鯉魚五六相繼而漸大淵亦隨大
同	三年六月	同	神護景雲元年	七六七	

朝鮮の災害

○新羅惠恭王五年六月	稱徳天皇神護景雲三年	七六九	地震辟如雷
同 六年十一月	光仁天皇寶龜元年	七七〇	京都地震
同 十三年三月	同 八年	七七七	地震
同 四月	同	同	同
○同 十六年三月	同 十一年	七八〇	京都地震壞民屋死者百餘人
同 元聖王三年二月	桓武天皇延暦六年	七八七	京都地震
同 七年十一月	同 十年	七九一	同
同 十年二月	同 十三年	七九四	地震
同 哀莊王三年七月	同 二十一年	八〇二	同
同 四年十月	同 二十二年	八〇三	同
同 六年十一月	同 二十四年	八〇五	同
同 興徳王元年正月	淳和天皇天長三年	八二六	同
同 文聖王元年五月	仁明天皇承和六年	八三九	同
同 六 年	同 十一年	八四四	地震摩如雷
同 景文王十年四月	清和天皇貞觀十二年	八七〇	京都地震
同 十二年四月	同 十四年	八七二	同
同 十五年二月	同 十七年	八七四	京都及國東地震
同 神徳女王二年四月	宇多天皇仁和四年	八八八	地震
同 五年十月	同 寛平三年	八九一	地 大 震
高麗太祖十一年六月甲戌	醍醐天皇延長六年	九二八	碧珍郡地震

新羅敬順王二年二月	同	七年	九二九	地	震
同 六年正月	朱雀天皇承平三年	九三三	同	同	
高麗光宗二十二年十二月	圓融天皇天祿二年	九七一	同	同	
同 二十三年二月	同 三年	九七二	同	同	
同 成宗十年十月	一條天皇正曆二年	九九一	同	同	
同 穆宗 四年	同 長保三年	一、〇〇一	同	同	
同 顯宗三年三月庚午	三條天皇長和元年	一、〇一二	同	同	
同 十二月丁丑	同	同	同	同	
同 四年二月壬午	同 二年	一、〇一三	同	同	
同 三月辛丑	同	同	同	同	
同 十一月丁未	同	同	同	同	
同 十二月丙戌	同	同	同	同	
同 五年八月丙子	同 三年	一、〇一四	同	同	
同 六年十一月甲申	同 四年	一、〇一五	同	同	
同 十一年閏十一月癸巳	後一條天皇寬仁四年	一、〇二〇	同	同	
同 十四年五月乙亥	同 治安三年	一、〇二三	同	同	
同 十五年十一月己酉	同 萬壽元年	一、〇二四	同	同	
同 十六年四月辛未	同 二年	一、〇二五	同	同	
同 壬申	同	同	同	同	
同 乙亥	同	同	同	同	

朝鮮の災害

高麗顯宗十六年七月	後一條天皇萬壽元年	一、〇二五	慶尙清州安東密城地震
同 二十一年	同 長元三年	一、〇三〇	交州翼嶺洞山縣地震
同 德宗元年十月	同 五年	一、〇三二	尙州等十餘縣地震
同 二年六月	同 六年	一、〇三三	安東陝州地震
同 靖宗元年六月丙辰	同 八年	一、〇三五	京都地震
同 八月辛未	同	同	又震聲如雷
同 九月癸卯	同	同	慶州等十九州地震
○同 二年六月戊辰	同 九年	一、〇三六	〔京城及東京尙廣二州、安邊府等管内州縣地震毀民屋 廬東京三日而止〕
同 八月戊辰	同	同	東京管内州縣及全州密城地震聲如雷
同 三年九月己酉	後朱雀天皇長曆元年	一、〇三七	龜朔泰州及威遠鎮地震
同 文宗六年二月丁丑	後冷泉天皇永承七年	一、〇五二	朔安西府地震
同 十二年四月壬子	同 康平元年	一、〇五八	地 震
同 二十年四月庚辰	同 治曆二年	一、〇六六	京都地震
同 二十七年正月乙巳	白河天皇延久五年	一、〇七三	地 震
同 宣宗九年十二月壬申	堀河天皇寛治六年	一、〇九二	同
同 肅宗八年十一月己丑	同 康和五年	一、一〇三	京都地震
同 十二月戊午	同	同	同
同 睿宗十二年十二月戊辰	鳥羽天皇永久五年	一、一一七	地 震
同 仁宗十二年六月己卯	崇德天皇長承三年	一、一三四	東京地震
同 十五年三月乙亥	同 保延三年	一、一三七	西京地震

朝鮮の災害

高麗高宗十四年二月庚寅	後堀河天皇安貞元年	一、二二七	地大震
同 癸卯	同	同	同
同 十五年正月丙子	同 二年	一、二二八	地震
同 十一月辛未	同	同	同
同 十八年十月壬戌	同 寬喜三年	一、二三一	同
同 四十一年八月甲戌	後深草天皇建長六年	一、二五四	同
同 四十二年三月	同 七年	一、二五五	同
同 四十四年九月辛酉	同 正嘉元年	一、二五七	京都地震
同 四十五年七月	同 二年	一、二五八	地震
同 四十六年十一月	同 正元元年	一、二五九	同
○同 元宗元年五月庚戌	龜山天皇文應元年	一、二六〇	地大震地屋崩頽京都尤甚
同 七月癸酉	同	同	地震
同 二年正月辛巳	同 弘長元年	一、二六一	同
同 六月壬子	同	同	地大震
同 五年二月壬子	同 文永元年	一、二六四	京都地震
同 十月辛酉	同	同	又大震聲如雷
同 十一年二月戊子	同 七年	一、二七〇	地大震
同 十三年三月戊寅	同 九年	一、二七二	地震
同 十月乙未	同	同	同
同 忠烈王三年十一月乙巳	後宇多天皇建治二年	一、二七六	地震聲如雷

同	三年九月癸卯	同	三年	一、二七七	地震
同	四年九月丁酉	同	弘安元年	一、二七八	同
同	七年正月庚申	同	四年	一、二八一	同
同	閏八月癸丑	同		同	同
同	十年四月癸卯	同	七年	一、二八四	同
同	十一年二月癸丑	同	八年	一、二八五	同
同	十九年十月甲辰	伏見天皇永仁元年		一、二九三	同
同	二十一年十月丙寅	同	三年	一、二九五	同
同	二十四年正月壬寅	同	六年	一、二九八	地圻壽寧宮門外泉湧高數尺自午後酉乃止
同	三十四年二月	後三條天皇延慶元年	一、三〇八	地震	
同	忠宣王三年九月辛酉	花園天皇應長元年	一、三一一	毀古壽寧宮御座地圻長數尺	
同	忠肅王元年閏三月癸未	同	正和三年	一、三一四	地震
同	五年二月己亥	同	文治二年	一、三一八	同
同	十五年十月乙巳	後醍醐天皇嘉曆三年	一、三二八	同	同
同	十一月乙酉	同	同	同	同
同	十七年十一月丙戌	同	元德二年	一、三三〇	同
同	忠惠王六年正月辛丑	同	延元元年	一、三三六	同
同	忠肅王後六年十月己卯	同	二年	一、三三七	禮城縣地震
同	七年六月丙寅	同	三年	一、三三八	白州地再震
同	乙亥	同	同	同	同

朝鮮の災害

同	高麗忠肅王七年六月壬午	同	後醍醐天皇延元三年	一、三三八	白州地再震
同	丙戌	同		同	同
同	丁亥	同		同	同
同	七月乙卯	同		同	同
同	八月壬午	同		同	同
同	八年五月辛酉	後村上天皇延元四年		一、三三九	地震
同	九月丁卯	同		同	同
同	忠惠王復位年五月	興國元年		一、三四〇	同
同	九月	同		同	同
同	四年三月癸酉	四年		一、三四三	地震三日
同	四月丁丑	同		同	地震二日
同	五月癸巳	同		同	地震
同	六月丁丑	同		同	同
同	戊寅	同		同	同
同	忠穆王元年正月甲午	六年		一、三四五	地震二日
同	乙卯	同		同	地震
同	恭愍王元年五月己丑	正平七年		一、三五二	同
同	二年四月甲辰	八年		一、三五三	同
同	四年六月辛巳	十年		一、三五五	同
同	六年閏九月丙辰	十二年		一、三五七	地大震

朝鮮の災害

高麗恭愍王五年七月己巳	後龜山天皇文中三年	一、三七四	地大震
同 辛禡二年五月庚午	同 天授二年	一、三七六	同
同 四年二月壬申	同 四年	一、三七八	地震
同 十一月辛巳	同	同	同
同 五年四月甲辰	同 五年	一、三七九	同
同 十二月	同	同	同
同 十年四月丙子	同 元中元年	一、三八四	同
同 五月戊申	同	同	同
○同 十一年七月戊寅	同 二年	一、三八五	地震四日聲如陣馬之奔墻屋頽圯人皆出避松岳西嶺石崩己卯地震三日
同 十月戊申	同	同	地震
同 十二年十二月	同 三年	一、三八六	同
同 辛昌元年十一月	同 六年	一、三八九	同
同 恭讓王元年十一月甲戌	同	同	同
同 三年七月丙戌	同 八年	一、三九一	同
同 壬辰	同	同	同
同 八月乙丑	同	同	同
○朝鮮太宗癸巳四月庚申	稱光天皇應永二十年	一、四一三	慶尙道鷄林府地震本宮池魚皆自死浮水
○同 丙申四月己卯	同 二十三年	一、四一六	慶尙道安東清道善山甫川鐵城義興軍威甫城開慶、忠清道忠州清風槐山丹陽延豐陰城地震安東尤甚屋瓦零落
○同 世宗丁巳正月甲寅	後花園天皇永享九年	一、四三七	京中及京畿、慶尙、江原、忠清、全羅諸道地震

○同	端宗甲戌十二月甲辰	同	康正元年	一、四五五
同	成宗九年	後土御門天皇文明十年	一、四七八	
○同	燕山君癸亥八月丁巳	後柏原天皇文龜三年	一、五〇三	
○同	中宗戊寅五月癸丑	同	永正十五年	一、五一八
○同	五月十五日	同	同	同
○同	丙戌九月壬寅	同	大永六年	一、五二六
○同	甲辰二月壬申	御奈良天皇天文十三年	一、五四四	
○同	仁宗丙午五月乙亥	同	十五年	一、五四六
○同	五月丁丑	同	同	同
○同	五月壬午	同	同	同
○同	明宗癸丑二月乙卯	同	二十二年	一、五五三
○同	甲子二月丁未	正親町天皇永祿七年	一、五六四	
○同	乙丑八月丙寅	同	八年	一、五六五
同	十二月戊子	同	同	同

第二章 災害の記録

慶尙道草溪善山興海、全羅道全州益山龍安興德茂長
高微靈光咸平務安羅州靈岩海南珍島康津長興寶城興
陽樂安順天光陽求禮雲峰南原任實谷城長水淳昌金溝
咸悅濟州大靜旌義垣屋頗毀多人壓死

地 震

京師及京畿、忠清、慶尙、全羅諸道地震

西時大地震凡三度、其聲殷々如怒雷、人馬辟易屋
壓頽城墻墜落、郡中之人皆驚失色。罔知攸爲終夜
露不報入處其家、故老皆爲所無也。八道皆同。黃海
道白川郡地坼水湧、忠清道觀察使使世健曰今五月十
五日至西時、有聲如雷、自東如越、人不自立、四面
城壁相繼頽落、牛馬皆驚仆、水泉如沸、山石亦有崩
落、京外地震四日、太廟殿瓦、禪落、闕內、墻垣倒塌民
家頽圯、男女老少皆出外露處、以免覆壓

中外地震、京城尤甚、塔屋頽落、人皆奔突、移時而
止、地震有聲如牛吼、城垣之墻塌者十中居一二、須
臾震四五度、或震、或輟、令露宿於外、過一月纔定

京師、京畿、忠清、江原、慶尙諸道地震、有聲如雷屋
宇搖動

京畿、江原、全羅、慶尙、忠清、黃海諸道地震

京師地震、自東而西、良久乃止、其始也聲如微雷方其
震也屋宇皆動、墻壁根落、申時又震

京畿、黃海、忠清、咸鏡諸道地震、平安道再度地震、
人家動搖、牛馬驚走、地震仍陷沒者四處、江原道川
渠動盪

京畿江華地震、有一民家、北角頽落、三人壓死

慶尙道內五十餘邑地震、或屋墻壁墜落、或山城崩壞

平安道江界地震、凝雪盡圻

平安道祥原地震

地 震

朝鮮の災害

朝鮮宣祖七年春	同	天正二年	一、五七四
同 十年十月	同	五年	一、五七七
同 二十三年十二月乙酉	後陽成天皇同十八年		一、五九〇
○ 同 二十七年六月庚戌	同	文祿三年	一、五九四
○ 同 丙申正月辛卯	同	慶長元年	一、五九六
○ 同 丁酉八月丙戌	同	二年	一、五九七
○ 同 丁酉九月壬寅 癸卯	同		一、五九七
○ 同 辛丑二月甲申	同	六年	一、六〇一
同 三十六年正月	同	八年	一、六〇三
同 光海君十年正月甲子	後水尾天皇元和四年		一、六一八
同 仁祖 八年 夏	明正天皇寛永七年		一、六三〇
同 十年正月癸丑	同	九年	一、六三二

京師地震

江原道地震

京都地震屋宇動搖

實時京城地震、自北而南、屋宇皆動、良久而止。忠清道自西而東、有聲如雷、地上之物莫不搖動、初疑天崩終若地陷、城、動之勢愈壯、洪州地自西向東、聲如雷動、屋宇掀搖、窓戶自開、東門城三間崩頽、

申時江原道平昌地震、屋宇震動、良久而止、旌善地亦是日地震、自西向東、竿額之聲動天、屋瓦掀復幾至顛落、小頃而止人皆驚感失措、城內皆然

咸鏡道三水郡末時地震、城子二處頽圯而郡越邊甌岩半片崩頽、岩底三水中、川水色變爲白、丁亥更變爲黃、仁遜外堡東距五里許、赤色土湧出、數日乃止

乙酉辰時地震、小柴堡越邊北德者耳遷堡人不接足處再度有砲之聲、仰見則煙氣漲天、大如數抱之石、隨擲折出、飛過大山後、不知去處、丙戌酉時地震、同絕壁更爲折落、同日亥時子時地震

忠清道唐津沔川大興等地震、或一日三四度、或六七度、疊震、屋瓦搖動

慶尙道星州八莒縣有地震、聲如雷殷々、起自東南轉向西北、墻屋掀動、人馬辟易、良久乃定、河陽自西北轉向

山搖屋、勢似崩、惟、良久轉向東南而止、大丘府中亦地震、起自坤方轉向艮方、而聲如大雷、屋宇振動、良久而止、全羅道金溝縣未時地震、自西向東、屋宇激動、

龍潭縣申時地震、自南而北、屋宇皆動、臨陂縣未時地震、自北向南、暫時而止

地 震

地 大 震

關東嶺南地震

地 震

同	十一月癸亥	同	同	同
同	十一年九月戊申	同	十年	一、六三三
同	十月丁卯	同		一、六三三
同	十二年十二月甲辰	同	十一年	一、六三四
同	十三年正月戊辰	同	十二年	一、六三五
○同	仁祖十五年十月	同	十四年	一、六三七
同	十六年九月癸酉	同	十五年	一、六三八
○同	癸未四月丙子	同	二十年	一、六四三
○同	丙戌	同	同	同
○同	六月辛未	同	同	同
○同	顯宗壬寅三月丁丑	後西院天皇寬文二年	一、六六二	同
○同	甲辰閏六月辛巳	靈元天皇同四年	一、六六四	同

第二章 災害の記録

同 連日地震
同 地 震
富平府地陷應可十餘丈深無底
地 震
午時京師地動、京畿監司狀午時地震起、屋角皆鳴、慶
尚監司書、地震之變、山谷海邊始、東萊大震、沿海
尤甚久遠、墻壁頽圯、溝道密陽之處、岩石崩頽、草
溪地當其震動之時、乾川亦出濁水、忠清監司狀、午
時地震、屋宇墻壁皆動搖、晉州陝川等官呈以地震時松
木五六十條摧倒、陝川地山獄動岩墜、人有壓死洞泉
水盈大路圻裂之事
慶尙道晉州地震、樹木摧倒、陝川郡岩崩二人壓死、久
洞之泉、濁水湧出、官門前路地圻十餘丈
京師地震、慶尙道大丘、安東、金海、盈德等地震、
煙臺城墜圯居多、蔚山府地圻、水湧、全羅道地震、
申時京師地有微動、慶尙監司狀未時大雨忽起、黑雲四
集、天動二三巡、後驟雨暫下、仍爲風定、沈陰申時坤軸大
震、有若天雷之聲、屋椽搖聲、似爲裂頽者、左右不覺
走出、慶尙左兵使黃湛狀、初九日申時、地震乾方始起、
鷄犬盡驚、人不定坐、山川沸騰、墻壁頽圯
辰時慶尙道監司、狀地震、城墜頽圯居多、蔚山亦同
日同時一體地震、府東十三里、潮汐水出入處、其水
沸湯騰湧、有若洋中大波、至出陸地一二步、而還入、
乾水田六處裂圻、水湧如泉
湖西大興等十邑地震、屋宇動搖、壁土剝落
全羅道全州、鎮安地震壓死至於五十名

朝鮮の災害

○	朝鮮顯宗戊申六月庚寅	靈元天皇寬文八年	一、六六八
○	同	同	同
○	己酉九月甲辰	九年	一、六六九
○	同	同	同
○	庚戌九月辛未	十年	一、六七〇
○	同	同	同
○	十月丁亥	同	同
同	肅宗甲寅十月戊午	延寶二年	一、六七四
同	同	同	同
同	元年八月壬午	三年	一、六七五
同	同	同	同
同	九月壬辰	同	同
同	二年三月丁未	四年	一、六七六
同	同	同	同
同	四年正月	六年	一、六七八
同	同	同	同
同	三月	同	同
同	六年五月	八年	一、六八〇
○	同	同	同
○	辛酉四月己酉	天和元年	一、六八一
○	同	同	同
○	五月甲寅	同	同
○	同	同	同
○	丁巳	同	同
○	同	同	同
○	癸亥	同	同

八〇

黃海道海州安岳延安載寧長連白川鳳山、慶尙道昌原、
 蔚山、海濱大湫、屋瓦皆似人或驚仆、平壤地震、
 平安道平壤夜地震、聲如激雷、屋舍掀動、若將傾頽
 如是者三、順安肅川同日地震
 全羅道高山等二十餘邑地震、光州康津雲峰淳昌、四
 邑尤甚、館宇掀簷、若將傾覆、城壁頽圯、屋瓦墜落、
 牛馬不能定立、行路不能定脚、蒼黃驚怕、莫不顛仆、地
 震之慘、近古所無
 全羅道濟州地震有聲如雷、人家牆壁多有頽圯
 地 震
 尙州沃川等五邑地震有聲如雷屋壁皆動搖
 瑞興等七邑及龍岡地震
 公州十邑地震屋宇動搖
 平壤三和全州鎮安谷城求禮地震
 咸悅北川恩津魯城等地地震
 順天等地地震
 申時京師地震、自良方至坤方、屋宇掀動、窓壁墜、
 震撼行路之人、有所驚、驚逸墜死者、京畿、江原、
 慶尙、忠清、黃海、平安、咸鏡諸道地震
 平安、慶尙、江原諸道及全羅道光州外十九處地震
 京畿廣州等三十五邑、忠清道洪州等十六邑地震、江
 原道申時一日之內三度地震、牆壁頽圯屋瓦落、黃海
 道地震
 京畿廣州地震、江原道地震、聲如雷、牆壁頽圯、屋
 瓦墜落、襄陽海水震蕩如沸、雪岳山、新興寺及松祖窟
 巨岩俱崩頽、三陟府西頭陀山層岩、自古稱以動石者
 盡崩、府東凌波臺水中十餘丈、石中折、海水爲潮退之
 狀、平日本浦處露出百餘步、或五六八十步、平昌旌善亦
 有山岳掀動岩石墜落之變、是後江陵襄陽三陟旌善平
 海旌善等地動殆十餘次、是時八道皆震

同	○	甲子	同	同	江原道江陵襄陽三陟二日連有地震黃海道平山田中地 頃、深九尺、穴中有水
同	○自	庚辰 丁亥	同	同	慶尙道榮川、禮安、安東、醴泉、豐基、眞寶、奉化等 二三次或一次地震
同	○	壬戌二月戊巳	同	二年	江原道平海地震、平昌地川邊地陷
同	○	甲子三月庚午	同	貞享元年	平安道昌城地震、聲如雷鼓、屋瓦皆動、如是者三、 朔州、敢亦於是日再震
同	同	十二年十一月	同	三年	地震
同	○	壬申九月庚午	東山天皇元祿五年	一、六九二	二更五點京師地震、自良方起直至坤方、亥時忠清、 全羅、慶尙、江原諸道地震、京都大震、是日京畿、 忠清、全羅、慶尙、江原等道俱地震、有聲如雷、甚處屋 宇掀掀、窓戶自開、山川草木無不震動、至鳥獸驚散竄 進者、其震多從西北起至東南云
同	○	庚辰三月甲辰	同	十三年	慶尙道大邱等二十四邑地震、晉州泗川二處、城堞崩 頽行人顛
同	○	七月庚申	同	同	平安道慈山地震、忠清道青山地裂內浦海溢
同	○	壬午七月癸丑	同	十五年	京都、京畿、忠清、江原、全羅、慶尙五道地震
同	○	英祖丁未五月丁巳	中御門天皇享保十二年	一、七〇二	咸鏡道咸興等七邑地震、屋宇城堞多頽壓
同	同	十五年七月壬戌	櫻町天皇天文四年	一、七二七	夜地震
同	同	十六年九月癸巳	同	五年	同
同	同	十九年三月丙辰	同	一、七四〇	地動
同	同	九月庚申	同	一、七四三	地動
同	同	二十七年九月辛巳	桃園天皇寶曆元年	同	地動
同	同	二十八年九月己卯	同	一、七五一	夜地震
同	同	三十年五月己未	同	一、七五二	地震
同	同	六月癸丑	同	一、七五四	地動
同	同	同	同	同	同

朝鮮の災害

朝鮮英祖三十五年正月戊子	桃園天皇寶曆九年	一、七五九	地	震
同 四十五年二月癸未	後櫻町天皇明和六年	一、七六九	同	同
同 三月己丑	同	同	同	同
同 正祖六年正月辛酉	光格天皇天明二年	一、七八二	地	震
同 八年二月癸亥	同 四年	一、七八四	同	同
同 純祖十年正月	同 文化七年	一、八一〇	咸鏡道	地震
同 二十七年八月	仁孝天皇文政十年	一、八二七	地	震
同 憲宗十二年六月丙寅	同 弘化三年	一、八四六	同	同
同 李太王六年三月	明治天皇明治二年	一、八六九	同	同
同 十九年十二月	同 十五年	一、八八二	地	動
同 二十五年十月	同 二十一年	一、八八八	地	震
同 光武二年十一月	同 三十一年	一、八九八	同	同

備考 本表中○印ヲ附シタルハ強震ヲ示ス。

霜害

朝鮮年代	日本皇紀	西曆	摘要
百濟溫祚王二十八年四月	垂仁天皇三十八年	九	隕霜害麥
高句麗大武神王二十四年七月	同 七十年	一七	隕霜
同 慕本王二年	同 七十八年	四九	同
新羅祗摩王十二年四月	景行天皇五十三年	一二三	同

同 逸聖王六年七月	成務天皇九年	一三九	隕霜殺菽
高句麗次大王八年六月	同 二十三年	一五三	隕霜如雪
新羅阿達羅王二年四月	同 二十五年	一五五	隕霜
同 十七年七月	同 四十年	一七〇	京都隕霜
高句麗故國川王十六年七月	仲哀天皇三年	一九四	隕霜殺菽
新羅奈解王五年七月	同 九年	二〇〇	隕霜殺草
同 十年七月	神功皇后攝政五年	二〇五	同
高句麗西川王三年四月	應神天皇三年	二七二	隕霜害麥
新羅味鄒王十年七月	同	同	隕霜害穀
高句麗故國原王五年七月	仁德天皇二十三年	三三五	同
新羅訖解王二十八年四月	同 二十五年	三三七	隕霜
百濟辰斯王二年七月	同 七十三年	三八五	隕霜害穀
新羅訖祗王四年七月	允恭天皇九年	四二〇	同
同 十五年七月	同 二十年	四三一	同
同 三十八年七月	安康天皇元年	四五四	霜雹害穀
同 四十一年四月	雄略天皇元年	四五七	隕霜傷麥
同 智證王十年七月	繼體天皇三年	五〇九	隕霜殺菽
高句麗平原王二十三年七月	敏達天皇十年	五八一	霜雹殺穀
新羅眞平王三十五年四月	推古天皇二十一年	六一三	隕霜
高句麗寶藏王九年七月	孝德天皇白雉元年	六五〇	霜雹害穀

朝鮮の災害

新羅元聖王五年七月	桓武天皇延暦八年	七八九	隕霜傷穀
同 興德王二年五月	淳和天皇天長四年	八二七	隕霜
同 文聖王十三年四月	文德天皇仁壽元年	八五一	同
同 憲安王二年四月	同 天安二年	八五八	同
同 孝恭王九年四月	醍醐天皇延喜五年	九〇五	同
同 神德王二年四月	同 十三年	九一三	同
高麗顯宗三年四月	三條天皇長和元年	一、〇一二	同
同 四年四月丙子	同 二年	一、〇一三	隕霜殺草
同 十八年四月甲戌	後一條天皇萬壽四年	一、〇二七	隕霜害苗
同 五月	同	同	公州隕霜殺苗
同 二十二年四月丁亥	同 長元四年	一、〇三一	隕霜
同 靖宗二年四月辛酉	同 九年	一、〇三六	同
同 八年四月丙戌	後朱雀天皇長久三年	一、〇四二	同
同 文宗二年四月甲午	後冷泉天皇永承三年	一、〇四八	隕霜于土山縣
同 三十七年四月	白河天皇永保三年	一、〇八三	隕霜
同 宣宗六年四月辛酉	堀河天皇寛治三年	一、〇八九	同
同 肅宗元年四月壬戌	同 永長元年	一、〇九六	連日隕霜
同 仁宗十二年四月戊戌	崇德天皇長承三年	一、一三四	隕霜
同 十七年四月丁卯	同 保延五年	一、一三九	同
同 二十一年四月戊辰	近衛天皇康治二年	一、一四三	同

同	毅宗二十一年四月丁亥	六條天皇仁安二年	一、一六七	同
同	明宗九年四月壬辰	高倉天皇治承三年	一、一七九	隕霜殺草
同	高宗四十五年七月	後深草天皇正嘉二年	一、二五八	隕霜于南界
同	元宗十三年四月戊戌	龜山天皇文永九年	一、二七二	隕霜
同	十四年四月戊子	同 十年	一、二七三	同
同	忠烈王六年四月癸未	後宇多天皇弘安三年	一、二八〇	連日霜殺于苗
同	十一年四月甲辰	同 八年	一、二八五	隕霜
同	十二年四月甲辰	同 九年	一、二八六	同
同	十三年四月庚辰	同 十年	一、二八七	連日隕霜
同	十五年四月辛亥	伏見天皇正應二年	一、二八九	隕霜
同	二十年四月戊戌	同 永仁二年	一、二九四	同
同	二十一年四月乙酉	同 三年	一、二九五	隕霜殺麻麥
同	二十三年四月庚戌	同 五年	一、二九七	隕霜
同	恭愍王十七年七月	後龜山天皇正平二十三年	一、三六八	隕霜殺菽
同	二十二年四月乙酉	同 文中二年	一、三七三	隕霜殺草
同	辛禰六年七月甲寅	同 天授六年	一、三八〇	連日隕霜
同	十一年七月	同 元中二年	一、三八五	江陵道隕霜殺禾
同	十二年四月丙申	同 三年	一、三八六	隕霜
同	十三年四月乙未	同 四年	一、三八七	同
同	恭讓王元年四月乙巳	後龜山天皇元中六年	一、三八九	隕霜

朝鮮の災害

高麗恭讓王二年四月乙卯	後龜山天皇中元七年	一、三九〇	限霜
同 庚申	同	同	同
同 四年七月辛卯	同 九年	一、三九二	限霜甚寒
朝鮮太祖七年六月	後小松天皇應永五年	一、三九八	限霜于山羊會地
同 太宗五年四月	同 十二年	一、四〇五	限霜
同 十七年五月	稱光天皇二十四年	一、四一七	同
同 宣祖二年四月	正親町天皇永祿十二年	一、五六九	同
同 十三年五月	同 天正八年	一、五八〇	江原道限霜殺草
同 二十三年五月	同 十八年	一、五九〇	錦山等五色限霜
同 仁祖六年六月七日	後水尾天皇寬永五年	一、六二八	北青甲山等地連日限霜
同 七年四月壬寅	同 六年	一、六二九	義州府限霜
同 甲辰	同	同	同
同 九年四月戊辰	明正天皇同 八年	一、六三一	長興興陽等地限霜
同 七月丙戌	同	同	安陰縣連夜限霜
同 十一年七月丁未	同 十年	一、六三三	關西連夜限霜
同 孝宗四年六月	後光明天皇承應二年	一、六五三	江陵府限霜
同 肅宗元年四月壬辰	靈元天皇延寶三年	一、六七五	平安道連日限霜
同 壬寅	同	同	茂朱限霜山野遍白
同 五月庚申	同	同	長水鎮安等地連日限霜
同 辛酉	同	同	同

同	甲戌	同	同	狼川公州等地隕嚴霜各穀枯死
同	二年四月丙辰	同	一、六七六	利川等十三邑隕霜谷山遂安等地亦隕霜
同	英祖二十一年五月	櫻町天皇延享二年	一、七四五	兩湖及關東隕霜
同	二十九年六月	桃園天皇寶曆三年	一、七五三	關東及嶺南隕霜
同	三十年四月辛丑	同	一、七五四	隕霜

電 害

朝鮮	年 代	日本皇紀	西 曆	摘
百濟溫祚王三十七年三月		垂仁天皇四十八年	一九	雨雹大如鷄子鳥雀中者皆死
新羅婆娑王二十一年七月		景行天皇三十年	一〇〇	雨雹飛鳥殺
百濟仇首王十八年四月		神功皇后攝政三十一年	二三一	雨雹鳥雀中死
新羅景德王四年四月		聖武天皇天平十七年	七四五	雨雹大如鷄子
同	十四年四月	孝謙天皇天平勝寶七年	七五五	同
同	惠恭王四年六月	稱德天皇神護景雲二年	七六七	京都雨雹傷草木
同	元聖王二年四月	桓武天皇延暦五年	七八六	國東雨雹桑麥皆傷
高麗毅宗十三年四月庚寅		二條天皇平治元年	一、一五九	大雨雹平地三寸
同	十四年八月丁未	同	一、一六〇	雨雹大如拳
同	明宗十四年四月戊午	安德天皇壽永三年	一、一八四	雨雹如杏子
同	十六年八月	後鳥羽天皇文治二年	一、一八六	雨雹于東澤二州大如拳屋瓦皆碎
同	高宗二十三年四月己亥	四條天皇嘉禎二年	一、二三六	大雨雹鳥雀中死

朝鮮の災害

高麗忠烈王二年閏三月乙卯	後宇多天皇建治二年	一、二七六	雨雹于寧越大如鵝卵鳥雀中死
同 十二年四月丁酉	同 九年	一、二八六	雨雹而氷凡八日
同 二十七年五月	後伏見天皇正安三年	一、三〇一	慶尚道安東府大雨雹一枚數人不能舉藥麈中死
同 忠肅王九年九月乙未	後醍醐天皇元亨二年	一、三二二	雨雹大如李梅四角如蒺藜
同 忠穆王三年五月癸亥	後村上天皇正平二年	一、三四七	雨雹大如梨
同 恭愍王十六年四月壬戌	同 二十二年	一、三六七	大雨雹平壤尤甚田頭鎰器皆碎
同 辛禰元年三月甲申	後龜山天皇天授元年	一、三七五	雨雹大如彈丸
同 十一年四月	同 元中二年	一、三八五	雨雹大如拳數日乃消
朝鮮太宗七年夏	後小松天皇應永十四年	一、四〇七	大雨雹人有凍死者
同 九年四月	同 十六年	一、四〇九	雨雹大如彈丸人有中死禽鳥多斃
同 宣祖十二年六月	正親町天皇天正七年	一、五七九	平安道大雨雹大者如匙櫟小者如手掌
同 二十九年五月丁丑	後陽成天皇慶長元年	一、五九六	南原淳昌等地大雨雹大如鷄卵飛鳥中死穴越亦斃
同 四十年六月	同 十二年	一、六〇七	忠清慶尙兩道雨雹大如鷄卵壓碎禽鳥隕殺草木
同 光海君十三年五月	後水尾天皇元和七年	一、六二一	洪原等處雨雹大如鷄卵飛鳥皆斃人或中死
同 仁祖二年秋	同 寬永元年	一、六二四	〔自長湍至平山大雨雹大者如鉢小者如鷄卵牛馬擊觸多死〕
同 四年	同 三年	一、六二六	昌城雨雹如人面鼻眼皆備
同 六年四月丁巳	同 五年	一、六二八	平壤江西等地大雨雹大者如梔子小者如鷄卵積地三尺
同 五月戊辰	同	同	星州晉松等地大雨雹大如鷄卵
同 八年六月己酉	明正天皇同 七年	一、六三〇	〔萬頃縣大雨雹大者如大椀有三角中者如沙鉢有兩角刃小者如鷄卵〕
同 十一年七月丁未	同 十年	一、六三三	平安道雨雹積地三寸

火災

同 十 四年	同 十三年	一、六三六	金化雨雹如人面鳥雀多中死
同 十六年九月戊辰	同 十五年	一、六三八	龍岡等十邑雨雹禽獸多中斃
同 肅宗元年七月癸巳	靈元天皇延寶三年	一、六七五	水原振威等地雨雹大如桃碩鳥傷死者千數
同 純祖二十一年五月	仁孝天皇文政四年	一、八二一	全羅道大雨雹狀如鷄卵
同 二十九年九月	同 十二年	一、八二九	平安道雨雹大如鷄卵
同 李太王十一年八月	明治天皇明治七年	一、八七四	黃海道大雹

朝鮮 年 代	日本 皇 紀	西曆紀元	摘
新羅祇摩王二十一年二月	成務天皇二 年	一三二	宮南門災
同 逸聖王二十年十月	同 二十三年	一五三	宮 門 災
百濟仇首王七年十月	神功皇后攝政二十年	二二〇	王宮西門火
新羅味鄒王元年七月	同 六十二年	二六二	金城西門災延燒民家三百餘戶
百濟比流王三十年五月	仁德天皇二十一年	三三三	星隕王宮火延燒民戶
新羅炤智王四年二月	清寧天皇三 年	四八二	金城南門災
同 眞平王十八年十月	推古天皇四 年	五九六	永興寺火延燒民家三百五十戶
同 憲德王五年二月	嵯峨天皇弘仁四年	八一三	始祖廟玄德門火
同 文聖王十 四年	同 十三年	八二二	調 府 災
高麗穆宗十二年正月壬申	一條天皇寛弘六年	一、〇〇九	大府油庫災延燒千秋殿
同 顯宗三年六月癸卯	三條天皇長和元年	一、〇一二	龍津鎮民家三百四十餘戶火

朝鮮の災害

九〇

高麗顯宗十二年二月癸亥	後一條天皇治安元年	一、〇二一	仁壽門外民家二千戸災
同 十九年三月丁未	同 長元元年	一、〇二八	龜州官舍及民家八百四十餘戸火
同 德宗元年二月癸酉	同 五年	一、〇三二	靈州火
同 靖宗四年二月庚寅	後朱雀天皇長曆二年	一、〇三八	中部民家八百六十戸火
同 六年二月庚寅	同 長久元年	一、〇四〇	昇平門廊屋數百間災延燒御史臺
同 己酉	同	同	松岳神祠災
同 九年正月乙酉	同 四年	一、〇四三	白翎鎮火延燒城門三百餘間倉庫五十間民家三百餘戸
同 文宗十二年十二月甲子	後冷泉天皇康平元年	一、〇五八	內史門下省火延燒會慶殿東南廊
同 二十年二月己亥	同 治曆二年	一、〇六六	雲興倉災積年所蓄盡爲灰燼
同 三十二年四月丙申	白河天皇永曆二年	一、〇七八	將作監災
同 宣宗三年三月庚辰	同 應德三年	一、〇八六	市廛災
同 四年九月庚戌	堀河天皇寛治元年	一、〇八七	夜懷數驛行在所扈衛軍營火
同 七年三月戊子	同 四年	一、〇九〇	〔夜大震雷新興倉災國廳鉦萬燒盡飛焰蔽空而民室無損者〕
同 九年三月丙辰	同 六年	一、〇九二	祭器都監藥店兩司樓門及市巷民家六百四十戸火
同 肅宗五年八月己未	同 康和二年	一、一〇〇	宮南樓橋東廊及四店館掌牲司儀二署火延燒民戸數百
同 六年四月乙巳	同 三年	一、一〇一	吏部火
同 睿宗元年十二月丁丑	同 嘉承元年	一、一〇六	大寧宮災
同 十二年十二月戊寅	同 嘉永二年	一、一〇七	左監牧火
同 壬午	同	同	大寧宮火
同 九年五月戊戌	鳥羽天皇永久二年	一、一一四	中尙署火

同	十三年十二月己亥	同	元永元年	一、一二八	明陵火
同	十四年正月	同	二年	一、一一九	迎恩館火
同	十月辛巳	同	二年	一、一一九	乾明殿火
同	十五年十月戊戌	同	保安元年	一、一二〇	鶴嶺城火
同	十六年三月	同	二年	一、一二一	市塵火
同	仁宗六年正月乙巳	崇德天皇大治三年	一、一二八	仁德宮火	
同	二月癸亥	同	同	同	南京宮闕災
同	七年二月癸丑	同	四年	一、一二九	供備庫火
同	十年三月丁酉	同	長承元年	一、一三二	仁德宮老櫓火出自焚
同	十四年十一月乙酉	同	保延二年	一、一三六	東京兵庫火
同	十五年二月癸丑	同	三年	一、一三七	東界末登戌兵庫火延燒民家七十餘戶
同	二十一年五月丁卯	近衛天皇康治二年	一、一四三	延德宮火	
同	二十三年十一月丙寅	同	天養二年	一、一四四	市塵火延燒民家數十戶
同	二十三年正月癸亥	同	久安元年	一、一四五	仁恩館火
同	丁亥	同	同	同	大同門及遮城左右廊五十間火
同	毅宗七年六月庚申	同	仁平三年	一、一五三	穆清殿災
同	十一年三月壬申	後白河天皇保元二年	一、一五七	尙乘局災延及御輦	
同	十二年四月癸巳	同	三年	一、一五八	新倉館里民家三百二十餘戶災
同	十一月癸未	同	同	同	萬寶殿災
同	十三年正月辛巳	二條天皇平治元年	一、一五九	禁中十員殿災	

朝鮮の災害

九二

同	高麗毅宗十五年三月乙丑	二條天皇應保元年	一、一六一	東界宣德鎮兵庫三百餘間及民家三百戸火
同	明宗元年十月壬子	高倉天皇承安元年	一、一七一	夜宮闕災
同	五年二月辛巳	同 安元元年	一、一七五	内史洞宮災
同	七年十月壬申	同 治承元年	一、一七七	宮闕都監及市塵火
同	十年十二月辛丑	同 四年	一、一八〇	夜三司災
同	十一年正月辛亥	安德天皇養和元年	一、一八一	寫經院災
同	十五年八月乙丑	後鳥羽天皇文治元年	一、一八五	戸部版籍庫災
同	十七年正月庚戌	同 三年	一、一八七	樞密院火延燒壽昌宮廊二十餘楹
同	十一月庚申	同	同	平壤祠堂災
同	十九年五月辛亥	同 五年	一、一八九	太倉災
同	康宗元年十一月	順德天皇建曆二年	一、二一二	大雷雨大倉災
同	高宗三年十月癸丑	同 建保四年	一、二一六	内莊宅災
同	九年二月甲辰	後堀河天皇貞應元年	一、二二二	市塵火
同	十二月	同	同	太僕寺災
同	十年正月辛亥	同 二年	一、二二三	戎器都監災
同	十月己丑	同	同	内都校災
同	十二年十月丁未	同 喜祿元年	一、二二五	儲祥奉元睦親合元四殿災延燒禁城廊廡一百三十七間
同	十二月辛卯	同	同	興國寺火
同	十五年十月丁巳	同 安貞二年	一、二二八	和州城廡三百餘間火
同	十六年三月庚寅	同 寛喜元年	一、二二九	和州兵庫災

同	四月乙巳	同	同
同	十七年七月戊午	同	二年
同	二十一年正月丙午	同	四條天皇文曆元年
同	三月癸丑	同	同
同	九月辛酉	同	同
同	二十三年三月庚申	同	嘉祿二年
同	三十二年三月甲子	同	後嵯峨天皇寬元三年
同	四十年二月丁丑	同	後深草天皇建長五年
同	十一月甲申	同	同
同	四十二年十二月丙戌	同	七年
同	四十四年九月己卯	同	正嘉元年
同	元宗十二年二月戊申	同	龜山天皇文永八年
同	九月乙亥	同	同
同	忠烈王二年閏三月庚子	同	後宇多天皇建治二年
同	三年三月庚子	同	三年
同	七年二月丙戌	同	弘安四年
同	十七年四月戊辰	同	伏見天皇正應四年
同	忠肅王九年春	同	後醍醐天皇元享二年
同	十一年正月庚寅	同	正中元年
同	三月丁未	同	同

第二章 災害の記録

三司文帳庫災	一、二三〇	同
大倉八廣皆災	一、二三四	同
大風關南里民家數千戸火	一、二五三	同
大府寺禮部弓箭庫火	一、二五六	同
市街南里民家數百戸火	一、二四五	同
〔江都見子山北民家八百餘戸火老弱焚死者八十餘人延燒延慶宮法主寺御營庫太常府輪養都監太醫監藥庫災〕	一、二五七	同
栗浦里民家百餘戸火	一、二七一	同
弓弩都監兵庫火	一、二七六	同
太倉災	一、二七七	同
栢市橋邊民家三百餘戸火	一、二七九	同
國贖庫火	一、三二二	同
鹽店洞民家千餘戸火	一、三二四	同
大府火延燒民家八百餘戸		
〔造成都監災時公主請元工匠修宮室民不堪命人以爲天示驚〕		
巡馬南里民家火延燒百餘戸人畜多燬死		
城中各里民家三百餘戸火		
延慶宮門火		
地藏坊里民家三百餘戸火		

朝鮮の災害

高麗忠肅王十一年八月甲申	後醍醐天皇正中元年	一、三二四	時坐宮厨火
同 九月癸酉	同	同	市廛火
同 恭愍王十七年四月丙寅	後龜山天皇正平二十三年	一、三六八	同
同 十九年二月癸未	同 建德元年	一、三七〇	同
同 二十二年十二月癸卯	同 文中二年	一、三七三	影殿庫災
同 辛禡二年十月丙辰	同 天授二年	一、三七六	義成倉酒庫災
同 十一月癸未	同	同	夜再火無餘
同 九月四日丁亥	同 弘和三年	一、三八三	陝州山城火延燒車糧一千三百石
同 十一年三月己巳	同 元中二年	一、三八五	海州通糧庫災
同 十三年十二月壬子	同 四年	一、三八七	典農酒庫災
同 恭讓王元年三月庚寅	同 六年	一、三八九	內乘災
朝鮮定宗二年二月	後小松天皇應永七年	一、四〇〇	文廟火
同 太宗庚辰十一月	同	同	壽昌宮火
同 中宗五年 春	後柏原天皇永正七年	一、五一〇	興仁寺舍利閣災
同 九年十二月	同 十一年	一、五一四	尊經閣災
同 三十八年	後奈良天皇天文十二年	一、五四三	東宮災
同 明宗八年九月	同 二十二年	一、五五三	景福宮火延燒思政殿以南歷代典憲灰燼
同 宣祖四年八月	正親町天皇元龜二年	一、五七一	康陵丁字閣火
同 十四年七月	同 天正九年	一、五八一	智陵災
同 二十五年五月	後陽成天皇文祿元年	一、五九二	景福宮燬

同	光海君元年	同	慶長十四年	一、六〇九
同	十一年四月	後水尾天皇元和五年	一、六一九	
同	仁祖二年十二月	同	寬永元年	一、六二四
同	三年二月	同	二年	一、六二五
同	九年二月	明正天皇同	八年	一、六三一
同	十七年三月	同	十六年	一、六三九
同	肅宗二年三月	靈元天皇延寶四年	一、六七六	
同	四月	同	同	同
同	八年三月	同	天和二年	一、六八二
同	十一年正月	同	貞享二年	一、六八五
同	五月	同	同	同
同	十三年	東山天皇同	四年	一、六八七
同	九月	同	同	同
同	二十三年十二月	同	元祿十年	一、六九七
同	二十四年十一月癸巳	同	十一年	一、六九八
同	三十年	同	寬永元年	一、七〇四
同	景宗二年四月	中御門天皇享保七年	一、七二二	
同	三年正月	同	八年	一、七二三

第二章 災害の記録

〔倭寇犯京上去邪亂民先焚刑曹掌隸院及臨海君宮洪汝諒家父焚景福宮及倭入京以南山下一帶爲居停翌年正月見敗於平壤發憤焚蕞而去〕	平壤府城中民家千餘戶火延燒大同門樓開城府民家數百戶火	都城大火焚燒民家數千區延燒鐘閣及南別宮人畜多死	智陵沙堂火	昌陵火	〔江陵集慶殿火。先是府境有空中火落延燒甚遠未久殿災襄陽洛山寺又災兼又風火烈延燒十里內人家滿山松栢頃刻灰燼變異之慘今古所無云〕	章陵火	開城府城內五百七十五戶火	開城府城內又五十二戶燒	平壤府民家三百四十四戶火數之內內燒一百一戶	鍾閣火	平壤府民家四百餘戶火	恭陵災	萬壽殿災	章陵火	〔夜承暉殿災先朝舊物及兩殿服御物盡爲燒燼二宮人亦燒死〕	孝陵災	市廛火	純陵災
--	----------------------------	-------------------------	-------	-----	--	-----	--------------	-------------	-----------------------	-----	------------	-----	------	-----	-----------------------------	-----	-----	-----

朝鮮の災害

九六

同	英祖元	年	中御門天皇享保十年	一、七二五	〔淮陽府民家一百二十八戸火延燒衙舍及内外各廳庫舍四百餘間〕
同	九年十月	同	十八年	一、七三三	市塵火
同	十三年	同	櫻町天皇天文二年	一、七三七	開城府民家一百二十一戸火
同	九月	同	同	同	市塵火
同	十七年三月	同	寬保元年	一、七四一	平壤府内民家一百九十戸火
同	二十年	同	延享元年	一、七四四	安州民家二百六十四戸火
同	九月	同	同	同	市塵火
同	十月	同	同	同	承政院火自宣祖辛丑以後百餘年時政記盡火
同	三十二年三月	同	桃園天皇寶曆六年	一、七五六	章陵火
同	三十七年十月	同	十一年	一、七六一	市塵火
同	四十三年三月	同	後櫻町天皇明和四年	一、七六七	〔平壤府城内民家五百十二戸火全州府民家二千三百三十四戸火〕
同	四月	同	同	同	郭山郡民家五百八十七戸火宣川府民家五百六戸火
同	四十四年三月	同	五年	一、七六八	平壤府民家三百九十八戸火
同	四十七年三月	同	八年	一、七七一	市塵火德川郡邑村民家二百三十四戸火
同	四十九年三月	同	安永二年	一、七七三	殷山縣民家一百五十餘戸火
同	五十年正月	同	三年	一、七七四	咸興府民家六百十四戸火
同	正祖丙申四月	同	後桃園天皇同五年	一、七七六	孟山縣民家一百四十餘戸火義州府民家一百四十四戸火
同	元年四月	同	六年	一、七七七	咸興府民家三百四十三戸火德川郡民家二百五十八戸火
同	三年十一月	同	八年	一、七七九	彦陽縣民家一百餘戸火
同	四年正月	同	光格天皇同九年	一、七八〇	咸興府民家九百七十一戸火

同	五年五月	同	天明元年	一、七八一	徳川郡民家三百餘戸火
同	十一月	同		同	利川府民家一百九十四戸火
同	八年二月	同	四年	一、七八四	通川郡民家一百二十四戸火
同	三月	同		同	樂安郡民家一百餘戸火
同	三月	同		同	盈徳縣民家一百五十戸火
同	九年三月	同	五年	一、七八五	价川郡民家一百十六戸火肅川府民家一百四十戸火
同	十一年四月	同	七年	一、七八七	西部東幕里民家五百餘戸火
同	十四年正月	同	寛政二年	一、七九〇	通明殿火
同	十八年四月	同	六年	一、七九四	開城府民家六百四十餘戸火
同	純祖元年二月	同	享和元年	一、八〇一	平壤民家六百餘戸火
同	三年四月	同	三年	一、八〇三	平壤民家一千餘戸火
同	十二月	同		同	仁政殿火
同	四年三月	同	文化元年	一、八〇四	崇鑾、崇仁兩殿火
同	五年五月	同	二年	一、八〇五	關北民家數千戸火
同	七年十一月	同	四年	一、八〇七	法聖民家四百餘戸火
同	九年三月	同	六年	一、八〇九	蔚山民家五百餘戸火咸興民家一千七百九十餘戸火
同	十年三月	同	七年	一、八一〇	通川郡民家七百三十餘戸火
同	十一年閏三月	同	八年	一、八一一	香室藝文館火
同	十三年十二月	同	十年	一、八一三	壽靜殿行閣火
同	十五年五月	同	十二年	一、八一五	光陵火

朝鮮の災害

朝鮮純祖十九年三月	仁孝天皇文政二年	一、八一九	南小管火藥庫火
同 二十四年八月	同 七年	一、八二四	景福宮火
同 二十九年十月	同 十二年	一、八二九	慶熙宮火
同 三十年八月	同 天保元年	一、八三〇	歡慶殿火
同 三十二年四月	同 三年	一、八三二	安州牧民家三百五十餘戸火
同 三十三年十月	同 四年	一、八三三	昌德宮大造殿熙政堂火
同 憲宗五年十二月	同 十年	一、八三九	景慕宮望廟樓火
同 哲宗七年四月	孝明天皇安政三年	一、八五六	咸興府民家一千三百餘戸火
同 八年十月	同 四年	一、八五七	宣仁門火
同 九年四月	同 五年	一、八五八	咸興府民家四百九十餘戸火
同 十四年八月	同 文久三年	一、八六三	市 廛 火
同 李太王元年四月	同 元治元年	一、八六四	鍾閣火延及市廛
同 三年三月	同 慶應二年	一、八六六	咸興府民家五百餘戸火
同 十二月	同	同	彰義宮藏譜閣火
同 四年三月	明治天皇同 三年	一、八六七	江陵府民家五百餘戸火
同 十年十二月	明治 六年	一、八七三	交泰殿火
同 十四年十一月	同 十年	一、八七七	康寧殿交泰殿火
同 十八年十一月	同 十四年	一、八八一	昌德宮咸寧殿火
同 二十五年三月	同 二十一年	一、八八八	景福宮承政院堂後火
同 二十六年九月	同 二十二年	一、八八九	慶熙宮崇政門火

同	三十四年四月	同	三十年	一、八九七	徽陵丁字閣火
同	光武三年正月	同	三十二年	一、八九九	南關帝廟火
同	四年閏八月	同	三十三年	一、九〇〇	慶運宮璿源殿火
同	八年二月	同	三十七年	一、九〇四	慶運宮中和殿咸寧殿卽祚堂昔御堂景孝殿火

여백

第三章 災害の程度

災害の種類は極めて多く、これに基く損害の大小も色々であるが、遠き過去に於ける災害の程度はこれに關する記録の甚だ不完全な爲めに正確に知ることは不可能である。そこで最近數年間に於ける最も著しき災害に就いて、その損害の程度を調べて見やう。尤も災害に因る損害額の見積は極めて困難なる爲め、各道の報告に係る數字が必ず災害の全部を網羅せざる場合もあり、特に旱害の如き、朝鮮に於ける農作物災害として最も著大なるものにありても、その最も激甚を極めたる大正八年及び同十三年の旱害以外に、何等の據るべき調査材料無きは甚だ遺憾のことである。然しながら將來に於ける災害の防止、救済、復舊等の施設を講せんとせば、既往に於ける災害の程度を參考として最も的確なる方策を樹立せねばならぬことは勿論である。茲に於てか災害に關する調査の完備に努むるは、極めて重要なことであると信する。

農作物被害

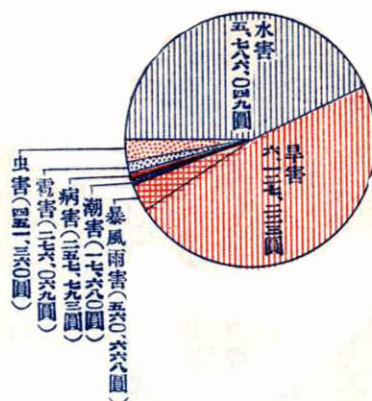
最近五箇年間で農作物被害の最も甚大であつたのは大正十四年の三七、四四六、六三七圓で、大正十一年の二一、二六三、六一七圓これに亞ぐのである。これ等の被害の中、水害によるもの最も多く、

年により多少の差はあるが、その被害は殆んど毎年免れることが出来ないものである。殊に大正十四年大正十一年の兩年は、その被害高著しく、前者に於ては三六、七九一、六七五圓に達し、同年度農作物被害額の殆んど九割八分を、後者に於ては二一、二六三、六一七圓に及び、總農作物被害の九割を占めて、その損失の何如に大なるかを物語つてゐる。大正十二年に於ては潮害が最も多く被害總額の六割を占め、水害がこれに亞いでゐる。大正十三年には水害が約六割、蟲害が約三割を占め、大正十五年には旱害が約五割近く、水害がこれに亞いで約四割は達して居る。

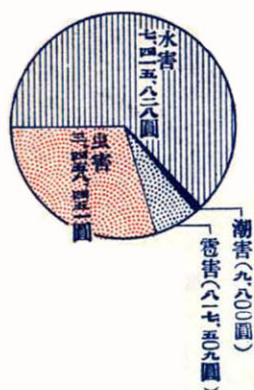
水害による農作物被害を各道別にして見ると、大正十一年は黃海道の八、〇一一、七四〇圓が最も多く京畿道、平安南道の順で、大正十二年は平安南道が第一で、忠清南道、黃海道これに亞ぎ、大正十三年は黃海道が全體の約五割で京畿道これに亞ぎ、大正十四年は慶尙南道の一八、九五三、五七九圓が五割餘を占め、京畿道の五、九五五、四一四圓の順である。大正十五年は忠南の二、四三二、八九八圓が筆頭で、忠清北道、京畿道これに亞ぐ。即ち以上によつて明かな通り、毎年水害によつて農作物に著しい損害を蒙るのは京畿道、黃海道で、被害高では慶尙南道の大正十四年に於ける大水害によつて受けた損害が最も大きい。これ等農作物の被害は主として水稻で、毎年總被害高の六、七割より八割を占め、これに亞ぐは豆類の約一割内外である。毎年鮮内各地方に於て、降雹の爲めに多少の農作物被害を蒙るのが常であるが、その被害額は最近に於て最も甚大であつた大正十三年に入一七、五〇九

最近五箇年間農作物被害見積額比較

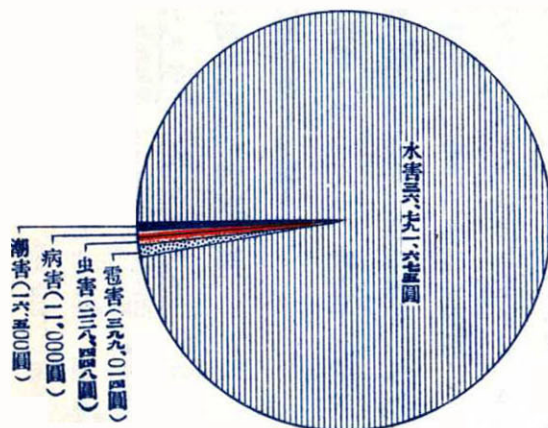
大正十五年
昭和元年 度(三、四七、八四三圓)



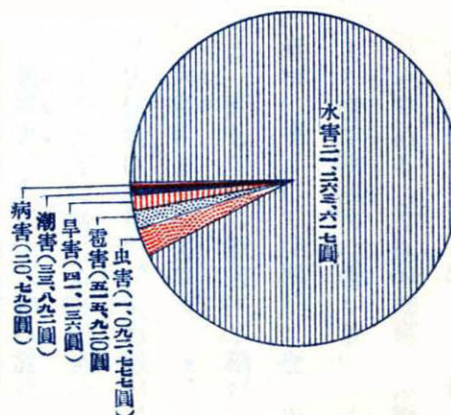
大正十三年度(二、七〇、五八八圓)



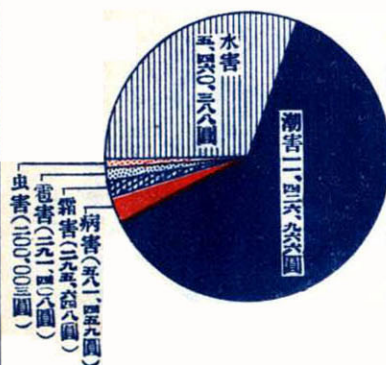
大正十四年度(三、四四、六三七圓)



大正十一年度(三、九六、一三圓)



大正十二年度(一、八五、八七二圓)



圓で、水害による損失とは較ぶべくもない。而して連年降雹に因る被害を受けてゐるのは慶尙北道で従つてその損害最も大きく、これに亞ぐものは忠清南北道、京畿道の順である。これが被害耕作物は、水稻が主で、その他禾穀類の被害も相當の額に上つてゐる。蟲害による農作物被害の最も多いのは黃海道と忠清南道で、この二道は殆んど連年この被害を受けてゐる。蟲害は主として浮塵子と夜盜蟲によるもので、殊に近年に於ける浮塵子の害は頗る甚だしきものがある。而してその被害は水稻が最も多く、粟これに亞ぎ、殊に大正十一年の粟被害は頗る多額に上つた。病害による被害は黃海道、慶尙北道、京畿道の三道に限られて居り、病氣は主として稻病である。被害作物は水稻で、黃海道が最も甚だしい。旱害に關する被害高の報告は全部を網羅して居らぬが、大正十五年に於ける黃海道の被害約五、一三二、六五九圓が最大である。更に同年に於ける平安北道の暴風害、大正十二年に於ける咸鏡南道の霜害はいづれも相當の額に上り、大正十三年の平安北道、黃海道、平安南道の海瀟害は被害額一一、四二六、九六六圓の多きを算した。

最近五箇年間農作物被害調

種 別	大正十五年		大正十四年		大正十三年		大正十二年		大正十一年	
	被害面積 金 額	被害見積 額	被害面積 金 額	被害見積 額	被害面積 金 額	被害見積 額	被害面積 金 額	被害見積 額	被害面積 金 額	被害見積 額
水 害	六九、五三、五、六六〇 町	四〇六、九六、九、七九、七五 町	四〇六、九六、九、七九、七五 町	一四七、三三、五、七四、五、八六 町	七三、〇六、六、五、四、六〇、三八〇、七九 町	二二、六三、六、七、四、九〇 町	二九、四八、二、三、四、二 町	五二、五、九〇 町		
電 害	六、八八、七	二七、六、〇、九	五、七、六	三九、〇、四	三、九、六	八七、五、九	一四、四、五	二九、四八、二、三、四、二 町		

蟲害	二六、八五九	四五、一六〇	二八、八五五	三八、四四八	一二、九四七	三、四八八	四五五	二、〇〇〇	六九、一八〇	一〇、九七五
病害	五、九三〇	二五、七九三	三〇〇	二一、〇〇〇	—	—	五、二九五	五八、四九九	一五	二〇、七九〇
旱害	二四〇、七六六	二七、三三三	—	—	—	—	—	—	六九二	四一、二六
暴風雨害	一七、一七	五〇、六八	—	—	—	—	—	—	—	—
潮害	一六	一七、六〇	三九六	一六、五〇〇	七四	九、八〇〇	一八四、二七二	二四六、九六六	一六	三、八五
霜害	—	—	—	—	—	—	二、八五五	二九五、六四八	—	—
計	三九、一〇三	一三、四七六	四四、一四五	三七、四四六	二八、三七二	一、〇六一	五八、一四五	八、八五一	四三、三六九	三、三三

備考

一、大正十五年の虫害は浮塵子及夜盜蟲の被害なれども其の大部分は浮塵子にして被害面積二八、六六一町、被害見積額四四八、四三七圓に達せり病害は稻熱病及炭疽病の被害なれども稻熱病の被害大にして被害面積五、一七六町被害見積二四二、九五七圓に上れり

一、大正十四年の蟲害は殆んど螟蟲の被害にして其の被害面積二六、三五一町、三金額一九八、五一〇圓にして夜盜蟲、浮塵子これに亞ぎ蠶桑の被害最も少し、病害は稻熱病のみなり

一、大正十三年の虫害は殆んど浮塵子にして面積二一〇、五一六町、金額三、三四七、八四一圓なり

一、旱害に關する被害額は僅に一部分に止まる、彼の最も激烈を極めし大正十三年の被害面積及びこれに因る減收高の如きは別

水害に因る農作物被害
(各道別)

[illegible]

忠清北道	八五三、一三六、五八	二、三三七	二五、八六七	—	—	三、七六五	七七一、三三五	六、一八五	八〇、〇四二
忠清南道	二、二〇一、二四三、八六八	三、三三六	二、二九、五七二	—	—	九、六六七	九八七、〇五七	九、七六三	四八三、五九五
全羅北道	—	—	三、四一、三七二、六九〇	七、五四	一四、八〇七	—	—	—	—
全羅南道	一、一四一	六、二五八	四、六四	一四、一四、四五〇	一八、五〇〇	四三、一六九	二二〇	二、一九三	八、〇三五
慶尙北道	—	—	四七、一九四、三、一八〇、五〇九	三、三九五	二七〇、四三六	—	—	—	八、三五四
慶尙南道	—	—	三八、四四一、一八、九三三、五七九	一〇、九四一、二九、〇三七	一、八九〇	—	—	—	八、四三四
黃海道	五、七三三	二、四一、三六八	五七、〇七六、二、六四、九三六	七、三七三、六九、六三九	一五、七六二	八八〇、八八九	一七五、七〇九	八、〇三二、七四〇	—
平安南道	—	—	二、三三八	一七〇、二三五	—	一八、九九九	一、二四三、三九	八〇、一四〇	三、一七二、六七
平安北道	一三、七九八	三、五二、一、九五	一〇、一〇八	四七、一〇、〇〇三	七、九四四	五九、四七五	二、三〇一	一〇七、〇六	七、六六六
江原道	二、九三八	三、三三、九〇九	二六、七五一、三三、七、一八	三、四九七	二、三、四九三	二、九九四	二、六八、一六五	七、七九	九〇、四、二四
咸鏡南道	五、二六七	二、九〇、二六七	二、三九	一、三、七〇	一、三〇七	四〇、五六六	二、一、七九七	五、五四、九六四	一四、七八三
計	六九、五三三、五、七六六、〇四九	四〇〇、九八九、三六、七、六七五	一四七、三三、七、四、五、八、八	—	—	七三、〇七六、五、四〇、〇、三八	—	—	三六〇、七七九、二、三、六三、六七

水害に因る農作物被害 (種類別)

種別	大正十五年	同十四年	同十三年	同十二年	同十一年
水稲	面積 積價 額 四、九七、四、四九、三三六 二、三三五 六、一〇、五五	面積 積價 額 三、七六、三三〇、一七、四四七 三、二〇七 八、八一、四三三	面積 積價 額 五、三三、四、五、〇〇、〇三三 三、四八 八、三五、六九〇	面積 積價 額 三、六九、二、九、五五、七四三 一〇、五七五 四八、八九九	面積 積價 額 一、五四、九七、三三、六六六 一、五四、九七、三三、六六六 六、〇六九、一、七三九、五九八
粟	面積 積價 額 九、九八三 四〇、四、五五五	面積 積價 額 一、九八、五六 六、七〇、三三六	面積 積價 額 一、七七、九八 二、八八、三三〇	面積 積價 額 九、五五六 三七七、九六八	面積 積價 額 七、七三三、二〇〇、九、三四
大豆	面積 積價 額 九、七七三 六、六〇、七三二	面積 積價 額 六、四、五、四三、一四〇、一九〇	面積 積價 額 三、八二、一一、三五四、六四七	面積 積價 額 二〇、七〇五、一一、二九、五、五六	面積 積價 額 六、五四、四九、二、七、八、六六三

電害に因る農作物被害 (種類別)

種類	大正十五年		同 十四年		同 十三年		同 十二年		同 十一年	
	面積	積金	面積	積金	面積	積金	面積	積金	面積	積金
水 稻	三、四〇三町	三二、九六五	二、九六三町	二〇、八九九	三、六六三町	八〇、六三三	一、〇〇五町	一七、一六九	一、五五五町	一七、七〇七
粟	九六八町	三、四四五	三三三町	一四、八六〇	一五五町	三、七九七	七五五町	一〇、六四九	九六四町	二六、九六八
上 記 穀 類 外	一、一六八町	一五、〇五一	一、四八三町	二八、三三三	二、一九六町	四七、八三三	一、七七八町	六、四〇〇	七二六町	三六、一七七
豆	一、一〇五町	八、四四三	六六七町	二六、一九三	二、九六六町	七五、三九七	一、三五五町	二、三四九	九六七町	三、〇六三
蔬 菜	三三三町	一、五七四	一〇五町	三、七六六	一、八四四町	一〇、三九二	七五五町	五、九四四	五三六町	一六、三〇三
其 他	三三三町	二、七五四	三三三町	三、六九四	一、三〇九町	六、五五四	四七〇町	三、五七七	一、一三七町	五、六六八
計	六、八六七町	二七、〇六九	五、七六六町	三九、〇二四	三、九九三町	八七、五〇九	一四、四〇五町	二九、四〇六	三、四四三町	五二、五九〇

蟲害に因る農作物被害 (各道別)

道 名	大正十五年		同 十四年		同 十三年		同 十二年		同 十一年	
	面積	積金	面積	積金	面積	積金	面積	積金	面積	積金
京 畿 道	一町	一	一町	一	二、八四〇町	七五、〇七五	一町	一	一、六三三町	四、六七五
忠 清 北 道	二〇三町	四、五五五	一町	一	二、二九九町	三、六三三	一町	一	三町	三、六〇〇
忠 清 南 道	一六、三〇〇町	三八、二四六	四六八町	一五、八六八	三、三七七町	七五、九三三	九六九町	一、三三〇	一、〇一一町	二四、四四八
全 羅 北 道	一町	一	一町	一	一、三〇〇町	八、一八〇	一町	一	一九町	三、五〇〇
全 羅 南 道	一町	一	一町	一	七五五町	五、九四〇	一、〇六五町	一、六六六	一町	一

朝鮮の災害

一〇八

種別	大正十五年、	同十四年	同十三年	同十二年	同十一年
慶尙北道	—	—	一四、九五	五三	—
慶尙南道	—	—	一九、六九	八六	—
黄海道	二八、九	五、五九	六、七六	七、七四	一、九〇
平安南道	—	—	四、〇八	五、三六	二、六七
平安北道	七、六五	八、〇〇	—	五、〇〇	七、〇五
江原道	一、八三	—	八、三〇	二、七五	三、七三
咸鏡南道	—	—	三、四一	七、一五	三、四七
咸鏡北道	—	—	五、二七	三、四六	一、五九
計	二八、八九	四、三〇	二八、八五	三、八四	一、三〇

虫害に因る農作物被害種類別 (害蟲別)

種別	大正十五年、	同十四年	同十三年	同十二年	同十一年
浮座子	二八、六六	四、四七	四、八六	一五、八六	一〇、五六
夜盜蟲	一九三	二、九三	二、〇五	一、三六	二、三六
螟蟲	—	—	二、六三	一、九七	一、七五
蠶繭	—	—	一、〇五	一、〇五	一、〇五
稻縱葉卷蟲	—	—	—	—	—
飛蝗	—	—	—	—	—
鋸蜂の幼蟲	—	—	—	—	—

赤壁虱
金龜子
蠶色幼蟲
計

蟲害に因る農作物被害 (種類別)

面	積	價	額	面	積	價	額	面	積	價	額	面	積	價	額
大正十五年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇

水種
稻

二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇
-------	------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	------	-------	-------

上記
米穀以外
の類

三〇	四、〇〇	三〇	四、〇〇	三〇	四、〇〇	三〇	四、〇〇	三〇	四、〇〇	三〇	四、〇〇	三〇	四、〇〇	三〇	四、〇〇
----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------

豆
棉

一	五、〇〇	一	五、〇〇	一	五、〇〇	一	五、〇〇	一	五、〇〇	一	五、〇〇	一	五、〇〇	一	五、〇〇
---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------

蔬
菜

一	五、〇〇	一	五、〇〇	一	五、〇〇	一	五、〇〇	一	五、〇〇	一	五、〇〇	一	五、〇〇	一	五、〇〇
---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------

其
計

二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇
-------	------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	------	-------	-------

病害に因る農作物被害 (各道別)

大正十五年	同	同	同	大正十五年	同	同	同	大正十五年	同	同	同	大正十五年	同	同	同
二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇

京
畿
道

面	積	價	額	面	積	價	額	面	積	價	額	面	積	價	額
大正十五年	同	同	同	大正十五年	同	同	同	大正十五年	同	同	同	大正十五年	同	同	同
二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇	二六、八五	五、二五	二六、八五	一、〇〇〇

第三章 災害の程度

朝鮮の災害

一一〇

忠清南道	慶尙北道	黄海道	計
五、九三〇	五、九三〇	五、九三〇	五、九三〇
二、七七五	二、七七五	二、七七五	二、七七五
三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇
二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇
三	三	三	三
五、二九二	五、二九二	五、二九二	五、二九二
五、二九二	五、二九二	五、二九二	五、二九二
三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇
一、二〇〇	一、二〇〇	一、二〇〇	一、二〇〇
三	三	三	三
二、七六〇	二、七六〇	二、七六〇	二、七六〇

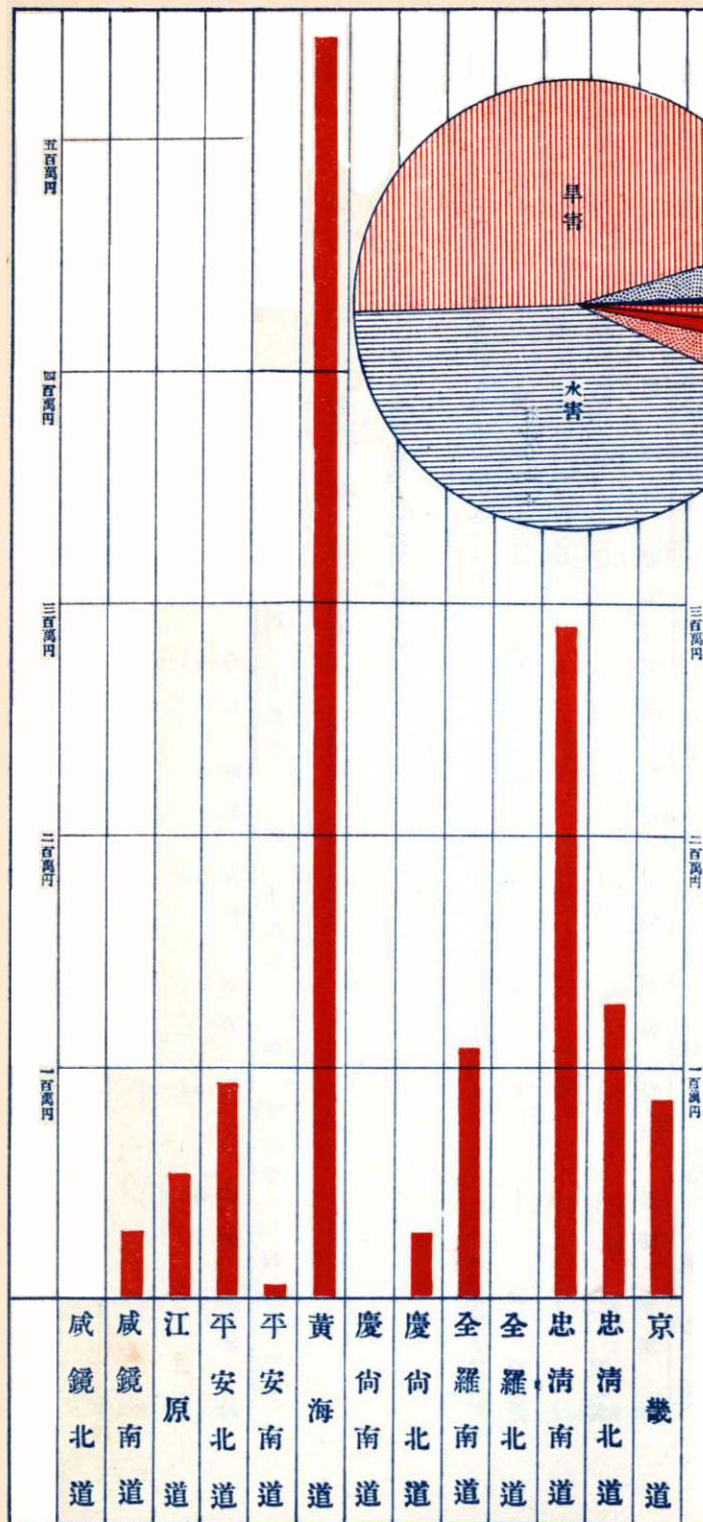
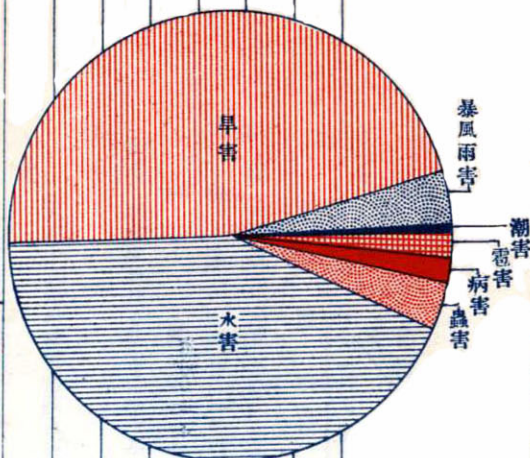
病害に因る農作物被害 (病害別)

種別	大正十五年	同十四年	同十三年	同十二年	同十一年
稻熱病	五、二六町 二四三、九七五円	三〇〇町 一一、〇〇〇円	一町 一円	三町 三〇〇円	一町 三〇、七六〇円
炭疽病	七四町 一四、八六五	一町 一円	一町 一円	五、二九二町 五、二九二	一町 一円
小麥の赤銹病	五、九二〇町 二七、七九三	三〇〇町 一一、〇〇〇	一町 一円	五、二九二町 五、二九二	一町 一円

病害に因る農作物被害 (種類別)

種別	大正十五年	同十四年	同十三年	同十二年	同十一年
水稲	五、二六町 二四三、九七五円	三〇〇町 一一、〇〇〇円	一町 一円	三町 三〇〇円	一町 三〇、七六〇円
粟	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇
上記穀類以外	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇
豆	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇
棉	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇	一町 一、〇〇〇

農作物被害見積額及び被害種別（大正十五年）



計	蔬 菜		其 他	
	面	積	面	積
五、九〇〇	三、五七、九三三	三〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
五、九〇〇	三、五七、九三三	三〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

早害に因る農作物被害 (各道別)

道 名	大正十五年		同 十四年		同 十三年		同 十二年		同 十一年	
	面	積	面	積	面	積	面	積	面	積
全 羅 南 道	二六、九〇〇	九、四四、五五〇	同	同	同	同	同	同	同	同
黃 海 道	二二、七六五、二三三	六、九	同	同	同	同	同	同	同	同
計	二四〇、七六六、二七三	三三	同	同	同	同	同	同	同	同

備考 朝鮮に於ける早害は毎年尠からざる額に達するも右の表以外に報告無し、假りにこれを掲ぐるもこの計數を全部と見る可からず

大正十三年の被害面積及び減收高別項参照のこと

早害に因る農作物被害 (種類別)

種 別	大正十五年		同 十四年		同 十三年		同 十二年		同 十一年	
	面	積	面	積	面	積	面	積	面	積
水 稻	五、四〇〇、二二二、七四四	同	同	同	同	同	同	同	同	同
粟	八〇、三六二、二二〇、五八二	同	同	同	同	同	同	同	同	同
上 記 以 外 類	四、六〇三、五五六、四七	同	同	同	同	同	同	同	同	同

朝鮮の災害

一一一

豆 類 三、一七 九三、七六

棉 二八五 四、五五

蔬 菜 一 一

其 の 他 二、九三 二五、〇六七

計 二四、七六六、一七、三三

備考 前表と同理由により旱害被害の一部分に過ぎず

大正十三年の被害面積及び減收高別項参照のこま

暴風雨に因る農作物被害 (各道別)

道 名 大正十五年 同 十四年 同 十三年 同 十二年 同 十一年

平 安 北 道 面 積 價 額 面 積 價 額 面 積 價 額 面 積 價 額 面 積 價 額 面 積 價 額

計 一七、一七 五〇、六六 一七、一七 五〇、六六 一七、一七 五〇、六六 一七、一七 五〇、六六 一七、一七 五〇、六六

暴風雨害に因る農作物被害 (種類別)

種 別 大正十五年 同 十四年 同 十三年 同 十二年 同 十一年

水 稻 面 積 價 額 面 積 價 額 面 積 價 額 面 積 價 額 面 積 價 額 面 積 價 額

栗 五、八三 一〇〇、九三 五、八三 一〇〇、九三 五、八三 一〇〇、九三 五、八三 一〇〇、九三

上 記 穀 類 以 外 類 三、七六 三三、八三 三、七六 三三、八三 三、七六 三三、八三 三、七六 三三、八三

豆 類 二、二九 六六、三二 二、二九 六六、三二 二、二九 六六、三二 二、二九 六六、三二 二、二九 六六、三二

[illegible]

潮害に因る農作物被害
(各道別)

道 名	大正十五年		同 十四年		同 十三年		同 十二年		同 十一年	
	面 積	積 價 額	面 積	積 價 額	面 積	積 價 額	面 積	積 價 額	面 積	積 價 額
京 畿 道	一六、 _町 一七、 _町 六〇						一八、 _町 一六、 _町 八〇	三〇、 _町 四八、 _町 四〇		
忠 清 南 道							九、八三	一五、 _町 八二、 _町 九	三〇	一〇、〇〇〇
忠 清 北 道									一四、 _町 六	三、 _町 八二、 _町 九
全 羅 南 道					七、 _町 四	九、 _町 八〇				
黃 海 道						一六、 _町 九五、 _町 三七、 _町 六、 _町 三三				
平 安 南 道						一五、 _町 三七、 _町 五、 _町 二五、 _町 三、 _町 九四				
平 安 北 道			三、 _町 九六	一六、 _町 五〇			二九、 _町 四、 _町 五、 _町 〇、 _町 三〇、 _町 九四〇			
計	一六	一七、 _町 六〇	三、 _町 九六	一六、 _町 五〇	七、 _町 四	九、 _町 八〇	一四、 _町 一、 _町 三七、 _町 一四、 _町 三、 _町 九六六	一七、 _町 六	三、 _町 八二、 _町 九	

備考 大正十三年中の黃海及び平北兩道は海嘯被害と同時に暴風雨の被害ありたり

潮害に因る農作物被害 (種類別)

種 別	
面積價額	大正十五年
面積價額	
面積價額	同 十四年
面積價額	
面積價額	同 十三年
面積價額	
面積價額	同 十二年
面積價額	
面積價額	同 十一年
面積價額	

朝鮮の災害

水稲	粟	上記以外	豆類	蔬菜	其他	計
大正十五年	一、七、六〇	一、七、六〇	一、七、六〇	一、七、六〇	一、七、六〇	一、七、六〇
同	三、六、〇〇	三、六、〇〇	三、六、〇〇	三、六、〇〇	三、六、〇〇	三、六、〇〇
同	一、六、〇〇	一、六、〇〇	一、六、〇〇	一、六、〇〇	一、六、〇〇	一、六、〇〇
同	七、四、八〇	七、四、八〇	七、四、八〇	七、四、八〇	七、四、八〇	七、四、八〇
同	五、〇、四、六〇	五、〇、四、六〇	五、〇、四、六〇	五、〇、四、六〇	五、〇、四、六〇	五、〇、四、六〇
同	一、六、〇〇	一、六、〇〇	一、六、〇〇	一、六、〇〇	一、六、〇〇	一、六、〇〇
同	三、八、二〇	三、八、二〇	三、八、二〇	三、八、二〇	三、八、二〇	三、八、二〇

霜害に因る農作物被害 (各道別)

道名	大正十五年	同	同	同	同	同
咸鏡南道	一、七、六〇	三、六、〇〇	一、六、〇〇	七、四、八〇	五、〇、四、六〇	一、六、〇〇
同	三、六、〇〇	一、六、〇〇	七、四、八〇	五、〇、四、六〇	一、六、〇〇	三、八、二〇
同	一、六、〇〇	七、四、八〇	五、〇、四、六〇	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇
同	七、四、八〇	五、〇、四、六〇	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇	三、八、二〇
同	五、〇、四、六〇	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇
同	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇	三、八、二〇
同	三、八、二〇	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇

霜害に因る農作物被害 (種類別)

種類	大正十五年	同	同	同	同	同
水稲	一、七、六〇	三、六、〇〇	一、六、〇〇	七、四、八〇	五、〇、四、六〇	一、六、〇〇
粟	一、七、六〇	三、六、〇〇	一、六、〇〇	七、四、八〇	五、〇、四、六〇	一、六、〇〇
同	三、六、〇〇	一、六、〇〇	七、四、八〇	五、〇、四、六〇	一、六、〇〇	三、八、二〇
同	一、六、〇〇	七、四、八〇	五、〇、四、六〇	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇
同	七、四、八〇	五、〇、四、六〇	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇	三、八、二〇
同	五、〇、四、六〇	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇
同	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇	三、八、二〇	一、六、〇〇	三、八、二〇

上 記 以 外 の 類	禾 穀 類	豆 類	棉	蔬 菜	其 他	計
一七、八六	二〇、八	三、五				三、八五
一九、〇五四	元、八三					二五、六六

水 害

朝鮮に於ける水害の記録は既にこれを示した通りで、その度数の多く、被害高の大なることは驚くべきものであるが、試みに最近十箇年間に就いて見るに、最も水害の大であつたのは大正十四年で、これに亞ぐは大正九年、大正十一年の水害である。水害に因る死者の数は九年度の一、二九五人が群を抜き、一箇年平均五一六人に對し二倍餘に當り、農作物被害は大正十四年の二四、一三〇、〇三一圓が第一位を占め、土地被害では九年の一六、五八七、四三八圓、工作物被害では十四年の六、六三七、〇五〇圓、家屋被害では同じく十四年の六〇、六〇六、〇〇〇圓がそれぞれ筆頭を占めてゐる。殊に大正十四年の家屋被害の如きは、大正九年の一三、四七三、五〇〇圓に對して約四倍半の被害高を示し、その汎濫區域の如何に廣かつたかゞ想像されるのである。また被害金額合計では大正十四年の一〇三、二一七、三五四圓が、大正九年度の約二倍餘にあたり、一箇年の被害高は平均二八、三二

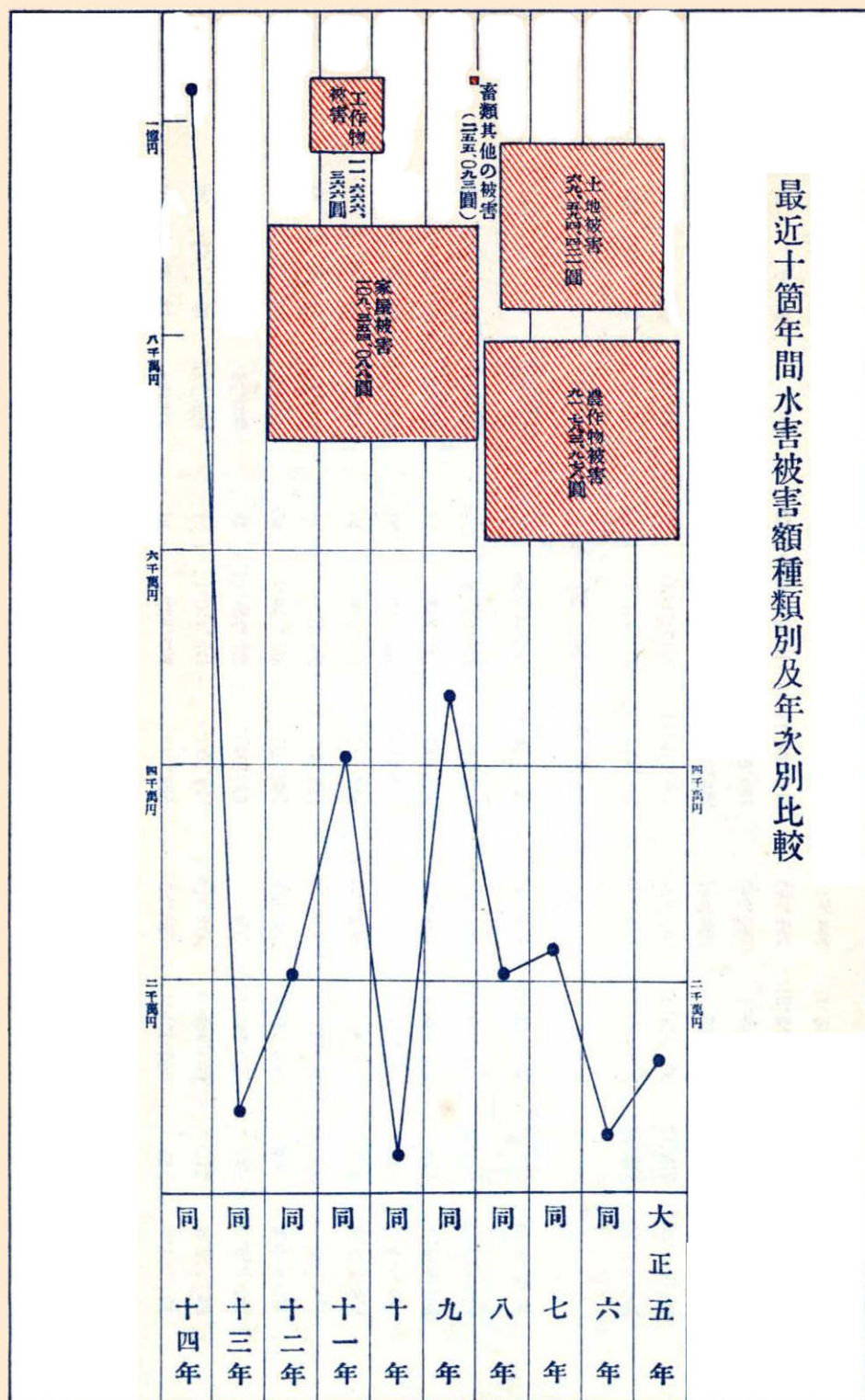
○、一九五圓となつて居り、年々莫大なる朝鮮の富が水害の爲めに失はれつゝあることを如實に物語つて居る。

今試みに、水害の最も甚だしかつた大正十四年について、その各道別被害高を見るに、死者は京畿道の三五六人が全部の六割を占め、農作物被害は慶尙南道の一〇、五六八、二八四圓が第一位で、京畿道これに亞ぎ、土地、工作物、家屋その他の被害では京畿道が最も大きいのである。被害金額總計は京畿道の四一、六六三、四四三圓が筆頭で（總計の約四割）、慶尙南道の二三、四八三、八五八圓（總計の約二割）これに亞ぎ、全羅南道の四九二、二七一圓が最も少いのである。水害に因る土地工作物被害は大正十四年が遙かに多く一七、二〇一、三六六圓の巨額を示し、從來のレコードたりし大正十二年の九、八三七、四六八圓の約二倍に近く、毎年の平均五、二七二、〇〇〇圓の三倍を超えて居る。

最近十箇年間水害表

年次	氾濫區域 面積	人の死	農作物被害	土地被害	工作物被害	家屋被害	畜類其他 の被害	被害額計
大正五年	—	三五五	四、三三、六六六	二七四、三六九	一五、七二	五、六四三、七五〇	一四、八八〇	二、三八七、三六六
同 六年	—	二二〇	九七、六〇四	一、五〇、〇七〇	一五、六〇	二、八八五、五〇〇	一七、一四〇	五、四七、七四四
同 七年	—	二七	一一、〇六、三三五	六、七七一、六六	二、七、三三	四、四五四、五〇〇	五、〇八〇	三、六九、六三三
同 八年	—	五七四	五、七三、五九六	九、一四〇、〇〇〇	八、七、四四	四、一、七、七〇〇	三、七、七〇	二、一〇、一三、〇〇〇
同 九年	—	一、二九五	一四、〇、一、七〇七	一六、五、七、四六	二、一、八、五九	一三、四、七、三、〇〇〇	一三、〇〇〇	四、六、六、三、三〇〇

最近十箇年間水害被害額種類別及年次別比較

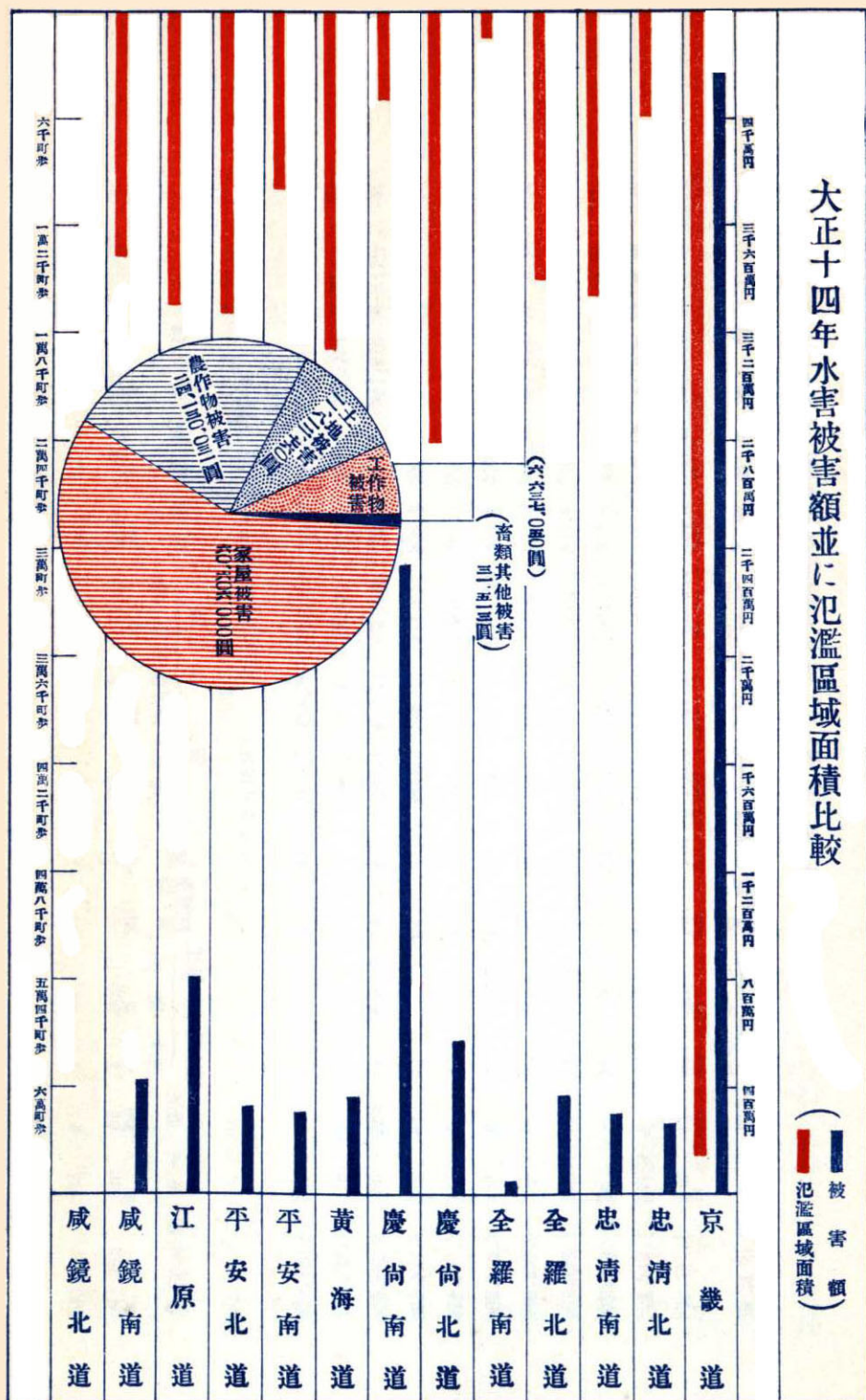


咸鏡南道	一三、二三三	吉	六、九七三	六、九〇〇	一、六、八二〇	二、七、七〇〇	二、二一〇	四、一、五七六
總計	二、〇七、四八八	六、七七	二、四、一〇〇、三三一	二、八、三、三六〇	六、三、七、〇五〇	五〇、〇〇〇、〇〇〇	三、一、五、三三	一〇、二、二、七、四四

更に、水害に因る國家の負擔に屬する土木事業災害たる道路、並木、橋梁、河川、池沼湖、港灣及海岸、溜池及用惡水路、水道、下水の損害を見るに、その中道路、並樹、橋梁の被害は大正四、五年度が最も甚だしく、往時の道路施設の不完全なることを示し、河川、池沼湖、港灣及び海岸の被害は近年の大洪水たる大正十四年度、同九年度、同十一年度に多く、水路、水道の被害は大正十二年度、下水は大正五年度、同十四年度の順序である。而してこれが被害額は大正四年度に一、三七四、二四九圓たりしものが、大正十一年度にはその約四倍、同十二年度には約七倍、同十三年度には約五倍、同十四年度には約十四倍となつて居り、近來水害に因る被害高の著しき増加の傾向を窺ふことが出来る。

今試みに、大正十四年度の各道別の被害額を見ると、道路、並樹、橋梁の被害では江原道が最も甚だしく、河川被害は慶尙南北道に於て最も多きを示し、また港灣、海岸の被害では慶尙南道が大部分を占め、水路被害では平安北道、池沼湖被害では全羅北道、下水被害では慶尙南道、水道被害では京畿道が激甚である。損害價額に於て最も多いのは平安南道の四、二三九、四一〇圓にして、最も少ないのは全羅北道の一、二二、五二八圓である。

大正十四年水害被害額並に氾濫區域面積比較



水害に因る土木事業災害表 (累年比較)

年度	河川				池沼湖海				溜池及用悪水路			
	道路並樹橋梁	堤防土砂埋没	其他	其の他	海岸	水路	其他	水道	下水	損害	價額	額
大正四年度	九五、三三三 間 本	四、二八 本	五、八七 本	一七、二六 立坪	二、〇八 立坪	二、〇八 立坪	一、〇八 立坪	一、〇八 立坪	一、〇八 立坪	一、〇八 立坪	一、〇八 立坪	一、〇八 立坪
同 五年度	四、七三三 間 本	四、五九 本	六、三三 本	三、〇一 立坪	一五、八九 立坪	四、八六 立坪	五 立坪	一四、三三 立坪	九、〇五 立坪	七、三九 立坪	一、五九、四三八 間 本	一、五九、四三八 間 本
同 六年度	二七、〇一九 間 本	八、七四 本	三、六九 本	一五、〇六 立坪	二、八〇 立坪	四、八六 立坪	四 立坪	二七、〇三 立坪	九、〇五 立坪	一 立坪	一、五九、四三八 間 本	一、五九、四三八 間 本
同 七年度	三〇、五七 間 本	一〇、〇〇 本	五、三六 本	二、〇一 立坪	三、八五 立坪	三、八五 立坪	三 立坪	二七、〇三 立坪	九、〇五 立坪	一 立坪	一、五九、四三八 間 本	一、五九、四三八 間 本
同 八年度	三、四三 間 本	八、五五 本	四、六六 本	一四、五九 立坪	八、〇一 立坪	二、一五 立坪	一〇七 立坪	二〇八 立坪	七、八六 立坪	二、二六 立坪	二、六八、七三七 間 本	二、六八、七三七 間 本
同 九年度	四、七四 間 本	四、九六 本	三、九六 本	一三、八〇 立坪	九、〇三 立坪	一三、八〇 立坪	一 立坪	一四、九三 立坪	三、八六 立坪	五 立坪	二、六八、七三七 間 本	二、六八、七三七 間 本
同 十年度	二〇、五〇 間 本	九、三 本	一、五五 本	四、九六 立坪	二、五五 立坪	五、五五 立坪	一三 立坪	二、八二 立坪	八 立坪	四 立坪	二、六八、七三七 間 本	二、六八、七三七 間 本
同 十一年度	三、六、九二 間 本	六、三六 本	四、〇九 本	一五、二七 立坪	八、九八 立坪	一、〇〇七 立坪	一、一三 立坪	三、九四 立坪	八 立坪	六、四 立坪	五、三九、一〇三 間 本	五、三九、一〇三 間 本
同 十二年度	三、三、一五 間 本	五、〇六 本	二、八二 本	二、〇、四三 立坪	一四、六七 立坪	一、九六 立坪	一四七 立坪	四、六六 立坪	九、〇 立坪	六、九 立坪	九、八七、四六八 間 本	九、八七、四六八 間 本
同 十三年度	三、八、四九 間 本	三、九四 本	一、四六 本	六、〇九 立坪	五、八九 立坪	三、九 立坪	三八 立坪	四、六六 立坪	六、一 立坪	六、一 立坪	六、五五、九六六 間 本	六、五五、九六六 間 本
同 十四年度	五、三、七四 間 本	三、七四 本	四、六三 本	三、三六 立坪	三、八、九四 立坪	一、三〇 立坪	一、五五 立坪	一、六六 立坪	一、二七 立坪	三、六 立坪	一、七、〇一、三六 間 本	一、七、〇一、三六 間 本

水害に因る土木事業災害表 (大正十四年度)

年度	河川				池沼湖海				溜池及用悪水路			
	道路並樹橋梁	堤防土砂埋没	其他	其の他	海岸	水路	其他	水道	下水	損害	價額	額
京 畿 道	三、一、六 間 本	二、〇一 本	五、八 本	三、四、九七 立坪	二、七三〇 立坪	五、八 立坪	一〇 立坪	一、〇〇 立坪	一 立坪	七、七 立坪	七、七 立坪	七、七 立坪
忠 清 北 道	三、九、七 間 本	一 本	一、八、二五 立坪	一 立坪	一 立坪	一 立坪	一 立坪	一 立坪	一 立坪	一 立坪	一、九一 立坪	一、九一 立坪

惠清南道	三、七七	五〇	五二	六、〇八	三〇	二〇	二	—	一四五	三	七	三	一、三三、九九
全羅北道	一〇、九二	—	三、〇〇	七、一八七	一四、三二	一七四	八	—	二四八	五	—	—	一三、五八
全羅南道	三、一四三	二四	一五	一、五九〇	—	三	二	六	—	三	—	—	一五、二〇一
慶尙北道	五、四九	—	五二	四、七四	一八、六五	七〇	六	九	—	五三	一	—	三七、七八六
慶尙南道	一四、五九	四、四二	三七	一五、三三	四、四六	一五〇	三	一、六七	四、四七	一〇	六	一、五三	三六、三九、四四
黄海道	三、七〇	二、七〇	一九	三、四七	—	四	七	—	—	七〇	—	四〇〇	二四、五、九五
平安南道	二、〇四	—	四六	四、〇五	九〇	六	三	—	—	—	—	—	四、三九、四〇
平安北道	五、六六	五九	二七	二、五九	二	五	一	—	九、五九	三	—	—	五三、六四二
江原道	一、五、四五	三、八七	六〇	五、三六	六、八〇	二二〇	—	五	二、二六	—	五	—	一四、五、九〇二
咸鏡南道	五、七六	五〇	五三	四、六三	一、〇九〇	三七	—	二	・八〇〇	四	—	—	二〇、〇、一一
咸鏡北道	六、七五	—	九	六、四	—	二	—	—	—	—	—	—	六三、三〇〇
總計	五三、七四	三、七	四、六三	三〇、五、六	三六、九四	一、三〇	一五	一、六三	一九、二七	三六	二三	二、九	一七、三、三六

林野被害

林野被害では蟲害が大牟を占め、火災による被害高これに亞ぎ、盜伐、誤伐、風枯その他の損害は極めて少部分である。即ち火災の件數では大正十四年の一、六四六件、及び同十三年の一、五六八件が多い方であるが、被害高から云へば大正三年の一、五五一、四一一圓が遙かに他を凌いでゐる。蟲害は最近に於て著しく増加し、大正十四年にはその被害高二、三九六、三八六圓の多きに達して居る。洪水による被害は大正十五年が最も多く、盜伐は大正六年、同十三年の順で、誤伐は大正十一年及び同

十四、十五の三箇年が最も多い。風枯その他原因による被害高は大正十四年の一四、二七〇圓が遙かに他を抜いてゐるが、これは同年度に於ける暴風害によるものである。被害高合計の最も多いのは大正十四年の三、二二六、一三四圓で、同十三年これに亞ぎ、大正元年の合計四〇、二〇九圓に對して各種被害とも著しく漸増の傾向が窺はれるのは、林政上最も憂慮すべき現象である。

林野被害累年比較

年 度	火 災		病 蟲 害		洪 水		盜 伐		誤 伐		風 枯 損 其 他		合 計	
	件 數	價 額	件 數	價 額	件 數	價 額	件 數	價 額	件 數	價 額	件 數	價 額	件 數	價 額
大正元年度	七	三、三二五	四	三、四	一	一	六	六、三三四	三	三	三	一、六〇四	一〇一	四〇、二〇九
同 二年度	二五	三〇、三三三	三	四、〇七五	一	一	一三	三、五五三	一〇	六三	三	二〇	四九三	三八、七八九
同 三年度	三〇	三、二二二	二	七、七七七	一	一	一七	二、九八一	一〇	五五	七	六五	五六一、五五七	五五二
同 四年度	七〇	七、三二六	二四	八、二六五	一	一	三六	四、五四三	三	三三	一	八〇四	五五三	九五、四七六
同 五年度	一九	五、五五〇	一四	一、五、三五	一	一	四四	一、九、三五	六	二、四三	四	二、七七六	八〇	一九五、三三九
同 六年度	五	六、五五〇	五	四、五、三三	一	一	八五	三、三三二	四	八、三九七	一	八三	一、八六	五三、三六二
同 七年度	四	一、六、八九	三	三、六九	一	一	一〇三	三、五五一	一四	八四〇	五	五、〇〇	五、一八〇	四六六、〇〇〇
同 八年度	四	一、四、〇六	一〇	二、七九	二	一	四九	二、三三	一	一、一四四	一	一、一六	一、三八六	二〇八、六八五
同 九年度	四	六、三三	一	一、一四	三	三、六三	四八	五、一七	一	一、一四	七	一、一五	二、三三四	六、四八三
同 十年度	五	二、七、三八	一	一	一	一	七	一、六、五五	一	一	一	一、一六	一、三三五	四五、八四四
同 十一年度	四	一、二、三三	一	一、〇、〇六	二	二、七六	一、六六	二、一四七	三	一、九六八	四	一、〇、九五	二、九、二九	一、三、七、〇〇四

同十二年度	六五三	七、四〇〇	二九二、三三五 ^町	一、九二二、五五 ^町	一〇六	六、一〇三	一、五一一	一八、四〇九	六四四	五、二〇〇	二、五五	三、二七〇	二、二七二、九二二、三三五 ^町	二、〇三五、八八五 ^町
同十三年度	一、五八六	八、九八五	三四、三八一 ^町	一、五九二、二二〇	一一〇	一五二、一一、四〇〇	二五、三五五	六三五	四、七九九	三二	一、一四四	三四、三八二、二五三、四三三 ^町	一、七九六、三六六 ^町	一、七九六、三六六 ^町
同十四年度	一、六四六	一、九四七	四三三、一五五 ^町	二、三九六、三六六 ^町	三七六	四、三三三	一、〇五〇	一三、八七七	四六六	一三、一四九	三八	一四、二七〇	四、七五五	三、三三六、一四四 ^町
同十五年度	一、五一一	一、三四七	三、三〇六 ^町	七、七九一 ^町	一、六四四、〇七一	八四四	二五、九〇五	三、〇〇一	一三、六六七	九五九	一三、三三八	四〇八	四、五七七	三、〇七九 ^町

備考 一、大正八年度以前は國有林のみなり

備考 一、大正八年度以前は國有林のみなり

一、大正九年及十年度は國有及民有林のみなり

右の統計を見るに、大正十五年中の森林被害高は總計一、七九六、二六一圓にして、その中、病虫害が約八割を占め、火災一割五分、其他五分の割合である。火災は無願火入に原因する度数が最も多いが、被害面積は反對に林内焚火に因る七、一六六町歩が最大である。被害額では煙草の吸殻に原因する二三、五八八圓が群を抜き、焚火による一五、二二七圓これに亞ぎ、森林以外よりの延焼によるものもまた相當の額に上つてゐる。これ等森林火災の最も多いのは江原道の四三四件、面積一〇、一一六町歩であるが、損害額は却つて慶尙南道の二〇、九九六圓が多く、營林署管内、黃海道に順で最も少いのは忠清南北道である。而して江原道、平安南北道に於て、森林火災の度数及び被害面積の著しく大きいのは、彼の火田民の火入によるものが大部分を占めて居る爲めである。朝鮮に於ける火田の整理は、獨り林政上重要な問題たるに止まらず、治水上、社會上實に容易ならざる問題であるから、速かにその根本的解決策を講ずることが大切である。（調査資料第十五輯）

（火田の現狀に參照）

朝鮮の森林被害の殆んど大部分は病蟲害によるものである。而して森林に大害を與ふる病菌、害蟲はその種類頗る多いが、就中被害の廣汎で、且つ激甚なのは、マツケムシである。その被害は咸鏡北道、咸鏡南道の一部を除いて殆んど全鮮各道に亘るが、最も大きいのは京畿道である。即ち被害面積七一、五九八町は、これに亞ぐ忠清南道の五九、八四〇町を遙かに抜き、その被害高は各道總計の約四割の四五四、一四一圓に達してゐる。その他の病蟲害はマツノクロムシ、マツノミドリバチであるが、その被害は殆んど慶尙北道に限られ被害高も僅少である。

その他の被害は病蟲害、火災による損害に比して極めて少なく、水害による二五、九〇五圓、盜伐一三、六九七圓、誤伐一三、三三八圓が稍大なるものである。盜伐は營林署管内が最も多く、慶尙南道が最も少なく、誤伐は營林署、忠清北道、京畿道の順で、風害は忠清南北道、水害は平安北道が全部を占め、雪害、盜採は營林署、及び慶尙北道に限られてゐる。即ち病蟲害及び火災以外の被害では平安北道が最も多く、總計の約三割五分の二一、五三九圓を占め、營林署の一六、〇八六圓がこれに亞ぎ約二割五分、最も少いのが慶尙南道の四一圓である。

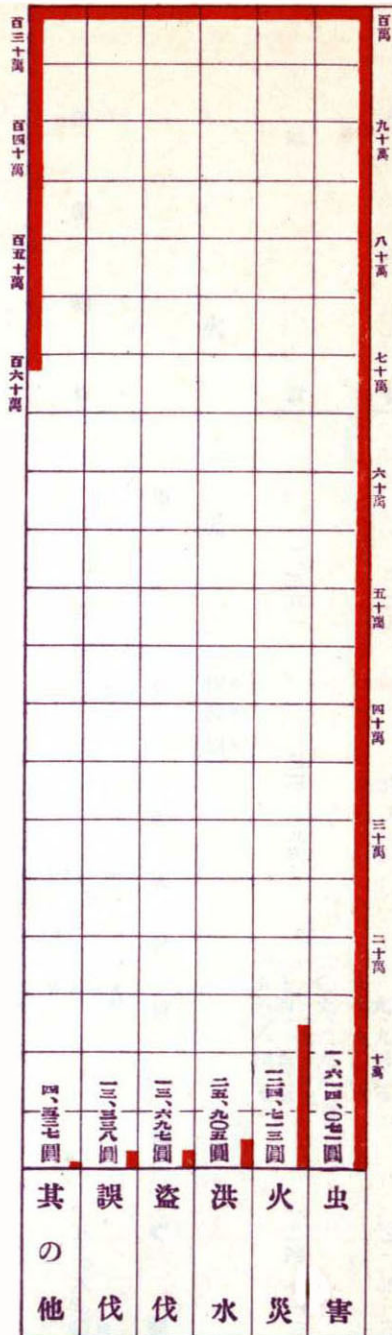
大正十五年
昭和元年

森林被害調

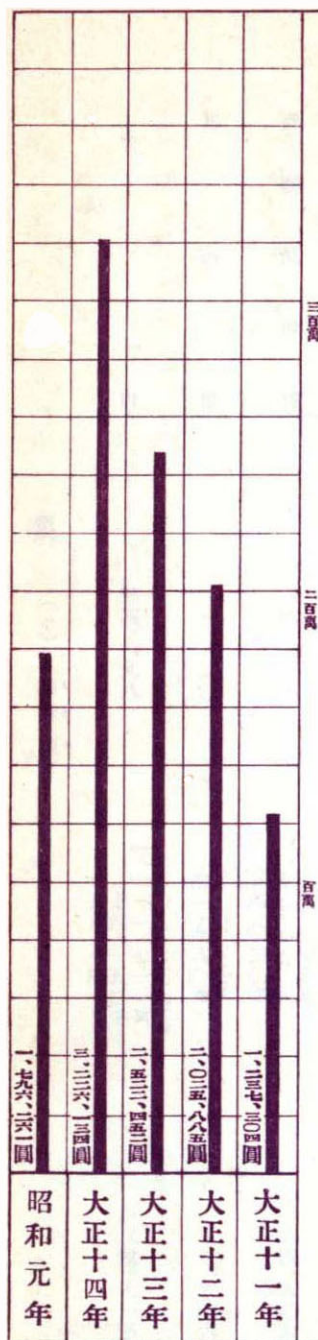
火 災 (イ) (原・因・別)

度	數	面	積	燒	失	材	積	損	害	額
放火に因るもの	八九		七二三町		六、三〇五	三、四二八	六、三〇五		四、二五八	四、二五八
					一、二五〇	五〇〇	一、二五〇			

昭和元年度種類別森林被害高



最近五箇年間森林被害比較



火	其の		針葉樹		針葉樹		其の		火
	計	他	林	林	林	林	計	他	
災	三四、八九八	一、七二〇	一四、三一八	一二、八五一	六、〇〇九	六、〇〇九	一、三六一	一二八	災
(ハ)(地方別)									(ロ)(樹林別)
面									面
積									積
焼									焼
失									失
材									材
積									積
損									損
害									害
額									額
	二、一〇九、二九八尺縮 一、七四一、七一八尺縮 一、五八八、四一四一尺縮	二、一九五 四、一九八〇尺縮	八、四〇、二五〇尺縮 三、九〇、五八五尺縮 五、四〇、三〇〇尺縮	七、五〇、〇六一尺縮 一、七五、五三〇〇尺縮 三、四三、四〇〇尺縮	四六、八一、一二尺縮 三、六一、一六尺縮 三二、一六二尺縮	六、〇〇九	三、四、八九八	六、八一	三、五、八六六尺縮 七、一、一七五尺縮 五、九、九四〇尺縮
	一二四、七二三	一、五〇六	六四、五三六	二五、七八一	三三、八九〇	六、〇〇九	一二四、七二三	三二、四二三	一二四、七二三

道	名	被面積	被害價額	同上の中 驅除面積	幼蟲	繭	成蟲	卵	計	驅除經費	從事人員	
京畿道	清北道	七元	一、二〇〇	—	—	—	—	—	九四四三	四八五〇	四	
忠清南道	清北道	七元	一、二〇〇	—	—	—	—	—	三七三	三七	三	
全羅北道	清北道	一〇〇	一、〇〇〇	—	—	—	—	—	一、六三八	五二元	五	
全羅南道	清北道	一五	九六	—	—	—	—	—	一、〇〇三	一一四三	一	
慶尙北道	清北道	五五	九九一	三〇〇〇	—	—	—	—	二四、六七三	六、一二一	六	
慶尙南道	清北道	五一	八八二	—	—	—	—	—	一四、九六三	五、九九九	五	
黃海道	清北道	六六	二、五六八	—	—	—	—	—	一七、〇〇九	二〇、九九六	二〇	
平安南道	清北道	一〇八	七四六	八六一五	—	—	—	—	一七、八六一	一八、五五〇	一八	
平安北道	清北道	八八	三〇九	—	—	—	—	—	二、三三〇	五、七五五	五	
江原道	清北道	四四	一〇、二二六	—	—	—	—	—	三、三五五	六二元	六	
咸鏡南道	清北道	五五	三、五五八	二六、四五〇	—	—	—	—	三、三三一	一六、六五九	一六	
咸鏡北道	清北道	六七	六、〇九八	六、八五〇	—	—	—	—	六、〇七七	二八、三五四	二八	
營林署	清北道	三六	六、四〇〇	八八、二六二	—	—	—	—	三、六二五	二〇、分三	二〇	
總計		一、三六一	三六、八九八	一、二二、七二	—	—	—	—	二九、九〇〇	三四、四三四	三四	
				(イ) マツケムシ	—	—	—	—	一八、八四二	七四、五三	二九、二九六	二四、七三

道	名	被害面積	被害價額	同上の中 驅除面積	幼蟲	成蟲	卵	計	驅除經費	従事人員
忠清	北道	四、五九	一、五七、二九三	二、四、五三	一、五七、四七五	三、二、八四	三、三、九三	一、〇五一	一九四、一〇一	五、〇〇五
忠清	南道	五九、八四〇	一、五、七九七	二、四、四八	三、三、三二二	一、〇、八九三	五、〇、九四	八、七四	五、五、三〇三	三、三八三
全羅	北道	一、一六五	六、五五〇	八〇四	一、五、一七三	一	一	一五、一三七	三八	一、〇九
全羅	南道	五〇、五五四	一、八、八六八	二、五、二二	一、〇三、七〇	四、八、八九	一、一、五二	一、六六七	一、五、八六八	三、三、七五
慶尙	北道	一、四、二七八	六、〇、四四	一、二、二五	一、〇〇、三三四	二、七、六四	三、七	九	一、六、五〇四	八、九七五
慶尙	南道	三、八〇三	三、三、三三	一、八、九六	一、九、四四〇	三、三、二四四	一、五、五九一	一、九、四四三	五、九、七七	三、〇、四九
黃海	道	四九、三七九	一、四、七四五	四、二、八五	一、九、九七	四、二、九七	四、七七八	一、三、九	二、四、三三一	九、八、〇三
平安	南道	一〇、六三九	四、九、九四	九、〇、〇〇	二、〇、五九九	一、三、五五	二、八、二六八	六、三、四五	五、〇、六六八	四、八、五五
平安	北道	三〇、一三五	九、五、二六六	二、九、〇元	九、六、八三	六、六、六二	三、二、六三	四八	一、七、一〇三	八、六、六
江原	道	一、七三	一、四、〇〇〇	一七	二、一、一〇〇	四、〇、〇〇	三、五〇	一六、四七〇	一、七、五〇	二、二七
咸鏡	南道	二三五	一	三三五	四、四、四〇	一〇	一	四、四、六〇	一〇〇	一、三、四
替林	署	二、五九八	一、四、六〇	二、五九八	八、一、二	九、三	一、九三	九、九	九、三、四一	三、一、九五
總計		三、〇、一、六、一、六、三、七、五	三、五、九、三、一、七、一、五、〇、九	七、三、五、六八	三、三、三、四六七	五、一、一〇元	一、八、三、三、三、三、三	三、八、四、四、七	一、二、七、七、八、八	

病 蟲 害 (ロ) (マツノクロムシ、マツノミドリバチ)

道	名	被害面積	被害價額	同上の中 驅除面積	幼蟲	成蟲	卵	計	驅除經費	従事人員
慶尙	北道	(マツノクロムシ) 一〇〇町 (マツノミドリバチ) 三	二、四〇 八〇	一〇〇町 三	七、五 一、五	一	一	七、五 一、五	一 二〇	三、九 一〇一
總計		三、〇三	三、一〇	一〇三	三、〇	一	一	三、〇 三、〇	三〇	四、〇

第三章 災害の程度

病 蟲 害 (一)(總計)

道 名	被害面積	被害價額	同上の中 驅除面積	驅 除 數 量				驅除經費	従事人員
				幼 蟲	繭	成 蟲	卵		
京 畿 道	七、五九八町	四四、一四一円	六、九六六町	六四、五九升	一五、八八升	七五、四六八升	三、三四四升	六六、一九九円	一四三、七四〇人
忠 清 北 道	四、五九	一四、二九三	二四、五四三	一五、四七三	三、一六四	三、二九三	一、〇四一	一九四、一〇一	五、三〇五
忠 清 南 道	五、八四〇	一五、七七七	二四、一四八	三六、三二一	一〇、八九三	五〇、三九四	八、七四四	五三、三〇四	六三、三八三
全 羅 北 道	一、一六五	六、三五〇	八四、一五、一三七、二六	—	—	—	—	一五、三七、二三八	一、五〇九
全 羅 南 道	五〇、五五四	一八、八六八	二五、一二三	一〇、七三〇	四、八八九	二、五七二	一、六六七	一五、八七八	三、七七七
慶 尙 北 道	一四、四八一	六、七七七	二、四八八	一〇、五四四	二七、六四四	三九七	七九	二八、七三四	八、九九五
慶 尙 南 道	三、八〇三	三三、三三三	一八、九六六	一九、四四〇	二二、一四三	一九五、五九一	一九、四四三	五九、七七	三〇、四七九
黃 海 道	四、三七九	一四、七九五	四、二一五	一九、九九七	四、一九七	四、七七八	一、三五九	二四、三三一	九五、八〇三
平 安 南 道	一〇、六九	四、九九四	九、〇〇〇	二〇、五八九	一三、五五六	二六、二六八	六、三四五	三五〇、六五八	四、八五五
平 安 北 道	三〇、三三五	九五、三六六	二九、〇〇九	六、八八三	六、九二一	三、二六三	四八	一七、一〇四	八、六二六
江 原 道	一、七三	一四、〇〇〇	一、七	一、一〇〇	四、〇一〇	三、五〇	—	一、四七〇	一、七五〇
咸 鏡 南 道	三三五	—	三三五	四、四四〇	一〇	—	—	四、四四〇	一〇〇
警 林 署	二、五九八	一、四六〇	二、五九八	八、一五	九三	一九三	八九	九、三四一	三、一九五
總 計	三〇、五九一	一、二四、〇一七	二五、七四五	一七、一八五、三九	七三、五八八	三三、四四七	五、二〇九、二八、三三、四九三	三八、四七七	一、二七、八、三三

道 名	盗			伐			誤			伐			風			害		
	件数	數量	面積	件数	數量	面積	件数	數量	面積	件数	數量	面積	件数	數量	面積	件数	數量	面積
京 畿 道	三二	六〇 尺	二六	一六	七〇 尺	八	一	七〇 尺	二五	一	七〇 尺	八	一	七〇 尺	二五	一	七〇 尺	二五
忠 清 北 道	三三	四八	五九	五九	二〇五	六四	一〇	三九	三〇	一〇	三九	八	一〇	三九	八	一〇	三九	八
忠 清 南 道	七四	八〇	七	二〇	一六	六	八	二六	三	二六	三	五	八	二七	三	一三	二六	四
全 羅 北 道	二	六	一	一四	四	二	五	二〇	一	二	一	二〇	一	二〇	一	二	一	二〇
全 羅 南 道	二五	四九	六三	二七	二〇	二〇	一	二〇	三	一	二〇	一	一	二〇	一	一	二〇	一
慶 尙 北 道	三〇	一七九	四四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
慶 尙 南 道	二	三	一〇	六	七	四	一	六	一	一	六	一	一	六	一	一	六	一
黃 海 道	二四	二六 尺	三三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
平 安 南 道	二〇	一四	五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
平 安 北 道	三	二〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
江 原 道	一五	二七〇	二九	四	二六	四	三	二六	一四	三	二六	六	三	二六	六	三	二六	六
咸 鏡 南 道	二	一四 尺	三	一	七	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
咸 鏡 北 道	七	五七 尺	一四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
營 林 署	六	八、九一	六六	六	二、四五	七、二三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
總 計	三、〇〇一	二、二九 尺	二、四八	九五	三、二八	四、三七	一、三六	四、三七	一、三六	一、三六	四、三七	一、三六	一、三六	四、三七	一、三六	一、三六	四、三七	一、三六

朝鮮の災害

1110

雜 (その二)

道名	水害	雪害	盗害	採
	件数 数量 面積 價額	件数 数量 面積 價額	件数 数量 面積 價額	件数 数量 面積 價額

忠清北道	三 八 三 六町 一、〇〇四			
------	----------------------------	--	--	--

忠清南道	七六 一、二六 一五 二、四七			
------	--------------------------	--	--	--

慶尙北道	八 四二 二 六元	一 四 二五町 五元	四 三本 五元	
------	--------------------	---------------------	---------------	--

平安北道	四 八、〇〇 三〇 三、四九			
------	-------------------------	--	--	--

江原道	七 一、五〇 六 八〇			
-----	----------------------	--	--	--

營林署	一〇 三三一 八 一〇〇	二 九 六 六元	六 一、〇〇 七九〇 三、五九	六 三 二〇
-----	-----------------------	-------------------	--------------------------	--------------

總計	八四 二、二二〇 六九 二、五九五	三 二八 三三 二六	四 一、一〇 七九〇 三、五九	六 三 二〇
----	----------------------------	---------------------	--------------------------	--------------

雜 (その三)

道名	其他	總計
	件数 数量 面積 價額	件数 数量 面積 價額

京畿道		四九七 八、〇四 一七 三、五〇四
-----	--	----------------------------

忠清北道		八四七 二、九四 七七 五、〇二
------	--	---------------------------

忠清南道		一、四八 二、七〇 三三 四、四九
------	--	----------------------------

全羅北道		三〇 一七六 二 六六
------	--	----------------------

全羅南道		一六八 六元 八五 七〇
------	--	-----------------------

慶尙北道	—	—	—	—	三四四	一九三 三本	一〇六	二〇〇
慶尙南道	—	—	—	—	八	一〇	一四	四一
黄海道	—	—	—	—	二四	二、二七費 二〇東	三三	五
平安南道	三	八種 六〇費 二〇東	六町	六町	三三	八、三〇 二〇東	五九	三四六
平安北道	—	—	—	—	六	—	三二	二、五九
江原道	二五	二、五〇〇	四三	六六八	四四七	六、四三四 二六四	七二	三、〇三
咸鏡南道	一	三	—	五	二四	一、五〇本 五三	三	二六
咸鏡北道	—	—	—	—	一七	五七四東	一四	六七
營林署	一〇	三、三〇〇 八〇費 二、〇〇東	三七	二、四三	一二七九	二五、三七六東 五九三本 一、一九費 八種車	四、八九八	一六、〇六
總計	三五	一四、六八 八〇費 二、一〇東	四六	三、六二	五、六三	六五、四九九 二六、二〇東 七、〇二六本 三、四七九費 八種車	八九二	五七、四七七

船舶遭難

海運業及び漁業の發達に伴ひ、暴風、濃霧等の襲來に依る船舶の遭難件數は、近年漸増の傾向がある。最近數年間を通じ船舶の遭難は大正十四年が筆頭でその隻數二、七〇二隻に上り、大正十二年の暴風による被害七〇四隻の三倍餘に當つて居る。これは同年九月上旬の大暴風雨によるもので、その

被害は主として慶尙南道、慶尙北道、全羅南道の沿岸地方に亘つて居る。船舶の遭難に基く人命被害の最も大なりしは、大正十二年の死亡五百二十四人、負傷百九十三人、行方不明四百四十九人、合計一千百六十六人である。これは主として南鮮地方の沿海に於て、暴風の爲め漁船の遭難したる結果で、或る地方の如きはこれが爲め内地人通漁者の殆んど全滅したやうな悲惨事を見たのである。この朝鮮近海は濃霧の發生多きを以て、その爲めに船舶の衝突、暗礁乗上等による被害も亦尠くない。されば船舶の遭難を成るべく最小の程度に止めんとせば、燈臺、望樓、浮標等の設備を充分ならしめ、警報速知、海難救済等の機關を完全ならしむることが急務である。

遭難船舶

年次	汽船	帆船		その他 の船舶	合計	乗組人員中			
		噸數	石數			死亡	負傷	行方不明	合計
明治四十三年	八	二	二四	四七	五〇	三三	七	一〇五	一四五
同 四十四年	八	六	三七	二六	七六	二八	二	三九	五七
大正元年	六	六	二二	一九	四九	二七	六	二六	五七
同 二年	六	四	二二	三四	五九	一八	六	一五	三九
同 三年	六	九	三三	五〇	八八	一九	五	三四	五九
同 四年	六	四	一五	三四	五九	二五	三	二五	五三
同 五年	三	四	一四	二五	四六	二五	六	三五	六六

第三章 災害の程度	大正十四年										累年比較									
	江 原 道	平 安 北 道	平 安 南 道	黄 海 道	慶 尙 南 道	慶 尙 北 道	全 羅 南 道	全 羅 北 道	忠 清 南 道	忠 清 北 道	京 畿 道	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	一	一	一	二	六	四	七	五	一	一	一	一〇二	四	七	三	二〇	七	四〇	九	六
	四	一	三	三	四	九	一	一	一	一	八	一五	九	一五	九	四	二	六	六	六
	三	一〇	三	八	四七	一〇	二〇	二	二	五	六	六四	一四	一七	二	七	三六	一三	一五	一五
	六	六	三	七	六四	五七	二四	一七	四	二	四	一、七五	三六	七四	六五	二五	七四	三九	二五	二五
	八	一八	九	二〇	一、〇五	七六	二七	二四	一六	七	元	二、七三	五九	一、〇三	九八〇	四〇二	一、二八	五八	四九	四九
	三	三	五	三	五	一〇	三	二	一	一	一	一四	二五	五	三三	九	二七〇	一五	一四	一四
一三三	三	一	一	二	六	七	九	一	一	一	一	八	八	一五	六	二	四	五	六	六
	五	一	一	八	二〇	二	三	一	六	一	二	二	二	四	一	八	三五	二九	二〇	二〇
	二	四	五	三	一〇	四	七	二	七	一	三	三	四	一、一六	六	二	七	四	四	四

朝鮮の災害

一三四

	咸鏡南道	咸鏡北道	合計
一	八	二	一〇一
二	四	六	一五
三	九	六	一六
四	二	三〇	一、七五
五	一〇	二七	二、〇三
六	七	一九	一、五四
七	一四	三	一六
八	三	三	二二
九	三	五	二四

旱害

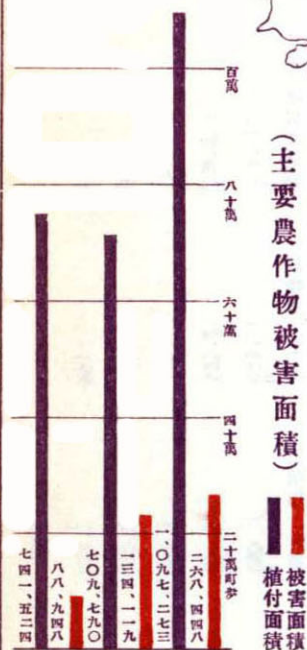
李朝時代に於ける水利灌漑の設備は極めて不完全にして、堤堰六千餘、淤二萬餘を有したるに拘らず、その殆んど全部が荒廢に歸して水利の用を爲さず、これが爲めに旱魃に際しては、農業上の被害は頗る激烈を極め、窮民山野に滿ち餓孚途に横はるの慘狀を呈したのである。此に於てか總督府設置以來、灌漑水利の便を計る爲め、地方廳の設計に基き、國庫補助、並に蒙利者の賦役を促して指導奨勵を加へたる結果、大正八年度迄に修築を加へたる堤堰一千五百箇所、淤四百四十箇所、その灌漑面積五萬一千町歩に達し、大正八年以後は地方廳に財源を移付し、地方廳をしてこれが助成に當らしめて居る。然しながら施政當時は、水利組合條例は發布せられて居たけれども、民度低き朝鮮農民の間には共同施設を爲すものがまだ多くなかつたのである。ところが、内地營農業者の漸次移住し、大規模の農事經營を計畫する者が増加すると共に、水利組合設立の機運が漸く動くに至つたので、大正六年に朝鮮水利組合令を發布して舊條例に代へたのである。けれども當時は調査設計が完全に行かず、經費も多額を要する等のことから、水利事業は甚だ不振の状態にあつた。そこで大正八年四月水利組

(積面害被稻水別道各)

積面付植
積面害被

大正十三年旱害主要農作物被害面積

(町步)



(主要農作物被害面積)

被害面積
植付面積

粟 大豆 水

豆 稻



合補助規程を制定し、事業の調査設計を政府に於て施行すると共に、工事費補助を國庫より下附することゝなつたのである。斯くて朝鮮の水利事業は大に進展し、昭和二年九月一日現在に於ては、水利組合數九十一箇所、組合蒙利面積十三萬五千四百七十三町歩、事業費合計八千二百九十餘萬圓を算するに至つたのであるが、昭和元年末に於ける朝鮮の畝のみの面積でも百五十七萬四千餘町歩に及ぶを見るときは、旱害の危険に暴露されて居る朝鮮の水田面積の如何に大なるかを想像するに難くあるまい。大正八年の旱害に就いては別項に於て説明するから、茲には近來の大被害たる大正十三年の旱害の状態を一瞥することゝした。即ちこれに據ると旱害面積は、水田二十六萬八千町歩、大豆二十三萬四千町歩、粟八萬八千町歩の多きに達し、水稻の被害は全羅北道最も甚だしく、京畿道、忠清南道これに亞いで居る。

大正十三年旱害被害面積

	作付面積	旱害面積				計
		七割以上減收	五割以上減收	三割以上減收	計	
京畿道	水	一七、八三三町	二、四三七町	二六、八三三町	五、九三三町	
	稻	二、六二二町	二、四三七町	二六、八三三町	五、九三三町	
	豆	四、五〇三町	一四、八四八町	三、八八四町	四三、三五五町	
	粟	三〇、九五四町	一、五八一町	三、四九三町	五、七五五町	
忠清北道	豆	一、九七四町	二、九七九町	四、八〇〇町	九、七三二町	
	粟	一六、三七七町	一、五八一町	一、三三三町	一、八八六町	
第三章	災害の程度					一三五

朝鮮の災害

忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尙北道	黃海道	江原道	平安南道
大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆
一五九、八八	一八八、二六九	一八八、二六九	一〇八、三六三	一七、四九八	一八、〇三五	一七、六四
四七、四八一	三三、三六八	三三、三六八	四〇、七六七	九〇、一九五	六六、六七三	五七、一〇三
一、七七一	一、八四三	一、八四三	一八、〇六七	一、九二〇	七九、三三四	一七、六四
一五、九九九	五〇、七五五	五〇、七五五	三七一	九三八	五	一、四四五
一、二九七	一、〇三五	一、〇三五	二、九七九	八、一三三	三、八〇八	五、一五四
六、八〇〇	一六、〇七五	一六、〇七五	二、四九九	二、三七七	五、五六	五、二〇二
六二	五、九四四	五、九四四	一〇	六、二七六	二、五五四	一、一九九
一九、九五四	三〇、四四〇	三〇、四四〇	一八、八二三	三、八四〇	二、五五四	三、九二二
二、七六〇	一五、八四四	一五、八四四	四、六四一	二、五五〇	二、五五四	一、四四五
三〇七	八七、三三二	八七、三三二	二、七五三	八、二二三	一八、〇一九	一、四四五
五三、三三三	三三、八五五	三三、八五五	四、六五五	九、三六三	三、〇七五	五、五四八
一五、九五四	五九	五九	七、四三八	八、二二三	一五、九〇四	六、五五五
三、七五三	三、七五三	三、七五三	二、七五三	八、二二三	一五、九〇四	六、五五五
一、九、八五八	一、九、八五八	一、九、八五八	一、九、八五八	一、九、八五八	一、九、八五八	一、九、八五八

一年に比し約四倍の増加を示してゐる。斯く被害額の増加率が件数の増加率に比し著しく大きくなつたのは、物價騰貴に因る見積額の増加にも基くが、概して朝鮮に於ける一般經濟力の發達を示すものであらう。

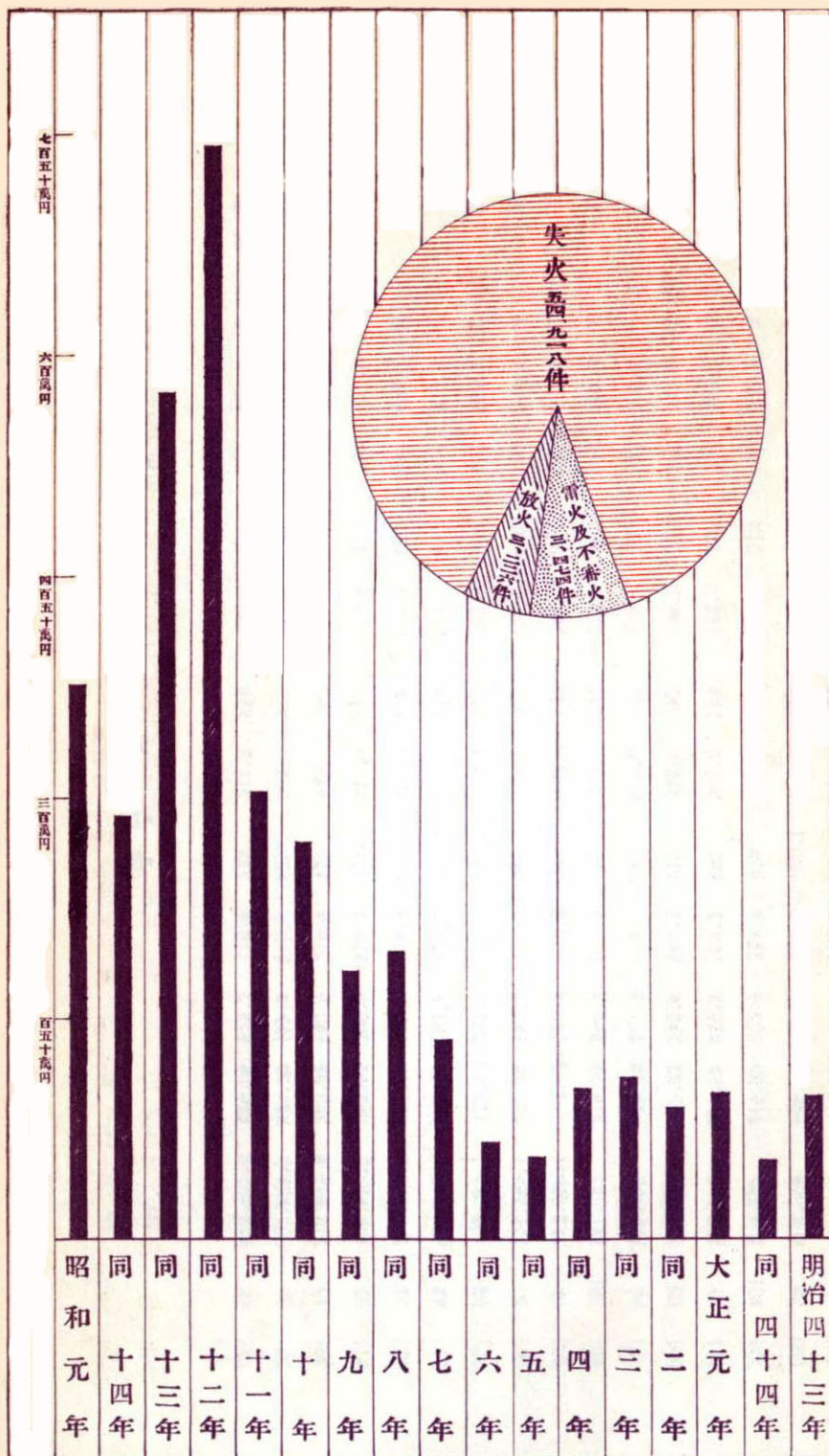
火災に因る大正十五年の全鮮總被害は件數三、二四五、被害額三、八二七、四六五圓で、一件當り一七九圓となつて居る。その中被害件數の多いのは、京畿道の五四三件、慶尙北道の三八二件、慶尙南道、江原道の順であるが、その被害額では全羅南道の一、〇〇三、六一一圓が群を抜き、一件當り四、二七〇圓の多額を示し、京畿道の六一二、九〇一圓、一件當り一、一二九圓がこれに亞いで居る。一年の中で最も火災件數の多いのは極寒時たる一、二月よりは寧ろ三、四月なのは注意すべきで五、六、七月と漸次減少し、八、九月が最も少く、十、十一、十二月と寒期に向ふに従ひ増加して居る。その原因は失火の三、二四五が殆んど大半で、その中温突の一、三四六が約四割を占め、竈の四一三、取灰の三八八の順である。温突の中では焚火に原因する四九四が筆頭で、煙突の四一三これに亞ぎ、朝鮮家屋がこれ等災害に對して頗る不完全なる事を示して居る。

自明治四十三年
至昭和元年 累年火災表 (種別)

年次	度數			上欄の内			火災に罹りし			死傷人員	
	失火	放火	雷火及不審火	延焼度數	不延焼度數	直ちに消止め	戸數	棟數	坪數(坪)	積額(圓)	死傷
明治四十三年	二、〇二	九	六	三三	一、九七		二、八三	?	二、七三	六三、三九	一五
昭和元年	二、二六	三	六	三三	一、九七		二、八三	?	二、七三	六三、三九	一五

火災による損害見積額比較及び火災原因別

(自明治四十三年至昭和元年)



同	四十四年	二、九七	一三二	八五	三、二〇五	五八	二、六五	三、一四八	?	三、六四七	五七、七四八	五	一七
大正	元年	四、三六	一五〇	二五七	四、七三三	九八	二、七三	一、〇三三	七、〇六	?	五八、七七	九七、五七	九
同	二年	四、〇〇	一六八	三六	四、五四四	九二	二、六五	九七	五、五四四	七、六〇	三三、七四	八四四、三三	一〇
同	三年	三、〇九	一三	二四	三、四四一	五六	二、〇八	八七	四、三三三	五、七四五	五、八八四	一〇、八八、三九	七
同	四年	三、三六	一〇四	二〇	三、七六一	四〇	二、四四	八八	四、三三七	五、四九六	四、六六二	一〇、四六、七六	六
同	五年	二、九〇	一九七	三四	三、三三一	三八	二、〇九七	八六	三、四二	四、一〇四	三、九四九	五八、八五	九
同	六年	三、五八	一三三	一七五	三、九八四	四七	二、六四	八九六	四、二二〇	五、二七四	三、九七六	六五、二一、四四	一〇
同	七年	三、三〇	一六	一七	三、五八	四四	二、三六	七四八	四、〇三	五、〇四八	四、〇四六	一、三四〇、四四	九
同	八年	二、七〇	一〇	三七	三、三三	五三	一、九六	七三	四、一〇	五、六九七	五、四九	一、九七九、一八	六
同	九年	二、一七	一七	二九	二、四三	四七	一、七八	二九八	三、一三五	三、八九	三、八四一	一、八三、四〇	五
同	十年	三、一三	一九	二五	三、五九	五四	三、〇五		四、六四	五、六九	六〇、八三	二、六七九、三七	六
同	十一年	三、四七	一四	二四	三、八六	五七	二、五四	七二五	四、七二	五、八八	五〇、一五五	三、〇三、六四	四
同	十二年	三、二七	五元	二〇	三、六三〇	四四	二、三五	八八一	四、三八七	五、〇六	四九、四四〇	七、三八七、三三	三
同	十三年	四、一〇	三四	三四	四、六七	六三	二、九四七	九四七	五、七二六	七、〇七七	五九、二〇九	五七、五、三九	六
同	十四年	三、四〇	二五七	二五	三、八九一	六八	二、四〇八	八六五	五、三三七	五、八九	五六、三四五	二、九三、六〇〇	五
昭和	元年	三、四五	一八六	三三	三、六五七	五五	二、二六	九四六	五、三八一	六、六六七	七、七三三	三、八三七、四四	一六〇

大正十五年
昭和元年

火 災

表 (道・別)

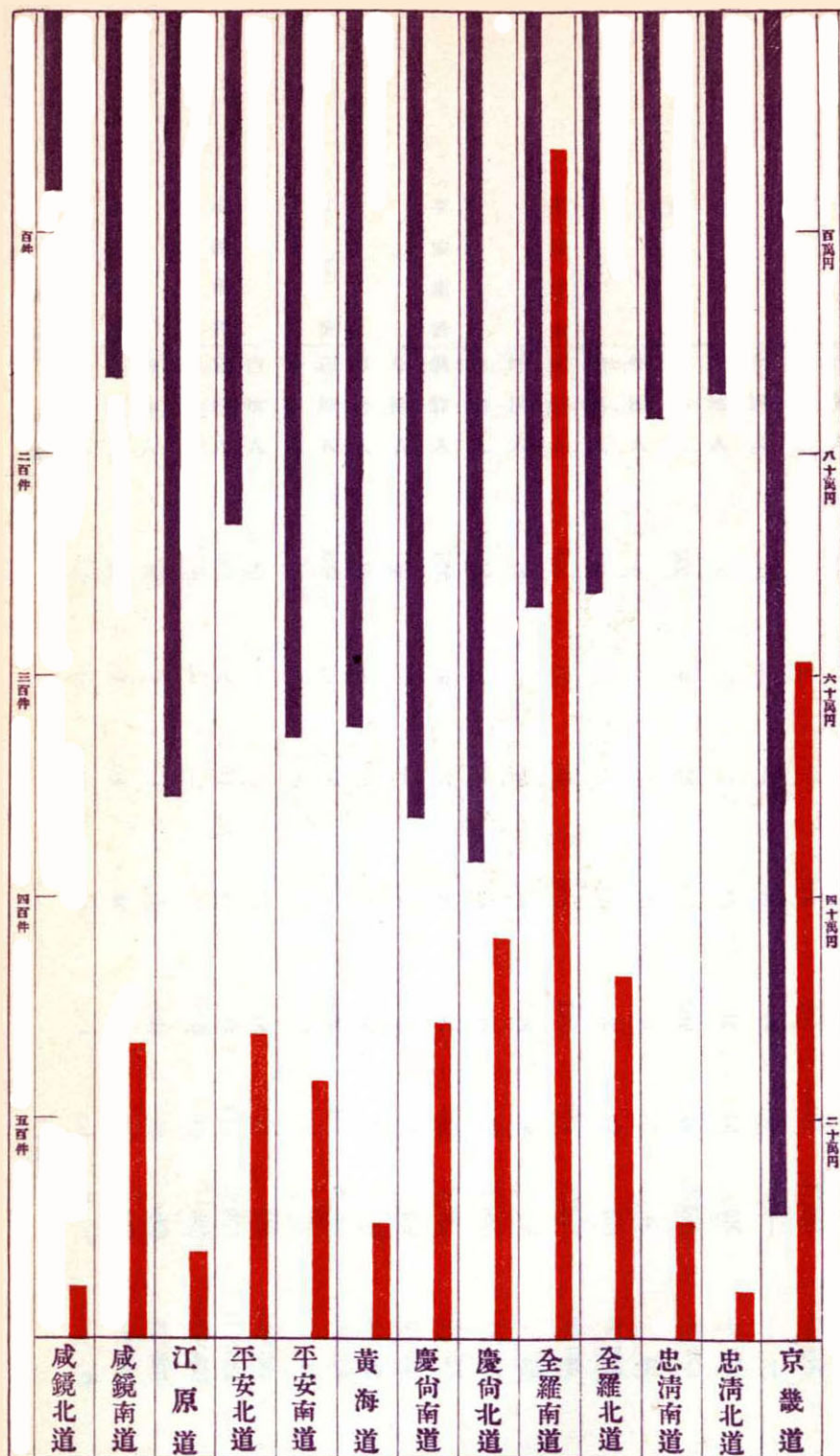
朝鮮の災害

一四〇

道別種別	度			火災に罹りし		
	失火	放火	雷火及不審火	戸數棟數坪數	損害見積額	
京畿道	三九三	七	二	四〇	五、三三	四、三五三
内地人	三	七	二五	二〇	七	一、七三
朝鮮人	三九〇	—	—	三六	四〇	四、三三
外國人	—	—	—	七	四	五、一七
忠清北道	一七	一	—	八	一〇	一、七九七
内地人	四	—	—	—	—	—
朝鮮人	一七	一	—	三五	三〇	一、四六六
外國人	—	—	—	四	五	三、五三
忠清南道	一八	—	二	三六	三七	六、三六
内地人	四	—	—	—	—	—
朝鮮人	一四	—	—	一九〇	一九七	一、六四
外國人	—	—	—	五	五	一、〇
全羅北道	二七	二	六	四六〇	六八	三、六六
内地人	二七	二	二	四六〇	六八	三、六六
朝鮮人	二	—	—	五	五	三、六
外國人	—	—	—	五	五	四、五二五
全羅南道	二七	二	三	四六	六五	二、八六六
内地人	二七	二	三	四六	六五	二、八六六
朝鮮人	七	—	—	三	一六	七、五八
外國人	—	—	—	三	一六	三、三九七
慶尙北道	三六	一	二	四九	五七	四、四七
内地人	三六	一	二	四九	五七	四、四七
朝鮮人	—	—	—	—	—	—
外國人	—	—	—	—	—	—

火災による損害見積額及び火災件數道別 (大正十五年度) (昭和元年度)

損害見積額
火災件數



咸鏡北道			咸鏡南道			江原道			平安北道			平安南道			黃海道			慶尙南道		
外國人	朝鮮人	內地人	外國人	朝鮮人	內地人	外國人	朝鮮人	內地人	外國人	朝鮮人	內地人	外國人	朝鮮人	內地人	外國人	朝鮮人	內地人	外國人	朝鮮人	內地人
一	九	六	二	三三	二〇	二	三〇七	二	三	一八	六	五	三六	三	一	二四六	九	一	二六三	四
一	一	一	一	八	一	一	三	一	一	二五	一	一	元	一	一	五	一	一	二四	一
一	一	一	一	二	二	一	元	二	一	八	一	一	四	二	一	元	一	一	二〇	一
一	九	二〇	二	一五	三	二	三八	三	三	二二	一六	五	二九	三	二	三二	二〇	一	三六	四七
一	七一	三七	七	一八	一五	二	四四	一四	一四	二六	三六	五	四〇	六	二	四七	一四	一	六〇	八二
一	五	三七	一〇	二三	二〇	二	四九	二〇	五	四七	四七	五	五四	三五	二	六五	一九	一	八三	六五
一	四八七	五七七	五九〇	二七六三	六七〇	一〇	六,三六	三三七	一四,九一	一四,三三	一四,三三	七	三,四〇二	五三	一七	五四七六	三六	一	四,九九	八〇
五	七,四八九	四〇,四三三	一七,五〇〇	一一,三五五	一〇,三三七	一八	二九,〇七	四八,〇五四	五九,〇〇〇	一五九,三三	七,三二	一八,〇五六	一八八,〇五六	七六,四七七	四〇	七三,六八三	三三,九四五	一六六,二六	一九,四六	二九,四〇

一四三

大正十五年 火災表 (月別)													總計		
別種別													計		
月			月			月			月			外	朝	內	
國	鮮	地	國	鮮	地	國	鮮	地	國	鮮	地	國	鮮	地	
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	
五	五六〇	三五	六	五五三	四三	六	二九七	四五	六	三三三	四五	三	二八五	三三	
一	三	一	一	三	二	一	一五	一	一	二	二	一	一五	三	
一	三五	四	一	五二	六	一	一七	四	一	二	二	四	一五	三〇	
六	六七	三元	六	六六	五一	六	三元	四九	七	三六〇	四九	三	三、三六〇	三六六	
七	一、一三	六三	一〇	九六九	五五	二	四〇五	六九	三	五七	八五	七	四、七九二	五一五	
七	二、一〇	五九	二	一、一三五	五	二	四三	五四	二	五二九	六五	六〇	六、三三	四七四	
七	二、三三八	一、四八〇	四八	九四六	一、一五〇	一三	四、四〇	八二	四八	六、〇五四	二、五〇七	一、三五三	四、八九一	二、四四九	
二、二九三	五九五、五八八	一四七、二八九	一三、一六七	二七、一七三	一〇、九四	八、三五五	一〇、五五八	一四、六六	六六、〇五八	二〇五、七六	八六、六五八	一五三、四六四	一、五九七、二八六	二、〇七六、七二	

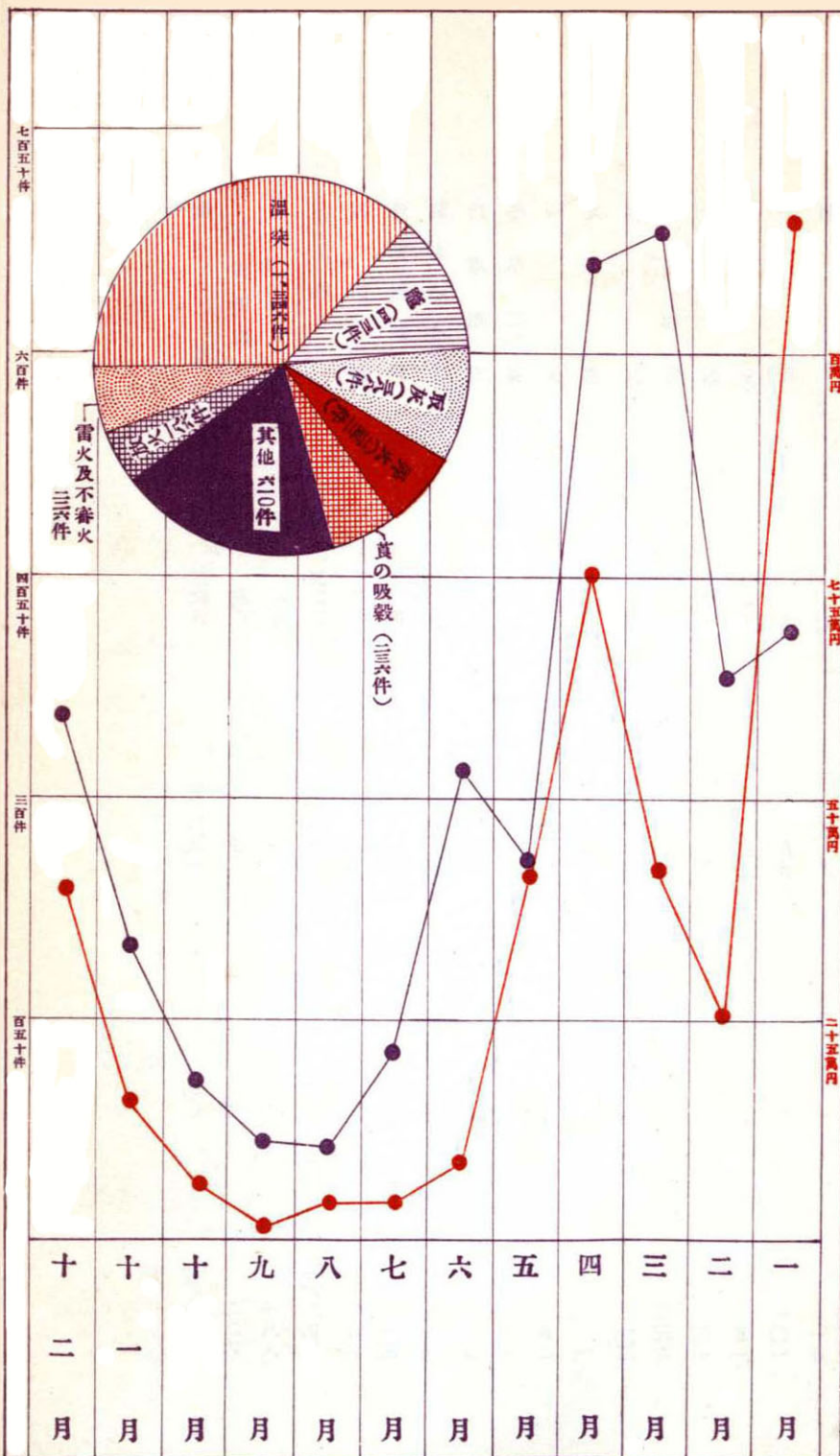
一四三

十			十			九			八			七			六			五		
一																				
外	月朝	內	外	月朝	內	外	月朝	內	外	月朝	內	外	月朝	內	外	月朝	內	外	月朝	內
國	鮮	地	國	鮮	地	國	鮮	地	國	鮮	地	國	鮮	地	國	鮮	地	國	鮮	地
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
一	一五〇	二六	一	五〇	七	一	四	二	一	四	九	一	二二	九	五	二四八	三三	三	一九五	元
	三	一		六	一		七			二	二		七			九	二		二	三
	八	一		五			二			二			六		二	一五	八		一四	五
一	一七〇	元	一	九	八		五	二	一	五	二	一	二四	九	七	二六二	三三	三	三〇	三七
一	一七	元	一	一〇一	二		五〇	二	一	七	三	一	二四	一〇	八	三三三	元	六	三一	七二
	二三	三〇	一	一〇四	一八		五	八		九	一〇	一	一六〇	九	七	四七	四四	四	四四〇	八五
一	一、四五九	四六六	一	六五五	二五三		三〇三	一五六	四	一、三五	二二	一	九四	九一	六四	五、〇三五	七八九	四六	三、三七七	一五、四三
四	六、五五五	六、五五五	二	三、七五五	三〇、六六六		四、七五五	一〇、九六六	四	一六、四四一	三三、九一〇	一〇五	二九、四八八	二、八八五	六、一〇三	四四、一四〇	四、五六五	三〇、一〇一	七四、六六六	三九、六〇〇

月別火災件數損害見積額及び火災原因別

(大正十五年
昭和元年度)

●火災件數
●損害見積額



總計	雷火及不審火	放火	其他	其計	製造所煙突	燐火を弄し	汽車煙突	鍛冶工場	弄火	火藥	消炭	其の吸殻	炬燵	燈火	焚火	爐灰	取灰
三六八	三〇	一五	三三三	三六	四	七	一	二	一九	一	五	三三	二六	一四	九	六	一二
三、二五一	一九二	一七三	二、八八六	三五	九	一〇四	三七	九	二二三	一	七	二〇二	五	三五	八九	八	三七五
四〇	四	一	三六	五	一	一	二	一	一	一	一	一	一	二	三	一	一
三、六五九	二二六	一八八	三、二四五	七六	一三	一一	三九	一一	二五二	一	一三	二三六	三一	五一	一〇一	一五	三八八

여 백

第四章 災害の影響

朝鮮に於ける各種自然災害の種類及び程度等は既に叙述したから、これによりて災害に基く損失は知ることが出来るが、災害に依りて財政上並に經濟上各方面に及ぼす影響は決して尠少でないのである。或は旱害の如き、或は水害の如き、その被害の激烈にして範圍の廣大なるものにありては、これが爲めに貿易、取引、物價、勞銀に影響を及ぼし、または移住出稼者の増加を來す等、その關係する所は頗る甚大である。然しながら殆んど年中行事の如くに繰り返さる、朝鮮の旱害及び水害に就き、これ等の微妙なる經濟的影響を一々茲に説明することは至難の業であるが、今試みに災害の影響中、比較の見易き數種の事例を擧げて概説しやうと思ふ。

荒地 地面積

災害に基く土地の荒廢は年々尠からざる面積に達するが、大正元年より同六年に至る六箇年間の調査では、大正六年の被害が最も多く、山崩十一萬一千餘結、押掘三十二萬九千餘結、覆砂三百九萬七千餘結、川成二百二十一萬一千餘結、海成四萬二千餘結、湖水成一萬七千餘結、其の他九十萬六千餘結、合計六百七十一萬六千餘結の荒地面積に上り、これに基く地稅收入の免除額は三萬七千四百八十

五圓に達して居る。その後は調査の方法を異にしたるも、災害に依りて荒地面積は年々増加の傾向あり、昭和元年に於ては、地稅施行地の荒地六萬七千五百六十三町步、この地稅免除額二十六萬三千九百四十五圓、市街地稅施行地の荒地九十一町步、この市街地稅免除額六百八十八圓に達して居る。

荒地 地 現 在

結

數

	山崩	押堀	覆砂	川成	海成	湖水成	其の他	合計	地稅額 免除額
大正元年	13,000 ^結	14,533 ^結	6,000 ^結	3,893 ^結	3,900 ^結	6,750 ^結	3,610 ^結	1,348,916 ^結	?
大正二年	18,533	24,543	5,599	2,552	9,398	2,666	2,747	1,044,578	10,433
大正三年	20,690	25,854	1,750,055	1,250,055	3,471	8,337	7,550,001	4,335,963	1,583
大正四年	5,733	10,510	2,241,300	1,666,693	5,300	11,899	9,540,006	5,107,553	2,049
大正五年	7,312	13,733	2,666,611	2,507,333	3,761	3,633	11,277,744	6,337,445	3,794
大正六年	12,144	3,993	3,507,000	2,221,548	4,000	17,912	9,066,532	6,766,841	3,785

荒地 地 現 在 (地稅令施行地)

	田	畓	埜(宅地)	池沼	雜種地	合計	地稅免除額
大正七年末	9,339 ^町	7,077 ^町	88 ^町	3 ^町	5,500 ^町	1,700,000 ^町	43,178 ^町
同 八年末	13,000	9,500	93	9	4,850	3,313	5,001
同 九年末	15,134	3,784	232	4	5,900	22,866	13,833
同 十年末	17,700	18,237	141	4	6,332	34,762	25,395

同	十一年末	二四、四八	二四、六一	一八〇	五	七六	五〇、〇六	二五、〇八一
同	十二年末	二六、三〇	二六、四二	二〇〇	五	一、〇〇七	五五、六六六	三〇、〇四八
同	十三年末	二七、六五	二七、六〇	二九四	五	九六	五二、五四九	三〇、七五八
同	十四年末	二五、七六	二六、四九	六三六	五	八四	四三、七四	二四、五五四
昭和元年末		二五、三二	二〇、三二	二七〇	四	九三	三七、五三	二五、九四三

荒地現在 (市街地稅令施行地)

大正七年末	田(畑)町三	番(田)町三	宅(宅地)町〇	合計	地稅免除額
同八年末	二	三	一	六	三
同九年末	二	一	一	三	二六
同十年末	四	一	〇	六	三
同十一年末	四	一	〇	六	四九
同十二年末	三	四	〇	七	七〇
同十三年末	二	三	〇	六	五
同十四年末	七	一〇	七	九四	六七一
昭和元年末	七	三	〇	九二	六八八

災害費、災害救済費

朝鮮總督府の災害費及び災害救済費として特別會計より支出した金額は過去十七年間に三千三百九

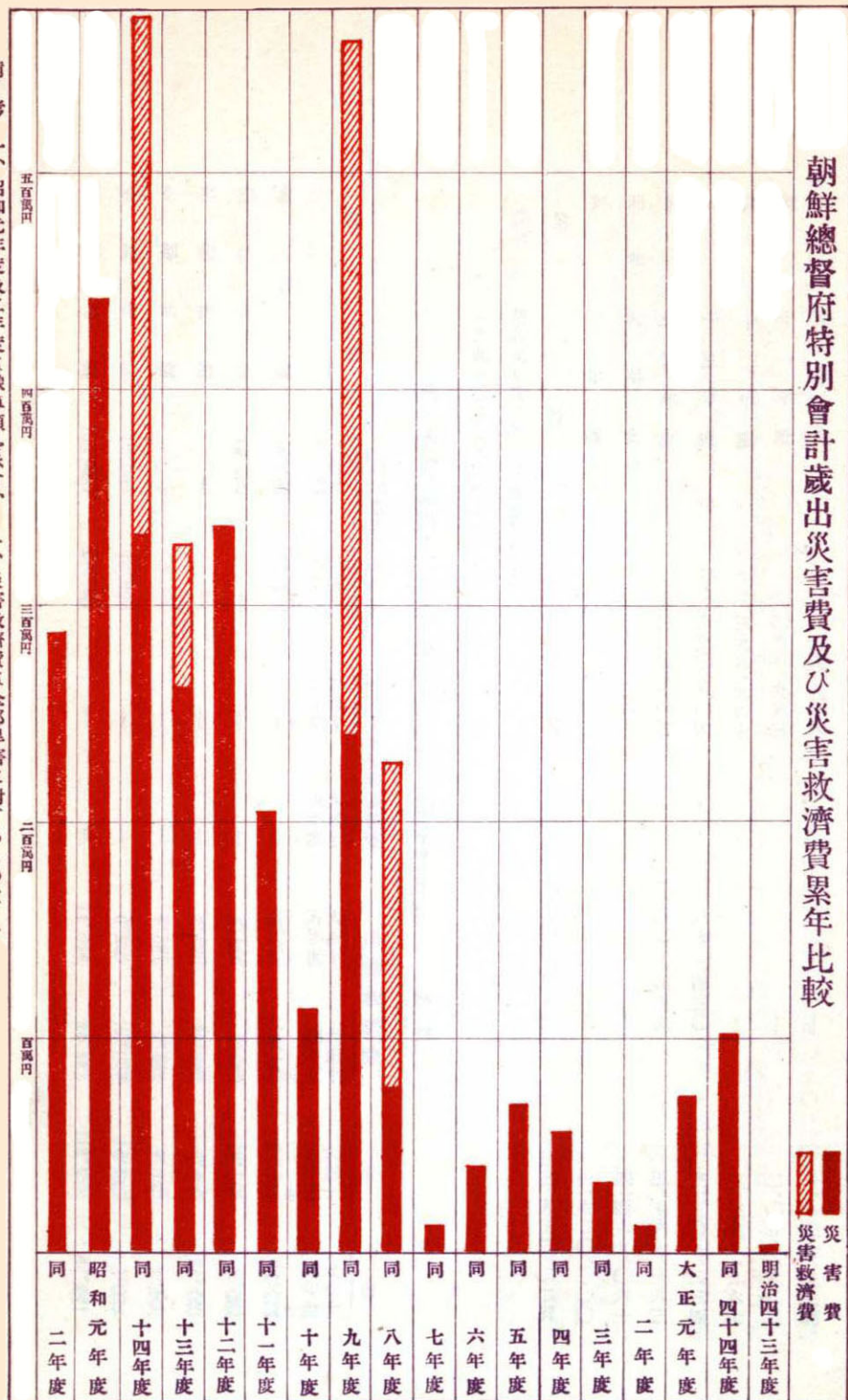
十三萬三千餘圓を算し、その毎年の支出額は明治四十三年の一萬三千圓に對し、大正十三年には三百倍に近い三百三十萬圓を支出し、更に大正十四年の大水害に當つては五百七十六萬圓の多額に上り、また災害復舊費、凶歉救濟費として道地方費に計上された額は、大正十四年に三十三萬四千圓、大正十五年に四十七萬六千圓にして、その中大部分は慶尙北道、江原道、京畿道の三道の支出に係るものである。

朝鮮總督府特別會計歲出災害費及災害救濟費累年比較

年 度 別	災 害 費	災害救濟費	合 計
明治四十三年度	一三、〇八六	一	一三、〇八六
同 四十四年度	一、〇一二、四八九	一	一、〇一二、四八九
大 正 元 年 度	七三四、九一九	一	七三四、九一九
同 二 年 度	一〇七、七六八	一	一〇七、七六八
同 三 年 度	三一四、八〇五	一	三一四、八〇五
同 四 年 度	五五一、四九〇	一	五五一、四九〇
同 五 年 度	六九七、〇七二	一	六九七、〇七二
同 六 年 度	三九五、一七九	一	三九五、一七九
同 七 年 度	一一九、一八三	一	一一九、一八三
同 八 年 度	六〇六、五〇四	一、六七七、八五一	二、二八四、三五五
同 九 年 度	二、四一九、八一七	三、二三五、六六〇	五、六五五、四七七

朝鮮總督府特別會計歲出災害費及び災害救濟費累年比較

災害費
災害救濟費



備考一、昭和元年度及二年度は豫算額を示す、

一、災害救濟費は全部旱害に對するものなり、

同	十	度	一、一三七、九七四	一、一三七、九七四
同	十	一年度	二、〇五八、九八三	二、〇五八、九八三
同	十	二年度	三、三九八、九六七	三、三九八、九六七
同	十	三年度	二、六三〇、八〇四	三、三〇一、二三四
同	十	四年度	三、三三九、七四四	五、七六一、一八三
昭	元	年度	四、四六九、〇六一	四、四六九、〇六一
同	二	年度	一、九二〇、〇〇〇	一、九二〇、〇〇〇
累	計		二五、九二七、八四五	三三、九三三、二二五

備考 一、昭和元年及二年度は豫算額を示す

一、災害救済費は全部旱害に對するものなり

道地方費歳出災害費及災害救済費二箇年度比較 (豫算)

道 名	道路橋梁災害復舊費		治下水災災害復舊費		凶歉救済費		合 計	
	大正十 五年度	大正十 四年度	大正十 五年度	大正十 四年度	大正十 五年度	大正十 四年度	大正十 五年度	大正十 四年度
京 畿 道	二五、八七〇	四、四六六	—	—	三、八六九	一五、二六〇	元、七九元	九、六六六
忠 清 北 道	10,000	—	—	—	五、一九九	四、二五〇	一五、一九九	四、二五〇
忠 清 南 道	—	—	—	—	八、九〇〇	四、八八〇	八、九〇〇	四、八八〇
全 羅 北 道	—	—	—	—	七、〇六一	五、四四三	七、〇六一	五、四四三
全 羅 南 道	10,000	10,000	—	—	九、四四〇	二〇、三三七	一九、四四〇	三〇、三三七
慶 尙 北 道	10,740	4,000	—	—	二、三六二	五九、四九一	二四、六〇三	九、四九一

朝鮮の災害

一五二

慶尚南道	10,000	10,000	—	—	八、四八六	八、二一〇	一八、四三六	一八、二二〇
黄海道	—	—	—	—	六、一〇五	六、三二八	六、一〇五	六、三二八
平安南道	10,000	五、〇〇〇	—	—	五、五七五	五、八四四	一五、六六七	二、一四三
平安北道	—	—	—	—	六、〇七五	五、七五五	六、〇七五	五、七五五
江原道	一七、〇〇〇	—	—	—	六、三六八	六、〇〇〇	一八、三三六	六、〇〇〇
咸鏡南道	三、一三〇	—	—	—	五、〇九二	五、〇九二	三、一三三	五、〇九二
咸鏡北道	—	—	—	—	三、一二五	三、六八八	三、一二五	三、六八八
總計	三〇、一三〇	二六、四三六	—	—	六、五〇七	二〇、六六四	四七、九八八	三三、二四二

地方土木費

地方土木費には毎年災害による事業費として總事業費の一割内外を計上してゐるが、その額は明治四十四年には十五萬圓であつたものが、通常事業費の膨脹と共に昭和元年には二百四十五萬五千餘圓に上り、この間に於ける増加率は實に十五倍を超ゆる有様である。またその總事業費に對する災害事業費の百分比を見るに、明治四十四年には七パーセントであつたものが、昭和元年には十三パーセントに達し、金額、比率とも漸次増加の傾向にある。災害事業費中最も多額を占むるものは道事業に係るものゝ約五割にして、通常費の三割に當り、これに亞ぐは水利組合事業、面事業に係る災害事業費であるが、大正十三年の如きは、私人の災害事業費も百五十餘萬圓の多きに上つたのである。最近數

年間を通じ最も多額の災害事業費を支出せるは、大正十四年の水害に係る二百九十二萬餘圓で、總事業費の二割に近く、その中約百九萬圓は水利組合事業として支出したものである。

更に昭和元年度の各道別災害事業費では、その最も多き京畿道の七十四萬九千餘圓は總災害事業費の約三割を占め、最も少いのは咸鏡北道の六千圓で、總事業費の僅か八厘に過ぎない。

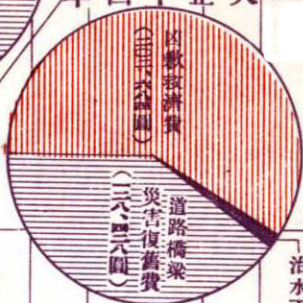
여 백

道地方費歳出災害費及び災害救済費(豫算二箇年(大正十四年度(昭和元年度)比較

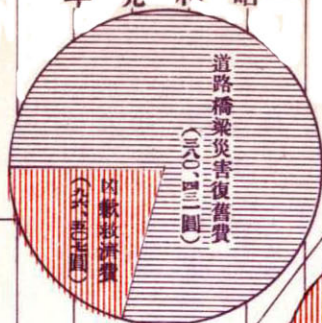
大正十四年度
昭和元年度

治水下水災害復舊費
(1,100圓)

大正十四年



昭和元年



十八萬圓
十五萬圓
十二萬圓
九萬圓
六萬圓
三萬圓

威鏡北道
威鏡南道
江原道
平安北道
平安南道
黃海道
慶尙南道
慶尙北道
全羅南道
全羅北道
忠清南道
忠清北道
京畿道

地方土木費
(單位圓)

[illegible]

여 백

地方土木費國庫補助

地方土木費に對する國庫よりの補助金は明治四十四年の二十九萬圓より、昭和元年には百五萬圓に達し、その内容も市街整理を始め、河川改修、堤防、護岸、導水堤、防波堤、防沙堤等の多きに亘つてゐる。昭和元年度に於て道路、橋梁に對して補助支出せる額は十九萬二千圓で總額の約一割八分、河川改修、堤防、護岸に對する補助は二十九萬二千圓で總額の約二割八分、防波堤、防沙堤、導水堤に對する補助は九萬圓で總額の約一割に當つてゐる。

地方土木費國庫補助金

	延長及箇所數	設計工費	地方費負擔額	府費	面費	國庫補助金
明治四十四年度	道 橋 梁 路 橋 梁 筒所 渡船場 棧橋 筒所	一五、七六 一、九一	五〇九、五七四 二七、一三三	—	—	三、二一、一〇一
大正元年度	道 橋 梁 路 橋 梁 筒所 護堤 筒所	一五、六六 三、三三	五三、六六二 二五、二六五	—	—	二九、九七七
同 二年度	道 橋 梁 路 橋 梁 筒所 護堤 筒所	三三、六八 一、〇〇	五八、六〇〇 二二、六〇〇	—	—	四〇、〇〇〇
同 三年度	道 橋 梁 路 橋 梁 筒所 堤 筒所	一六、一七 六、三三	四七、〇三 一、一七、〇三	—	—	四〇、〇〇〇

同	同	同	同	同	同	同	大正
十一年度	十年度	九年度	八年度	七年度	六年度	五年度	四年度
防導水路護堤道 流水面 堤堰門上岸防路 箇所	護下橋道 岸水梁路 箇所	護堤下橋道 岸防水梁路 箇所	下側護橋道 溝石岸梁路 箇所	下橋道 水梁路 箇所	河護堤橋道 川改岸防梁路 箇所	橋道 梁路 箇所	河橋道 川改修梁路 箇所
三、四、五 一、七、八 一、六、九 一、七、九 一、六、二	一、〇、八、五 三、三、九 八、八、六	三、三、六、四 三、三、二、六 三、三、二、五 一、三、七、五	三、三、七、四 三、三、七、〇 一、〇、二、五 一、〇、一、三、一	一、〇、四、八 一、〇、四、八 四、八、二、四	五、八、七 四、六、六 四、六、六 四、六、六 五、八、七	二、六、二、七 二、六、二、七 四、六、二、八	一、三、三、六 一、三、三、六 一、〇、〇、〇
一、〇、四、二、二	八、八、七、八	一、三、三、〇、二	七、六、〇、三	五、五、五、五	三、〇、四、〇	三、五、一、五〇	四、六、〇、〇
二、九、五、六	七、五、三、七	三、二、八、九	八、七、三、六、四	三、五、一、二〇	七、九、八、七	二、八、一、五〇	一、四、九、〇、〇
二、六、七、〇、〇	二、九、五、二	一、三、六、六、〇	一、六、八、四、四	—	—	—	—
一、〇、三、五	—	—	—	—	—	—	—
五、七、六、〇〇	四、六、八、〇	九、三、七、二	五、三、七、〇	三、〇、九、〇	一、五、〇、六、五	三、七、〇、〇〇	五、〇、〇、〇〇

一五九

[illegible]

[illegible]

損害保險

朝鮮の損害保險は火災保險、海上保險、運送保險の三種であるが、朝鮮に於ける災害の影響を知らんと欲せば、これ等保險の支拂狀況をもまた看過することは出来ない。鮮内に於ける大正二年の損害保險の營業を見るに、會社數二十、その支店代理店數は百八十、年末現在契約高三千百五十九萬三千餘圓、支拂保險金五萬三千餘圓に過ぎざりしものが、昭和元年には社數五十八、支店代理店數千百五十九に激増し、年末現在契約高三億九千六百十六萬二千餘圓、支拂保險金二百十五萬三千餘圓に達し新契約高も二萬七千件、四千七百七十萬圓より、二十三萬三千件、七億五千六百八十萬圓に増加してゐる。これ等損害保險は大部分火災保險で、昭和元年について見るも、支店出張所數八百九十三に及び總數千百五十九の約八割を占め、その年末現在契約高三億七千九百五十萬九千餘圓に達し頗る活動してゐるが、これ等保險の利用者は殆んど内地人に限られ、朝鮮人は極めて一少部分に過ぎないのは注目すべきことである。

損害保險

支店支店
出張所及
代理店數

新契約高

條件ノ成就ヲ他ノ事出ニ俟
リ消滅又ハ解除シタル契約高

年末現在契約高

險收
入保
料

險仕
拂保
金保

深金ノ外
契約ニ依リ仕
拂ヒタル金額

同 大正二年(〇社)	一八〇	二七、六三三	四七、七六、三四	四、二二五	九、六〇、五九	一九、四五五	三、五九九、九七	一七九、八四七	五〇、七五
同 三年(四社)	二六六	六五、六三七	八一、六三三、九六六	五九、三八八	六八、〇四、三三	一四、一八〇	三三、九四〇、九〇	二六六、〇八	六八、二六
同 四年(三社)	三三〇	七〇、〇九	九八、一八、四八〇	七、六五〇	一〇一、〇〇〇、三三	一三、八五	三四、八三九、四八二	四〇二、六六	二五七、八七一
同 五年(六社)	七三〇	七三、三三〇	一〇七、六六〇、九七	六六、三三二	一〇〇、三六六、八四〇	一六、六三三	四、四九、四〇七	三四八、三八	七六五、六三〇
同 六年(六社)	四四七	八五、一六	一六〇、三九二、五五〇	八三、七九	一三六、三三三、一〇四	一九、四三	五五、四四、四三六	四二七、〇四〇	三五二、二八五
同 七年(四社)	四五七	七、七九	一九二、三三四、七三	四四、九一	一七〇、二七、一九六	二五、〇〇七	六九、七八、九九九	五九五、三六	四二六、一一
同 八年(九社)	四九四	八五、三五二	二五九、三九、一八〇	七六、七五	二二五、九六、二二六	三〇、一六九	二二、三三、一八〇	一、〇三二、八四三	一六七、五〇七
同 九年(五九社)	六三八	七三、〇七	三九七、〇四四、九〇七	七三、四四二	三九七、四九四、四七五	二九、三三九	一四三、八四一、六四	一、一九四、二〇	二九一、八九三
同 十年(六社)	六七三	二二、七五五	三三三、一四九、三八	九二、三七	三〇〇、〇四二、一七八	五五、四四	一七九、五二、四三三	一一、二九八、七五	一、五四、四九
同 十一年(六社)	六六六	八七、二四一	二〇三、七〇、九六八	七七、三五	一七三、八五、九三三	六五、〇九二	二〇九、〇〇〇、四六	九、一三六、八〇	九九〇、三九
同 十二年(七九社)	六二五	一五、七七五	三八三、三九、八三七	二六、三七	四三、五六、九七九	四九、九八八	一九五、九六八、四七	一、九八一、九四	八三八、〇六五
同 十三年(五社)	八二九	一六九、一四	五二八、一三九、〇六	一五四、二六	四九八、五九八、八三	四四、五八四	一九〇、一八、〇八	二、二〇二、六五五	五、四七四、九六六
同 十四年(九社)	一、〇三	二四七、一一三	八三三、九六六、〇四	一八五、二二	七三〇、五三三、七七八	二七、七〇	三六、四七、三三	四、八三二、〇四	二、四六七、九四四
同 昭和元年(五九社)	一、一五九	三三三、八三	七五八、八三三、三九九	二二六、三三	七二〇、〇九、七五七	一四三、二二	三九九、六三三、九九	五、〇〇九、五五	二、一五三、二七八

種
類
別
(昭和元年)

動
産

內地人	五四、八五一	三三、八四〇、八〇九	四三、三三二	一九〇、九三三、三三三	四七、〇〇八	三四四、四三〇、〇四	二、六五五、五七	四三七、一九六	二、七五五
朝鮮人	六、三三九	三三、九五一、六〇〇	三、五九七	三、六三三、三六四	五、四四三	一六、四四九、〇二三	一八、〇〇四	一〇七、一四七	—
外國人	二、四九七	一三、六五五、八五	一、九五五	三三、三四、九〇〇	一、六三三	一一、四九五、一六七	一、五五八	四三三	—
計	六三、七七三	三三〇、四三三、九四	五〇、七四四	三三九、九五、八六六	五四、六四四	一六二、四五五、一九四	二、六七二、七九	五四四、七五六	二、七五五

火災保險

八五三 不動産

内地人	朝鮮人	外國人	計
六〇、五七	二、二九〇	一、三三五	七、七二〇
一四、二二、八六三	四二、二四、〇〇一	九、九七〇、七七	二二〇、三六八、一八〇
五、二二三	九、一四一	一、〇〇五	六二、三三九
一三、四、九二、一七	三、四、五、五五五	九、九、九、三九四	一、六、三、三、八、二、六
六、三、三、四	二、三、五、四六	一、二、九〇	八、三、三、〇〇
一、六、三、三、七	四〇、三、三、三三	二、一、八、五、〇三三	二七、〇、九、七、七
一、七、五、五、五三	一〇、一、七、七	四〇、八、七	八、六、九、五三
七、七、六、九	八〇、四、七	一、三、七	一八、九、三

計

運送保險 三

内地人	朝鮮人	外國人	計
五、七、八	六、九、九	八、五	二、七、九二
八、四、二、二、四六	七、二、六、八〇四	九、一、五五	一、五、三、九、八、二、〇五
五、六、九	六、八、四一	七、九	二、二、六、九
八、二、八、〇、二、七三	七、二、三、四、〇、九	八、〇、〇五	一、五、四、七、三、四、七
三、九	二、九、八	七	五、四
八、八、二、七五	一、二、七、一、六四	六、二、〇〇	二、〇、七、三、九
九、三、七	九、二、〇	七、五	一、〇、八、一、二
五、七、五	四、〇、一	三、七	一、六、二、一〇

貨物

内地人	朝鮮人	外國人	計
六、四、四四	一、六、五、四四	三七	八、三、三、元
一三、四、六、八、九三	一、八、三、四、六、一	四、〇、九、三、三六	一、四、八、三、三、元〇
七、二、六、七	一、八、六、六	一、六、九	九、二、七、四
一、〇、〇、九、六、八	一、七、九、九、六、四	四、四、一、七、〇三	一、五、四、六、三、三、六
四、六、七	一、七、〇	三	六、四、四四
九、元、四、三三	四、八、五、一、二六	二、二、〇〇	一、四、二、五、三、八
二、六、二、六、六	二、六、七、六	三、八、六	二、九、三、三、八
一、六、一、六、七	一、六、七、九	六、七	二、八、八、九、五

海上保險

三四 船體

内地人	朝鮮人	外國人	計
二、五五	一八	—	二、五五
七、九、〇、五〇	三、九、六、〇〇	—	八、八、八、五〇
三、三	一三	—	二、四、五
七、八、四、〇〇	三、九、六、〇〇	—	八、二、〇、〇〇〇
三、三	一七	—	三、三
二、五、五、五〇	三、七、〇、〇〇	—	六、二、五、五〇
三、八、四、七	一、五、一、二	—	五、三、五、九
三、七、四、三	三、七、六、〇〇	—	七、五、〇、三

第四章

災害の影響

災害と貧困者

計		計	
内地人	六六、六八九	二四三、〇七、九四三	七、四九九
朝鮮人	一六、五五三	一八、四三三、七六一	一八、七八一
外國人	三七一	四〇六九、三六六	一、六〇〇
計	八三、六二三	一四、六二二、〇四〇	九一、九九九
内地人	一八七、八五五	五七〇、三六九、二〇〇	一七五、六四二
朝鮮人	四一、七六〇	一五八、七五八、七六六	三八、三六〇
外國人	四二三八	二七、七〇四、四四六	四、七〇〇
計	二三〇、八三九	七五八、八二三、三九六	二二六、七四二

各種の自然災害に依りて多數の貧困者を出したことは、災害の歴史を繙くに於ては、一目瞭然たるものがあるが、由來朝鮮に於ては一般に富の程度低く、平素に於ても貧困者數極めて多く、生活資源の貯蓄無き爲め、一朝災害の發生に際しては、多數の人民は忽ちに糊口に窮し、實にその慘狀眼もあてられざるものあり、殊に旱害、水害等の頻々として襲來する爲めに、一層貧困者の増加を促す傾向がある。而してこれ等の貧困者は、災害の如き非常事變に對しては、生活上最先に窮況に陥り、何等かの保護救済を要する階級であるから、災害の影響を考察せんとせば、先づ貧困者の分布を見て置くことが肝要である。

古來、朝鮮に於ける貧困者の生活程度は極めて低く、農民に在りても窮農若くは火田民の如きは、端境季節に入ると、粗悪なる穀食すら爲し得ずして、野生の木の實、草の根などを食し（拙稿「朝鮮の物産」中の救荒植物の項参照）甚だしきは或る地方に於て土を喰ふ者さへある。されば乞食の數の多いことも驚くべきもので、殊に京城の如き大都市の目貫の場所に、みすばらしき乞食の蟬集せる様は、市街の各所及び近傍に散在せる土幕生活者の多いこと、共に、人生の悲哀であり且つ文明の汚辱である。最近の調査に據ると、朝鮮全土に於ける細民は四十萬八千四百二十二世帯、人口百八十六萬人、窮民は七萬三千五百十五世帯人口二十九萬五千六百二十人に達し、總戸數に對する細民及び窮民の割合は、世帯數に於て一三%、人口數に於て一一%を占めて居る。尙ほこの外に一萬六十六人の乞食が居るのであるから、朝鮮に於ける防貧救貧施設は、社會政策上重要な問題である。

細民窮民及び乞食調（道別） 昭和元年末調

道名	種別	細民			窮民			合計			總戸口數に對する率	乞食數
		世帯數	男	女	世帯數	男	女	世帯數	男	女		
京畿道		12,191	110,128	126,783	6,633	14,777	13,737	18,823	126,835	108,309	3.81%	8,800
忠清北道		2,747	48,177	49,631	3,260	6,390	6,047	9,637	54,567	55,733	1.48%	2,890
忠清南道		4,032	85,560	86,766	4,435	19,177	18,044	8,731	141,687	109,900	2.03%	6,250
全羅北道		7,636	161,155	167,561	8,433	17,453	16,466	23,967	191,557	197,144	2.17%	12,060

全羅南道	四、五〇九	一〇、九六六	六、六六六	一九、七四九	九、二四〇	一八、一四〇	一七、五〇四	三五、八四四	五、六三三	二二、三六六	二四、一七七	二五、九三三	三三、一〇〇	一九、一四七
慶尙北道	四、一六六	九、五五五	六、四四九	一七、〇〇四	九、九五五	一八、六六〇	一八、六六六	三〇、五五五	五、〇八七	二二、四四五	一〇、五一五	二六、五〇〇	二六、九三三	九三、二五三
慶尙南道	三、六五五	八、七六七	八、〇〇三	一六、六四四	七、七六六	一三、四三三	一三、七五四	二七、一七七	四、〇五五	九、〇九五	九三、七五五	一八、六五五	二一、一	九三、一四三
黃海道	三、八八六	七、七九九	七、五九〇	一五、七四九	四、二五四	九、〇三四	八、五八四	一七、六六六	六、〇八二	八、八七三	八、五七四	一七、五七七	二二、三	二九、〇
平安南道	三、九〇一	九、九六六	四、七〇三	九、九六六	二、九四五	五、八五五	五、三三三	二一、〇六六	二四、八四六	五、七七三	五、三三三	一〇、〇〇四	一〇、六	八七
平安北道	二、六〇九	七、六九九	六、七〇〇	一四、七九九	二、五九〇	六、三三三	五、四九六	二、七六八	三、二九九	七、八七二	七、五九六	一三、四四七	三、一	一〇、八
江原道	四、五五五	八、六六七	六、〇三三	一四、一八〇	六、三三三	一四、六三三	一三、四六六	二六、〇七〇	四二、八四六	一〇、〇七九	九、一四七	一九、二五〇	二六、五	一四、四
咸鏡南道	二、八八六	五、〇〇七	五、〇八九	一三、八四六	三、三三三	六、九三五	六、三三七	一三、三三三	二四、〇九	五、九四三	五、三三三	二七、一五六	二〇、〇	八、三
咸鏡北道	四、六九三	二、一七六	一、九三三	三、二五五	五、四九	八、三	八、九一	一、七三三	五、三三四	一、九九〇	二、八八八	三、八八	四、九	三、八
總計	四八、四三三	六、〇〇九	八、六六六	一、八六六	七、五五五	一五、一五九	一四、四〇一	二九、五五五	四八、九七七	一、二四、五八八	一、〇、八三三	一、五、六六〇	三三、〇	二、〇、〇〇六

備考

本調査は凡そ左記標準に基き且つ廣く居住の状態、世帯の構成、職業の種類等より生活の實狀を觀察して之を計上せり

- 一、細民は生活上窮迫を告ぐるの狀態に在るも必ずしも他人の救護を受くるの程度に至らず辛うじて生計を営み得るものを謂ふ
- 一、窮民は生活上窮迫を告げ緊急何等かの救済を要するの狀態にある者を謂ふ
- 一、乞食は諸處を浮浪徘徊して自己及び其の家族の爲め未知の人に對し貧困を訴へて常業的に救助を乞ふものを謂ふ

即ち各道に就いて總人口に對する細民及び窮民の割合を見ると、忠清南道の一七・一が第一位を占め、これに亞ぐは全羅北道と江原道の一四・四であり、その最も少きは咸鏡北道の三・八及び咸鏡南道の八・三である。また乞食の數は慶尙北道の二千二百九十二人が最も多く、これに亞ぐは慶尙南道の一千七百四十三人であるが、江原道を除けば概して經濟狀態の發達した南鮮地方に貧困者が多く、そ

の進歩の遅れて居る北鮮地方には貧困者の少いことを示し、前者に貧富の懸隔が漸く著しく、後者に未だその傾向の濃厚に現はれざることを物語つて居る。朝鮮に於ける人口の職業別分類を見るに、總人口の約八割は農業に従事して居る關係上、貧困者の大部分が農業者であることは言を俟たない。されば旱害、水害等の災害に依り生活上直接に最も打撃を受けるものはこれ等の貧困者にして、災害に基く彼等の窮狀は言語に盡し難きものがある。

細民窮民及び乞食調 (各警察署管内別) 昭和元年末調

別	細民				窮民				合				乞食
	世帯		人		世帯		人		世帯		人		
	男	女	計	口	男	女	計	口	男	女	計	口	
	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	
計	四三、四九	一〇三、二〇八	九四、七三	一六六、八四四	六、六三三	一四、七七	二、四七三	三八、二〇〇	四九、九二	二六、八五	一〇八、三七	三、四〇四	八、四四
本町	五	二〇	一〇〇	二二〇	—	—	—	—	五	二〇	一〇〇	二二〇	四
鍾路	一八二	四七	四二五	八三三	五	四八	五三	一〇一	二五	四六	七一	九三	七
東大門	一、五三	三、二八	三、〇七三	六、一九〇	二〇	三八	三三	七二	一九	四六	三、四六	六、八二	四
西大門	一、六〇	三、九二	三、四四	七、三五五	一九	五九	七八〇	一、〇八一	四、三三	三、八〇	八、二五	三	
龍山	二、六六	四、九三	三、九七九	八、八九三	一〇四	一九	一六〇	三五九	二、四七〇	五、二二	四、三九	九、二五	二七
仁川	一、七五	三、七四	三、四四三	七、二二七	一〇	二七	二〇五	四〇〇	一、八七七	四、〇〇	三、六六	七、六四七	三
開城	三、二五	八、五三	八、四四六	一六、五八	一九	三七	三七五	七二〇	三、〇五	八、四九	八、八九	一七、三六	四〇
水原	五、三九	一三、六四	一三、六八四	二六、五八	六八	一、六〇	一、五三〇	三、一九〇	五、九九	一五、三四	二九、七六	一六、二八	一六

京畿道

永登浦	一七九	五、三〇〇	四、六五五	九、九九五	一四一	三〇三	三九	五七	一、五二〇	五、三三三	五、二二一	一〇、六四四	一
平澤	一三八二	三、五〇〇	三、七七一	六、八〇二	三三	七四五	六〇〇	一、四五五	一、六九七	四、四五五	三、九三二	八、〇〇七	元
安城	二〇〇三	四、八八八	四、九九五	九、八八三	—	—	—	—	—	四、八八八	四、九九五	九、八八三	一五
江華	一、〇二二	二、七七一	二、〇四〇	四、三三三	一五六	二四八	四九六	一、二七七	二、五〇〇	二、五〇〇	四、〇八八	四、〇八八	八
金浦	七〇六	一、五五八	九三三	二、四八一	二六二	五三三	六〇三	一、一九六	九六八	二、一四一	一、五五八	三、六七七	三〇
龍仁	一、五九五	四、二七八	三、八四四	七、九八二	四八三	一、二六八	一、〇三六	二、二〇六	二、〇七七	五、三四六	四、八四二	一〇、一八八	二一
驪州	二、四三六	三、四九八	二、四三三	五、九〇〇	五四八	一、五九九	一、四四五	三、〇三四	二、九七四	五、〇六八	三、八六六	八、九三四	二二
楊州	二、九六六	七、四一七	七、〇九八	一四、五〇六	五五五	一、一〇〇	一、〇四五	二、一四五	三、五七七	八、五七七	八、一三四	一六、六五一	二六
加平	九四三	二、三三三	二、〇〇七	四、一四〇	二四三	五七五	五三	一、〇九六	一、一八六	二、七七八	二、五三八	五、三六六	二〇
廣州	四、〇八五	一〇、三七四	九、八八九	三〇、二三三	七六三	一、六五五	一、四七七	三、〇八二	四、八四七	二二、〇〇九	二二、二六六	三三、三三五	二三
坡州	七〇	二六	一三	二六四	三五	七三	五五	一三七	一〇五	一九八	一九三	五九一	一三
利川	二、〇三三	三、二二三	三、〇三三	六、一五七	六〇〇	一、二六六	一、二五二	二、二五二	二、六四三	四、二四八	四、一六〇	八、四〇八	五三
抱川	一、〇六七	二、六二五	二、〇九五	四、七二〇	一八四	五〇四	四五五	九九九	一、一五一	三、二一九	二、五五〇	五、六六九	二六
漣川	三、〇二二	六、六六二	六、三三八	一三、〇〇〇	三三三	七四	六五一	一、六六五	三、三四四	七、四四六	六、九九九	一四、三九五	五八
長湍	一、八六六	四、一九九	三、九四六	八、一四五	六四	七五	八八	一、六三	一、八九〇	四、二七四	四、〇三四	八、三〇八	六
楊平	九元	二、四四六	二、〇六八	四、三三四	四七	一、〇二二	八二	一、八三三	一、三六六	三、四六七	二、八八〇	六、三四七	—
計	二〇、四七四	四八、一七七	四四、六六六	九三、八五三	三、一八〇	六、三九〇	六、〇四七	二二、四三七	三三、七五四	五四、五六七	五〇、七三三	一〇五、二九〇	二八九
清州	四、九五三	一三、四六六	一二、五〇八	二六、〇〇四	八五五	一、九四九	一、八三三	三、七九二	五、八七七	一五、四四五	一四、三三一	二九、七六六	五五
報恩	一、六二二	三、七六七	三、六六八	七、四四五	三七一	七九二	七六六	一、五九八	二、〇三三	四、五五九	四、四三四	八、九三三	一〇
沃川	一、六二二	三、八三五	三、六四三	七、四七六	三二	六六七	六四三	一、三〇九	一、九三三	四、五〇二	四、二八五	八、六六七	二五

忠清北道

永同	一、三〇〇	二、八四四	二、六二八	五、四八二	三〇〇	四、八八	四、四九	九七	一、六〇〇	三、三三二	三、〇六七	六、五九九	元
鎮川	一、〇六四	三、二〇〇	三、一五八	六、四二八	八	一七三	一五八	三三二	一、二四五	三、四四五	三、二六	六、七九	六四
槐山	二、二四三	五、三三五	四、八〇五	一〇、一四〇	四八	五八六	五三八	一、二四	二、七三	五、九二	五、四四三	一、二六四	四三
陰城	一、二六九	二、九四	二、六八八	五、五七三	三三	五二	五〇三	一、〇三	一、四九	三、四三三	三、一六〇	六、五九五	三
忠州	一、七三三	三、六八	三、三四	六、六三	三三	四五〇	三八六	八三六	一、九四	四、〇八八	三、七〇	七、九八	二四
堤川	二、八六	五、二六	四、七六	九、四七	一〇	三四七	二九八	六四五	三、〇六	五、五〇八	五、〇八四	一〇、九三	二八
丹陽	一、七〇七	三、八七	三、五〇八	七、三九五	二六	四七	四七五	九二	一、九二	四、三四	三、九三	八、三〇七	八
計	四〇、三四三	九五、五七〇	八六、七九六	二二、三六六	八、四三	一九、二二七	一八、一〇四	三七、三二	四八、七七一	一四、六六七	一〇、四九〇	二九、五九七	六五

忠清南道

公州	四、四九八	九、六三	八、九三	一八、六六四	一、五五	三、三八	三、四二	六、七九	六、〇四二	二、三九〇	二、五、五三	一〇、六四四	九
鳥致院	二、二二六	四、八九七	四、五三	九、四三〇	二八八	六八	五八六	一、三三	二、四二四	五、五五	五、一〇九	一〇、六四四	二八
大田	一、四八三	二、五〇	二、八八〇	五、四〇〇	二五四	四〇	四五六	八六八	一、七七	二、九三〇	三、三三八	六、一六八	一〇七
江景	二、九二四	五、七二	五、九〇九	一一、九一	三〇	三三	三三〇	四五一	三、〇四	六、〇〇	六、一三	一二、一四二	六
扶餘	四、〇五七	九、六六	九、〇四三	一八、八〇九	八〇七	一、六四五	一、四四四	三、〇八九	四、八四	一一、四二	一〇、四八七	二二、八九八	一〇
舒川	一、六六五	四、〇四	三、四三	七、四七八	五三	一、〇七	九八〇	二、〇六七	二、一九七	五、一三	四、四二四	九、五四五	三
青陽	二、五四五	六、四〇	五、四三	一一、八五三	三五三	八八七	八七	一、七〇四	二、八九七	七、三七	六、二四〇	一三、五五七	五一
保寧	一、二八二	三、六二	三、四四九	七、一四一	二八八	六八	五九五	一、二六	一、六七〇	四、三三〇	四、〇四四	八、四〇四	一八
洪城	二、五〇〇	六、一三	五、五八	一一、七三	三〇	六四	六四二	一一、九六	二、〇二	六、八七	六、一〇	一二、〇三七	三
禮山	三、〇三九	七、〇八	七、二五四	一四、五五二	三三	一、三四	一、二五四	二、六三	三、六六〇	八、六六	八、五〇八	一七、三〇〇	四〇
唐津	一、七八〇	四、一〇四	一、八九一	五、九九五	一七六	三四五	三四〇	六八五	一、九五六	四、四四九	二、二二	六、六八〇	二四
瑞山	七、四三	一八、六六	一七、〇三	三五、七〇八	二、七七	六、八八九	六、三八四	一三、二五三	九、八六九	二五、五五	二五、三九六	四八、六六一	七〇

朝鮮の災害

一七〇

全羅北道

溫陽	八、四四三	七、九〇九	一六、七三二	三三	七五	七九	一、四四	三、八五	九、二八	八、六六	一、八六	九	
天安	一、七〇六	四、〇〇五	三、五九	七、五三	一〇五	二六	二四	五〇	一、八三	四、三九	三、七三	八、〇三	三
計	三七、六七四	八六、一〇五	七、七九八	一六、八六五	八、四三	一七、四五一	一六、四六六	三、九八八	四、〇八七	一〇、五七	九、四三	一七、八〇一	一〇天
群山	一、六六	三、九七	二、七七	六、七七	九三	三三	一〇	二二	一、六九	四、二九	二、八七	七、〇〇	八
金州	三、二四八	七、四七	六、五七七	一三、九八四	八六四	一、九四	一、三九	三、三三	四、二二	九、三三	七、八六	一七、三三	二七
鎮安	一、六五五	四、〇七	三、七三	七、七五	二六六	五〇	四八	九七	二、三三	四、五八	四、三〇	八、五八	二六
錦山	二、三三〇	五、三三七	四、九七	一〇、一三四	三六〇	五九	五〇	一、〇九	二、六〇	五、七五	五、五七	二、三三	四
茂朱	一、二九	二、八〇〇	二、五三	五、三三	三七四	七九	七九	一、六〇	一、六三	三、五九	三、九一	六、八八	五
長水	一、五〇	三、五七	三、三〇	六、八八九	五〇	一、二九	一、五九	二、五七	二、一〇	四、七五	四、四一	九、二四	一六
任實	一、八三	四、一四	三、六四九	七、八三三	七五	一、五五	一、五二	三、三六	五、七九	五、一八	一〇、九九	五	
南原	三、三三	七、五三	六、二八四	一三、九六	一、七五	二、五三	二、七六	四、六二	四、四六	九、九〇	八、五二	一八、四七	五
淳昌	一、三三	二、四三	二、四〇	四、八三	一九	二七	三	六〇	一、三三	二、四〇	二、四三	四、八九	三
井邑	八、七六	二、三九七	一六、二四八	三七、六四五	一、八四	三、九三五	七、八八〇	一〇、六四〇	二、三五二	二〇、一三五	四、五三五	二八	
高敞	二、六六	四、九七	六、八七	一、七九四	四四	九四	八四七	一、七一	二、七二	五、九一〇	七、六六四	一三、五八	二
苗浦	一、九三	四、八〇	五、〇六	九、八四六	二二〇	五五	一、二九	二、一三	五、五八	五、五二	二〇、六四	六	
金堤	一、九五	四、一四	四、二六八	八、四〇九	八四四	一、八三	一、六九	三、〇九	二、八九	五、九四	五、九四七	二、九一	一五
裡里	四、三三	九、五五	九、一五七	一八、七五三	五六	一、二七	一、三三	三、三九	四、八六	一〇、七三	一〇、三六	二二、〇九	六
計	四四、五九	一三三、〇九	六六、六五五	一八九、四四九	九、一〇	一八、一四〇	一七、五〇四	三、六四四	四、六三	二二、三三	二四、一五七	三三、九三	一四七
木浦	四、九七	二、九九四	二、八二五	二五、八八九	四二	一、一〇	一、〇四	二、一五	五、三八	一四、一〇四	一三、八六	二七、六三	七
光州	二、三三	四、六七	四、五九三	九、一七九	四八	六六	六六	一、六三	二、六三	五、六五	五、二八	一〇、八七	一六

全羅南道

潭陽	二、二八	五、六九五	五、六二	一、三、四	六四二	一、二八七	一、三、四〇	二、六七七	二、八〇〇	六、九八〇	六、九六二	一、三、九四	四
谷城	一、九六六	四、三三	三、九六七	八、二九八	三、四四	六、一	六、一〇	一、一九一	二、三〇	五、〇〇二	四、五八七	九、五八九	八二
求禮	一、三三	三、〇九七	二、九六	六、〇二五	三、〇	五、一〇	五、一〇	一、〇三	一、八三	三、五九八	三、四七	七、〇四五	三
光陽	九七七	二、〇九	一、九六一	四、〇三〇	二、四一	三、六	三、九八	七、六	一、三六	二、三三七	二、三五九	四、七四六	九四
麗水	七〇	一、七九七	一、六五〇	三、四四七	一、〇	三、三	三、〇	四、五三	八、二	二、〇〇	一、八八〇	三、九〇〇	三
順天	四、七三	一、〇、一、七	九、八〇	一、九、九七七	六、九	一、〇、一、五	一、〇、九七	二、三、一〇	五、三、三	一、一、三三	一、〇、九七七	三、三、九	六九
高興	一、五八四	三、一、三、四	二、九六九	六、一〇三	四、〇三	八、〇	八、〇〇	一、七、〇〇	一、九、七	四、〇、四	三、七、九	七、八〇三	六二
寶城	二、二八八	六、三、三、三	六、〇五〇	一、三、三、三	三、三	三、七	二、八	五、五	二、六、〇	六、六、〇	六、三、六八	二、三、六	一、六五
和順	二、二五九	四、六、〇	四、二、九	八、七、九	六、七、三	一、三、一、四	一、三、九	六、六、三	二、八、三	六、八、〇	五、四、三八	二、一、四、三	一一
長興	二、二七三	四、三、〇	四、〇、七	八、三、八一	三、五、四	五、〇	六、六	一、一、九六	二、五、六	四、八、六	四、六、八	九、五、七	三三
康津	一、三、四	二、七、六	二、五、七	五、二、六	二、三	三、四	二、三、九	四、八、三	一、四、四六	二、九、八	二、七、六	五、七、四六	五五
海南	二、〇、四	五、〇、四	四、六、四七	九、六、九	五、二	一、二、一〇	一、一九三	二、三、九四	二、五、六五	六、二、四、五	五、八、四〇	二、〇、八、五	五九
靈岩	二、七、六	七、三、二	六、六、〇九	一、三、八、三〇	三、五、五	七、〇	七、四七	一、五、七	三、二、一	八、〇、一	七、三、五	一、五、三、六	六
羅州	二、六、四一	六、五、五〇	五、六、九五	二、二、一、四、五	三、三	七、四	六、六	一、四、〇六	二、九、三	七、二、九四	六、三、五	一、三、六、五	七九
咸平	一、八、七三	四、一、〇、四	三、九、六	八、一、八〇	九、五、三	二、三、三〇	二、一、二	四、四、一六	二、八、四	六、五、七	六、〇、八、九	二、五、九、六	五七
靈光	二、〇、四	三、四、九	三、〇、四一	六、五、九	六、四、四	九、〇	八、三	二、六、八	四、四、七	四、四、七	三、八、七	八、五、三	一五
長城	一、一、七四	二、〇、六	一、八、九五	三、九、七一	二、七、七	四、〇	四、三	八、七一	一、四、五二	二、五、六	二、三、六	四、八、四三	九
莞島	一、三、五	四、八、三	四、六、七五	九、五、七	一、四、五	三、〇	三、三	七、〇	一、六、〇	五、三、三	五、〇、七	一、〇、一、三、九	一七
珍島	一、七、八	二、九、三	二、六、九	五、六、三	五、六、六	一、六、五	一、三、八	二、五、五	一、九、五、四	四、三、七	三、九、七	八、一、八、四	四九
濟州島	五、五	五、二	五、八	一、二、九	三、五	五、三	五、八	一、二、九	七、〇	一、〇、一、四	一、一、九、九	二、三、六	一〇

朝鮮の災害

一七二

慶尙北道

計	四、二六九、五五五	六、四九一、七九〇、三四	九、九九一、一八、八〇〇	一八、六六六、七〇、五五五	五、〇七二、四三三、〇五五	二、六、九〇〇、二、九三
大邱	四、五二一	八、三六六	七、八七五	一六、三三三	九、六六六	一、〇、一七六、〇
慶山	一、六二二	三、三〇〇	三、一一一	六、四七一	七、三三三	一、〇、一八〇、一
永川	二、五二六	五、五三三	五、一六二	一〇、六七三	五、七三三	九、〇三三
慶州	六	一、二二七	一、一三八	二、五五五	二、六	一、〇、九六
浦項	二、三七七	五、〇六一	四、六三三	九、七四三	三、五五五	七、〇〇〇
盈德	一、〇六六	二、三九	一、八六六	四、七五五	三、六〇〇	五、四四
英陽	三、五九	六、八	六、三三	一、三二一	六、三三	二、三
青松	一、五九	二、四八七	二、一五四	四、六四一	五、三	八、三
安東	二、三九九	六、〇九一	五、六六六	一一、七八七	三、三三	三、四七
義城	二、二〇九	五、〇七四	四、七九〇	九、八六四	九、〇〇	二、〇、三五
軍威	一、四四七	三、〇三三	二、八二九	五、八五〇	九、九	一、四九
倭館	一、二七二	二、九三三	二、八七四	五、八六六	一、七	二、五五
金泉	三、九六七	九、一三七	八、六二九	一七、七七六	九、七	二、〇、九
尙州	二、六六九	五、九三三	五、四九一	一一、四三三	八、三	一、五五〇
醴泉	二、六六六	六、〇〇〇	五、二九一	一一、三六一	四、〇一	七、八
榮州	一、三三二	二、六六六	二、四六六	三、三三七	三、九	三、七〇
奉化	一、〇一八	三、一二五	二、八三三	五、九三六	七、五	一、三
開慶	一、五五八	三、七三三	三、五〇四	七、二五五	五、四四	一、四元
星州	一、四〇〇	三、七六五	三、三六六	七、四二一	一、一、四五五	二、一、九三三

慶尚南道

高靈	清道	善山	鬱陵島	計	釜山	釜山鎮	馬山	晉州	宜寧	咸安	昌寧	密陽	梁山	蔚山	東萊	金海	鎮海	固城	統營
二,五五五	一,七九九	一,〇四六	三四	三,六六五	六五四	四	一,六六三	二,九三三	一,九三三	一,八三三	一,九三三	七三三	六六六	一,二六六	八〇八	一,四七〇	五九二	一,〇〇九	五三三
五,七五一	三,五五三	二,五五五	七六	八,〇〇一	一,〇四八	七	三,八三八	六,七四八	三,七六六	四,四四四	三,三三三	四,六〇〇	一,三九九	二,六四四	一,七三三	二,八四四	二,〇七〇	二,一〇〇	一,一〇〇
六,〇五八	三,二七五	二,四三三	六六	一,二一七	一,三三六	二六	三,四四〇	六,四八〇	三,七三三	三,七三三	三,三三七	四,三〇〇	一,三九九	二,七三三	一,五三六	二,七二一	二,一八八	一,〇九五	一,〇九五
一一,〇〇九	六,八三八	五,〇〇七	一四四	七,七六六	二,二八六	三三	七,二四六	一三,三三八	七,〇六六	八,一四七	六,七三三	八,八〇〇	二,六三八	五,四七九	三,三三九	五,六〇五	四,五五五	二,〇五五	二,〇五五
五,六	三,〇六	三,〇	—	一三,四三三	二八	—	二八	二四	一七三	五九	三三	四三	一六	三八	八七	四八	三五	六八	六八
一,〇九五	四九六	四四四	—	一三,四三三	一三	—	二五〇	一六六	四四	一〇六	四〇	一〇〇	二四〇	七七七	一七五	五〇	四九七	二六	二六
一,一三四	四八二	四三三	—	一三,七五四	一三	—	四八〇	三六六	三四五	一,〇八九	三九	九四八	二四八	七四三	一六一	五九二	五四〇	一五七	一五七
二,三三九	九七九	八六六	—	二七,一七七	二五五	—	七〇	五三三	七九〇	二,一二七	七九	二,〇四八	四八八	一,五〇〇	三六	一,一五三	一,一五七	二七三	二七三
三,〇〇一	二,〇五五	一,三五	三四	四四,三三三	七三	四	一,九七	三,二〇六	二,一〇五	二,四二	一,四四	一,三五	八五七	一,五〇四	八九	六五〇	一,五五五	六四	六四
六,八四六	四,〇五九	二,九五九	七八	九八,〇九五	一,一〇〇	七	四,〇八八	六,九二四	四,二二	五,四九三	三七九四	五,七〇〇	一,四七九	三,四三三	一,八七六	三,四三三	二,五五五	一,一三六	一,一三六
七,一九二	三,七五七	二,九二四	六六	九三,七五六	一,一七	二六	三八八	六,八四六	四,一七	四,八七二	三七三六	五,一四八	一,六四七	三,四七六	一,六七七	三,三三三	二,五五五	二,二八八	二,二八八
一四,〇五八	七,八八六	五,八七三	一四四	一八,八八二	二,五五二	三三	七,九六六	一三,七〇〇	八,三八八	一〇,五六四	七,五〇〇	一〇,八四八	三,三三六	六,八八九	三,五五五	六,七五七	五,五九三	二,四七六	二,四七六
一〇八	一七五	四一	—	一七,四四二	二六	—	二四	五八	一〇三	一〇	九四	六	一七	一四	二六	四	三	三	三

延濟	五三	一、五七	一、三六	二、五九	一〇五	一七	一六	三五	六六七	一、五四八	一、四六	二、九四	一五
潤川	五三	一、九七	一、九四	三、八六	一八〇	三七	五〇	六七	一、二二	二、八四	二、三	四、九八	二四
南川	一〇、二六	二、三九	二、三六	四、五八	六四	七	一五	一〇〇	二、四	二、三	四、七	五〇	
河東	六〇	一、〇〇	一、四〇	二、七八	四五	三	五〇	八五	一、三三	一、五〇	二、八〇	二〇	
山清	三、七三	七、八七	八、三四	一六、二九	一、二〇	二、〇	二、三六	四、六	四、八	九、九〇	二、四〇	二〇、〇〇	一五
咸陽	一、九〇	三、二五	二、八七	五、九一	三五	六五	一、二四	二、〇	三、七六	七、三	七、三	七	
居昌	六、六七	一五、五四	一五、一五	三〇、六六	一、三四九	二、五九	二、四四	四、九	八、〇六	一八、七	一七、六	三五、六九	二七
陝川	三、六二	七、四	七、八三	一五、三六	九六	一、六	一、六〇〇	三、三	四、八九	九、〇	九、四三	一八、四九	二四
計	三、八六	九、七九	七、九〇	一五、七四	四、三四	九、二四	八、八四	一七、六八	三、〇八	八、七五	八、四七	一七、五七	五〇
海州	四、八五	三、六七	二、九	二、七六	四四	一、二九	一、二	二、三〇	五、六六	一五、〇	二六、九六	一八	
延白	二、四八	六、二〇	六、〇九	一三、一〇	四四	六四	七五〇	一、五四	二、八七	六、八四	六、八四	一三、七六	一八
金川	一、六三	三、三九	三、二〇	六、四三	二〇六	四八	四三七	八四	一、八二	三、六	三、六	七、二七	一九
南川	五、〇六	六、九	六、三八	一三、三六	二六八	四七	二六	七八〇	三、三四	七、七〇	六、七四	一四、二六	二
新溪	一、〇九	二、四七	二、二五	四、六六	九九	二五	二〇六	四四	一、二五	二、六八	二、四六	五、一五	八
曉津	二、四〇	四、八七	四、一七	九、〇三	三〇	六九	七四	一、五九	二、五〇	五、五	四、八	一〇、四七	六
長淵	二、六五	五、九七	五、四七	一一、四五	六六	一、六	三、〇	三、〇	三、〇	七、二	六、八	一四、六	三
松禾	五三	一、二四	一、一七	二、三	八九	二	一四〇	二	六五	一、二六	一、三	二、三	一
長連	四三	九三	一、〇四	一、九六	三	五	七	二五	四三六	九六	一、二七	二、三	七
安岳	一、三〇	二、四三	二、三六	四、六九	一四四	四三	四〇五	一、五七	二、八六	二、七	五、六	一	
信川	五、〇六	六、九六	六、八九	一三、八九	三四	七	一、三六	三、五四九	七、七〇	七、六	一五、三	二〇	

黃海道	信川	安岳	長連	松禾	長淵	曉津	新溪	南川	金川	延白	海州	計	陝川	居昌	咸陽	山清	河東	南川	潤川	延濟
	三、〇〇	一、三〇	四〇	五三	二、三六	二、四〇	一、〇九	三、〇六	一、六三	二、四八	四、八五	三、八六	三、六二	六、六七	一、九〇	三、七三	六〇	一〇、二六	五三	五三
	六、九六	二、四三	九三	一、二四	五、九七	四、八七	二、四七	六、九	三、三九	六、二〇	三、六七	九、七九	七、四	一五、五四	三、二五	七、八七	一、〇〇	二、三九	五三	五三
	六、八九	二、三八	一、〇四	一、一九	五、四七	四、一七	二、二五	六、三八	三、二〇	六、〇九	二、九	七、九〇	七、八三	一五、一五	二、八七	八、三四	一、四〇	二、三六	五三	五三
	一三、八九七	四、八六九	一、九六	二、三	一一、四五	九、〇三	四、六六	一三、三六	六、四三	一三、一〇	二、七六	一五、七四	一五、三六	三〇、六六	五、九一	一六、二九	二、七八	四、五八	三、八六	二、六八
	三四	一四四	三	八九	六六	三八〇	九九	二六八	二〇六	四〇四	四九一	四、二五	九六	一、三四九	三五	一、二〇	四五	六四	一八〇	一〇五
	七九二	四二	五三	二	一、六三	六六	二五	四一七	四一八	六四	一、二九	九、二四	一、六三	二、五九	六五	二、〇	三	六四	三七	一七
	七四	四	七	一四〇	一、二八	七四	二〇六	三六	四三七	七五〇	一、二二	八、八四	一、六〇	二、四四	五九	四、六	五〇	七	五〇	一六
	一、五	八八	二五	三	三、〇〇	一、五九	四四	七〇	八四五	一、五四	二、三〇	一七、六八	三、三	四、九	一、二四	四、六	五〇	一、〇六	六七	三、五四
	五、五四九	一、五七四	四三六	六五	三、〇五	二、五〇	一、二五	三、三四	一、八二	二、八七	五、六六	三六、〇三	四、八九	八、〇六	二、〇四	四、八三	八五	一、〇六〇	一、二二	六、六七
	七、九九〇	二、八九六	九八四	一一、二七	七六、二一	五、五	二六、八	七、七〇	三、六五七	六、八四	一、五八六	八、七五	九、〇	一八、七	三、七六	九、九〇	一、三三	二、四	二、八四	一、五四八
	七、六三	二、七	一、三七	一、三七	六、八	四、八	二、四六	六、七四	三、六	六、八三	一、〇〇〇	一七、五七	九、四三	一七、六	三、四九	二〇、四〇	一、五〇八	四、七	四、九八	二、九四
	一、四、四	五、六	二、三	一	一、四、四	一、〇、四七	五、一五	一四、二六	七、二七	一三、七六	二六、九六	五〇	二八〇	二四〇	七、三	三〇、〇〇	二、八〇	四、七	二、三	二、九四

平安南道

載寧	二,〇七〇	四,六六六	四,五六六	九,四四四	三七九	七六	七五二	一,五七	二,四四九	五,六四四	五,三三	一〇,六六	六
黃州	一,一三〇	二,三三	二,六四七	四,八七八	三	七	七	一四八	一,一五	二,三四四	二,七五	四,〇六	五
兼二浦	六六六	一,五七	一,四三	二,九七〇	一〇	一五	一四	元	六六	一,五三	一,四七	二,九六	三
沙里院	一,六二	四,九七	四,四七一	九,四〇九	七	一四八	一五五	三〇三	二,〇三	五,〇八五	四,六七	九,七三	六
瑞興	一,二五九	二,七六	二,六二八	五,四〇七	三二	六八四	六〇六	一,二九〇	一,五〇	三,四七	三,四七	六,六七	六
遂安	二,三六六	五,五八四	五,三九一	一〇,九七五	三三	三三	八八	八六	二,三六九	五,九七	五,八七	一一,八	五
谷山	一,五九六	四,〇〇四	三,八三	七,八六	九	一九六	一九一	三六七	一,六六	四,三〇	四,〇	八,三三	七
計	三,九二	四九,九五	四七,〇二	六,六八	二,九五	五,八五	五,三三	一一,〇四	三,八四	五,七	五,三三	一一,〇四	三
平壤	一,七四	三,三三	三,五三	六,七	四	一,〇五	九三	一,九六〇	二,三	四,二〇	四,〇	八,七	九
鎮南浦	八九〇	二,元五	二,〇三五	四,三〇	四八	九〇	八三	一七	九六	二,三	二,〇	四,四	九
大同	一,〇三	二,六二	二,〇	四,六	一五	二五	二五八	五	一一八	二,八	二,八	五,一六	一
順川	二,六五	六,二九	五,八九〇	一一,一八	三〇	四	三九一	八	二,八七	六,七	六,二八	一二,〇四	二
孟山	四六	一,〇	九一	二,〇三	四	三	六	二四	三	一,〇	一,〇	二,一四	一
陽德	七七	一,六四	一,五三	三,一六七	七	二九	一〇	三	七七	一,七	一,六	三,三九	二
成川	一,七六	三,九六	三,九四	七,八八	三三	四	五九一	八三	一,九六	四,三四	四,三	八,六八〇	二
江東	九二	二,三三	二,二四九	四,六〇	三	二	五	五	九七	二,三四	二,二	四,六	一
中和	一,一六	二,六二	二,四三	五,〇五	二二	三	七九五	一,四九九	二,五〇九	三,〇	二,八三	五,八八	三
龍岡	二,二四三	四,六六	四,四	八,七一	二六	五	三六八	八七一	二,五〇九	三,〇	二,八三	五,八八	三
江西	四六	一,〇〇七	九	一,九二〇	八八	一五	九六	二五	五四六	一,一六	九九九	二,一六	七
平原	一,〇八	二,四一	二,〇五	四,三	三〇	六七	五	一一五	一,四一八	二,八六	二,六	五,八	八

朝鮮の災害

一七六

厚昌	二五〇	二六四	一七七	四四一	二二	三三	三〇	五五	二六二	二六七	二〇七	四四四
江界	三七一	六三八	五八	一二〇六	二五	二七	一四九	三六六	四六六	八五	七七	一、七三
前川	一、二五八	三、四六七	二、九七〇	六、四三七	二二	二五	一八八	四三三	一、三三〇	三、七三	三、一五八	六、八七〇
熙川	一、一九七	二、七五五	二、六〇四	五、三八九	二八	三八	四一	一、三三五	二、八三三	二、六四四	五、四六八	
北鎮	六七七	一、五三三	一、四七七	二、九九九	六六	一四二	一六六	三〇八	七三三	一、六四四	一、六四三	三、〇〇七
寧邊	五、五四九	一六、五五〇	一六、三三四	三三、八九四	四九	一、四〇四	一、四六九	二、八七五	五、九六八	一七、九七四	一七、七九三	三三、七六七
泰川	二九四	六六六	六三三	一、二六九	一一〇	三〇〇	二五二	五〇一	四〇四	九六六	八八四	一、七九〇
博川	一、〇四九	二、六三三	二、三九三	五、〇三四	八二	一五二	一四五	二九七	一、一三〇	二、七六三	二、五八八	五、三三二
龜城	一、八三三	三、五五三	三、一八四	六、七三六	七〇	一五四	一六六	二八〇	一、九三三	三、七六六	三、三二〇	七、〇二六
定州	八三三	一、七六六	一、六〇二	三、三三八	一〇五	一九八	一八七	三八五	九三八	一、九四四	一、七八九	三、七三三
宜川	一、七四四	四、五五五	四、三五四	八、八四五	八〇	一九九	一三三	三〇二	一、八三四	四、七七四	四、四七三	九、〇四六
鐵山	一、七五五	三、七九	三、六三三	七、三三三	三七	三七	二四九	四六六	一、八七二	三、九四六	三、八七三	七、八八八
龍巖浦	二、五九八	六、三三五	六、一六四	一二、三八九	三三	九二	九四六	一、九〇七	二、九八〇	七、一六六	七、一〇〇	一四、二九六
新義州	一、三三〇	五、六四四	二、九三二	八、三三五	二六六	八三三	四四七	一二九九	一、五九六	六、三三六	三、三九八	九、六二四
義州	一、〇八五	二、九六六	二、八四四	五、七三〇	一〇〇	三三三	二九一	五九四	一、一八五	三、三九	三、〇五五	六、三三四
計	二六、七〇九	七三、六五九	六七、一〇〇	一四〇、七五九	二、五九〇	六、三三三	五、四六六	二、七〇八	三、一九九	七九、八七一	七三、五九六	一五、四六七

平安北道

東興	一〇五	二九〇	二五五	五二五	五	六	四	一〇	一一〇	二六	二五九	五五	一
中江	一二	一八一	九七	二七八	一四	五二	三三	八五	一三五	三三	一〇	三六三	一
慈城	七七一	二,〇六六	一,七二三	三,七九九	四七	六六	四六	一三三	八八八	二,六二二	一,七九九	三,九二一	一
滿浦	七五一	一,八三三	一,六四五	三,四四七	六一	九四	六二	一五九	八二七	一,八六六	一,七〇九	三,六〇三	一
渭原	三六四	一,〇五四	七九三	一,八四七	元	五二	五二	一〇〇	三九三	一,一〇六	八四四	一,九六〇	一
楚山	二,六四一	六,〇六九	五,五五五	二一,六〇四	一六五	三〇一	二二二	五三三	二,八〇六	六,三三〇	五,七四七	二二,一七七	一七
碧潼	六二六	一,六六六	一,五五四	三,一二〇	一〇三	一八一	一六六	三七七	七九	一,六八七	一,六七〇	三,四七五	四
昌城	一,三三三	三,三三〇	三,一九〇	六,五二〇	四三	六五	五六	一二二	一,三五六	三,三八五	三,二四六	六,六三二	三
朔州	二九	六〇一	五七四	一一,一七五	二〇	五〇	四九	九九	二三元	六五一	六三三	一,二七四	一
計	三四,四三三	八六,一六七	七六,〇三三	二六四,一八〇	六,三九五	一四,六二二	二一,四六八	二六,〇七〇	四〇,八四八	一〇〇,七九九	九,四七七	一九三,二五〇	七四三
春川	二,二六六	五,七九六	四,七五七	一〇,五五三	二九九	五五六	五五五	一,〇九一	二,五五五	六,三三三	五,三三二	一一,六四四	一三
麟蹄	九三四	二,四〇〇	二,〇九一	四,五五二	二八五	七五五	五八八	一,三四三	一,二二九	三,三三五	二,六九七	五,八九四	一三
楊口	三,二六七	七,四六八	七,九六一	一五,四三九	七三三	一,九七五	一,八四七	三,八三三	四,〇四〇	九,四三三	九,八〇八	一九,二六一	八
淮陽	九八二	二,五五五	二,三三四	四,八八九	三九	八〇五	七四六	一,五五一	一,〇一一	三,三〇六	三,〇七〇	六,四四〇	二四
通川	八六六	一,六七七	一,五四四	三,三三二	三三三	四二二	三九五	八七七	一,二二九	二,〇八九	一,九三九	四,〇〇八	三八
高城	八八六	二,二七七	二,〇七三	四,三五四	三七七	五七〇	五五五	一,〇八五	一,一三五	二,八四七	二,五八八	五,四三三	三三
襄陽	一,〇二二	二,六八八	二,一五〇	四,七六八	二二五	二八四	二五六	五四〇	一,二二七	二,九一〇	二,四〇六	五,〇〇八	八四
江陵	一,七三四	四,六一二	三,八九四	八,〇五五	一九〇	三九九	四〇三	八〇一	一,九二四	四,五〇〇	四,二九六	八,八六六	一三〇
三陟	二,一七六	五,五三三	四,五六三	九,八八五	八三	一九九	一三〇	二七九	二,二五九	五,六六七	四,四九二	一〇,一六四	二〇
蔚珍	一,三八一	二,二七七	二,六三二	五,三九三	一〇七	二三四	二二二	四五七	一,四八八	三,〇〇五	二,八四五	五,八五〇	三二

朝鮮の災害

一七八

江原道

旌善	三〇〇	七三	六四七	一、三六八	六七	一六二	一四三	三〇四	三六七	八八二	七九〇	一、六三三	一七
寧越	二、八七六	七、五四〇	六、四四九	一三、九四九	二九	三三	一〇一	四八八	三、〇〇五	七、七七	六、六二〇	一四、五六七	四二
平昌	一、〇一七	三、三六三	二、三八三	五、六四六	二五	四一	二二	六三	一、三三三	三、三〇四	二、四〇四	五、〇八八	八
原州	四〇六	八五三	七三	一、六二四	四九	六六	七四	一五〇	四四	九八	八六	一、七六四	三三
横城	一、八九五	五、四四九	四、六四四	九、六六三	三三	三四七	四〇六	七五三	二、二一八	五、五九六	五、〇〇〇	一〇、四四六	一九
洪川	二、七八〇	七、七〇六	六、六三三	一三、八九三	九三	二、四二七	二、〇九三	四、五二〇	三、七二五	九、六六七	八、七五五	一八、四〇五	二五
華川	一、五九四	三、八七七	三、二七三	七、一五〇	三三	四七	四四	七六八	一、八七	四、三三四	三、六二四	七、九八八	三
金化	六七	一、六六七	一、三六八	三、〇三五	二九六	八五	六五四	一、五〇九	九三	二、五三三	二、〇三三	四、四四四	三三
金城	八八	二、〇〇三	一、八三	三、八二九	一三七	三九	三〇〇	六六九	九五	二、三三	二、二二	四、四九八	七
鐵原	二、〇九一	四、五五	五、〇〇九	九、五六〇	五二	一、一七	一、一三	三、〇一〇	二、六三	五、七三	六、一四〇	一一、八六二	二五
平康	八〇五	二、〇四	一、八四二	三、八六六	三五五	八〇	七三九	一、五四九	一、六〇	二、八四	二、五八一	五、四〇五	二六
伊川	三、五〇八	一〇、〇〇五	九、四七九	一九、五二四	七八四	一、五二	一、六九八	三、三八〇	四、九三	二、六七	二、一七	三、七九四	一九
計	二〇、八二八	五、〇〇七	五、〇八三	一三、八四六	三、二二	六、九三	六、三七七	三、三三	二、四、〇三九	五九、九三	五七、三六	二七、一五八	八〇
咸興	一、八六三	三、八八	四、一六六	八、〇五一	一五	二四	二五	五七	二、〇七	四、四九	四、四二九	八、五八	四
元山	一、五七四	三、五二七	三、四九四	七、〇一一	一四〇	三九	二九四	六〇三	一、七四	三、八六	三、六八	七、六四	一
安邊	一、二九四	二、七三	二、七七	五、五六四	九九	二二	三九	四八〇	一、九三	三、〇〇〇	三、〇〇〇	六、〇四四	一
文川	九二四	三、〇七九	二、六四	五、七四三	三三	八七	五八	一四	九六	三、一六	二、七三	五、八八	一
高原	二六三	六五	六八	一、二五五	三九	三	四八	一〇一	三〇三	六八	六六	一、五五四	五
永興	三、四六四	八、八一五	九、八六五	一八、六八〇	四七六	七四	七九九	一、五四〇	三、九四〇	九、五五六	一〇、六六四	二〇、三三〇	一五
定平	三六五	七〇〇	六八二	一、三六二	三三	二四	二〇	四四	三六七	七四	七四	一、四二四	四

咸鏡南道

新興	八七三	二,九三二	三,〇七五	五,〇一八	一六九	二九三	二九一	五八四	一,〇四一	三,二四	二,三六八	五,〇三二	四
洪原	一,一七三	二,九〇〇	二,八九六	五,八三六	六五五	一,三三七	一,三八〇	二,七四七	一,八七〇	四,二九七	四,二七六	八,五五三	—
北青	三,〇六六	七,八九九	七,七五五	一五,五八四	二九六	六六七	六〇一	一,二六八	三,三三二	八,五五	八,三三六	一六,〇五三	—
利原	五九五	一,四〇八	一,三六六	二,七九四	五	一四七	一五四	三〇一	六四八	一,五五五	一,五〇〇	三,〇九五	九
端川	一,五〇三	四,二二五	四,〇〇六	八,二〇一	三四	八四五	七七	一,七三	一,八六	四,八九〇	四,八二三	九,七三三	六
豐山	一,五六八	四,三五四	三,四六六	七,八〇〇	四九〇	一,三六	一,〇三	二,三四九	一,八七六	五,六九〇	四,四九	一〇,一四九	二
甲山	三三三	七四八	六八九	一,四三七	一五	四五	三	八一	三三八	七九三	七五	一,五二八	—
惠山	五八三	一,四三三	八〇〇	一,九八二	四七	二二	八五	一九七	六〇〇	一,二五四	九三五	二,七一九	—
三水	一六五	二六四	三七	五九一	四三	六八	五	三三	二〇八	三三	三六三	七四	一
好仁	四五	一,二五五	一,〇〇〇	二,三五八	五五	一四	一三	二八七	五〇八	一,四〇九	一,三六	二,五四五	—
新設坡	三〇三	七七	七五	一,四三二	五八	二二	一〇〇	二二	三〇	八三八	八三五	一,六七五	—
長津	四五四	一,二七三	九六八	二,二四〇	三	五七	四六	一〇三	四八六	一,三三	一,〇四	二,三四三	—
下碭	二〇六	五八九	四二	九六九	二二	二四	三五	五九	二八	五八二	四四	一,〇七	—
計	四,六九二	二二,一七八	二〇,九七七	三三,一二五	五四九	八三	六九一	一,七三	五,三四一	二一,九九〇	二一,八六	三三,八八	四三
羅南	一五	二六六	二四	五三〇	四	三	六	九	一五九	二六	二七〇	五三九	—
清津	一〇一	一〇〇	一六	五九六	五	四	六	一〇	一〇六	三〇	三〇一	四〇六	一〇
漁大津	五五	一,三三九	一,四六七	二,七〇六	四六	七〇	九一	一六二	五八二	一,三三九	一,五八	二,八六七	—
明川	五三	一,二五二	一,二五五	二,五三七	一四三	一四	一六五	三〇八	六六五	一,四〇四	一,四三	二,八五五	六
吉州	一,三五五	二,八七	二,七八	五,六四五	八四	一四七	一七三	三三九	一,四三九	三,〇〇四	二,九六〇	五,九六四	六
城津	三〇	八八	七七	一,五六五	八六	一〇一	一三	三四	四〇六	九一〇	八八九	一,八〇九	三〇

咸鏡北道														
富寧	五	七	一〇九	三〇六	三	四	五	九	五五	一〇一	二四	二五	—	—
茂山	二七	一、一三七	一、〇九	二、〇〇〇	一九	三〇	八	七	二九二	一、一六	一、二二	二、七	—	—
三長	九	二八	三三	四〇〇	一五	三五	三五	七〇	一〇六	二五	二四七	五〇〇	—	—
延社	一七	三六	三三	六九	六	四	六	二	一九五	四五	三九五	八〇	—	—
會寧	四一	一、〇九	一、〇八	二、九五	七	一五	一九	六	四四	一、四六	一、三五	二、六	—	—
鍾城	一四	三	三六	七五	五	二〇	二	三	一五	八	一、三	二、六	—	—
穩城	八	二〇	二〇	四九	五	七	五	三	八	二六	二五	四一	—	—
訓戎鎮	四	八	四	二二	六	三	五	八	一〇	二	九	二〇	—	—
慶源	九	一六	一七	三三	一〇	二	三	四	一〇	二七	二九	四六	—	—
慶興	三	一〇	八	一九	二	—	—	二	四	二	八	一九	—	—
新阿山	二七	六	五〇	二八	一	一	三	四	六	九	五	三三	—	—
雄基	二五	四三	四九	八四	三	七	三	二〇	二五	四三	四三	六四	—	—
西水羅	二五	六四	四六	一二	一	一	一	二	六	六五	四九	二四	—	—

貧困の境遇は、窃盜、その他の犯罪の發生を伴ふものにして、災害時及びその後には、常に犯罪件數の増加を來して居る（調査資料第二十三輯）。（朝鮮の犯罪と環境参照）また災害中、旱害及び水害の年に於ては、往々にして傳染病の流行を見ることがあり、就中、食糧の不足缺乏に依りて、或は粗食を爲し、或は多種の救荒食料を用ふる等の結果、健康を害し、特に胃腸疾患に罹る者を増加するなど、保健衛生上に及ぼす影響も亦等閑に附すべからざる問題である。（調査資料第二十二輯）（朝鮮の人口現象参照）

第五章 災害の救済

災害救済制度

朝鮮に於ける救済制度は、遠く新羅時代より發達して居た。即ち儒理王五年（垂仁天皇五十七年）、王は國內巡行の途、飢寒の爲め死に瀕せる一老嫗を見、これに衣食を賜ひて救恤し、尙ほ全國の鰥寡孤獨や、老病にして自活の途なき者を賑恤したるを嚆矢とし、爾來三國に於ても、窮民救恤には相當力を注いだのである。次いで高麗時代に入るや、佛教思想の影響を受けて、歷代の王朝は慈悲仁政を誇りとし、或は常平倉を設けて備荒の策を講じ、或は義倉を置きて施餓救貧に努め、或は大悲院を建て、醫療を施したる等、各種救済制度は高麗時代に於て大に發達し、當時救済の政は、經國濟民の大部分を爲したるの觀あり、半島の民族性をして、依頼力強く、自營自活の念を衰へしめたるもの、實にこの時代に端を發したるにあらざるやを思はしむるのである。高麗朝亡びて李朝時代となるや、専ら儒學の精神に基きて、王者は救済に心を注ぎ、國力を盡してこれに従ひ、新羅、高麗の諸制度を更に擴張し、或は支那の諸制度を模倣し、救済制度は最も普及し、備荒の方面に於ては、常平倉、義倉及び還穀、交濟倉及び濟民倉、社倉等の制あり、救荒の方面に於ては、蠲減、賑貸、賑恤、施倉、輕糶及び防穀、救荒方、願納等の方法あり、四窮[●]丐[●]乞[●]の保養取扱[●]としては、親族扶養、官府留養、寺院及

び民家收養養老等の制あり、また醫藥救療の方面に於ては、大悲院、濟危舖、惠民局、活人署、廣濟院、月令醫等の施設あり、この外婚喪の顧助、各種の契の如き隣堡相救の方法あり（調査資料第十六輯）（朝鮮の契（參照））、一見李朝時代に於ける救濟制度の整頓を示して居るが、この實、政治の腐敗に伴ひ、救濟施設は往々にして不正官吏の私腹を肥すの具となり、實際の用に適せざる憾みありたるのみならず、却つてこれが爲めに國民の負擔を加重するの弊を大ならしめ、また國力疲弊の結果、折角の制度もこれを運用し得ざる例頗る多く、更に一面に於ては救濟餘りに遍洽したるが爲めに、自然民をして懦弱に陥らしめ、一般に勤儉貯蓄の風を失はしむるに至つた。されば韓國併合以來は、災害の救濟に際しても止むを得ざる者の外、直接救濟よりも、寧ろ生業扶助、生産保護等に重きを置いて居るのは、蓋し時弊に適した方法であらう。

朝鮮に於ける各種災害の狀況及び過去に於ける救濟制度に就いては説明したが、現今は罹災者の救濟に關して、國費、地方費、臨時恩賜金、恩賜罹災救助基本金、御下賜金に依りて救恤が行はれて居る。後に説明する如く、災害に對しては總督府及び地方廳は、直接間接に各種の方法によりて罹災者を救濟し、また民間社會事業團體の活動、及び團體又は個人の義捐寄附等に俟つことも多いが、試みに罹災者救恤金の内譯を示せば左表の通りである。即ちその救恤金額を見るに、大正四年度に於ては僅に二萬八百六十一圓に過ぎなかつたものが、同九年度には十三萬五千五百十九圓に達し、大正十四

年度には大水害の影響を受けて六十八萬三千三百三十七圓に激増を來したのである。その救恤延人員は、大正四年度に五萬四千六百八十四人たりしものが、同九年度には四十九萬四千九百九十七人となり、更に大正十四年度には三百八十九萬四千九十四人といふ驚くべき數に達したのである。而して救恤金を災害別にして見ると、水害が毎年總救恤金の大部分を占め、これに亞いで旱害、火災の順序であるが、その金額は水害に較ぶれば遙かに小さいのである。即ち水害に因る罹災者救恤金の大部分より昭和元年に至る總計は百八萬七千圓で、旱害は約その半分の五十三萬三千圓、火災は更に下つて四萬二千圓、風害が二萬九千圓となつてゐる。

救恤御下賜金 (道別) 單位圓

	明治四十 四年度	大正 元年度	大正 三年度	大正 四年度	大正 五年度	大正 六年度	大正 八年度	大正 九年度	大正十 一年度	大正十 二年度	大正十 三年度	大正十 四年度
京 畿 道	六四	四九二	—	四四五	二一〇	九五	六三〇	二、一六〇	二、三三七	二〇〇	六五〇	二、三〇〇〇
忠 清 北 道	二七五	三六	—	—	七五	一四二	—	一〇〇	一、〇〇〇	—	—	一、五〇〇
忠 清 南 道	一、二六	六九	—	—	三三	一五	—	一一〇	四〇	六〇〇	—	一、〇〇〇
全 羅 北 道	一、一五〇	六七	—	—	一、五四〇	八三	—	三、五〇	—	—	—	一、一〇〇
全 羅 南 道	四三	—	—	—	二四	三	—	三〇〇	一四〇	—	—	一〇〇
慶 尙 北 道	一、四	二六	—	一、一七五	九六	二三	一、五三〇	二、六七〇	三〇〇	三、三〇〇	—	三、八〇〇
慶 尙 南 道	一、四九四	九	—	六六	一、五三	七六〇	一九〇	五、三三〇	五〇	—	—	一、四、五五〇
黄 海 道	五、四三	—	四六	—	—	四四	一、四八〇	四〇〇	四、四三	二、〇五〇	一、一〇〇	五〇〇

同	十一年度	二〇四	一七、五八〇	三九、六二二	二四二、〇五五	—	一〇、五〇六	一〇三、七九四	一、三七二	一〇、五五五	一五、一九七
同	十二年度	一五二	三〇、五五五	八二、〇三三	五四八、九三二	—	二八、二四五	三三、八〇八	五、四四五	三、五九八	二五、一八七
同	十三年度	二七	八二、五九	三九、八七一	三、四八、五五八	—	一七五、四〇三	九八、一五八	二、三五四	一、八八	二七、七九四
同	十四年度	一三三	一〇七、一〇四	二五〇、二六六	三、八九四、〇九四	—	六〇九、七五九	一七、八〇二	三、一五	五、五七一	六八、三三七
昭和	二年度	五	三〇、六四〇	四三、三〇〇	一六九、五八〇	—	六、六二二	五、六九七	—	三、〇〇〇	七〇、三三八

災害別

水害

大正	四年度	二	七、九七	一四、四九九	五〇、〇〇七	—	一、八二〇	五、四九三	五、〇〇〇	七、六〇〇	一九、九六三
同	五年度	二四	四二、一八一	五、一五九	七八〇、五七	—	三、三〇六	一五、六四三	一四、二五〇	五、七〇〇	三八、八九九
同	六年度	三〇	三、三三	五、一七	六一七四	—	二、一九四	三四	—	二、〇〇〇	四、八八
同	七年度	三三	二、九八三	四、五四六	五三三	—	二、三三	一四一〇	三四	—	三、九六
同	八年度	六七	五、三六三	一〇、五四三	六三、六九五	—	七、九三	一〇、〇九九	—	六、四三一	二四、三三
同	九年度	二七	二五、七六〇	五四、〇三	四四〇、一二五	—	六四、八八	二、五六〇	一、〇二二	一七、四一五	一〇四、八四五
同	十年度	一四	二二	八三	一、〇五一	—	一、八六八	四二	—	—	二、二六九
同	十一年度	一七三	一六、一五九	三三、二八九	二二〇、一八三	—	九、五〇六	九九、三三	一、三七二	九九、〇六	二二〇、〇三
同	十二年度	一九	二九、八六	八〇、五四	五〇〇、二四七	—	一四、三五九	三一、五五九	五、四二五	一九四、八二	二四、八五
同	十三年度	四一	一一、〇六	一七、三三	五八、四一五	—	六、一九〇	一一、九六六	二、三五四	一、八三九	三、四九
同	十四年度	二三	四三、三〇八	一〇四、九四	五三〇、四一五	—	三、九、〇五八	七、五〇八	二、九九〇	五二、六七	四三、三七
昭和	元年度	二四	一七、一六五	三七、七一	一三、〇〇〇	—	五〇、八九一	五、六三一	—	三、〇〇〇	五、五三

旱害

第五章 災害の救済

朝鮮の災害

一八六

大正	四年度	一	五五	五五	五五	—	100	—	—	100	
同	八年度	二六	一〇、三六六	四二、七四〇	三六、六七三	九、七五三	三、〇六六	二二、八八五	七九	五、〇九五	三、五六八
同	九年度	四	三、四八〇	五、三九三	二、一七四	—	四、四三五	一九、九八〇	—	二、五〇三	二六、九八八
同	十年度	四	九二六	一、五六二	一、五六三	—	三、二二七	—	—	—	三、一七七
同	十三年度	五九	六七、七五〇	二四、四五五	一、六四四、二五〇	—	一六七、三三〇	九、八六一	—	—	二四七、〇九一
同	十四年度	二五	五九、一四八	一三九、八四四	三、三〇三、四四〇	—	二二、三四八	八、七三三	二五	—	二二、三三五
昭和	元年度	一	二、四一六	二、四一六	二、四一六	—	二、四一六	—	—	—	二、四一六
火災											
大正	四年度	五	二九八	八四七	四、一二五	—	五五五	一二五	—	—	六八〇
同	五年度	二	六〇	二三八	二三八	—	一三八	—	—	—	一三八
同	六年度	九	一四五	五三六	一、四九九	—	二九八	四六七	—	—	七六五
同	七年度	六	一二七	四九八	四九八	—	二七〇	四七二	一四〇	—	八八二
同	八年度	二	五二	一九〇五	二、一五六	—	一、七五四	三三、〇七八	—	—	二四、八三三
同	九年度	九	七二	三七	一、三三七	—	三三	六二	—	—	六九五
同	十年度	一四	二二	八三	一、〇五一	—	一、八五六	四二一	—	—	二、二六九
同	十一年度	七	二二	五七四	二、四二二	—	九九五	四三	—	一四五	一、五七三
同	十二年度	二	二二	五〇五	三、四六一	—	二、一〇三	二〇一	—	四〇〇	二、七五五
同	十三年度	二	二二	一、七七	四、四三三	—	五二	二二	—	—	六九二
同	十四年度	七	八二	二二	一、七八	—	五〇五	五二三	—	—	一、〇一八
昭和	元年度	二六	五五三	二、〇八〇	一、三六四	—	六、四三	六	—	—	六、四八八

大正四年度	同 十一年度	同 十二年度	大正十三年度	同 十四年度	昭和元年度	大正六年度	同 七年度	大正九年度	同 十一年度	同 十二年度	同 十三年度	同 十四年度	昭和元年度	大正十年度	同 十一年度	第五章 災害の救済	一八七
四 六七	二 三二	一九 三六三	四 三五	三 一、二八五	二 一三	一 七八八	一四 七八八	二 五〇	二 八四五	一 二四	八 二、九六八	四 一、二八一	二 四〇九	一 三八	二 一三	二 五五八	一、一九三
四七 四七	三六三 一、一〇一	八六〇 二、〇七	三七 一、五	二六七 一、三	二 三〇	一、八一九 一七、六〇六	一、八一九 一七、六〇五	二、二八三 五〇、七三三	二、八四七 二七、八〇一	一四 二七	四、一八七 一六、六三五	四、九六九 六五、四八九	一、二四三 一三、四七〇	一九二 一九二	五五八 五五八	五五八	一、一九三
九八	五 二四一	一、七六三 五五五	一五 三〇五	二四、一三 二四、一三	二〇	一、四〇七 一、四〇七	一、四〇七 一、四〇七	九三 一、六八	一、六八 一、五三	一、五三 一、八七五	二、七五 一、〇〇九	一、三五三 一、三五三	一、三五三	二六四	一、一九三	一、一九三	一、一九三
九八	七〇 四七四	三、六五 一、五七七	三〇 二四、一三	二四、一三 二四、一三	一三〇	一、四〇七 一、四〇七	一、四〇七 一、四〇七	二、〇六五 一、九八	一、九八 一、五三	一、五三 六、〇〇〇	一、五三 六、〇〇〇	三、四四 三、四四	一、三五三	二六四	一、一九三	一、一九三	一、一九三

一八八

[illegible]

一八九

[illegible]

朝鮮の災害

一九〇

平安北道	水害	七	七六	三、六九九	一二、〇八三	—	三四三	—	三、四二九
江原道	水害	二〇	二、七三三	一〇、〇五五	三五、三二三	—	三、七〇〇	—	四、五〇〇
咸鏡南道	水害	一一	二、三四	五、九三五	一四、〇九九	—	一四、四六	—	一四、四六
	旱害	二	一、九三	二、六〇〇	四、五八六	—	五、〇七	—	五、〇七
咸鏡北道	旱害	六	二、四〇	六、八三三	一六四、七七一	—	三〇、三三五	—	三九、三六
	水害	二三	四三、三〇八	一〇四、九三四	五三、〇四五	—	三九、〇六	七、五〇八	二、九〇〇
總計	風害	三	一、二八五	二、六七	三五二	—	二四、二三	—	二四、二三
	旱害	二五	五九、一四八	一三九、八四三	三、三〇三、四四〇	—	二二、三四八	八、七七三	二、五
	電害	四	一、二八一	四、九六九	六五、四八九	—	二、七五	一、〇〇九	—
	火災	七	八二	二七三	一、六八	—	五〇五	五二三	—
	計	一六二	一〇七、一〇四	二五〇、二六三、九四、〇九四	—	六〇九、七九九	一七、八〇一	三、一〇五	五、六七一

大正八年の旱害救済

稀有の旱魃 大正八年七月小笠原方面より高氣壓の擴張したる爲め、半島内陸には連日降雨を呈し、殊に五、六兩日に亘つては中部地方に夏季特有の豪雨を見たが、同月上旬末より中部以北にては頗る高温度の晴天を持続し、例年楊子江方面より半島を通過する低氣壓を見ず、連日日射焼くが如く蒸發盛んにして、各地農作物はその影響を受けることが少くなかつた。八月に入り中部以南の地は朝鮮海峡を通過した颱風の影響を受けて多量の降雨を見たが、中部以北殊に西半部に於ては前月來の旱天は

八月末まで續き、氣溫著しく上昇し農作物は多く枯死して未曾有の慘害を現出したのである。その被害は全北、忠南、忠北、京畿、黄海、平南、平北及び咸南の各道に亘り、面積百十四萬九千町歩に達した。降雨季と乾燥季と截然たる區別を有するは半島氣象の特色で、晩秋より初春に至る半歳は乾燥季に屬し、晩春より初秋に至る半歳は雨期に屬して多量の降雨あるを常とする。而して五、六月は雨季前の乾燥季にして、往々七月に入るも寡雨に失することがないが、多く七月中旬より各地に豪雨を見、出水の被害を蒙るを例とする。然しながら大正八年の如く、西北鮮一帯に亘り、雨季の最盛季五旬の永きに及びて降雨なく、稀有の大旱魃を現出したのは異常の現象である。

主要農作物の作付面積及びその收穫量 △印は減少を示す

道名種類	作付面積			收穫量		
	大正八年	平年	増減	大正八年	平年	増減
京畿道	水 稻	一七、八四五町	一四、五五五町	一、八五、一七五石	一、六五、六五五石	△ 五八、四九〇石
	粟	三、八四四	九、一二二	一三〇、六四六	一五八、六三九	△ 三七、九八三
	大豆	八、一八一	六三、一三三	二七四、九四五	四五五、七三六	△ 一四〇、七九一
	小豆	一六、六六八	一三、八九〇	三、七六	六三、九二七	△ 二、三三四
忠清北道	水 稻	三、七三三	三三、四九六	二七、二一八	三四、八八〇	△ 七、六六二
	粟	六、一三四	六、〇八	四、四〇八	四六、五五二	△ 三、一四四
	麥	三、九三三	二〇、九四	三、四、九四三	二六、二二〇	一〇、六三三

朝鮮の災害

平安南道			黃海道			全羅北道			忠清南道					
麥	粟	水	小	大	麥	粟	水	小	大	麥	粟	水	小	大
		稻	豆	豆			稻	豆	豆			稻	豆	豆
四六、〇〇九	二五、二八	六三、〇三	五八、八二	七〇、八六	二六、八六七	一五、三六七	一〇八、〇六二		八〇、八〇	五、五九〇	五、五四		一五、三三九	一五、三三九
													三、二七	三、二七
													七、八八九	七、八八九
													七、五	七、五
													三、四、五三	三、四、五三
													六、五八	六、五八
													二、六、三三	二、六、三三
													二、〇、七	二、〇、七
													三、七、七	三、七、七
													四、六、八四	四、六、八四
													九	九
													四、六、八四	四、六、八四
													二、四	二、四
													六、〇、二	六、〇、二
													五、九、七	五、九、七
													五、三	五、三
													九、七、三八	九、七、三八
													二、九、五、三五	二、九、五、三五
													八、八、二九	八、八、二九
													五、〇、七	五、〇、七
													五、四、四	五、四、四
													五、八、二一	五、八、二一
													一〇、四、四五	一〇、四、四五
													四、二、八七	四、二、八七
													五、七、三	五、七、三
													二、七、六三	二、七、六三
													一、〇、四〇	一、〇、四〇
													九、三、五	九、三、五
													四、六、九、五三	四、六、九、五三
													三、九、〇九	三、九、〇九
													七、七	七、七
													五、一、六五	五、一、六五
													一、七、三〇	一、七、三〇
													一、四、六	一、四、六
													一、〇、八三	一、〇、八三
													二、三八、七三	二、三八、七三
													三、六、五	三、六、五
													七、九、八三	七、九、八三
													三、五、八四	三、五、八四
													七、九	七、九
													四、六、八四	四、六、八四
													二、九、八三	二、九、八三
													四、一、八六	四、一、八六
													二、一九六	二、一九六
													八、四六、六三四	八、四六、六三四
													一、〇、九、一一三	一、〇、九、一一三
													六、九七、二六八	六、九七、二六八
													五、五、一、六二四	五、五、一、六二四
													二、七、四八	二、七、四八
													二、八、五、六	二、八、五、六
													一、七、七、九七	一、七、七、九七
													二、三、九、九七	二、三、九、九七
													六、三、七、九三	六、三、七、九三
													七、四、七	七、四、七
													四、七、二	四、七、二
													三、〇、三、二四	三、〇、三、二四
													五、九、六、四六	五、九、六、四六
													二、〇、七、七	二、〇、七、七
													三、〇、七、九	三、〇、七、九
													五、七、三	五、七、三
													二、七、六三	二、七、六三
													一、〇、四〇	一、〇、四〇
													九、三、五	九、三、五
													四、六、九、五三	四、六、九、五三
													三、九、〇九	三、九、〇九
													七、七	七、七
													五、一、六五	五、一、六五
													一、七、三〇	一、七、三〇
													一、四、六	一、四、六
													一、〇、八三	一、〇、八三
													二、三八、七三	二、三八、七三
													三、六、五	三、六、五
													七、九、八三	七、九、八三
													三、五、八四	三、五、八四
													七、九	七、九
													四、六、八四	四、六、八四
													二、九、八三	二、九、八三
													四、一、八六	四、一、八六
													二、一九六	二、一九六
													八、四六、六三四	八、四六、六三四
													一、〇、九、一一三	一、〇、九、一一三
													六、九七、二六八	六、九七、二六八
													五、五、一、六二四	五、五、一、六二四
													二、七、四八	二、七、四八
													二、八、五、六	二、八、五、六
													一、七、七、九七	一、七、七、九七
													二、三、九、九七	二、三、九、九七
													六、三、七、九三	六、三、七、九三
													七、四、七	七、四、七
													四、七、二	四、七、二
													三、〇、三、二四	三、〇、三、二四
													五、九、六、四六	五、九、六、四六
													二、〇、七、七	二、〇、七、七
													三、〇、七、九	三、〇、七、九
													五、七、三	五、七、三
													二、七、六三	二、七、六三
													一、〇、四〇	一、〇、四〇
													九、三、五	九、三、五
													四、六、九、五三	四、六、九、五三
													三、九、〇九	三、九、〇九
													七、七	七、七
													五、一、六五	五、一、六五
													一、七、三〇	一、七、三〇
													一、四、六	一、四、六
													一、〇、八三	一、〇、八三
													二、三八、七三	二、三八、七三
													三、六、五	三、六、五
													七、九、八三	七、九、八三
													三、五、八四	三、五、八四
													七、九	七、九
													四、六、八四	四、六、八四
													二、九、八三	二、九、八三
													四、一、八六	四、一、八六
													二、一九六	二、一九六
													八、四六、六三四	八、四六、六三四
													一、〇、九、一一三	一、〇、九、一一三
													六、九七、二六八	六、九七、二六八
													五、五、一、六二四	五、五、一、六二四
													二、七、四八	二、七、四八
													二、八、五、六	二、八、五、六
													一、七、七、九七	一、七、七、九七
													二、三、九、九七	二、三、九、九七
													六、三、七、九三	六、三、七、九三
													七、四、七	七、四、七
													四、七、二	四、七、二
													三、〇、三、二四	三、〇、三、二四
													五、九、六、四六	五、九、六、四六
													二、〇、七、七	二、〇、七、七
													三、〇、七、九	三、〇、七、九
													五、七、三	五、七、三
													二、七、六三	二、七、六三
													一、〇、四〇	一、〇、四〇
													九、三、五	九、三、五
													四、六、九、五三	四、六、九、五三
													三、九、〇九	三、九、〇九
													七、七	七、七
													五、一、六五	五、一、六五
													一、七、三〇	一、七、三〇
													一、四、六	一、四、六
													一、〇、八三	一、〇、八三
													二、三八、七三	二、三八、七三
													三、六、五	三、六、五
													七、九、八三	七、九、八三
													三、五、八四	三、五、八四
													七、九	七、九
													四、六、八四	四、六、八四
													二、九、八三	二、九、八三
													四、一、八六	四、一、八六
													二、一九六	二、一九六
													八、四六、六三四	八、四六、六三四
													一、〇、九、一一三	一、〇、九、一一三
													六、九七、二六八	六、九七、二六八
													五、五、一、六二四	五、五、一、六二四
													二、七、四八	二

[illegible]

大豆		三、五七、五〇〇	三、八八、三〇七	四、六九、三三〇	一、〇九、四四六	一、九六、四三三	八、五八、九六六
大	豆						△
小	豆	一、九〇、三七七	一、七六、〇〇七	三、三二、〇九	一、九四、五三〇	七、七三、三二	五、六二、五九七

激甚なる被害 右の表に依れば、前記被害地に於ける稲作は、平年に比し四萬四千四百十七町歩の作付面積の増加を見たるも、收穫は却て百九十萬三千餘石の激減を見、これを反當收穫量に換算すれば、平年作に於ては九斗一升弱のものが、同年は五斗三升強に減じ、僅かにその五割八分に過ぎないのである。粟作にあつては收穫實に百十二萬六千石の激減を呈し、反當平年作五斗四升に比し、その七割六分、即ち四斗一升到過ぎず、麥作は作付季節の關係上被害比較的少なく、八千六百二十二石の減收であつたが、大豆は四萬八千九百二十三町歩の作付面積の増加に對し、八十五萬六千石の減收となり、反當平年作六斗二升到對し、その四割八分、即ち三斗強の減收といふ慘害を呈したのである。また小豆は作付面積の二萬三千町歩増加したるに拘らず、收量は五十八萬二千石を減じ、反當一斗強で平年四斗六升の僅か二割二分の收穫を擧げたのみであつた。

各道別作柄 (水稻、粟、大豆、小豆)

道	名	收穫皆無	三分作以下	半作以下	計
京	畿道	一一、九五九町	四七、二三八町	七二、〇〇九町	一三三、二〇六町
忠	清北道	一、一六四	二、五八六	三、三三四	七、〇八六
忠	清南道	七、一二五	一一、八七五	二二、五七七	四二、五七九

全羅北道	四、九九八	三、〇八三	一一、三三五	二〇、四一七
黃海道	六七、九八九	一三六、三八六	一九三、四〇九	三九七、七八四
平安南道	四二、四七三	六九、二九九	八八、三四三	二〇〇、一一五
平安北道	三七、七一三	七〇、九七五	四三、八八四	一五二、五七五
江原道	三七四	三、二四四	四、六四二	八、二六二
咸鏡南道	三、一八八	五、六四四	四七、八四四	五六、六七六
總計	一七七、九八三	三五一、三三〇	四八八、三七七	一、〇一七、七〇〇
備考	町歩以下切捨			

被害農地中の小作面積及びその小作者戸口

道名	被害地中小作面積	同上小作者戸數	同上人口
京畿道	九五、九〇三 _町	九六、三一七	四三一、二二六
忠清北道	二、〇九六	七、五一五	三七、五七五
忠清南道	三二、三七五	三八、四四一	一七七、九八五
全羅北道	一六、七五〇	四、四六六	一九、七〇三
黃海道	二二九、八三七	一二二、九二二	四六三、四四一
平安南道	一三二、一九五	七二、三一八	三四五、一八一
平安北道	一一三、三三八	六〇、七五二	二九一、〇七〇
江原道	四五、二一三	一四、〇九二	六九、一五二
咸鏡南道	二五、三〇五	一、四六七	八、八〇二
總計	六九三、〇一四	四〇八、二九〇	一、八四四、七六五

旱害の影響 即ち被害地中小作面積は總計六十九萬三千町歩で、被害の最も大であつたのは黃海道の二二九、八六七町歩、これに亞いで平安南道、平安北道等いづれも十萬町歩以上の被害である。またその被害は水利灌漑施設の不完全な地方に特に甚だしかつた事は勿論にして、その施設の完全なる地に於ける作柄は、他の然らざる地に比して損害の遙かに僅少なを得たのである。

旱害に因る窮民増加數

道 名	總 戸 口		窮 民 數		總戸口に對する窮民戸口の割合	
	戸 數	人 口	戸 數	人 口	戸 數	人 口
京 畿 道	二七、六一	一、五〇、八五	五〇、一八	二四、三〇七	一七・四	二六・一
忠 清 北 道	六、二〇七	三〇、七六	四、五七	一六、八〇	六・九	五・〇
忠 清 南 道	九、六七	四七、九一	二六、四九五	一八、五八	二九・一	二七・一
全 羅 北 道	四八、〇〇	二五三、八九	五、八五三	二六、五四	一二・一	一〇・四
黃 海 道	二二、八六六	一、三〇、三〇	四四、二六〇	一八四、〇三	一六・八	一四・一
平 安 南 道	一九、六五	一、〇五、三六	一〇、一四六	三九、三六六	五・三	三八
平 安 北 道	一三、八六	七五七、五七	二三、四〇	一〇八、五〇五	一七・五	一四・三
江 原 道	六四、八六一	三〇八、四九	五、一〇七	二〇、四三	七・八	五・八
咸 鏡 南 道	一六八、二九	一、〇〇、九六	二、七六〇	一四、五八〇	一・六	一・五
總 計	一、三二、三三	七、〇六、二三	一七三、四五	七六、八六	平均 一二・一	一一・一

旱害に因る被害總戸數は實に百三十一萬千三百四十二戸を算し、その人口數七百二萬八千二百二十三

人の中、窮民戸數十七萬二千五百四十五戸、人口七十八萬八百六十六人の多きに達し、總戸數に對する窮民の割合、戸數に於て三・一%、その人口數は一・一%に達した。

窮民の生活 窮民の食物は平年に於てすら極めて悲慘なるものがあり、粟飯、米飯、麥飯等を食し得るは新穀の出來秋のみ、六月麥收穫期前に於てはその窮狀殊に甚だしく、或は將來の收穫を擔保として前借し、甚だしきに至つては草根木皮等を採食するものも尠くないのである。されば旱害後の彼等の生活は實に想像の外にあり、或は麥粉、粟、玉蜀黍等に、野草、海草を混じて粥となし、或は山野より木の實、草根、木皮等を採取して餓を凌ぎ、或は投棄せし菜、大根の枯葉を拾ふ等、その慘狀實に同情に堪えざるものがあつた。また朝鮮人は由來着物の貯えなく、加ふるに菜の缺乏の爲め家屋の修繕をなすこと能はず、従つて旱魃後は嚴冬と雖も、着るに物なく、焚くに物なく、宿るべき家すら求め得ざるの有様であつた。斯くの如き狀況であつたから、同年より翌九年にかけての被害各道に於ける、學校生徒の退學、缺席、農民の移住、出稼は夥だしき數に上り、また衣食住の不備による營養不良、胃腹病、呼吸器病等は同年の死亡率を著しく高めたのである。

大正八年の旱害に因る被害の激甚は、勢ひ大正七、八、九の三年度間の地稅、戸別稅の滞納を大ならしめ、納稅狀況を通じて窮民増加の事實を明かに示して居る。

移住及び教育狀況

朝鮮の災害

一九八

大正七年移住出稼者

大正八年移住出稼者

數育に及ぼしたる影響

計 生徒退學者 欠席者

道名	戸數	人口	戸數	人口	計
京畿道	二五〇	一四九	四八五	二〇六	七三五
全羅道	四	二五七	一九	九五五	—
黃海道	一三二	四三六	一九	三、七〇六	一、三三四
平安南道	四九	二、〇四三	一、三五〇	五、四六七	一、六五
平安北道	三、六〇	一三、六九	三、八〇	一四、四〇〇	—
江原道	一五	八六	三七	一、五九	一、〇〇九
咸鏡南道	四三	一七五	三四	一四五	七四
總計	五、八四	三、八三	一〇、四七	六、三五〇	七、〇〇九

地稅、戸別稅滯納調

道名	地稅	滯納者	戸別稅	滯納調
京畿道	九	七、六六	四八、二二	一五、〇〇八
忠清北道	—	四二	三九、八一	—
忠清南道	五、四〇六	一五、九元	四四、三九元	五四、四五
黃海道	元	四、三三	一〇、〇〇〇	—
平安南道	—	—	一五七、六九七	五、三三二
平安北道	—	—	四二六	—
咸鏡南道	—	—	—	—
總計	五、四〇六	一七、九七九	三〇〇、三四	一四八、一八〇

大正八年度の犯罪總件數は一千百七十件であるが、この中約八割二分の九百六十二件は強盜盜及び詐欺罪で、これは同年七月以降の一般經濟界不況にも基因するが、一方旱害の結果糊口に窮し、惡心を起して敢て犯罪を犯すに至つたものも尠くはなかつたのである。民事訴訟に於ても罹災地たる京城、公州、咸興、平壤、海州の各地方法院を通じて、事件數の減少せる一方、米、土地、建物等物品を目的とする訴訟の増加したことはまた旱害の影響の一面を物語るものである。

經濟界の打撃 大正八年に於ける朝鮮經濟界は、未だ時局の影響たる前年來の好況を覆へすに至らず各地に於ける事業熱の勃興と共に銀行、金融組合の預金貸付は頗る増加し、殊に貿易方面にあつては實に總計二億八千萬圓を超え、空前の繁忙を呈したのである。然るに同年八月の旱害は内地一般金融界の梗塞と相俟つて、大正九年前半期に於て著しくその打撃を受けたのである。即ち四月以降に於ては輸移出、輸入共に激減し、前半期の入超は三千九百萬圓に上つた。また同期間に於ける銀行會社の設立増資計畫二億一千萬圓の中、拂込は僅に一千八百五十萬圓に過ぎざるに對し、解散及び減資は前年同期の十社三十萬圓に對し、當期に於ては實に十七社二百二十九萬圓を算したのである。

斯くの如き事業界の梗塞は、綿糸布、粟、米、豆等の相場低落と相俟つて金融業者の警戒を招き、金利は著しく上騰するに至つた。然しながら朝鮮の經濟界は、大戰に因る好景氣の惠澤に浴することが比較的薄かつた爲め、その反動もまた甚だしからず、また擔保價格の低下と金利上騰の爲め、株界

は金融難に制せられ、過度の思惑を試みるの餘地なく、一般金融業者の警戒も機宜を失はなかつた爲め、克く財界の惡化を防止し、恐慌を緩和することが出來たのは幸である。

救済施設 大正八年の旱害は朝鮮に於て稀有の凶荒で、窮民の狀態は日を逐ふて益々困憊に陥り、地方農村の購買力減退し、延いて一般地方經濟の不況、諸般事業の不振等實に容易ならざるものであつた。されば此の狀況に顧み、總督府に於てはこれ等被害民を救済してその生活の安定を得しむるの緊要なるを認め、その善後策を講ずる爲め、九月臨時旱害救済委員會を組織し、委員は數次協議の結果次の通り、救済方針を決定したのである。

- 一、被害地方の不足食糧はこれを鮮外、主として滿洲より輸入すること。
- 二、被害民には成るべくその地方に於て自助的の救済方法を講せしめること。
- 三、被害の激甚なる地方にして隣保又は地方の救済を受くること能はざる者、或は老幼、婦女、病弱者等にして、生業に就く能はざる者に對しては國庫より直接救助をなすこと。
- 四、種子購入の資力なきものに對しては相當補助を爲すこと。
- 五、畜牛保護の爲め、國庫補助を爲すこと。

これ等の事業は道知事に管掌せしめ、その費用は地方費より支辨し、不足額は國庫の補助に俟つこととしたのである。またその救済の範圍は、道路工事の起工、未墾地開墾事業の助成、種苗の配給、及

び窮民の救助等に及び、或は倉庫を建築し食糧配布に便を計り、或は被害各地に治道工事、灌漑工事を起して罹災民を使役し、開墾事業には相當の補助金を交付して工事の促進を計り、老幼、婦女には副業を奨励して、その原料の供給、生産品の販賣の便利を計る等、官民一致して罹災民の生活安定の爲め努力したのである。

また一方朝鮮銀行より百五十萬圓、大藏省預金部より二百五十萬圓の融通をうけ、これを殖産銀行の手より各地域内の共助組合へ低利に貸出しを行つた。

旱害救済費大正八年度豫算要求額

一金百三十一萬九千三百六十五圓也

内 譯

七十九萬四千四百四十圓

食料配給費補助

九萬八千圓

開墾工事費補助

十九萬六千八百二十五圓

種子購入費補助

二十三萬圓

地方道路改修費補助

旱害救済費大正九年度豫算要求額

一金百六十四萬七千一百十圓也

内 譯

八十三萬三千六百十圓

食糧配給費補助

四十七萬圓

地方道路改修費補助

三十四萬三千五百圓

開墾工事費補助

第五章 災害の救済

旱害救済費調

	要救助費	救助期間中の收入金額			計	國費支辨を要する金額
		地主の救助見込	勞働收入	副業收入		
京畿道	一、五七、五〇〇	五元、二七〇	四、五七、六〇〇	三三〇、〇〇〇	一、九六、七七〇	三、九〇、七四〇
黄海道	二、五三、二九五	八六、六五五	九七、二一〇	二七〇、〇〇〇	二、〇四、〇六五	四、八八、三〇〇
平安南道	一、五四、一三〇	五八、四〇〇	四六、〇〇〇	三六、五〇〇	一、〇三、四〇〇	四七〇、五九〇
平安北道	一、九元、六五〇	六四六、五五〇	八四、〇〇〇	一四、〇〇〇	一、五九、五五〇	三、四六、一〇〇
計	七、五四、五七五	二、五二、五五五	二、六四、八〇〇	七五〇、五〇〇	五、九六、八二五	一、三三、七五〇

旱害補助金調

	開墾事業補助	種穀購入補助	治道費補助	計
京畿道	七五、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三三、〇〇〇	一三七、〇〇〇
黄海道	三三、六〇〇	二一、〇〇〇	一五、〇〇〇	四五、六〇〇
平安南道	三、〇〇〇	五、二五五	一五、〇〇〇	二四、二五五
平安北道	二、一〇〇〇	七、七〇〇	一五、〇〇〇	二五、〇〇〇
計	四一、九〇〇	一六、八五五	七〇、〇〇〇	一三八、七五五

小作人保護 概して朝鮮に於ける地主の多くは小作人を愛護救済するの念に乏しく、加へて小作慣習の缺陷は斯くの如き凶作に當つて種々の紛争を醸すことが少くないのである。殊に定租即ちその土地に於ける從來の收穫高を標準として小作料を協定する方法による場合にあつては小作人はその負擔重

きに過ぎ、且つ小作料滞納の場合には多く小作地を返還せしむる習慣さへ認められて居るのである。同年度の如き凶作の場合には地主側に於て小作料を減免する如き習慣があるが、地主と小作の關係は内地の如く密接ならず、凶作時の小作保護も極めて消極的なるに過ぎない。同年度に於ける異常なる移住者の増加も斯かる事情によるものであらう。されば當局は各道、郡に對し機宜に應じて勸説する處があつたが、更に關係地主を集合して種々小作人保護に關して協定せしめ、將來の收穫を擔保として種穀貸付及び給與をなさしめ、或は生活費、生活資料の給與貸付を獎勵する等種々方法を講じたのである。その結果、多くの地主は小作人に對しその小作料を減免し、或は種子資金を給與貸與する等、成績頗る見るべきものがあつた。

窮民救助 大正八年の凶歉に當り相扶相惠は至る處に現はれ、金品を寄贈、貸與し、或は各種事業を起して勞銀の撒布を圖る等個人に團體に大に窮民救助に努力し、一方當局に於ても各其職員を派し篤志の士の自發的奮起を促し、救済の實を擧げ得たる處は決して尠くはなかつた。被害民の生業扶助として道路改修工事を起工し、被害民を使役して相當の賃金を與へて生活の安定を計つたのである。即ち總督府直營事業として第二期治道路線に於て總工費百十一萬二千百三十圓の豫算を以て、黃海、平安南北、咸南の五道に對し總工費金額の國庫補助を與へて道路改修工事を起工し、その補助額七十萬圓を

計上したのである。また平安南道大同郡、江原道平康郡には水利灌漑工事を許可し、この總工事費二十八萬三千四百五十圓で、勞銀三萬四千六百七十七圓を撒布したのである。

旱害地たる京畿、黄海、平安南北の四道の開墾工事に付ては、大正八年度に於て金九萬八千四百圓を道地方費に補助することに決し、これを京畿道に四萬三千六百五十圓、黄海道に二萬八百五十一圓、平安南道に三千九百圓、平安北道に二萬九千九百九十九圓を配布した。而して右の補助金は、大正八年十月より大正九年三月迄に、實際支出したる工事費五千圓以上のものに對し補助し、被害民救済の趣旨を徹底するに遺憾なきを期したのである。

補助企業及び被害民救助

	補助企業數	總工費	土工費	被害民救助		補助金支出及交付
				使役員數	支拂賃金額	
京 畿 道	七	四八、四六	五三、七三	三〇、七六	三七、五三	四三、六九
黄 海 道	六	一六、九六	一〇、四三	八三、八三	七、四九	二〇、八五
平 安 北 道	五	二六、〇〇	二四、九八	二六、四七	二四、九八	二九、九九
計	一八	九七、四二	八四、一三	六六、八九	六三、一〇	九四、四九

生業補助 旱害善後策として窮民に職を與ふことは當時最も必要であつたので、總督府は各道知事に通牒を發して奨勵すべき副業の種類を調査し、副業用原料の配給に關し適當の計畫を樹てしめた。その主なる種類は、藁を原料とする繩、蓆、草鞋等の製造で、これに亞いで萩を原料とする蠶具の

製作、蘆草を原料とする蘆蕤の作製、その他平安南道にあつては紐、綿布、絹布、麻布等の製織、藥草の採集、薪炭の製造等で、これ等副業に要する原料は道外隣接地方より購入する外、各道内に於て相互供給することゝした。

生業補助狀況調

	從業戸數	生産額
京畿道	一九、九一一	四八二、〇七五
忠清南道	六〇、八四五	三六九、九六九
黄海道	四、七九〇	一二六、四八三
平安南道	八六七、〇五三	一、二六六、一八三
平安北道	一九五、八一二 楓葉、運材は未詳	一、四九五、五五九
計	一、一四八、四一一	三、七四〇、二六九

糧食資金の貸出 旱害に因る被害民救済の爲め、共助組合資金として、朝鮮殖産銀行より各道へ對する貸付限度、及びその貸付額は次の通りであるが、この糧食資金の貸出が、危急に瀕せる罹災民救済に興つて力あつたことは云ふ迄もない。

糧食資金貸付限度及び貸付額

朝鮮の災害

二〇六

道名	貸付限度額	貸付額	差引剩餘額
京畿道	六四五、五四〇 _円	六一八、〇九八 _円	二七、五四一 _円
忠清北道	一〇四、〇〇〇	一〇四、〇〇〇	—
忠清南道	二〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	—
黃海道	七二三、七〇〇	六七七、六七八	三六、〇二一
平安南道	九四六、四五五	九四六、四五五	—
平安北道	一、〇七五、〇〇〇	一、〇五八、八〇〇	一六、二〇〇
江原道	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	—
咸鏡南道	一五〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇	—
總計	三、九三四、六九五	三、八五五、〇三二	七九、六六二

共助組合は旱害地窮民の互助的救済の手段として面單位に依り組織され、一の規約に基き該組合を通じて朝鮮殖産銀行より低利資金の貸出を受け、食糧の調節、副業の奨励、勞働の斡旋等を目的とする組織、管理、及び事業は組合規約によつて詳細規定せられる處である。而して組合員の名に於て融通を受けたる資金を組合員に貸付けるに當つては、現金融通を例外とし、多く糧食種子等の共同購入に當てたのである。

共助組合及び組合員數

共助組合數	關係面數	組合評議員	組合員
京畿道	八〇	九四	一、七六七
戸數	元、九四	人	口
			一三、〇五

忠清北道	三
忠清南道	六
黃海道	一七
平安南道	六
平安北道	六
江原道	三
咸鏡南道	五一
總計	四九

忠清北道	三	六三	三、四九	一三、三五
忠清南道	六	六三	九、九七	四六、六一
黃海道	一七	二、八七四	二六、七三	二九、七三
平安南道	六	二、三三	五、二九五	二六、九一七
平安北道	六	一、七六	四四、九五	一六三、一九八
江原道	三	四六	五、七五一	三、四五四
咸鏡南道	五一	一、一六	七、一九〇	四三、四五四
總計	四九	一、一四六	一三、一四	八二、七四八

共助組合貸出狀況調

京畿道	六八、〇六
忠清北道	一四、〇〇〇
忠清南道	三〇、〇〇〇
黃海道	七、七、六六
平安南道	九四六、四五五
平安北道	一、〇五、八〇〇
江原道	一〇〇、〇〇〇
咸鏡南道	一五〇、〇〇〇
總計	三、九五、〇〇一

京畿道	三、〇七	六〇五、五三	一七	〇六
忠清北道	三、四一〇	一四、〇〇〇	一六	二・〇
忠清南道	一〇、五六	一九、三九	七	〇・九
黃海道	三、七三	六、七、五四	一九	一・五
平安南道	三〇、〇〇〇	九六一、〇四	三〇	一・〇
平安北道	三、四、一九五	一、〇七、〇九	五〇	二・八
江原道	四、四六	一〇〇、〇〇〇	一〇〇	二・〇
咸鏡南道	六、四六	一五〇、〇〇〇	一五〇	?
總計	一、一八三	三、八、四、四一六	五〇〇	九

食糧配給 大正八年の旱害はその被害の激甚であつた爲めに、窮民數を激増せしめ、副業又は勞働に依る收入、また食糧買入資金の貸付等にては到底生活を支え得ず、直接食糧の給與を必要とする者も随分多數に上つたのである。

食糧給與の外なきもの數

道 名	生活上不安なきもの		副業又は勞働によりて 生計を立て得るもの		食糧を給與する外なきもの	
	戸 數	人 口	戸 數	人 口	戸 數	人 口
京 畿 道	一九〇、五六八	一、〇三四、三九五	四三、一三七	二〇二、九〇六	八、〇五一	三七、一三一
忠 清 北 道	三、九六六	一五、九七七	一、五九三	五、六四五	六九八	二、六〇三
忠 清 南 道	二二、一九九	九八、〇〇元	三三、〇四四	一六三、九五三	一三、九三二	五八、八七四
全 羅 北 道	三、一二三	一四、三六八	?	?	?	一、三七四
黃 海 道	一六、〇六六	三六九、四五一	八九、〇三三	四一四、二八八	二六、〇〇四	一六六、六四五
平 安 南 道	四七、六六九	二六〇、六六九	一六、三六七	五五七、四〇〇	一〇、〇四六	三九、三六六
平 安 北 道	三五、九三五	一九、五四四	五五、九九二	三三〇、二七四	一五、八四四	六九、五五六
江 原 道	四、一七〇	三、九五二	九、一七四	三五、七五五	二、四四三	八、三二二
咸 鏡 南 道	一五、一八四	七六、五六一	七、六六一	三五、四六六	二、一六八	一〇、六五五
總 計	三三七、八三二	二、〇七六、九七一	三四二、六四〇	一、七五五、六六七	八〇、三三五	三五四、八六六

これ等他の救助に頼る能はざる窮民に對して、大正八年度に六十五萬七千九百六十三圓、大正九年度に八十三萬三千六百十圓の豫算額を決定し、個人篤志家の寄附と相應じて公平適實なるを期した。

而してその給付現物は主として粟で、これに亞いで麥、高粱、藁、馬鈴薯等であつた。

旱害を被りたる結果、大正八年八月各道に於ける穀類の收穫豫想高は二千六萬石にして、大正七年度實收高二千六百五十六萬石に比し六百四萬石を減じ、これを消費方面より打算すれば、大正七年度消費量に及ばざること二百六十一萬石なるに、更に米豆の輸移出量百五十萬石を加ふるときは、鮮内消費に對する八年度の不足量は四百十一萬石に達し、これより旱害地方に於ける消費節約量二百三十三萬石と、陸接國境貿易による輸入見込八萬石とを差引くも、尙ほ二百三十六萬石の不足を來すべき計算となつたのである。

大正八年度旱害救済食料品に關する經費豫算並支出

款 項	目	豫 算 額	支 出 額	殘	摘 要
旱害救済費	管 理 穀 類 補 償 金	一、四八、〇〇〇 _四	四八、七七一 _四	九五、三三三 _四	本年度に於ては販賣終了に至らざりし爲め支出なし
	食 料 品 補 給 施 設 費	一、〇〇八、〇〇〇	四八、六六七	五五、三三三	
	同上内課	六〇八、〇〇〇	三三、三九	四六、七〇	
	海路運送費補助	四〇〇、〇〇〇	三三、四〇七	三八、五九三	
備考	簡易倉庫建設費				粟、高粱、小豆一三二、九九七石
	同上内課				七六二
同以下切捨					龍山外十九驛六十三棟六千四百三十五坪

大正九年度旱害救済食糧品輸入に關する經費豫算並支出

朝鮮の災害

二一〇

款 項 目

豫算額 支出額

殘

摘

要

旱害救済費 管理穀物補償金

三、〇八、九〇〇

三、二七、〇四六

八四、〇四一

同

二、四七、〇〇〇

一、九三、〇九七

五九、〇四二

同上内譯

損失補償
手 數 料

一、八四七、〇三三

八三、九四四

一

食料品補給施設費 海路運送費補助

六〇、六〇〇

二九三、一四〇

三二四、九五〇

買付數量二〇九、八三六石
販賣數量二〇七、三五一石
缺量 二、四八四石
高粱 粟、高粱、玉蜀黍、稗、小豆、蕎麥、
小麥、大豆 二九、一七八九石

備考 圓以下切捨

種穀種子の補充 旱害に因る種穀の不足數量は左の如きものである。

種 穀 不 足 數 量 調

京 畿 道	五、八八七、一七〇 _石	平 安 南 道	一〇、六六三、一三〇 _石
忠 清 南 道	三、三八四、五九〇	平 安 北 道	八、一五四、〇〇〇
全 羅 北 道	一九五、一五〇	咸 鏡 南 道	一、四二六、〇〇〇
黄 海 道	一、一九一、三〇〇	合 計	二九、四七五、三三〇
	七四〇、貫〇〇〇		七四〇、貫〇〇〇

これらの不足量を農民各自の措置に投置することは、農業生産上に打撃を來し、食糧問題の解決をして一層困難ならしむるのみならず、農民個々の經濟上より見ても到底不問に付する能はざる處である。然しながらこの不足種子全部を舉げて國庫の給與とするは豫算の許す所でなく、また農民の怠惰、依頼心を助長するに至つては面白くない所以である。従つてこの補充としては左の方針を採つ

た。

- 一、隣保相助の方法に依り補充する事
- 二、地主に於て補充する事
- 三、共助組合に於て購入補充すること
- 四、凶歉救済費を以て購入補充すること

補充數量、價額、及びこれに依る作付面積

種穀補充數量	價額	作付面積
五、八八七 _石	一七二、九五六 _町	九、八一二 _町
三、三八四	七四、七一五	七、三九一
一九五	五、九〇四	三五〇
一、三七六	三八、六三一	二、六二六
七四〇貫	三三三、〇二五	二、一九七
一〇、六六三	二〇〇、九七六	一三、一〇九
八、一五三		

馬鈴薯の數量、價額及びこれに依る植付面積

購入數量	價額	植付面積
二〇、〇〇〇 _匁	一一、六八二 _町	八〇 _町
二六、四九六	一五、四九三	一〇六
二、七一〇	一、四四五	?
三〇、五六〇	一七、九二七	一六二

朝鮮の災害

二二二

平 安 道	三、四、二四〇	二〇、五四四	六八
平 安 道	一五、二九六	五、二五八	四七

雜穀、馬鈴薯に對する補助額

雜穀に對する補助金額		馬鈴薯に對する補助金額		計
京 畿 道	二、三、六九五 _四	七、〇〇五 _四	三〇、六九五 _四	
忠 清 南 道	—	一一、六五九	一一、六五九	
黃 海 道	二四、〇〇〇	一〇、七〇二	三四、七〇二	
平 安 南 道	六三、四〇〇	一九、九五〇	八三、三五〇	
平 安 北 道	二六、五〇〇	五、三二〇	三四、八二〇	
計	一四〇、五九五	五四、六三一	一九五、二二六	

畜牛の足止 朝鮮の畜牛數は、累年の統計に徴するも、毎年約二萬五千頭を増加する傾向あるに拘らず、大正八年に於ては前年に比し却て一萬八千餘頭を減するの異例を示した。これは旱害の爲めの飼料缺乏に依るもので、加ふるに農作物收穫不足に依る一般物價の高騰は、さなきだに衣食不備なる罹災民の生活を脅し、畜牛放賣を誘致したのである。爲めに畜牛の市場價格は従前に比し約四割、五割の低落を示し、食料不足と相俟つて屠殺畜牛數もまた著しく増加し、全鮮に亘り約五萬五千八百頭の減少を來し、農耕上、畜牛増殖上甚大なる打撃を蒙つたのであつた。されば總督府は地方長官に對して通牒を發し、機宜の方法を講せしむると共に、旱害の最も甚だしかつた黃海、平安南北の三道に對

し、合計十萬四千三十八圓の補助金を交付し、飼料乏しく良牛を留保し得ざる者に保護を與へ、その放賣、屠殺を防止したのである。その結果、黃海道に三百八十九頭、平安南道に二千四百十三頭、平安北道に二千二十二頭の畜牛を止め得て效果大に見るべきものがあつた。

畜牛増加獎勵成績 (其一)

道名	大正八年屠殺數	大正七年屠殺數	増加
京畿道	四六、二三二	三四、六三九	一一、五九四
忠清北道	八、二八八	五、四三九	二、八四九
黃海道	一九、九六九	一二、五二五	七、四四四
平安南道	二八、四一九	一三、六九三	一四、七二六
平安北道	二三、九八六	一四、二九三	九、六九三
咸鏡南道	二二、三六三	一〇、八六二	一一、五〇一
總計	一四九、二五七	九一、四五一	五七、八〇七

畜牛増加獎勵成績 (其二)

道名	旱害後畜牛數	旱害前畜牛數	旱害前後の増加
京畿道	一〇九、八六七	一一五、八八〇	六、〇一三
忠清北道	五三、四八八	五五、九五三	二、四六五
黃海道	一〇八、二四〇	一一五、四二六	七、一八六
平安南道	七八、七八二	九一、八八二	一三、一〇〇

朝鮮の災害

二二四

平 安 北 道	一六八、二二七	一七九、四八二	一一、二六五
咸 鏡 南 道	一四七、六五一	一六三、四七八	一五、八二七
總 計	六六六、二四五	七三二、一〇一	五五、八五六

義捐寄附 この稀有の凶荒に當つて個人的に糶、現金、白米、麥、粟等を或は給與し、或は無擔保無期限で貸付ける等の美舉は至る所に見受けられた。また面、郡の有志よりなる救濟會、有志團、青年會、その他各種慈善團體は進んで地方窮民の救助に當り、その救濟は頗る廣範圍に渡つたのである。今試みに團體救助並に篤志家救助の概況を示せば

大正八年旱害義捐寄附調

	團 體 救 助		篤 志 家 救 助	
	金 額 數 量	備 考	金 額 數 量	備 考
京 畿 道	一、二五七圓	粟、金錢、稗	四一、六三六圓	人員 二八、九二七 戶數 八、〇八九
忠 清 北 道	三五〇圓			
忠 清 南 道	一四、三〇〇圓			
黃 海 道	現金 一〇、五六五圓 粟 五、六五圓 高粱 八石	救濟人員 一六、七三一	現金 一四、〇七六圓 穀類 二、三九六石	
平 安 南 道	二二〇、四八六圓	救濟人員 一七、九〇七	四六、五八〇圓	人員 二二、九八九 戶數 五、三一六
平 安 北 道	六五、三七八圓	現金、粟、賃金	八、〇七五圓	人員 一、七一二 戶數 七、九一二
咸 鏡 南 道	三八四圓	賃金、粟、現金	一一、九九五圓	人員 一、二八二 戶數 二、一五二

即ち總督府及び地方廳の善後措置と相俟ち、一般の義捐寄附に依り、未曾有の大旱害に對して救済上多大の成績を擧げ得たことは欣ぶべきである。

大正十四年の水害救済

朝鮮に於ては毎年八月の交、霖雨のため多少の水害を招くのが例であるが、大正十四年には稍々その時期を早め、七月中旬に中部以南の地方に於て近年稀有の水害を發生し、次いで八月中旬に至り西鮮地方に水害を見、九月上旬又々南鮮沿岸地方に於て暴風雨による慘害を蒙らしめたのである。

七月中旬水害 七月中旬に於ける水害は主として中南部地方に發生したもので、七月十一日より十三日に亘り第一回の出水を見、更に僅か數日を隔て、七月十七日より十九日に至る第二回の出水を見たのである。

當初南洋方面より北上して來た濃厚七百四十耗の低氣壓は、支那大陸の北岸より朝鮮半島の中部を突き二分せられて、一は滿洲に一は半島に沿つて南下し四國方面に去つた。これが爲め黃海道以南の各地方に於て少きも三百耗、多きは四百耗の豪雨を齎し、就中京畿道江華、水原、忠清南道唐津、瑞山地方は雨量最も多く、慶尙北道高靈、慶尙南道釜山、山淸、咸安等も亦三百五十耗に及ぶ豪雨で、漢江、洛東江、錦江、高頭江等の諸川は悉く汎濫して沿岸流域に少からざる損害を與へた。その被害

の最も大きかつたのは京畿道及び慶尙南北道にして、七月十二日に於ける漢江の最高水位は三十五尺七寸を示した。

右の出水が未だ全く減退するに至らざるに先ち、黃海沖に現はれた小低氣壓の發生に連れて、南洋方面より北上して來た新颶風の來襲を誘致し、數十年來曾て見ざる豪雨を齎し、その降雨地域も略ぼ七月十二日前後に於けるものに等しく主として中南地方に亘つたのである。第二回の降雨は第一回の出水後僅か數日を隔てたのみであつたのと、十六日夕刻より十八日朝に至る迄の連續せる豪雨であつたため各河川の出水量極めて多く、被害の區域は頗る廣汎に亘つた。十七日午前十一時より同日午後十一時に至る十二時間の降雨量の如きは就中激甚なるもので、當時三日間に亘り各地に最大五百耗以上の降雨を來し、爲めに流域の最も廣汎な漢江及び洛東江等に於ては、その水位は從來の記録を破り、沿岸地方に激甚なる被害を與へた。

漢江に於ける當時の水位は、七月十二日午前十一時に於て最高三十五尺七寸、七月十八日午後九時に於て同四十二尺四分を示し、最近の記録たる大正九年の最高水位三十五尺五寸を遙かに越えるの大量水を現出せしめたのである。

當時の各地に於ける降雨量は次の通りである。

宜寧	三三八	四二六	七五四
密陽	三〇二	三九九	七〇一
梁山	二七六	四四四	七二〇
河東	三二〇	四八二	八〇二
山清	四〇六	五七〇	九七六
咸陽	三三二	四七八	八一〇
尙州	二三七	二九七	五三四
安東	二一四	二七六	四九〇

漢江及び洛東江流域地方の降水量は何れも平年の豪雨程度を超ゆること甚しく、且つその降雨期間の短かゝつた爲めに、一時的増水量を益々大ならしめ、近年稀な被害を呈したのである。

當時の被害は平安南北道及び咸鏡南北道を除いた各道に亘つたが、その被害の主要なるものは左の通りである。

七月中旬洪水に依る人命及び住家被害數

	人			住家			
	死亡	行衛不明	負傷	流失	全潰	半潰	床上浸水
京畿道	三〇人	三人	三人	四、四四戸	四、四九戸	二、五〇戸	一〇、三三戸
忠清北道	八	九	二	六九	二二〇	二六	一、二六戸
忠清南道	三七	一	二	三八	三〇八	三九	二、二七戸

全羅北道 一〇 一 一 二 三〇 三五 三四七
 全羅南道 九 一 四 五 一一 七 二六
 慶尙北道 四七 四 三〇 一五五 一〇〇四 三四 一九二五
 慶尙南道 三〇 一 二六 五四 四七五 一四九 九、五五
 黃海道 一六 一 二 二〇 一九三 一、六三
 江原道 五五 五 五五 七七 四八七 三九三 二、六四
 計 五五 五 一五五 六〇五 二、六五七 六、〇六 三一、六三

八月月中旬水害 八月十一日より十三日に至る間に於て、低氣壓襲來に伴ひ、西北鮮地方一帯に水害を來した。その災禍は七月中の水害に比すれば甚だ少なかつたが、黃海道、平安南北道、並に咸鏡南道等に於ては、各河川の汎濫溢水に伴ひ相當の被害を生ぜしめた。

八月月中旬水害に依る人命及び住家被害

	死	行衛不明	負傷	流失	全潰	半潰	浸水
全羅北道	一	四	一	四	二	六	七
黃海道	四	一	一	一	五	一五五	三、五五
平安南道	一〇	一	一	元	一六	二八一	一、七三
平安北道	四	六	五	一七〇	一五	六〇	一、五元
咸鏡南道	六	四	三	二五	二五	六五〇	八、〇四
總計	三五	一四	六	五五	六八	一、七三	一五、二九

九月上旬風水害 九月四、五日前後琉球方面を犯した猛烈な颱風は六日朝濟州島の南方に迫り、北々西に向つて移動し、同夜全羅南道木浦の東方に上陸し、七日午前大邱附近を通過し慶尙北道東海岸に出て日本海に去つた。當時風雨の最も激しかったのは六日夜半より翌七日午前中にかけてで、七日午前四時に於ける釜山の最低氣壓は實に七百三十耗一に達し、風速は二十一米四を示した。尙ほ同時刻に於て一時間二十九耗一の降雨を伴ひ、海陸共に被害を生ぜしめたが、就中慶尙南道及び慶尙北道沿岸地方に於て激甚なる災害を齎し、全羅南道と江原道に於ても沿岸地帯の一部に被害を發生した。その被害は殊に海上に於て甚だしく、遭難船舶頗る多く、或は沈没し或は破壊せられた數約二千隻に及んだ。陸上に於ても出水被害に依る人命住家の損害は左の如く相當多數に上つたのである。

九月上旬(六日より七日至る)暴風雨被害

	人			住家			船舶		
	死亡	行衛不明	負傷	流失	全潰	半潰	浸水	破損	沈没又流失
全羅南道	三人	三人	九人	三戸	二六戸	四六戸	一、三三戸	二隻	四九隻
慶尙北道	四	四	四	二六	四〇	五九	一、四四戸	五只	三三隻
慶尙南道	五	四	六	一〇〇	九六	一、四七	二、四六戸	六七只	五〇隻
江原道	七	一	二	一四	一九五	三〇八	二、四三戸	一	三
總計	一四	五	二三	六二	一、七六	二、五一	七、四九三戸	一、二六隻	七四

以上三回に亘つた豪雨及び暴風の被害集計數字は左の通りである。

大正十四年(七、八)風水害報告集計表

(其の二)

道名	内人の別	死	傷	不行衛	死	傷	不行衛	流失	全潰	半潰	床上	流失	全潰	半潰	床上	救助を要する戸數
京畿道	内地人 八 朝鮮人 一 外国人 一	八	一	三	二、九三	三	一、六	四、四四	四、四三	二、八〇	一〇、四六	七〇	七八	一九〇	五七	二、五三
忠清北道	内地人 八	一	三	九	八	一	一五	九	二〇	二六	一、八一	七〇	二五	五七	一七	
忠清南道	内地人 三 朝鮮人 一	三	一	一	二	一	一七	三八	三二	五四	二、二七	一六	一五	一〇一	五二	七三
全羅北道	朝鮮人 二	一	五	一八	一八	一	一三	一六	二九	五四	二、四八〇	四	六	七六	五五	
全羅南道	朝鮮人 二	三	六	八	一五	七	二五	七	二九	四四	一、五九	六	二二	一九	五八	
慶尙北道	内地人 一 朝鮮人 一	一	六	一	一五	一	一三	五四	一、五八〇	一、九	三、九七	六	一六	一九	二五	五〇
慶尙南道	朝鮮人 三	六	一	一	五	元	二四	五四	四、六五	一、四九	九、六五	二七	三五	二、四五	四、九四	
黄海道	内地人 二 朝鮮人 一 外国人 一	二	三	一	六	一	二五	三	一九	二七	六、三六	六	一四	八	五五	三九〇
平安南道	朝鮮人 九	一	一	一	四	元	一	二	七	一七	一、〇四	三	七	一五	二四	
平安北道	朝鮮人 三	五	六	一	一	一	一	一七〇	一、八	六〇	一、七元	八	五四	八	一四	六八
江原道	朝鮮人 一	六	九	一	一	三	一九	九七	七五	七四	五、九元	六	一四	一四	四、七三	
咸鏡南道	朝鮮人 一	八	四	一	一	一	二〇	一六	一〇	四二	四、八一	一	七	一、八七	七	

總計 四八、四三三・二二五、九四一・七九八・五九 三二、七九六・六三 七九、七七七一四、二六六・九四一・八五六・五六、一八六・三二、三元 三八七・四三 四、〇三三 三二、九七七・三三、七七二・六八七・六 一九、五八

(其の三)

道名	救助人員		救護費用											
	焚出 日數	焚出 人員	米	麥	粟	雜	穀	人	夫	救護所	雜費	金額合計		
京畿道	七	三、五七二	石數 六、九五四	價格 四、四〇〇	石數 八、六六四	價格 一、五九〇	石數 一、六〇〇	價格 四、三三〇	石數 一、八〇〇	價格 三、四〇〇	延人員 一、三八〇	賃金 一、二八〇	設置費用 七、三三〇	金額合計 四、三三〇
忠清北道	六	一、〇〇八	石數 六、九五〇	價格 三、九四〇	石數 四、一〇〇	價格 五、三三〇	石數 —	價格 —	石數 —	價格 —	延人員 三元	賃金 一、三三〇	設置費用 二、五三〇	金額合計 六、八〇
忠清南道	四	四、三八八	石數 三、八六五	價格 五、七七二	石數 —	價格 —	石數 二、六〇〇	價格 四、〇〇〇	石數 二、六〇〇	價格 五、〇〇〇	延人員 九六	賃金 三、五三〇	設置費用 二、七〇〇	金額合計 六、四〇〇
全羅北道	六	五、五三三	石數 一、九四八	價格 八、七二〇	石數 一〇〇	價格 六、〇〇	石數 —	價格 —	石數 —	價格 —	延人員 九六	賃金 八、〇〇〇	設置費用 四、一〇〇	金額合計 一、〇六〇
全羅南道	二	一〇〇	石數 —	價格 —	石數 一〇〇	價格 三、〇〇	石數 —	價格 —	石數 二	價格 一、五〇〇	延人員 —	賃金 —	設置費用 —	金額合計 三、〇〇〇
慶尙北道	一五	五、九七	石數 一、三七五	價格 六、三八四	石數 四、五七三	價格 五、三六八	石數 —	價格 —	石數 —	價格 —	延人員 —	賃金 —	設置費用 六	金額合計 一、七〇五
慶尙南道	一五	六、九六	石數 三、四三二	價格 九、一七〇	石數 三、一〇〇	價格 四、九二〇	石數 三、五〇〇	價格 九、七〇〇	石數 一、四〇〇	價格 三、三〇〇	延人員 九七	賃金 七、九〇〇	設置費用 一、八二	金額合計 二、四八〇
黃海道	二	六、九〇	石數 六、八六〇	價格 六、五五五	石數 —	價格 —	石數 九、四〇〇	價格 五、四〇〇	石數 —	價格 —	延人員 八〇	賃金 六、〇〇〇	設置費用 七	金額合計 五、一〇
平安南道	一〇	二、一〇三	石數 三、五	價格 一、五、四〇	石數 —	價格 —	石數 三、一〇五	價格 六、六四〇	石數 一〇	價格 九、五	延人員 一三	賃金 一、〇五〇	設置費用 六	金額合計 四、六三
平安北道	八	一、一四六	石數 六、五四七	價格 三、九六五	石數 —	價格 —	石數 八、六二五	價格 一、五三、九三	石數 —	價格 —	延人員 一七	賃金 二、〇〇〇	設置費用 三	金額合計 六、七〇
江原道	八	二、六七二	石數 一、八三〇	價格 八、三二五	石數 —	價格 —	石數 五、二〇〇	價格 二、八九七	石數 —	價格 —	延人員 四四	賃金 一、二〇〇	設置費用 六、九	金額合計 一、七五、三
咸鏡南道	一〇	一、一三元	石數 一、七三〇	價格 九、五二〇	石數 —	價格 —	石數 一、九〇〇	價格 一、三〇〇	石數 —	價格 —	延人員 一元	賃金 一、七〇〇	設置費用 五	金額合計 六、一〇〇
咸鏡北道	—	—	石數 —	價格 —	石數 —	價格 —	石數 —	價格 —	石數 —	價格 —	延人員 —	賃金 —	設置費用 —	金額合計 —
總計	五五	五、九四一、〇二六・三三、四三、三、五〇一・三三、三六三・二九・六元	石數 八二、七九六	價格 四、〇三三	石數 一〇、三六七・三三、三三〇	價格 六二・五、四、五三三・五、六、一〇	石數 五九二・三、八、〇二二・一、六、八、四、四、五、六	價格 —	石數 —	價格 —	延人員 —	賃金 —	設置費用 —	金額合計 —

由來朝鮮の河川には堤防の築造を缺くもの多く、その流域を形づくる山系も概ね禿山である爲めに霖雨期に際しては常に洪水を伴ふことが多い。然しながら大正十四年の如き水害は、近來稀有のものであつて、一部落を挙げ濁流に崩壊流失し、殆んど原形を存しないものも少くなく、死亡者、行衛不明者及び負傷者を合算するときは、實に前後一千名を超ゆる惨害を發生し、或は住家又は船舶を壊滅流失せられ、幾多の工場はその製品と共に流失破壊の厄を蒙り、或は田園は荒蕪せられ、農作物は滅失し、家畜を亡ひ、家財を亡失する等、罹災者の困憊慘害は實に甚だしかつたのである。一方公共の爲めにする道路、橋梁、又は堤防、護岸の諸工事の破壊、鐵道、電信、電話、電氣、水道、瓦斯等の被害も尠からず、これ等物質的被害額のみにて尙ほ約九千萬圓内外の巨額に上つたのである。

然しながら朝鮮に於ける農業の田園灌漑方法は今尙は天水耕作によるものが多く、従つて降雨の多い時は自ら作付面積の増大を來し、爲めに朝鮮全體としては水田收穫高は旱害時より寧ろ増加するのを例とし、大正十四年の水害も亦この例に漏れず、左表の如く作付段別の増加と收穫高の増加を示したのである。

米作付段別比較表

作		付		段		別
粳	米	糯	米	陸	米	
一、四三、三〇、八 ^町		八七、六六、六 ^町		一八、三六、五 ^町		計
大正十年		大正十四年		大正十四年		

累年比較		同	
同	十一年	一、四九、九〇・七	九、六五・一
同	十二年	一、四三、六七・四	七、六八・一
同	十三年	一、四七、四六・九	七、四三・三
同	十四年	一、四八、八三・九	六、八五・一
			一八、四〇・七
			二〇、〇四・六
			二七、八七・五
			六、二七・二
			一、五五七、九四八・五
			一、五五〇、三九・四
			一、五七五、七五・六
			一、六九、二六・二

收穫高比較表

累年比較		同	
同	十一年	一、四九、九〇・七	九、六五・一
同	十二年	一、四三、六七・四	七、六八・一
同	十三年	一、四七、四六・九	七、四三・三
同	十四年	一、四八、八三・九	六、八五・一
			一八、四〇・七
			二〇、〇四・六
			二七、八七・五
			六、二七・二
			一、五五七、九四八・五
			一、五五〇、三九・四
			一、五七五、七五・六
			一、六九、二六・二

天恩無窮 豪雨濁流に洗はれ、住家田園一朝にして荒土に歸し、餘水尙ほ去らず、電柱倒れ、牛羊斃

死し、江畔の老木折損して、慘害の跡歷々たるの時、畏くも 天皇皇后兩陛下には、侍從海江田子爵を差遣せられて、罹災民生の酸苦を見舞はせ給ひ、併せて災害の状況を視察せしめられた。是れ尚に天恩邊土に洽くして 朝鮮の山河喜びに輝くものと謂ふべきである。

海江田侍從は七月廿七日朝京城に到着、即日總督府に於て總督及び政務總監に對し親しく 聖旨を傳達せられ、當局より説明したる災害の報告を聴取し、直ちに各災害地の實況を巡視して、民生の痛

苦を犒はれたが、京城府内外の主要災害地は勿論、慶尙南道地方中特に惨害の甚だしかつた洛東江沿岸の諸部落をも親しく視察せられたのである。

勅使の御差遣と共に罹災民救恤の御思召によつて 天皇皇后兩陛下より御内帑金五萬圓の御下賜あり、總督はこの優渥なる御沙汰を拜受し、直ちに各道に對し左の如く配付して聖旨の傳達を爲した。

京	畿	道	二、三〇〇圓	忠	清	北	道	一、五〇〇圓	
忠	清	南	道	一、五〇〇圓	全	羅	北	道	一、一〇〇圓
全	羅	南	道	一〇〇圓	慶	尙	北	道	三、八五〇圓
慶	尙	南	道	一四、五五〇圓	黃	海	道	五〇〇圓	
江	原	道	三、八〇〇圓	總	計	五〇、〇〇〇圓			

次て各宮殿下御合同の下に金參千圓を下賜せられ、水害罹災民救助費に使用すべき恩命を御下賜金と共にこれを各罹災道に分配して、等しくその惠澤を分つこととなつた。その道の通りである。

京	畿	道	一、二〇〇圓	忠	清	北	道	一〇〇圓	
忠	清	南	道	一〇〇圓	全	羅	北	道	八〇圓
全	羅	南	道	六〇圓	慶	尙	北	道	二五〇圓
慶	尙	南	道	九〇〇圓	黃	海	道	六〇圓	
江	原	道	二五〇圓	計	三、〇〇〇圓				

次て各宮殿下御合同の下に金參千圓を下賜せられ、水害罹災民救助費に使用すべき恩命を拜し、陛下御下賜金と共にこれを各罹災道に分配して、等しくその惠澤を分つこととなつた。その道別割合は左の通りである。

罹災者救助 災害の惹起せらるるや、總督府は各所屬官公署を指揮して、防禦、救援、食糧の配給等各般の罹災救助に關する手段を講せしめ、尙ほ軍隊駐屯地方等に於てはその兵力の援助を受けて救援に當らしめ、災後に於ては各般の復舊又は整理改善、衛生施設の徹底、罹災民に自活の途を與ふる爲めの職業の斡旋、又は勞銀撤布の工事施行等に關し十全の方法を講じ、罹災に依る窮乏を救ふて安全なる生計の途を立てしむることを期した。

本年の水害に當り、軍隊側の救援、援助を受けたのは京城、大邱、釜山、及び咸興の四箇所、釜山で龜浦方面の救難に海軍側の援助を受けた外、各地では専ら陸軍側より災害防止、罹災救助等に至大の盡力を受けたのである。この外各新聞社、消防署、青年團その他各種の民間團體又は箇人の應援が、この災害に臨んで有力な援助となつたのも忘れてはならない事である。

各災害地には直に避難所を特設又は指定して、罹災者を收容し、一定期間の收容及び給食を爲し、全鮮約五百十數箇所の救護所を設置した。京城府の如きは大規模なるバラックを急造建築し、一時約二萬人内外の罹災民を收容し、食糧の給與を爲すこと十數日間に及んだ。

災害と同時に食糧及び飲料水の缺乏を來たすのが普通である。特に京城では四周悉く水災に見舞はれ、水道及び照明施設は勿論、鐵道、電信、電話、皆災厄を蒙り、恰も孤城に據る如き状態に置かれた爲め、直接罹災者の食糧及び水の配給は勿論、一般市民の生活必需品の分配と補給に就いて尠から

ざる不便を感じたのである。水に趁はれて高臺に脱出した避難者には、各關係府郡面は直に部署を定めて焚出しを開始し、民間各團體の應援を受けて握飯の作製配給を爲したが、新聞社、私人又は共同團體で米麥の寄贈を申出で、又は自ら焚出しを爲し湯茶の供給を開始したものも尠からず、何れも全力を擧げて之に従事した爲め、幸に各地共救援救助に就いて、十分な効果を擧げることが出来た。各道が食糧費、焚出費、小屋掛費、竝に種穀費、衛生費、弔慰金又は見舞金等の名義を以て、水災中、又はその直後の救助方法として執つた措置の爲めに支出した救助費は概ね左の通りである。

道名	地方費救助費	恩賜義災救助基金支出	第二豫備金より支出	計
京畿道	一四五、〇一〇 ^四	八三、七六七 ^四	五六、〇〇八 ^四	二八四、七八五 ^四
忠清北道	三六五	—	—	三六五
忠清南道	一、七六九	—	—	一、七六九
全羅北道	一、〇二九	—	—	一、〇二九
全羅南道	二〇、〇〇〇	—	八、五〇〇	二八、五〇〇
慶尙北道	三二、二四〇	四〇、〇〇〇	三七、九九〇	一〇九、二三〇
慶尙南道	九四〇	—	五、〇〇〇	五、九四〇
平安南道	一三九	—	—	一三九
江原道	一三、〇六〇	一〇、九四三	—	二四、〇〇三
咸鏡南道	一〇、〇〇〇	—	一二、五〇〇	二二、五〇〇
總計	二二三、五五二	一三四、七一〇	一一九、九九八	四七八、二六〇

右の如く地方費、恩賜罹災救助基金、及び國費より、約四十八萬圓の救助費を投じて、罹災民の直接救護を實施したのであるが、今參考の爲め水害の最も激甚であつた京畿道に於て支出した救助費の區分を示して見やう。

罹災者立退用住宅地買收費	二三、〇〇〇圓
水害時白米市價調節差損	七六七圓
家屋流失全潰者見舞小屋掛費	一八三、八八六圓
焚出し給與費	四六、九三七圓
食糧給與費	一九、四一四圓
代用作物種子配給費	五、一九二圓
雜費	五、五八九圓
計	二八四、七八五圓

各道に於ては或は死亡者弔慰金及び負傷者に對する見舞金等の支出に充てたものもあるが、その使途は大體に於て同一である、總督府に於ては更に間接救助策として地方費及び國費を以て災害復舊工事を施行し、水害により破壊されたる施設物の現状恢復を計ると共に、勞銀を罹災者に撒布するの方便を立てた。災害復舊工事費として十四、五の兩年度に亘り支出した額を掲ぐれば、

大正十五年度災害復舊費（國費）

災害費

四、四六九、〇六一圓

朝鮮の災害

二三〇

- 一、漢江橋水害復舊及改築工事費 三〇〇、〇〇〇圓 (内工事費二七六、〇〇〇圓)
- 二、咸興附近浸水地帯防水工事費 二五〇、〇〇〇圓 (内工事費二二七、五〇〇圓)
- 三、大寧江水害制水工事費 一〇〇、〇〇〇圓 (内工事費 九〇、〇〇〇圓)
- 四、鐵道線路其他水害復舊及改良費 二、〇〇〇、〇〇〇圓 (内工事費一、九五一、八〇九圓)
- 五、道路河川其他水害復舊費 四九二、六〇〇圓
- 六、鹽田堤防其他水害復舊及新營費 一三〇、〇〇〇圓
- 七、驛屯土堤堰水害復舊費 一〇、一六〇圓
- 八、勸業模範場西湖堤防水害復舊及修築費 六〇、二九四圓
- 九、道路其他水害復舊費補助 一五一、〇〇〇圓
- 十、京城、仁川水道防水堤增高工事費補助 六五、一〇〇圓
- 十一、土地改良工事水害復舊費補助 九〇九、九〇七圓

大正十四年度地方費水害復舊工事費

道	名	十四年度	十五年度	計
京	畿道	一二三、九一四 ^四		
忠	清道	一六、二〇〇		
全	羅北道	六、五〇〇		
全	羅南道	八、四三〇		
慶	尙北道	一〇四、二〇九		
慶	尙南道	一三七、八〇〇		

黃	海	道	七八、六〇八		
平	安	北	道	五、〇〇〇	
江	原	道	一四、〇九五	一七、七一〇 ^円	三一、八〇五 ^円
咸	鏡	南	道	一、三〇〇	
總	計		四九六、〇五六		五一三、七六六

即ち國費より約四百五十萬圓、地方費より五十一萬圓計約五百萬圓を投じて道路及び河川の改修、復舊、橋梁堤防の改造修復等の工事を施行したのである。その割當も災害の最も激甚であつた道の工事費は自然増加するから、罹災者に分布する勞銀も亦従つて公平に割當てられ、總工費五百萬圓の七分は勞銀として撒布せられるものとしても約三百五十萬圓に達するのである。

生業扶助 總督府及び各地方廳は更に罹災民に對し、その生業、又は副業の斡旋を爲し、講習、指導器具器械の給與、又は貸與、その他の方法に依り、授産的救助の途を講せしめた。由來下層民には勤勞を厭ふ風があつて、彼等は治産的工風に乏しく、只目前の安逸を貪り、他の救助に俟つことを耻としないのみならず寧ろこれを當然と考へてゐるものがある。これ等に對しては直接民衆接觸の任に當る者をして仔細に實情を考察し指導鞭撻を加へ、その矯風改善を計ることに努め、直接救済に依つて衣食の途を與ふると共に、主力を授産的救済施設に注がしめて、當面の急を緩和し且つ將來の生計手段として副業を與へ、勤勞の美風と生活の安定とを期圖せんとした。各道共この方針に従ひ、その地

窯業補助	一二箇所	三、五〇〇圓	笠子製造補助	五〇〇圓	豚毛加工補助	三、一四〇圓
避難臺設置補助費					三、八〇〇圓	
防水林設置費					二、〇〇〇圓	
製紙業補助費					一、〇七七圓	八箇所
其の他					二九、〇三九圓	
計					一五〇、〇〇〇圓	

各道に於ける生業扶助の方法は、金額は異なるも、大體京畿道に於けると同様で、地方々々の状況に應じ、業態、職種を取捨選擇して之が扶助を爲したのである。

義捐金の募集分配 大正十四年七月に於ける漢江及び洛東江沿岸地域を中心とした中南部地方の洪水は實に未曾有であり、被害の程度も未だその比を見ないもので、罹災民の窮狀は洵に同情に堪えないものであつた。そこで京城府内に於ける公職者、銀行會社代表者、新聞通信代表者、及び宗教團體、その他有力者等は舉つて發起人、評議員となり、「朝鮮水害罹災者救濟會」を設立して、廣く一般の同情に懇へ、その救濟資金を募集し、罹災者に之を頒ち、困窮相助、同胞相愛の誠を致さんとして義捐金の募集を爲した。當時内地官公署及び民間有志並に遠く滿洲臺灣よりも、朝鮮の水害に同情し、或は私人より或は團體より、續々として總督府に出捐の申出であつたが、之を官廳と民間側との二様に蒐集するは取扱上不便が多いので、總督府宛の寄贈金も一應救濟會の蒐集金中に加算し、その分配は總督府で行ふことに定めた。

而して爾後八月の朝鮮地方水害及び九月の南鮮地方暴風雨被害等天災相續き、この救助もまた放置出来なかつたので、被害程度の輕重に依り等しくこれ等罹災者にも應分の頒與を爲すを適當と認め、大正十四年中の風水害全部に對し均霑せしめることゝした。

大正十五年六月末日締切義捐金の蒐集高

本府取扱金高	四四三、一六五圓七二五
利子	五七圓三八〇

計 四四三、二二三圓一〇五

總督府にて取集めたるものは主として朝鮮外のもので、何れも多大の同情を寄せられ、その醸出額が豫想以上に達したのは洵に感謝に堪へないことで、この爲めに罹災者に對する配給上非常なる便宜を得たのは勿論、罹災民の好感を得たことは決して尠少ではなかつた。而して大正十五年一月迄に總督府にて蒐集受附けたる義捐金は、全部之を救濟會に引繼交付したが、救濟會にては總督府より引繼ぎを受けたものゝ外、左の如く義捐金の受附けを爲した。

救濟會直接取扱金高 二九四、三五九圓三七五

利子 (大正十四年十二月末日迄の分) 三、二八五圓五五〇

計 二九七、六四四圓九二五

以上總督府及び救濟會にて取扱つた義捐金の集計は、

義捐金總高 七三七、五二五圓一〇〇

利 子

計

三、三四二圓九三〇
七四〇、八六八圓〇三〇

蒐集せる義捐金は相當額に達する毎に、救濟會の申出に依り、總督府に於て各道災害の程度に應じてこれを分配せしめた。その配付回数及金額を示せば、

第一回 分配	九月廿九日	二〇二、六〇四圓一三
第二回 分配	十一月三日	一五〇、〇〇〇圓〇〇
第三回 分配	十二月廿六日	三〇〇、〇〇〇圓〇〇
第四回 分配	大正十五年五月廿一日	五〇、〇〇〇圓〇〇
第五回 分配	同 日	五、四一〇圓三〇
第六回 分配見込額(蒐集殘額)		一七、七四六圓六一
合 計		七二五、七六一圓〇四

外に利子若干

義捐金の各道割當額は左表の通りである。

水害義捐金各道割當表

道 名	分 配 額	道 名	分 配 額
京 畿 道	三四六、九七〇圓五八	慶 尙 北 道	八五、八四〇圓八七
忠 清 北 道	三、七二二圓〇〇	慶 尙 南 道	二〇三、七八四圓九八
忠 清 南 道	五、〇二四圓〇〇	黃 海 道	三、三四一圓〇〇
全 羅 北 道	四、八三九圓〇〇	平 安 南 道	三、二五五圓〇〇
全 羅 南 道	三一八圓〇〇	平 安 北 道	六、六六六圓〇〇

第五章 災害の救済

朝鮮の災害

二二六

江原道 二九、一七八圓〇〇
咸鏡南道 一五、〇七五圓〇〇
外に未分配約一七、七四六圓六一錢あり

總計 七〇八、〇一四圓四三

水害義捐金中内地官公署等にて取纏め寄贈せられたる分、及び一千圓以上の寄贈者を示せば、

内地寄附中官公署取纏分

府	縣	金額	府	縣	金額
福岡	岡	四八、〇五〇・三五 ^四	岡山	山	三、五二五・〇六 ^四
東京	京	四七、〇〇九・二三	三重	重	三、四〇六・六六
大阪	阪	一四、八二一・五四	和歌山	山	三、〇二四・〇九
北海道	道	一一、六九三・三一	千葉	葉	二、八二九・四五
臺灣	灣	九、九四〇・八七	長野	野	二、三〇三・七二
佐賀	賀	九、三七四・八二	静岡	岡	二、二四五・〇四
熊本	本	九、一六三・二二	香川	川	一、七七〇・七六
石川	川	七、一八一・九一	奈良	良	一、一八八・五六
京都	都	六、〇三七・〇八	山梨	梨	一、〇六九・五九
富山	山	五、三八五・四七	青森	森	九三〇・一二
山形	口	五、一六五・四七	宮崎	崎	九一三・四七
岐阜	阜	四、五二〇・四三	岩手	手	八六八・四〇
長野	崎	三、九九五・一〇	大分	分	六一五・九四

鳥 取
鹿 兒 島

五三・五二
二二・四三

外に拓殖局取扱
(内閣、各省其の他諸官
署並に各府縣廳を含む)

六六・一八七・〇一

二十八府縣計

二〇七、一〇五・六一

總 計

二七三、九二二・六二

千圓以上寄附者調 (金額順)

金額	住 所	氏 名
二〇、〇〇〇 _円	京 城	朝鮮殖産銀行
一五、〇〇〇	大 連	南滿洲鐵道株式會社
一〇、〇〇〇	東 京	三菱合資會社社長岩崎小彌太
一〇、〇〇〇	同	三井家總代三井倉左衛門
一〇、〇〇〇	同	男爵大倉喜八郎
一〇、〇〇〇	京 城	銀行集會所
五、〇〇〇	東 京	大日本麥酒株式會社
五、〇〇〇	同	第一銀行
五、〇〇〇	京 城	朝鮮銀行
五、〇〇〇	東 京	東洋拓殖株式會社
三、〇〇〇	京 城	李玉職
三、〇〇〇	東 京	王子製紙株式會社社長藤原銀次郎
二、五〇〇	大 阪	大阪朝日新聞社
二、五〇〇	同	大阪毎日新聞社
第五章	災害の救済	

朝鮮の災害

二、五〇〇	東京
二、〇〇〇	奈良縣山邊丹波三市町
二、〇〇〇	東京
二、〇〇〇	同
一、三二〇	大阪
一、三二〇	哈爾濱
一、〇〇〇	京城
一、〇〇〇	岡山縣淺口郡三和村
一、〇〇〇	東京
一、〇〇〇	同
一、〇〇〇	奉天
一、〇〇〇	大阪
一、〇〇〇	同
一、〇〇〇	京城
一、〇〇〇	東京
一、〇〇〇	同
一、〇〇〇	同
一、〇〇〇	同
一、〇〇〇	同

東京日日新聞社
天理教管長中山正善
日本銀行市來乙彦
金剛山電氣鐵道株式會社
滿鮮貿易商同業組合
日本居留民會長古澤幸吉
淺野太三郎
金光教管長
馬越恭平
京城電氣株式會社
東亞勸業株式會社
久原鑛業株式會社
藤本ビルブローカー銀行
金光教朝鮮布教所
日本銀行木村清四郎
日本郵船會社白仁武
日本勸業銀行
子爵澁澤榮一
大倉組門野重九郎
村井合名會社村井吉兵衛

生業扶助の方法に依る支途に充當した。
 水害義捐金の各道に於ける使途に就いては何れも相當の考慮を加へ、成るべく現金の支給を避けて

一、〇〇〇	横濱正金銀行	兒王謙次
一、〇〇〇	東 京	服部金太郎
一、〇〇〇	同	大川合名會社大川平三郎
一、〇〇〇	同	朝鮮興業會社大橋新太郎
一、〇〇〇	同	男爵古河虎之助
一、〇〇〇	鎌倉由井ヶ濱	雨潤會陸奥廣吉
一三四、六二〇		

水害義捐金支途内譯 (京 畿 道)

種 別	員 數	金 額
製 麵 機	四、六七七臺	二七、三九〇 ^四
製 繩 機	三二五臺	一一、三七五
機 織 機	五〇臺	一、七七五
水 稻 種 子	三七五石	七、五〇三
陸 稻 種 子	三四石	六七四
馬 鈴 薯 種 子	二四、三五七貫	一二、五六六
蕎 麥 種 子	一〇石	一七三
大 麥 小 麥 種 子	五六〇石	九、四六二

朝鮮の災害

大豆種子	一八一石	三、六一九
種豚	四四二頭	六、三六五
種鶏	六、四九六羽	一四、六七二
繩队原料及傳習會費		二一、二五八
機業原料及傳習會費		三、一六六
窯業補助		三、七五〇
農笠製造補助		六二〇
豚毛加工補助		三、七一〇
避難臺設置費		三、八〇〇
防水林設置費		二、〇〇〇
製紙業補助		二、二四九
學用品補助		一九五
蠶具材料		二、六四六
蠶具傳習會		一、一七一
蠶種子		七六九
棉花種子	四、五〇〇斤	四五〇
藥細工原料	六、四〇四貫	五、〇五四
筵席製造補助		一二八
蔘圃簾製造補助		三八四
特種救濟費		一一五

粟種子	三石	四五
落花生	九貫	一三五
甘藷	四〇〇貫	一二〇
消防組補助	一、三〇〇	六〇〇
種卵代	一七、四〇〇	二六、五六〇
救助用船舶代	一、一五九	三、三四〇
京城府配分額	一、一五九	五二、八八三
各郡直接救助及自由施設費	三九、九一〇	三四六、九七〇
死亡及行衛不明者弔慰金	一、一五九	三、三四〇
兒童學用品補給費	一、一五九	三、三四〇
其の他	一、一五九	三、三四〇
配當豫定額	一、一五九	三、三四〇
合計	一、一五九	三、三四〇

水害義捐金使途内譯

(慶尙北道)

使途	金額
一、死亡者弔慰金	三九名
二、負傷者見舞金	七名
三、被害家屋救助費	一、二四一戸
四、被害田、畝救助費	一、二五〇戸

京城府へは救済事業の施行を委任す

朝鮮の災害

二四二

五、被害漁船救助費	二五〇艘	九、五一〇・〇〇
六、養鷄扶助費	八三四戸	六、二一三・九五
七、叭製作機臺又箴扶助費	六五五戸	四、五〇三・〇二
八、楮又杞柳其他苗木扶助費	四六七戸	三、四四〇・四〇
九、機業機臺又箴扶助費	九五二戸	八、一八三・五八
一〇、大麻種子扶助費	三八一戸	一、七〇七・八〇
一一、莞草栽培扶助費	二三一戸	一、〇〇七・〇〇
一二、製蓮機臺又箴扶助費	九三八戸	七、三九二・九六
一三、蠟表製作箴扶助費	六二戸	三九二・〇〇
一四、水産繅刺網及其他扶助費	三三一戸	七、一一一・〇〇
一五、製紙煮熟釜等扶助費	七〇戸	五八五・〇〇
一六、綠肥大豆種扶助費	三七戸	一四四・〇〇
一七、其の他生産扶助費	—	六、一九二・九五
一八、水防用具設備費	—	五、三九五・三二
計	—	八六、六〇六・九八

附記 大正十四年中の風水害の一般的状況は上叙説明した通りであるが、京畿道管内の水害は特に甚大であつたから、左にその特種の状況を摘録する。七月中旬に於ける連續二回の豪雨被害の最も甚だしかつたのは、主として漢江流域を中心とした地方であつた。龍山市街地先に臨んでゐる漢江の水位は七月十二日に於て三十五尺七寸と云ふ高水位を示し、沿岸低地部に浸水の害を與へ、長安坪及び金

浦等に於て堤防の決潰を來したが、龍山市街防禦の堤防は軍隊の援助を受け完全に防水し得た。然し出水の爲め麻浦、舊龍山、二村洞等に於ては約一千戸以上の浸水家屋を生じ、十二日迄に炊出救護人員三千三百名に上つたのであるが、幸に死傷者を生ぜずして終つた。

出水は十二日正午より漸次減水し初め一般に愁眉を開いたが、間もなく十六日來の豪雨襲來して、十八日夜最高水位四十二尺四分と云ふ近來稀な最高水位を示し、遂に龍山附近の堤防各所は決潰を生じて、濁流は新舊龍山一帯を襲ふと共に、漢江流域の全部に亘り最も激甚なる災害を及ぼしたのである。就中京城府内に於ては交通、通信、電話、電燈、水道等最も重要な施設を破壊せられ、多數の民屋を流失倒壊せしめて府外との交通連絡を絶たれ、一時京城は孤立の状態に陥つたが、軍隊、消防、青年團、官公署及び民間篤志者の熱心なる協助を受け、避難者を救出し救護所を設け、炊出しを開始し、日用物資の供給に關し軍隊側の援助を受けて、精白米の拂下を斷行し昇騰せんとする市價を抑制すると共に、井戸水に依る給水の方法を講じ、衛生救護班の活動を促し、極力災害應急の措置を講じたのである。十八日夜を最高として十九日朝來水位減退し初めたので、更に復舊の爲めに各方面の努力を促した爲め、秩序よく諸事恢復せられ、電燈は二十日より點火し、市内電車は二十一日よりその運轉を初め、外部との通信交通も不完全ながら漸次恢復せらるゝに至つた。是等の恢復と同時に各方面の慘害狀報は頻々として到着したが、その内京畿道内に於ては京城府、高陽郡、廣州郡、楊州郡及び始

興郡、金浦郡の一府五郡の災害を最とし、その他漢江沿岸各郡に亘つて甚だしき被害を生ぜしめた。

京釜線龍山鐵橋及び人道橋は出水中その一部崩壊を傳へられたが、通路堤防の決潰を生じたのみで完全に保たれたるも、京元線漢灘橋はその一部橋脚を濁流に浚はれたのである。

人及家屋の被害 連續二回に亘る出水被害は京畿道管内に於て、死亡者三百三人、行衛不明者三十一人、家屋の流失四千四百四十四戸、倒壊四千四百九十二戸、半潰二千五百八十戸、床上浸水一萬三百四十六戸に達した。廣州郡、高陽郡管内には一部落全滅の慘害を生じたものもある。

電信電話 電信電話は十七日夕刻より十八日未明に亘り京城を中心として全部不通となり、殊に龍山局内の電話は一方加入者家屋の浸水したのと、他方龍山分局(電話局)に於ては午前二時頃より機械室浸水し、午前四時遂に電力室の電源を浸すに至つた爲め、該方面の電話は全然不通となつた。依つて救護上必要なる電話は本局で交換する事として急設工事を施した。

また對内地及び滿洲間の通信も不通となり、官報及び新聞電報等は京城無線電信局を利用して通信した。而してこの復舊に關しては、萬難を排し極力修理に努めた結果、十九日より漸次應急の開通を見るに至つた。

鐵道 鐵道は京城を中心とし各線共不通となり、京城は全く孤立の状態となつた。この復舊は焦眉の急務であつたから全力を盡して復舊工事に當り、十九日夜に至つて先づ水原軍浦場間の開通したのを

初めとし、二十三日は龍山鷺梁津間の徒歩連絡に依つて京城釜山線は全部開通、京義線は二十日夜より全部開通、京元線は二十三日東豆川全谷間徒歩連絡に依り開通し、京仁線は二十日先づ仁川梧柳洞間開通し二十三日更に永登浦(京釜線の分岐點)迄の開通を見た。

●電氣 京城電氣株式會社麻浦發電所は十七日午後七時浸水、發電不能に陥り、金剛山水力電氣會社より供給の電力に依り電氣の供給を繼續して居た處、十八日午前一時に至り水力電氣も途中電柱の倒壊した爲め、京城、仁川一帯に亘り送電不能となつて、その爲めに救護、警戒、其他の活動に尠からず支障不便を感じたが、復舊工事に全力を傾注した結果、京城電氣會社は二十日午前二時より先づ水害地たる新、舊龍山に點燈し、同夜より京城府全市に點燈し(電燈線のみ)た。二十一日夜より金剛山電氣の送電によつて充分なる供給を得ることが出來た。

●瓦斯 瓦斯製造所浸水の爲め、十七日夜既に供給不能に陥つたが、減水と共に激流の爲め彎曲龜裂を生じた十四時送管の修理及び發生爐その他の復舊工事に努力した結果、二十四日午後四時漸く全市に亘る供給の開始を見ることが出來た。

●水道 蠡島及び鷺梁津水源地は工兵隊の援助に依り極力防護に勵めたが、十七日夜既に浸水して、揚水及び送水の作業を停止するに至り、僅に貯水池に残溜せる約三十五萬立方尺の淨水を一日三萬立方尺宛、自動車、馬車及び手押車等に依り府民に配給したが、復舊工事に努めた結果漸く二十五日不完

に努めた。京城府の附近の蔬菜園はその全面積の約三分の二は今次の水害に依り甚しき被害を蒙り、價格暴騰の徴があつたので、野菜卸賣組合長を召集し、卸賣價格に付嚴重な戒告を爲した。これと共に鐵道に於ては食糧、薪炭、その他日用必需品の輸送は特に優先權を附與することとし、七月二十一日京義線の開通より之を實施し、府内に於ける供給を潤澤ならしむることに努めた。

更に水害地よりの避難者が一時に京城府内に住宅を求めやうとした爲め、家賃の値上を爲す虞があらうたので、總督府は京畿道と協力し、市内各署をして一齋に家主に警告せしむると同時に、市内の空家を調査し、これを市内各署及び派出所に備へしめ、極力便宜を圖つた。

●●●●●●●●●●
軍隊の出動　十七日午後七時、京畿道知事は衛戍司令官に兵力の出動を要求し、漢江堤防の防護、人命の救助、並に水源地の保護方を依頼した。司令官は直ちにその請求に応じ、兵力を區署し、最も敏速に活動救援を助けると共に、軍隊舎内を開放して罹災民の收容救護に當る等、極力應援する所があらつたが、地方行政廳の救護秩序立つと共に、二十日午前十一時軍隊側の救護配置を撤廢した。

●衛生　罹災民の被害後に於ける衛生施設は特に留意すべきものがあつたので、總督府醫院、京畿道廳、京城府、赤十字社、鐵道病院、セブランス病院、醫師會、及び各新聞社等に於て、定置又は巡回救護班を設け、罹災者に對する診療に當ると共に、入院を要すべき患者は之を總督府醫院、赤十字病院、府立順化院、及び臨時病院（府に於て京城中學校内に開設す）に收容保護に努めた。

前述の通り府民の飲用水は水道貯水池殘溜の淨水を配給したけれども、府民の使用量を充たすに足らなかつたので、全部の井戸に對しクロール消毒を施し、その不良井は浚泄すると同時に、氷雪清涼飲料水に對する取締を勵行した。

一方水災後に於ける傳染病患者の續出を慮り、京城府を
（順化院内に百
 餘名を配付）
 「バラック」を急造せしむると共に、府内一般に對し消毒的清潔
 及び檢病調査を施行した。

朝鮮の災害終